

生徒会長ゼノヴィア

阿修羅丸

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

無事に駒王学園の生徒会長に就任したゼノヴィアだったが、その仕事は予想以上に大変だった。

原因は兵藤一誠である。

その一誠と喧嘩をしてしまった時、彼女の前に一人の少年が現れて……。

※ゼノヴィアたちが三年生に進級してからのお話です。原作時系列で言うと22巻辺りです。

※人によっては、キャラ描写に違和感を覚える方もいるかも知れません。

# 目次

## 第一章

生徒会長の悩み

1

異能剣士

8

怒りの一撃

15

闇に蠢く者たち

25

そして翌日……

32

接触

39

敵の正体

48

逆襲の魔焰

58

水龍乱舞

66

戦士の帰還

75

魔聖剣

84

魔剣烈剣

93

決意と衝突

101

駒王戦線

111

王の駒

120

電光石火作戦

129

牙剥く駒王町

140

魔剣豪、再臨

150

念道烈風（前編）

162

念道烈風（後編）

171

## 第二章

ヒーロー！ ……俺？

180

モチ期襲来

191

生徒会長の決意	202
生徒会長のときめき	210
山ごもり	218
アルバイト	227
それぞれの一週間	237
悪魔の申し子	245
拳と剣	253
ヒーローズトーク	264
生徒会長の挑戦	274
聖剣戦争	283
断空剣	294
連也vsゼノヴィア	301
春風駘蕩	311
悩み、人それぞれ	320
生徒会長の気持ち	330
ヒーローズトークII	340
侵略者、連也	354
逆鱗に触れる	369
青春試考	380
開戦	391
連也vs赤龍帝	409
最後の勝利者	420
落とし前	437
エピローグ	450

## 第一章

### 生徒会長の悩み

まだ日の高い放課後の事だった。

「待てーっ！ 貴様等あーっ！」

少女の怒号が駒王学園の校庭に響き渡り、それから逃げるように三人の男子生徒ががむしやらに疾走している。

いや、『逃げるように』ではなく、実際に逃げていた。

女子水泳部の着替えを覗いていた兵藤一誠が、悪友の松田、元浜と共に。

それを追うのは、生徒会だった。先頭に立つのは生徒会長のゼノヴィア・クアルタである。アフリカの草原を疾駆するチーターも斯くやという勢いだ。

「このままじゃ追い付かれる……三方向に別れるぞ！」

「おうー！」

「地獄で会おうぜ！」

一誠の提案に、松田と元浜は各々答えて、そして三人はバラバラに別れた。生徒会もそれに合わせて散開する。

ゼノヴィアは軌道を変える事なく、真っ直ぐに一誠を追った。

美しい顔には苛烈な憤怒の色が浮かんでいる。

さもありません。生徒会長に就任してからの彼女の、そして新生徒会の主な仕事は、一誠たち三人組の覗き行為に対するクレーム対応だったからだ。これまで一誠のスケベぶりには甘い顔をしていたゼノヴィアだったが、いざ被害者の声を直接聞くようになると、一人の女性として義憤を覚えたのである。

「くっ、ゼノヴィアの奴、何むきになってんだよ……かくなる上はあ！」

一誠は一瞬だけ眼を閉じて、意識を自分の身体の内集中させた。すると、彼の逃走スピードがグンと急上昇した！ 十秒ごとに持ち主の力を二倍に倍加させる《ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手》。最初の一回だけならば、

籠手を顕現させる事も『Boost』という詠唱を響かせる事もなく、行う事が出来る。そのように訓練したのだ。

一気に二倍となった一誠の脚力には、さすがのゼノヴィアも追いつけない。グングンと距離を離されていく。

しかし天網恢々、疎にして漏らさず。

一誠の前に一人の見知らぬ男子生徒が立ちはだかった。その手には箒が握られている。

一誠が彼に気付いて避けようとした瞬間に、男子生徒は箒をポイントアンダースローで放り投げる。すると――、  
「うおおっ!」

箒は空中でピタツと固定されて、一誠の逃走を阻止したのだ！  
否、固定されているどころか、まるで意思があるかのようにグイグイと一誠の腹を押ししている。そのゆっくりではあるが力強い怪現象に、一誠の足が止まった。

「天誅ー」

そこへゼノヴィア渾身の飛び膝蹴りが後頭部に炸裂し、一誠は失神KOされてしまった。同時に箒は、カランと地面に落ちた。

「ご協力的に感謝する」

ゼノヴィアは一誠を引越し荷物のように肩に抱え上げ、男子生徒の方を向いた。

彼女からは一誠の背中しか見えなかったもので、何故彼が足を止めたかはわからなかった。単に前方に立つ男子生徒に道を塞がれて、思わず止まってしまったのだらうくらいにしか思っていない。

「……ええつと」

「あんとと同じ三年の、秋月連也ってんだ」

「そうか。私は生徒会長の」

「知ってるよ。熱い演説かましてくれたからな、嫌でも覚える」

「恐縮だ。では、これで」

「お勤め(苦労さん)」

ゼノヴィアは軽く会釈して、去っていく。

秋月連也と名乗った少年は、その背中にヒラヒラと手を振った。

◆ 夕焼けに染まる住宅街。

疲れた顔の一誠と、眉間にシワを寄せてムスツとした顔のゼノヴィアが並んで歩いていった。

あれから無事に捕縛した三人組に、生徒会室で懇々とお説教していたのだ。その間床の上に正座させられたその痺れで、一誠の足取りは若干おぼつかなかった。

「まったく……さつきも言ったが、君はもう最上級生なんだぞ？ みんなの手本にならなければいけない立場だというのに、悪い見本を見せてどうするんだ!？」

「またその話かよ……もう勘弁してくれよ」

「だったら、もっと己の行動を慎む事だな」

トゲのある口調に、一誠は辟易する。生徒会長になってから、彼女は事あるごとにこの調子だ。

(これなら前の方がまだ良かったぜ……)

ついそんな風に思ってしまう。もちろん、隣を歩く少女の生徒会長就任を我が事のように嬉しく思ってもいるのだが……。

「君は学校の最上級生であり、悪魔としては眷属を持つ事も許された上級悪魔だ。近い将来には領地経営だって任される身なんだぞ？」

冥界で君を英雄と讃える者たちや、将来君をご領主様と呼ぶ事になる者たちの気持ちも考えろ」

「わかった、わかったって……でもさ、やっと平和になったし、俺も今年で卒業なんだ。少しくらい好きにやらせてくれてもいいだろ？」

それは本当に軽い気持ちから出た言葉だった。

だがゼノヴィアは、平手打ちで返答した。

「その言葉を、君たちに不快な思いをさせられている女子生徒たちの前で言ってみろ。君の事を慕うアーシアや部長の前で言ってみろ。裸なら私たちがいくらでも見せてあげるというのに、わざわざ他人の着替えを覗いて、挙げ句の果てに言う事がそれか?」

「うっ」

「確かに平和になった。三年生に進級も出来た。気が抜けて羽目を外

したくなるのはわかるが、それはそれ、これはこれだ……イツセー、あまり私をがっかりさせないでくれ」

ゼノヴィアは冷ややかに一誠を一瞥して、家とは反対方向に歩き出した。

「おい、どこ行くんだよ」

「ストレス発散だ。ついてくるな」

振り向きもせずに答えて、ゼノヴィアは足早に立ち去った。行き先はバッティングセンターである。



前方のスクリーン内で、投手が投球のフォームを取る。その動きに合わせて、ピッチングマシンから軟球が飛んできた。

ゼノヴィアは『三塁打』と書かれた標的目掛けて、球を打つ。打球は狙い通りに飛んでいった。

全球を『ホームラン』にするよりは、狙った場所に狙い通りに打ち返す方が楽しい。

生徒会長という立場上、制服ではまずいと思い、途中の公衆トイレで私服に着替えてあった。服など魔力を使えば簡単に変えられる。

「……？」

ふと見ると、隣のケージに知ってる顔があつた。私服に着替えてはいるが、今日一誠を捕まえるのに協力してくれた秋月連也だ。

しかし奇妙だった。

ゲームが始まり、四球ほどを打ったが、打球は標的には届かず凡打で終わる。

球は傾斜の付いた床を転がってピッチングマシンへと回収されていく……本来ならば。

しかし少年の打った球はピッチングマシンまで転がっていかず、ピタリと途中で止まっていた。四つの軟球が、一ヶ所に固まって。

なだらかな傾斜だ、ただ転がりきれずに止まるだけならあるかも知れない。しかし、ボールが意思を持つかのように一ヶ所に集まるとどまるなど、起こる事なのだろうか？

打つ手を止めて、ゼノヴィアは少年のバッティングをじつと見る。

五球目が飛んできた。

連也がそれを打つと、打球は一ヶ所に固まった四球にぶつかつた――そして、ビリヤードめいて四つの軟球が弾け飛び、『ホームラン』『三塁打』『二塁打』『シングルヒット』の四つの標的全てにヒットした！「なっ!?!」

思わず声が出た。

それで連也は、ようやく隣のケージの少女に気付く。

「よう、生徒会長さんも来てたのか」

「い、今の、は……?」

「なあーに、ちよつとした特技の練習さ。みんなには内緒だぜ?」

連也は人差し指を唇に当てて、そう言った。

◆ 施設内の休憩コーナーで、連也は缶コーヒーを買ってゼノヴィアに渡した。

「口止め料な」

「ああ、それは構わないが……あれはいつたい……」

「そんな事より、生徒会長さん、ここにはよく来るの?」

強引に話題を変えられて、ゼノヴィアは一瞬言葉を失った。

言外に『その事については何も聞くな』と言っているのだ。人様には言えない秘密など、彼女にだつてある。だから、何も聞かずにいようと思つた。

「ああ。秋頃に見付けてね、嫌な気分になつた時はここで発散しているんだ」

「なるほど……生徒会長さんともなればストレスも溜まるだろうし、なおさらよく来るようになるんだろうな」

「……そうだね」

ゼノヴィアは苦笑した。そのストレスの原因の顔を思い浮かべて。「……」

連也は少女の、かすかに陰りのある顔をじつと見る。

たぶん兵藤一誠の事だろうと思つた。駒王学園に入学して以来、幸いにも同じクラスになる事はなかったが、奴等の悪名は連也の耳にも

届いている。

三人組と同じクラスになってしまった友達が、「何もしてないのに自分たちまで同類のように思われている」とか「あいつ等と同じクラスとわかった途端に女子が一步下がる」などと愚痴をこぼすのも、一度や二度ではなかった。

生徒会長として三人組の対応に追われて、疲れているのだろう。

「元氣出しなよ」

ポンポンと、ゼノヴィアの背中を叩いてやった。

「ここで会ったのも何かの縁だ。ストレス発散に付き合ってやるよ。あっちでな」

親指で指し示したのは、ゲームコーナーだ。

二人はそこで、エアホッケーやレーシングゲーム、格闘ゲームなどに興じた。

そうしている内に、段々とゼノヴィアの様子は本来の明るさを取り戻していく。

「……」

連也はそれを見つめていた。

心から楽しそうに笑い、小さな子供のようにゲームに熱中するゼノヴィアの姿を見て、眩しそうに眼を細めて、笑った。

◆

店を出ると、辺りはすっかり暗くなっている。

二人は並んで歩き出した。

「ありがとう。おかげで、気分もスッキリしたよ」

「お役に立てて何より。俺も楽しかったよ。でもな生徒会長さん。さっきのあれはハメ技って言って、リアルファイト喧嘩にも発展しかねない危険なものだから」

「ゼノヴィア」

「——はい？」

「私の名前はゼノヴィア・クアルタだ。だから、ゼノヴィアと呼んでくれ」

「ん、ああ……わかったよ、ゼノヴィア……それじゃあ俺の事も下の名

前で——ファーストネームで呼んでくれていいぜ？」

「わかった、連也」

リクエストに答えてから、ゼノヴィアはクスツと笑った。

「ど、どうかしたか？」

「変な顔……♪」

「うっ」

言われて連也は、口許がにやけているのを自覚した。慌てて口を手で隠す。

「名前で呼んだだけじゃないか。それも、君の方からの頼みで」

「いや、そうだけどな……それでも、可愛い子に下の名前で呼ばれるのは嬉しいもんなんだよ」

「ふうーん、そういうものか……可愛い奴だ」

「男に向かって可愛いとは何だ、可愛いとは！」

「仕方ないだろう？　実際に可愛いのだからね」

むきになる連也に、ゼノヴィアはケラケラと笑う。

「本当にありがとう。心が軽くなったよ。また明日な、連也」

そう言い残して、パタパタと家路につくゼノヴィア。

「……また明日な、ゼノヴィア」

連也はその背中に、そう呟いた。

## 異能剣士

思えば、三学期に行われた生徒会選挙がきつかけだったのかも知れない。

いろんな事を教えてくれた学校と、そこに通うみんなに恩返しをしたい。そんな想いを飾る事なく語ったゼノヴィア。

それまでは『よそのクラスにいる美人の外国人転入生』でしかなかった少女を、秋月連也はあの演説以降、少し気にし始めていたのだろう。

そしてバツティングセンターでの一時で、彼の心をゼノヴィアという少女が占める割合は、また少し大きくなったようだ。

朝、登校すると、時々彼女と出くわす事がある。

「やあ連也。おはよう」

「おつす、ゼノヴィア」

そうやって挨拶を交わすだけの短いやり取りが、何だか妙に楽しかった。

同時に、この少女ともっと仲良くなりたいたいという欲求も湧いてくる。

そんなある日の事である。

いつもより早くに目が覚めた連也は、二度寝すると今度は寝過ぎしてしまいそうなので、いつもより早く登校する事にした。

とは言え、うっかり教室に入れば日直の仕事を手伝わされそうだ。

今日の日直の桐生藍華は、口先一つで相手を自分のペースに巻き込むのが妙に上手い。

どこか静かな所で時間を潰そうと、ちようど良さそうな場所を探して早朝の校内を散策していると……。

「おい元浜、大丈夫だろうな?」

「心配するなイツセー。これまでのリサーチによると、朝練の時は見張りを置いてない」

「いや、それもあるけど……村山のおっぱいが大きくなってるとのはホントのホントに本当なんだろうな?」

「ふつ、俺のスカウターが間違ってた事が一度でもあったか？」

「それもそうだな……つて、そもそも合ってるかどうか確認した事、まだ一回もなくね？」

そんな声が聞こえてきた。行ってみると剣道部の練習場があり、この壁に顔をくつつける二人の男子生徒。その傍らには見張り役なのか、坊主頭の男子生徒が周囲をうかがっていた。と言つても、早く交代したいのか、やたらチラチラと腕時計を見ている。役割を果たせているとは言えなかった。

今の会話から察するに彼等が何をしているのかは明らかだ。連也は呆れると同時に、胸の奥に込み上げてくるものを感じた。

制服の胸ポケットに挿していたボールペンを手に取り、眉間に近付ける。そして二、三秒ほど眼を閉じて精神を集中させた。手中のボールペンに、陽炎めいたゆらめきが宿る。

連也はそれを、三人組目掛けて投げつけた。その一投は、地面で重なり合った三人の影に突き刺さる。しかし一誠と元浜は覗きに熱中して、松田は時間ばかり気にしているので、誰も気が付かない。

「動くな！ 警察だ！」

物陰に隠れたまま、連也は大声を出す。

「何よ、今の声！」

「えっ、警察!?!」

練習場の中から女子たちの声がして、窓が開けられた。前髪をヘアバンドで留めて額を丸出しにした少女が顔を出し、三人組に気付いた。

「あんたたち何やってんのよ！ みんな、またあの三馬鹿が覗いてる！」

その女子の報せに、窓の向こうの更衣室内でバタバタと物音がした。

そして少ししてから、ジャージ姿に竹刀装備の女子剣道部一同が飛び出してくる。

——奇妙な事だが、一誠たち三人はその間に逃げる事が出来たはずなのに、何故かその場にとどまっていた。

別に神妙にお縄につこうなどと思っていないのではない。しかし、逃げようとする意思に反して足が――下半身が動かないのだ。見えないう力でその場に縫い止められているかのように。

そうこうする内に女子たちに囲まれて、三人は散々に竹刀で叩かれる。情けない悲鳴が聞こえてきた。

「――？」

そんな中、一誠は地面に刺さったボールペンに気付いた。

(あんなどこにあんな物あったっけ?)

気になつて眼を凝らすと、そのボールペンは陽炎のようなゆらめきをまとっている。そのゆらめきはやがて、蠟燭の炎が燃え尽きるかのようにフツと消えた。

「このエロ猿ども！ 先生たちに突き出してやるから覚悟しなさいよね！」

「ひいひい、勘弁してくれえ〜！」

「俺まだ覗いてねーのにい！」

「問答無用！」

女子たちは三人組の襟首なり足なりを掴んでズルズルと引き摺っていく。

さつきまで不可視の拘束を受けていた彼等の下半身は何事もなく動くようになっていた。

「――！」

引き摺られながら、一誠は物陰から様子をうかがう男子生徒の姿に気付いた。そして彼が、以前自分の逃走をおかしな能力で妨げた少年である事にも……。

◆ 放課後。

「おい！」

校門を出た辺りで、連也は背後から呼び掛けられた。振り向くと、そこには一誠が立っている。

「何だよ。友達だと思われて噂されたら恥ずかしいから、話し掛けんな」

「何だところの……！ お前のせいで今朝は竹刀でぶっ叩かれるわ先生たちに説教されるわで散々だったんだぞ！」

「何の事だ？」

「とぼけんな！ お前が隠れて見てたの知ってたんだよ！ この前だってお前のせいでゼノヴィアに蹴っ飛ばされるし、なんで俺の邪魔ばかりするんだ！」

「そりやお前等が問題ばっかり起こすからだろ。法治国家に生きる者としての、当然の正義感ってやつだよ——だいたいお前、何しに学校に来てんだよ。学生の本分は勉強って言うけどな、それが出来てりや後は何してもいいってもんじゃねえんだぞ？ 少しは親の気持ちも考えろ」

「親は関係ないだろ！」

「あるよ。お前等のために、払わなくてもいい学費を払ってるのはお前等の親だろ。親の稼ぎを食い潰すような真似して、男として恥ずかしくねえのか？ 学校に恩返ししたいからって理由で生徒会長やってるゼノヴィアに申し訳ないとか、そういう気持ちはねえのか？」

「——ゼノヴィア？」

いきなり出てきた名前に、一誠は反応した。

まるで知り合いか何かのような気安さが、今の言葉から感じられた。

「お前、ゼノヴィアとどういう関係なんだよ……」

「どうって……知り合いだよ」

「なんでお前とゼノヴィアが知り合いなんだよ！」

「別にいいだろ、同じ学校で同じ三年なんだから！」

段々面倒臭くなってきて、連也はそこで話を打ち切り、足早に去っていく。

「待て！ まだ話は終わって、なあっ!?」

追い掛けようとした一誠だったが、出来なかった。

連也の足取りはせいぜい急ぎ足といったところか。にも関わらず、彼の身体はグングンと遠くへ去っていく。移動スピードと足取りとの激しいギャップで、何とも異様な光景だった。周りの生徒たちは、

しかしそんな不可思議な通行人を気にも止めない。

「な、何なんだアイツ……」

一誠は呆然と立ち尽くす事しか出来なかった。

◆

連也は移動スピードを歩調と同じレベルに落として、街中に出た。コンビニでシュークリームを一個買い、そこからすぐ近くの公園のベンチに腰を下ろす。そしていざ食べようとした時——公衆トイレの屋根を越えて、一匹の猫が下りてきた。

連也は思わず固まってしまう。その猫は高い所からピョンと飛び降りたのではなく、フワリと滑空して来たのだ。その背中には、コウモリの羽が生えている。

猫は連也に気付いて振り向くと——、

「人間がいたのか、ぬかったぜ……!」

口許を歪ませて、男の声で人語を発した。

「まあいい、ちよいと腹ごしらえさせてもらうか」

言うなり、小さな体躯が膨れ上がり、変形していく。頭に山羊のような捻れた角を生やした、身の丈四メートルはある巨体。全身をアルマジロに似た装甲で覆っている。

同時に、公園内の空気が張り詰めたものに変わっていた。空は青からおどろおどろしい紫に変色している。

「ぐへへ……周囲に結界を張り巡らせたからな。泣いても叫んでも、誰も助けになんて来やしねえぜ!」

「親切な解説ありがとう」

連也は動じる事なく返す。シュークリームをベンチの上に起き、立ち上がった。

「お礼に、面白いものを見せてやるよ。種も仕掛けもないぜ?」

パツと右手を開いて掲げ、それをズボンのポケットに突っ込む。

ゆっくりと引き抜かれた手には——柄卷きを施した木刀が握られていた!

「な、何だそりや……セイクリッド・ギア神 器か!」

怪物は一瞬たじろいだ。

はぐれ悪魔のジャンゴ。それが彼の名前だ。悪魔の棲む異世界『冥界』で罪を犯し、追っ手から逃げてきた先で異能力者に出会うとは思わなかった。しかし……、

「そんな棒っ切れが何だってんだ！ ぶっ潰してやる！」

どんな能力や武器を持っていようと、使う前に倒してしまえば問題ない。ジャンゴは握り締めた右拳を振り上げて、連也の頭上に打ち下ろす！

しかし連也は、木刀をヒョイと上げて、その切っ先で、迫る剛拳を止めてしまった。

「何だ?!」

ジャンゴは驚き、拳を引こうとするが、離れない。右拳は木刀に接着剤でくっ付けられたかのように、全く離れない。

かと思えば、連也が木刀を横に軽く振っただけで、ジャンゴの巨体はボールか何かのように派手に投げ飛ばされてしまった。

「このガキ……何なんだよその棒っ切れは！ やっぱり神セイクリッド・ギア 器なのか?!」

「何の事かは知らないけど、こいつはただの木刀さ。先祖伝来の逸品ではあるけどね。俺のこの力は、訓練によって得たものだ」

「ふざけんな！ テメエ等人間ごときが、鍛えたくらいでこんな力を使える訳がねえだろうが！」

「使えるんだよ。小さい頃からの積み重ねでね」

「ふざけんなああああ！」

ジャンゴは激昂した。ちっぽけな人間のガキに翻弄されるのが我慢ならず、怒りもあらわに連也に襲い掛かる。

「ふんっ！」

連也は両手で握った木刀を、鋭く突き出した。ジャンゴとの間にはまだ距離があったが、木刀から放たれた衝撃波が悪魔の腹にぶち当たり、突進を止めさせた。

「はあっ！」

すかさず、虚空を下から上へと斬り上げる。木刀から白光がほとばしり、刃となってジャンゴの身体を正中線に沿って真っ二つに両断す

る！

斬割された身体が一瞬光ったかと思うと、黒い塵に分解されて、そのまま消滅した。

はぐれ悪魔の死と共に、空の色は元に戻った。結界が消えたのだ。「悪く思うなよ……俺なんて放つといてさっさと逃げておけば良かったんだ」

連也は呟きながら、木刀の切っ先を制服の袖に入れて、そのまま押し込む。長さ一メートルはある木刀は袖の中にすっぽりと入り込んだが、袖は全く膨らんではいなかった。

どちらかといえば超能力に近いだろう。

ポケットから木刀を出したのは『物品引き寄せ』ポワッ、袖にしまったように見えたのは、袖口を出入り口とした『瞬間移動』テレポーションだ。

人間が持つ生体エネルギーである『気』を一定レベル以上にまで高めていくと、物理法則すら超越する霊的なエネルギー『念』へと変化する。

この『念』の力を、武道に応用して操る技……それが秋月連也の使う『念道』と呼ばれるものであった。

邪魔者を排除したところで、改めてスーツタイムにしようと連也がベンチの方を向くと、そこには一匹のカラスが止まっていた。そしてシュークリームをくちばしにくわえて飛び去っていく。

「お、俺のシュークリームうううううっ！」

捕まえようとする連也だったが、カラスはすぐに空の彼方へと消え去っていく。

「ふざけんな馬鹿ガラスうううううっ！　いつかどっ捕まえて唐揚げにして食ってやるからなああああああ！」

青空に向かって、連也は一人吠えるしかなかった……。

## 怒りの一撃

秋月連也は公園に一人立っていた。時間は朝の八時。ただし平日の、である。

にも関わらず、連也は制服姿ではなかった。トレーナーとジーンズ姿だ。

ここ桂馬川公園は、昨日連也がはぐれ悪魔のジャンゴを倒した場所だ。

連也は公衆トイレを見上げた。ジャンゴは猫の姿でそこから下りてきたのだ。

軽く屈んでジャンプすると、少年の体はフワリと宙に浮き、五メートルは離れた公衆トイレの屋根の上に着地した。そして額に手をかざして、遠くを見回す。

彼の体内で練り上げられた『念』によって、視覚は物理的にも霊的にも強化される。視界に、ジャンゴの妖気の痕跡が点々と映し出された。

それを伝って、連也は建物の屋根から屋根へと跳び移って行く。『念』によって、自分の姿を万が一誰かに見られても、その誰かには認識出来ないようにしておいた。

学校には「自動車学校に行く」と連絡してある。実際自動車学校に通ってるし、もしも用事が早く済むようならば本当に行くつもりだ。

連也が学校をずる休みするほどのその『用事』とは、ジャンゴがどこから来たのかを調べる事だった。

出会い頭に人間に襲い掛かってきた狂暴な怪物。そんな者がどこから来たのか。別の土地なり異世界なりから来たのだとしたら、その侵入ルートを潰しておかなくてはなるまい。同じような狂暴な怪物が、そのルートから駒王町に侵入する前に。そして自分以外の誰かが被害に遭う前に。

(まったく、面倒な町に来たもんだ……)

連也は胸の奥でぼやく。

十四歳の時に念道の師である父が病死し、叔父夫婦に引き取られる

形でこの駒王町にやって来たのだ。

しかしこの町は、思いの外物騒だった。時々、昨日のような怪物が現れるのだ。

遭遇する度に念道の力と技で撃退するのは、いい修行になる。

しかし、他の人間はそうはいかない。だからこうして、ルート潰しに勤しんでいる。

住宅街の民家の屋根で、連也は足を止めた。右手の民家のベランダに、女性物の下着が干されてある。やけに大きなサイズのブラジャーだ。Gカップ以上はあるだろう。しかし、連也の視線の先はそこではない。その民家のベランダの更の上、太陽発電のパネルのある瓦屋根だ。そこに、血の痕を見付けた。

跳び移り、調べる。血痕の横に、動物の毛も散らばっていた。形からして猫の物と思しき、動物の足も。

◆ 連也の眉間に皺が寄った。

ここにもう一人、学校を休んでいる者がいる。

駒王学園高等部を卒業して大学に進学した、リアス・グレモリーだ。住まいである兵藤邸の自室。そこで机の上に駒王町の地図を広げていた。そして赤マジックで、地図のあちこちに丸を付けていく。それはここ三年間で、討伐予定だったはぐれ悪魔の生命反応が消えた地点だった。

強靱な生命力を持つ悪魔が、出会い頭の事故で死ぬとは考えられない。恐らくは何者かによって倒されたのだろう。しかし自分たち以外に、この駒王町で悪魔と戦える者がいるという情報は入っていない。

——否。

一人だけ、心当たりがある事はある。

しかし、魔法少女コスチュームに押し込まれた筋肉の塊のような偉容を思い出すと、なるべくならそれには関わりたくはなかった。

「……なるほど」

マークは十をわずかに越える程度だったが、やってみた甲斐はあつ

た。全てのマークが例外なく、ある区画に集中している。

謎の悪魔ハンターはその区画内か、そうでなくともその近辺に住んでいるはずだ。

そして、こうも一区画内に集中しているところを見ると、その討伐者は案外襲われたところを迎撃しているだけで、自分から悪魔狩りに勤しんでいるのではないかも知れない。

「今夜辺り、調べてみようかしら」

ポツリと呟いたところで、机の隅に置いていた携帯電話が鳴った。

相手は、グレモリー家のメイドでありリアスの義姉グレイファイア・ルキフグスだ。

話の内容は、近々討伐命令が下る予定だったはぐれ悪魔ジャンゴが、町内に侵入して間もなく生命反応をロストさせたという報告だった。

「そのロストした場所はわかる？ ……桂馬川けいまがわ区ね、ありがとう」

地図上のマークが、また一つ増えた。やはり同区画内だ。

『それと、もう一つご報告が』

「なあに？」

『はぐれ悪魔ジャンゴは、他のはぐれ悪魔たちと徒党を組んで行動していました。彼等もまた、駒王町に侵入しているものと思われます。つい先程、その者たちの討伐命令が下りました事、ここにご報告いたします』

「ありがとうグレイファイア。ではグレモリー家の名において、速やかに実行します」

『今の皆様方に勝てる者などそうはいないでしょうが、それでもどうかお気をつけて。それでは、失礼いたします』

グレイファイアはそう言っつて電話を切った。

リアスは眷属全員の携帯電話に、今夜はぐれ悪魔の討伐に向かう旨をメールで送った。



夕焼けで町並みが朱色に染まる頃、連也は屋根ではなく地上の道を普通に歩いていた。

昼過ぎになって、町外れの森の中で、彼の『念』はわずかな空間の歪みを探知した。しかしその歪みは発見してすぐに消えてしまった。この事から、恐らくは別の場所から転送魔法のようなもので移動してきたのだろうと判断する。その魔法の痕跡すら消えてしまったのでは、連也一人でのこれ以上の探索は無理だ。諦めるしかなかった。(しゃーない。後は管理人に任せるしかないよな……)

連也がこの町に来てから感じた事の 하나가、『この町全体を管理している何者がいる』という事だった。

今までに倒した怪物たちは誰かに追われていたらしく、中にはハツキリと「冥界からの追手か!」と問い掛ける者もいた。

冥界と言うと死者の行く所という認識なのだが、どうやらあの手の怪物の住み処でもあるようだ。

連也は、駒王町に現れた怪物の全てを自分一人で倒してきたとは思ってない。にも関わらず被害が少ない。新聞やテレビのニュース番組に注目しても、殺人事件はおろか行方不明者の報すらほとんどないのだ。恐らく、自分以外にもあの手の怪物を退治している者がいるのだろう。

他にも根拠はある。

去年の夏頃から、町全体を覆うエネルギーの存在を感じるのだ。

それと前後して、近所の空き地に夜が明けたら家が建っていて、住人が以前からそこにいたかのように普通に生活していたりなどという事もあった。

顔も名前も知らないが、相当な、そして色々な力を持っているのだろう。

あとはその管理人に任せるしかない。

そう結論付けての帰宅だった。

春になったとはいえ、まだ日は短く、あつという間に辺りが暗くなっている。

「あー、秋月くーん!」

考え事をしていたら、不意に声を掛けられた。

振り向くと、前髪をヘアバンドで留めて、額を丸出しにした少女が

いた。

その傍らに、髪を赤いリボンでツインテールにした少女もいる。どちらも駒王学園の制服を着ていた。

声を掛けてきた、額を丸出しにした方が片瀬。もう一人が村山。二人とも連也のクラスメートである。

「よう、今帰りか？」

「うん。秋月くん、今日は休んでたみたいだったけど、どうしたの？」

「朝から自動車学校行ってた」

「そうなんだ」

「ねえ、途中まで一緒に帰ろうよ」

村山がそう言った。

探索を諦めたとはいえ、それでも昨日の今日だ。二人の身を案じて、連也はその誘いに応じた。

道すがらのお喋りは、主に片瀬と村山の、一誠たち三人組への愚痴だった。一年生の時から悩まされていたらしい。

「ホンツットに最低よアイツ等！ 片瀬の綺麗な足があの変態どもの汚い目線で汚されてるのかと思うと腹立つたらありやしない！」

「いくら村山の胸が大きくて綺麗で柔らかくて揉み心地最高だからって、ジロジロいやらしい目で見ているいい訳じゃないんだから！」

「私たち、去年はアイツ等と同じクラスだったんだけどさ、普通同じクラスの子の着替えとか覗いたりする！ アイツ等罪悪感とか全然ないのよね！ 片瀬の生足は私のものなのよ！」

「兵藤なんて普段から村山の胸をジロジロ見てたのよ!? 信じられない！ 私だけのおっぱいなのに！」

……愚痴の中身がだんだん不穏なものになり始めてきた。これ以上一緒にいると、聞いてはいけない事まで聞いてしまいそうで、さてどうしたものかと連也が思案し始めた頃、一同は遊歩道のある大きな公園に差し掛かった。

村山と片瀬は、この公園を突っ切るつもりらしい。しかし連也の家は別方向なので、ここで別れる事となった。

「じゃあね秋月くん」

「また明日ねー」

二人の少女は仲良く手を振って、外灯で煌々と照らされた遊歩道を歩いていく。

「ああ、また明日な」

連也も手を振り返すと、自宅の方へと歩き出した。

しかし、少しも歩かない内に、額に稲妻が走るような感覚に襲われた。念道修行によって身に付いた第六感の発動である。

連也は同級生を追って、公園へと掛けていった――。



その頃、片瀬と村山は手を繋いで遊歩道を歩いていた。この道だけでなく、公園を抜けた先も外灯で明るくなっている。それに自分たちは部活帰りで竹刀も持っている。夜道を歩く事への恐怖はなかった。

だが、行き先を照らしてくれていた外灯の明かりが、不意に瞬き始めた。等間隔に設置された外灯全てが、だ。

後ろを向くと、後方の外灯も同様だった。一本二本ならともかく、十本以上の外灯が同時に寿命を迎えたりするものだろうか？

戸惑う内に、外灯は全て消えてしまい、周囲は闇に包まれた。

「何？ 何？」

「やだ、どうなってるのよ……」

さつきまでの楽観的な気持ちまで、明かりと共に消え去った。二人の少女は互いを庇うように寄り添い合った。

辺りに霧が立ち込めてくる。赤紫色の霧が。

その霧に触れられた瞬間、片瀬の制服が、濡れたティッシュペーパーのように溶け始めた！

村山の制服も同様だ。

なす術もなく、制服も下着も溶け落ちて、二人は文字通り丸裸にされてしまった。

しかし、悲鳴はあげなかった。叫ぶ余裕すら、少女たちの心からは消えている。互いの裸身を隠すように、ただ抱き合って震えるだけ。

そんな二人の前に、三日月のかすかな月明かりの中、不気味な影が浮かび上がった。

四本の腕を持ち、胸元に生えたフジツボのような器官から、二人の衣服を溶かしたあの霧が噴射されていた。

「ふへへ……一度に二人か。なかなか可愛いじゃねえか……」

その化け物は、口からヨダレと一緒に人語を発した。蛙を思わせるギョロついた両目が、淫らな欲望でキラキラと輝いている。

「さあて、どっちから味わうか……こつちだな！」

化け物は村山の肩を掴んで、片瀬から引き剥がす。そして二本の腕で少女の両手を封じ、もう二本の腕で丸出しにされた豊かな膨らみを、乱暴に揉み始めた。指がグニグニと食い込んで、引きちぎらんばかりの勢いだ。

「い、痛い！ やめて、離してー！」

「村山！」

片瀬は友人の危機に、自分が裸である事も忘れて、袋に入れたままの竹刀で化け物に打ち掛かった。

脳天に叩き込まれた健気な一撃は、しかし通用しなかった。袋が不自然なほど曲がって、中で竹刀が折れたのがわかった。

だが、この化け物には通じなかった。ただ、怒りを誘っただけだったのだ。

「慌てんじゃねえよ。後でテメエも可愛がってやらあ！」

怒声と共に、片瀬は頬を張られて倒れる。一発のビンタで、脳震盪を起こして気を失った。

邪魔者を黙らせて、化け物——はぐれ悪魔のミドラは改めて村山の身体を弄び始めた。

強引に顔を向けさせて唇を吸おうとした時、闇の向こうから駆け寄る影を捉える。悪魔の視力で、それが木刀を持った少年であるかわかった。

「近付くんじゃねえぞクソガキ！ こいつがどうなつて——!?!」

村山を盾にした瞬間、少年は既に彼女を挟んですぐ正面にまで近付いていた。

そして木刀を迷わず村山の腹に突き入れる！

「ぐふおあつ!?!」

しかし声と共に息を吐き出して吹っ飛んだのはミドラ！

少年の木刀は村山の身体の数ミリ手前で消失し、背中側から現れて悪魔の腹に強烈な刺突をめり込ませていた！

化け物の拘束から解放されて倒れる村山の裸体を、連也は優しく抱き止めた。

少女は恐怖と恥辱に耐えきれず、既に気を失っている。

「……やってくれたな」

小さな眩きには、鋼鉄のような暗く冷たいものが込められていた。

「懺悔でもしとけ。お前の抜け出てきた地獄に、俺が送り返してやる……！」

「ほぎけクソガキい！」

ミドラの胸のフジツボから、霧ではなく火炎が噴射される。

連也は村山を地面に横たわらせると、迫り来る炎に木刀をかざした。

火炎の熱と勢いは、木刀を容易く消し炭に出来るほどだ。しかし見よ、木刀は焼き尽くされるどころか、まるで綿飴のように炎をその刀身に絡め捕ってしまった！そして連也の一振り、球状に絡め捕られた炎はミドラ目掛けて飛んでいき、直撃した。

爆発が起き、ミドラは更に後ろへと吹っ飛ぶ。

起き上がった時には、その顔には恐怖の色だけが浮かんでいた。

「な、何なんだ……何なんだよその木刀は……ま、まさか神滅具ロンギヌスなのか……!?!」

人質の身体を避けて攻撃し、炎を撃ち返す不可思議な道具に、戦慄を覚えていた。

ミドラは背中を向けて逃げ出す。なけなしのプライドもかなぐり捨てて、己れの身の安全だけを考えて。

連也は木刀をゆっくりと振り上げた。敵との間合いは広がる一方だが、焦りはない。

「——はあっ！」

気合いと共に、大上段からの木刀を一閃させる。

少年の体内で練りに練られた『念』が木刀からほとばしった。

それは刃とならず、白い光の柱となって、ミドラの脳天に落雷のように炸裂、頭部を胴体に半分以上もめり込ませた。

打撃と共に、悪魔の体内に破邪の『念』が隅々にまで浸透し、爆発するような勢いで黒い塵へと分解し、消滅させた。

同時に、消えていた外灯が全て再点灯する。

照らし出された二人の少女の裸体を、連也はすぐに調べた。と言っても、直接触れる必要はない。手から放つ『念』で、少女たちの肉体が汚されてはいない事がわかった。片瀬が倒れた拍子にいくつかの擦り傷をこしらえた程度である。

安堵の息を漏らした連也だったが、複数の気配を察知して、すぐに臨戦態勢を取る。

彼が一方的に知っている顔が、いくつかあった。

去年まで『二大お姉様』と呼ばれて慕われていた、二人の元上級生。女子の話題を常に独占している金髪の美少年。

マスコットキヤラの人気を誇る銀髪の小柄な少女。

その中に、最近ちよつと気になり始めている青髪の女の子がいた。さつきまで同級生の愚痴の対象になっていた少年もいた。

その少年、兵藤一誠の視線は、倒れて気を失ったままの二人の少女に注がれていた。

去年まで同じクラスだった少女たち。そのあられもない姿に、一誠の顔が憤怒に歪んだ。

「デメエ……よくも……！」

一誠の左手に、真っ赤に輝く籠手が現れた。その籠手から放たれる閃光に包まれて、一誠は全身を装甲で瞬時に覆い尽くす。そして背中から噴炎を上げて、連也目掛けて飛翔した。

「よくも村山と片瀬をおおおっ！」

怒りに任せて繰り出される左ストレート！

それはむなしく空を切った。

かわし様に放った連也の抜き胴が、一誠の腹部にめり込む。

「がはっ……！」

体内を駆け巡る、熱を伴う衝撃。

一誠はそのまま意識を失い、脆くも地面に崩れ落ちた。

## 闇に蠢く者たち

昨年の夏に転入してから進級するまでの間、村山と片瀬は何も知らない自分に色々とアドバイスしてくれた。生徒会長就任を我が事のように喜んでくれた。ゼノヴィアにとって、別々のクラスとなった今でも、間違いなく大切な友達だ。

その二人があられもない姿をさらして地面に転がっているのを見た瞬間、彼女の胸の内にどす黒いものが湧き上がった。

だがしかし……だ。

まさか一誠が、そばにいる少年に事情も聞かず、バランスブレイク禁手化して突っ掛かっていくとは思ひもなかった。

相手の少年が一誠の鉄拳をかわし様、木刀でカウンターを決めて、一太刀で彼を昏倒させたのは、もっと思ひもなかった。

しかしそんな凄腕の剣士が連也だった事は、それほど意外には感じなかった。バツティングセンターで見たあのブレイクショットからして、只者ではないとわかっていたからだろう。

「イツセーくん！」

悲鳴に近い声を上げたのは朱乃だった。彼女はグレモリー眷属の中では、特に一誠への依存度が高い。その一誠が目の前で倒された瞬間、事の是非は頭から吹っ飛び、木刀の少年への怒りだけが心を一色に染め上げた。

白くたおやかな手が翻り、龍を象った雷光が少年目掛けてほとぼしる。

連也は咄嗟に木刀を正面に掲げて、雷光龍を受け止めた。ミドラの炎同様、稲妻も木刀を焼き尽くす事なく絡め取られる。

しかし、ここで彼の動きが一瞬止まった。

いつもなら、このまま相手へ撃ち返すところだ。

だが先程の一誠の怒号から、どうも彼等は村山と片瀬を襲ったのが自分だと勘違いしているようだ。その誤解を解くのが先決であろうと考えた。

「——はあっ！」

木刀から『念』を放って、雷光龍を消滅させた連也は、忍者が刀を背中の鞘に仕舞うように、木刀をトレーナーの背中側の襟口に押し込んだ。

「えーつとですね、とりあえずお話を聞いてもらえますか？」

そう言つて、両手を上げた。

◆

村山と片瀬のケアを召喚したスタッフに任せて、リアスは連也を兵藤邸へと案内した。

未だ目を覚まさない一誠は、転送魔法陣で自室へと直接運ばれた。明日の朝には目を覚ますだろうと、連也は言う。

リアスは眷属たちを下がらせて、彼と二人きりでリビングに入った。

向かい合つて座ると、まずはリアスの方から名を名乗り、連也も自己紹介をした。それが終わると、まずは彼の方から事情を説明した。「なるほど、そういう事だったのね……確認もせずに一誠と朱乃がひどい事をしてしまったわ。本当にごめんなさい」

リアスはペコリと頭を下げた。

「まあ、俺は怪我がなかったからいいですけど。それより村山と片瀬は……」

「ご友人のお二人ならば心配いらさないわ。服もきちんと修復させるし、記憶の方も、『野良犬に追いかけて回されていたところをあなたに助けられた』とでも変えておきましょう」

「記憶を変える、ね……そんな事出来るんなら、襲われた事を綺麗さっぱり忘れさせた方が……」

「それでも、『何か恐ろしいものに襲われた』という部分までは消せないの。それが何なのかわからないまままでいさせるよりは、そこに答えと救済を与えておいた方が、彼女たちを悩ませずに済むわ」

「……じゃあ、そういう事で」

「他に何か、聞きたい事はあるかしら？」

「——先輩がこの町の管理人つて事で、いいんでしょうか？」

「ええ、そうね」

「この町を去年から変な力で覆ったのも？」

「変な力とはご挨拶ねえ」

リアスは苦笑した。町を包む結界の存在にこの少年が気付いていた事に、内心驚きもしたが。

「私一人の力ではないわ。その結界に関しては、いろいろと事情があるの」

「事情って？」

「うーん、そうね……どこから話せばいいかしら……」

リアスは紅髪を人差し指に巻き付け始めた。思案にふける時の癖である。髪が傷むからやめなさいと母や義姉からよく注意されるのだが、依然直らない……。

数秒の思案の後、自分達が人間ではなく悪魔である事、悪魔・天使・墮天使の三つの種族とその関係、つい最近まで繰り広げられていた戦いの事などを説明した。

「あなたの言う変な力というのは、その敵から町を守るための結界だったの」

「その割りには、あんまり守れてる感じがしませんけど」

言外に、ついさつきクラスメート二人が襲われた事を非難していた。

「それについては、申し訳ないと思ってるわ。だけど結界の仕様上、仕方のない部分もあるの。そうね、網に例えればいいかしら……大きな魚用の網でメダカを捕まえろというのは無理な話でしょう？」

「そんなもんですか」

「ただ、情報はすぐに入ってくるから、お友達を襲ったはぐれ悪魔のよきな輩は私たちが直接討伐するようになってるの……ただ、ね」

リアスは思いきって、確かめてみる事にした。単刀直入に尋ねたりはせず、とりあえず話題を振って連世の反応を探ってみるが……、

「三年ほど前から、まれにそのはぐれ悪魔の消息が掴めなくなるケースが起きているの。件数は十件ほどだけれど、場所は全て駒王町内の桂馬川区。私たちとは別に、彼等を退治している者がいるのではないかと推測されるのだけれど……」

「あ、じゃあそれ、俺です」

「……あつさりと認めた。」

「そ、そうなの……」

「人の仕事横取りしたとか、文句言わないでくださいよ？」

「そんなつもりは毛頭ないわ。むしろ感謝しているし、無関係なあなたをこちらのゴタゴタに巻き込む形になって、申し訳ないくらいよ……だけど、気になるわね。先程といい、あなたにはいったいどんな力があるのか……」

そこで、リビングのドアがノックされ、女性の声がした。

「リアスさん。お客様にコーヒーをお持ちしましたよ」

「ありがとうございます」

リアスは立ち上がり、ドアを開ける。トレーに二人分のコーヒーを乗せて、中年の女性が立っていた。一誠の母親の兵藤静江だ。

トレーを受け取るリアスの肩越しに、静江は客人の顔をチラリと見た。

一瞬、何か言いたげに口を開けたが、すぐに閉じた。まるで昔の知り合いを見かけたような表情だった。

再び二人きりになる。

「話の続きだけれど、あなたの力がどんなものなのか、見せてもらえないかしら」

「いいですよ？」

連也はコーヒーカップを手に取ると、中のコーヒーにフツと強めに息を吹き掛けた。

ブワツと湯気が立ち上る。真っ赤に焼けた金属に冷水を掛けた時のような、激しい勢いだ。

次いで、コーヒーに人差し指を入れる。そしてカップから抜いた指には、コーヒーがゼリー状に固まってくっついていた。

「触ってみてください」

と連也が言うので、リアスが指先でおそろおそろの塊に触れると……ヒンヤリと冷たかった。

『念』を吹き掛けて熱を奪って、そして指先から流し込んだ『念』で

固定させてます」

答えてる間に、コーヒ―は固体から液体に変化し、カップの中に戻された。

「念……つて、何？」

「気を高めていくと、物理法則を超越した霊的なエネルギーに変化します。思念の強さや想像力でいくらでも応用が利くこの力を『念』と呼び、武道に取り入れたのが念道で、俺はその念道の修行中なんです」

「セイクリッド・ギア神 器ではないのね……」

「何ですか、それ」

そんな単語を昨日ジャンゴが口にしていたのを思い出した。

リアスは神セイクリッド・ギア 器について簡単に説明する。

「――人間にしか発現しない上に、使い方次第では神すら倒し得る強力な物もあるの。だけど、未だに未知の部分も多いから、私たち三種族以外にも、いろんな種族や勢力が警戒し、注目してもいるわ」

「ふうん……ま、俺には関係ないですけど」

「最初はてつきり、あなたが持つてるあの木刀がそうなのかと思つてたわ」

「あれは『飛龍』といつて、ただの木刀ですよ。先祖伝来の逸品で、代々の念道家の『念』が宿つてはいますけど、ただの木刀です」

大事な事なので二回言つた。変に誤解されるのは面倒なのだ。

連也の話を聞きながら、リアスは念道という技に興味を覚えた。

一誠は一年前とは比べ物にならない、別人どころか別の生き物と呼んでも差し支えないほど強くなっている。怒りで我を忘れ、力を倍加させてなかつたとはいえ、そんな一誠を一撃で昏倒させる強さ。

それが訓練によって得られるというのならば、なかなか魅力的な話ではないだろうか？

「ねえ、秋月くん」

「はい」

「私たちに、その念道を教えてもらえないかしら。もちろん、授業料はそちらの言い値でお支払いさせてもらうわ」

「お断りします」

連也は断った。

一ミリ秒の躊躇いもなく断った。

まるで最初から答えが決まっていたかのように、淀みなく断った。



同時刻の桂馬川公園。

連也がジャンゴを倒した場所だ。

そこに四人の男女が集まっていた。

その内の一人の男が地面に屈んだ。そして大きめのサングラスを外す。その下の両目はギョロリと飛び出て、左右別々に動いている。まるでカメレオンだ。

「ふむ……ふむふむ……ジャンゴはここで殺されているな……グレモリー眷属でもシトリー眷属でもない……人間の小僧だ……木で出来た刀を使う……しかし、何だこの力は……ジャンゴの拳を簡単に止めて、無造作に投げ飛ばしおった……」

一見、地面や夜の闇を見つめているようにしか見えない。しかし彼の目には、昨日の戦いがハッキリと映し出されていた。

「ジャンゴめ、黒い塵になって消え去りおった……まるで聖剣で斬られたかのようなだが、聖剣ではあるまい……木刀型の聖剣など、聞いた事もない」

「じゃあ何なのよ」

尋ねたのは、背広とタイトなミニスカートで肢体を包む若い女だった。インナーの類いは着ていないらしく、背広の襟から白く深い谷間があらわになっていた。スカートも「ひよつとしてサイズを間違えるのか？」と思うくらいにピチピチで、下半身の肉感的なラインをくつきりさせている。

「さて、そこまではわからんが……人間どもは何かといろんなものを作る生き物だからな。新しい聖剣か、それとも我々の知らない破魔妖撃の術を生み出したのかも知れん」

「ボスが通れるよう、結界に抜け穴作っておかなきゃならねえつてのに……」

素肌の上から革ジャンを着た金髪の男が、唸るような声でぼやく。

「頭数が減るわ、訳わかんねー敵が湧いて出るわ、めんどくせえ！」  
「なあに、ボスをお招き出来れば、この程度の小僧など恐れるに足りん……グレモリー眷属であろうと、赤龍帝であろうとも、ボスのドウレ  
ンダナの前ではな」

カメレオンの目を持つ男は不敵に笑い、サングラスを着けた。

彼の言葉に、他の面子より頭二つ分も背の高い、コートの方がうな  
ずく。

背広の女がサングラスの男に声を掛けた。

「ミドラも先行してたんでしょ？ あの馬鹿取っ捕まえて、もう少し  
詳しい事情を聞きましょう」

「うむ。あの馬鹿は途中でジャンゴと別れておる。おおかた女漁りで  
もやっとるんだらう。ついてこい」

サングラスの男に先導されて、一同は闇に溶け込むように消えて  
いった……。

そして翌日……

「お断りします」

連也は断った。

一ミリ秒の躊躇いもなく断った。

まるで最初から答えが決まっていたかのように、淀みなく断った。

「そ、そんなあつさり……」

「だって、俺だってまだ修行中ですし、とても人様に教えられるレベルじゃないです」

言いながら、連也は一瞬目を伏せた。

念道の師である父を病気で亡くし、新たに指導してくれる者もない現状、彼の念道は半分我流のようなものだ。先祖代々の教えを中途半端な形で遺していく事になるのではないか……そんな危惧が常に心の片隅にある。それが一瞬、おもて面に出た。

「そもそも、先輩たちが悪魔だってんなら、人間にはない力だって持つてるでしょ？ それを極めていく方が余程早い。何よりも、万が一の事態に対して、俺は責任が持てません」

「万が一の事態？」

「……先輩たちが、俺から教わった念道を悪用しないという保証はない。先輩たちから教わった別の誰かが悪用しないという保証はもつとない。」

だけど、先輩たちに教えといて他の奴には教えないなんて訳にはいかないし、先輩も、自分たちは習ったけど他の奴はダメなんてのは、筋が通らない……だから、その願いだけは聞けません」

「……それほど危険なものでもあるのね」

先程の連也の説明でも、『念』は物理法則をも超越したエネルギーだと言っていた。

それを自在に操れるようになれば、良からぬ事を考える者は確かに現れるだろう。リアスが眷属と共に討伐してきたはぐれ悪魔の中にも、そのような手合いはいた。

「そういう事なら仕方がないわね……変な事を言っでごめんなさい

ね、秋月くん。

最後になるけど、あなたが倒したはぐれ悪魔には仲間がいて、彼等もこの町に侵入してる可能性があるの。もちろん私たちの手で迅速に対処するつもりだけれど、あなたもくれぐれも気を付けてね？」

「わかりました」

話はそれで終わった。

連也はリアスとその眷属たちに、玄関まで見送られる。家まで送りたいというリアスの申し出は、丁寧に断った。

「そんじゃ、お邪魔しました」

それだけ言った連也は、去り際に軽く手を上げた。リアスの後ろにいるゼノヴィアに向けて。

ゼノヴィアも、同じように返した。



連也は「明日の朝には目を覚ますだろう」と言ったが、その「朝」とは具体的には午前九時くらいを想定していた。

しかし一誠が目を覚ましたのは、その予測よりも早い午前七時であった。

パチツと目を開き、カーテン越しの朝陽でうつすらと照らされた自室の天井を見る。一瞬の記憶の混乱があった。夜の公園にいた自分が何故家に戻っているのか？

だがすぐに、村山と片瀬の裸体を思い出し、次にそのそばにいた少年を見て、そいつが犯人だと思い込んで殴りかかった事を思い出した。

放った左拳をよけられたと思った瞬間、そいつの持っていた木刀で腹を打たれた事、気を失う寸前に見たのが、自分の邪魔を二回もしたあの怪しげな少年の顔だった事も。

「あ、あの野郎！」

「あ、おはよう、イツセーくん」

傍らから声がした。

ベッドの横で、椅子に座って小説を読んでいた木場祐斗だった。

悪魔の視覚ならば、今くらいの明るさでも読書には充分なのだ。

「具合はどうだい？ どこか痛い所は？」

「ああ、全然平気だ……って、そうじゃねえよ！ おかしいだろ、なんでお前なんだよ！ 普通こういう時にそばに居るのはリアスとかアーシアとか朱乃さんとか、そうでなくともロスヴァイセさんとかゼノヴィアとかレイヴェルとか小猫ちゃんとか……とにかくもう、なんでお前なんだよ！ おかしいだろおおおお！」

「……うん、確かにまったく問題ないみたいだね」

一誠の悲痛な叫びを祐斗は鮮やかに受け流した。

「リアス様とアーシアはおばさんと一緒に朝ごはんの支度をしてるよ。ロスヴァイセさんとゼノヴィアはもう学校に行っただし、小猫ちゃんもレイヴェルは、はぐれ悪魔の仲間も町内に侵入してるかも知れないから、その探索。ギヤスパークくんも一緒だ。朱乃さんはお仕置き部屋でまだ吊るされてる。で、君が目を覚ました時に誰も居なかったら寂しいだろうから、僕がそばについてたんだよ」

「だからその人選がおかしいって言ってんだるるおおおお！」

巻き舌になりつつなおも叫ぶ一誠。

「目が覚めたようね、イツセー」

ドアが開き、リアスが入ってきた。

「リアス」

「体の具合はどう？ 気分は？」

「いや、全然平気だよ。あんな奴のちんけな攻撃、屁でもないぜ！」

「それは良かったわ……心置きなくお仕置きが出来そうね」

「……えっ!?!」

この時、一誠の目には、リアスの身体から陽炎めいてユラユラと立ち上る怒気が、ハッキリと映し出されていた。



敷地内の一角にある離れが、『お仕置き部屋』である。

既に朱乃が、襦袢の上から柔肌なやみに荒縄を食い込ませて天井から吊るされていた。

白い肌はしっとり汗ばみ、紫色の瞳は快感に濡れて、恍惚としただらしない表情を恥ずかしげもなくさらけ出している。

その隣で、パンツ一丁に剥かれた一誠がやはり吊るされていた。身体のあちこちに、鞭で打たれた痕があった。すぐそばの朱乃の痴態も目に入らず、正面で乗馬鞭を持って佇むリアスにおどおどした視線を投げ掛けている。

「——という訳で、秋月くんはむしろあの二人を救った恩人だったのよ？ それをあなたと来たら、事情を聞こうともしないで殴りかかるなんて……」

「ご、ごめんよりアス……村山と片瀬は去年同じクラスだったんだ……その二人があんな風になつてるのを見たら、ついカツとなつて……」

「カツとなつて、わざわざバランスブレイク禁手化してから襲い掛かったと言うの？ 呆れたわね……」

リアスは苛立たしげに、髪を掻き上げた。

「あなた、自分がどれだけ幸運だったかわかっていないようね」

「わ、わかってるよ……以前アザゼル先生にも言われたよ、ああいうのを格上相手にやったら殺されるって。そういう意味では、確かに運が良かった、あぎやあつ!？」

リアスの手がひるがえり、乗馬鞭が一誠の腹を打った。

「そういう事ではないのよイツセー……全然わかってないのね。」

いい事？ もしも秋月くんが何の力も持たない、本当にあそこを通りかかっただけの一般人だったとしたら、あなたはそんな無実の人間を的外れな怒りで殺していたかも知れないのよ？」

「うっ……」

ようやくその事に気付いたらしく、一誠は小さく呻いた。

「クイーシャの件もそうよね。何の非もない相手に一方的な怒りから来る殺意を向けて……」

「あ、あの時は仲間が次々やられて……」

「それは向こうだって同じだし、対等なルールで戦っていたのだから、どんな結果になろうとも恨むのは筋違いよ……まったく、こんな体たらくでは、上級悪魔の昇格も取り消してもらわなくてはいけないわね。あなたの将来の眷属や領民がいつどんな理由で傷つけられるか、

わかったものではないわ」

「そ、そこまで言わなくてもいいだろ……」

「秋月くんを殺してしまった後でも、同じ事が言えるの?」

乗馬鞭で一誠の頬をペチペチと叩きながら、リアスは凄んでみせる。

自分の持つ力の強さやそれに伴う責任を考慮せず、感情のままに力を奮う。そんな男を自分と同じ上級悪魔とも、将来の伴侶とも認めたくない。もつと身分に相応しい落ち着きを持ってもらいたい。

一誠を愛するからこそ、リアスの態度はここ最近厳しいものとなっていた。

一方朱乃は、吊るされた自分のすぐそばでの二人のやり取りに、擬似放置プレイめいたものを感じて、豊満な肉体をビクンビクンと震わせていた。



昼になって、リアスのお仕置きとお説教から解放された一誠は、重たい足取りで登校した。

(上級悪魔になってから、いい事ないよなあ……)

リアスもゼノヴィアも口うるさい事を言うようになった。二人だけでなくアジアも、オカルト研究部部长という立場がそうさせるのか、一誠に対してまるで母親のようにお小言を言う事が増えた。

変わらず接してくれるメンバーもいるが、この三人から怒られる事が多くなったのは確かだ。別に自分の普段の態度が前よりもだらけて来ているとは思えない。なのに事あるごとに文句を言われ、その内容も「上級悪魔としての自覚と責任を持て」の一言に常に集約される。同じ説教を何回も聞かされているみたいで、なおさら疲れてしまうのだ。

正門から入ると何だか目立ってしまいそうなので、裏門から校舎に入った。

教室に荷物を置き、授業前に用を足しておこうと廊下に出たところで、バツタリと連也に出くわした。

彼の顔を見た途端、昨夜の村山と片瀬のあられもない姿を思い出

し、怒りが湧いてきた。

「……よう。昨日の事で話がある。ついてこい」

嫌だと言おうものなら力づくで連れていくつもりだったが、一誠の言葉に、連也はあっさりに従った。

校舎の裏庭は日陰になっていて、人気もなく静かだ。

「リアスから聞いた。村山と片瀬を、お前が助けてくれたんだってな」

「ああ」

「……あの二人と最後まで一緒に居たのもお前だったんだっけか」

「ああ、そうだけど？」

「そうか」

それを確認すると、一誠は握り拳を連也の頬に叩きつけた。連也はこれをまともにくらい、たたらを踏んだ。

「なんで殴られたかわかるよな？ お前があの二人を守れてないからだよ……」

一誠の声は怒りで震えていた。

「お前が公園で別れたりしなけりや、村山も片瀬も怖い思いや恥ずかしい思いをしなくて済んだんだ！ 危ないところを助けりやそれでもいいってもんじゃねえ！ 危険を事前に排除する、危ない目に遭うのを未然に防ぐ！ そこまでやって本当の意味で守護<sup>まも</sup>るって事なんだ！」

「……ご高説はありがたいけどな、そりやお前等の仕事なんじゃねえのか？」

「話を逸らすな！ 今はお前の事を話してるんだ！ リアスの話じゃ物凄い力を持つてるみたいだけど、そんな力があるくせに真剣に人を守ろうとしない奴を見てると苛つくんだよ！」

今のはお前のせいで怖い思いをした、村山と片瀬の分だと思え！」

一誠は黙示録<sup>トライヘキサ</sup>の獣との戦いで離れ離れにならざるを得なかった者たちの事を思い出していた。

自分たちがもつとしっかりしていれば、あるいは別の、もっと良い結果になったかも知れない。そんな思いがある。

だからこそ、むぎむぎとかつてのクラスメートたちを危険にさらし

た連也が許せなかったのだ。

「言いたい事はそれだけかい、イツセー」

背後からの声に振り向くと、ゼノヴィアが立っていた。眉間にシワを寄せて、一誠を睨み付けている。

「ぜ、ゼノヴィア……う？」

その険しい表情に、一誠は思わずたじろいだ。

ゼノヴィアはそんな彼の正面に、ズイツと歩み寄る。

「元同級生の恩人に対して、ずいぶん言いぐさじゃないか。連也がああ二人を救ったのは紛れもない事実なのだけどね」

「いや、でも、それだけじゃダメだろ！ こいつにも言ったけど、危険から救うだけじゃダメなんだ、それじゃ遅いんだよ！」

「……まあ、それはそれで一理ある。だが、連也に対して、他にもっと言うべき事があるだろう？」

「え？ えーつと……」

一誠が考え込んだ瞬間、ゼノヴィアの鉄拳が一誠の頬を打ち抜いた。連也が殴られたのと同じ場所を。

「今のは、勘違いで殴りかかられた上に、謝罪もなしに更に殴られた連也の分だと思え」

ゼノヴィアの声は、鋼鉄のような暗さと冷たさを宿していた。

## 接触

一誠を殴り飛ばした後、ゼノヴィアは連也を保健室へ連れて行く。背後で一誠が何やらわめいていたが、無視した。

保健室はちょうど誰もいなかった。鍵は掛かっていなかったから、校医の木野はすぐに戻ってくるつもりなのだろう。

「すまなかつたね、連也。痛かつただらう？」

「いや、平気だ」

現に、殴られた口許の出血は既に止まっていた。ゼノヴィアが戸棚から赤チンだのガーゼだのを探して取り出す間にも、傷はどんどん治っていく。

体内で練り上げられた気は、『念』へと昇華させる他にも全身の細胞を活性化させて、自然治癒力を高める事も出来る。

それでも、「私の気が済まないから」と言っつて、ゼノヴィアはほぼ形だけではあつたが、手当てをした。

連也は椅子に座り、おとなしくされるがまだまだ。すぐそばから漂う髪の毛の香りが、嗅覚を優しく刺激する。

間近で見ると、真剣に手当てしてくれるゼノヴィアの表情にはひたむきさがあり、何よりも可愛らしかつた。

琥珀色の瞳。

小さめの鼻。

ふつくらした唇。

どれもが連也の視線を吸い寄せて離さない。

しかも、今は保健室に二人きり。

目の前の少女に触れたいという衝動が、連也の胸の中でムラムラと込み上げてくる。

「さつきは一誠がすまなかつたね。私からも、謝罪させてもらうよ。すまない」

手当てを終えたゼノヴィアは、そう言っつてペコリと頭を下げる。

「一誠は最近上級悪魔に昇格したばかりなんだ。元々その場の感情で突っ走りやすい奴だが、上級悪魔としての責任やプレッシャーで、少

し暴走しているのかも知れない。どうか許してほしい」

「ゼノヴィアがそこまで言うなら……大して痛くもなかったし、殴られた事は気にしないでおくよ。言ってる事は、一理あるしな」

「いや、それも無い。アイツの言っていた事は、本来我々が町の管理者として心得ておくべき事であり、一般人の連也がそこまでする義務はないんだ。一民間人でしかない君には、そもそも出来る事も限られてるだろう？　どうかあまり深く考えすぎず、まずは自分の安全を優先してくれ」

「そうか……そうするよ」

連也はとりあえずそう答えておいた。そう言えば、彼女が安心してくれるだろうと思ったのだ。

正直なところ、一誠の事は気にくわない。

普段の行動もあるが、昨夜リアスから聞いた話で、ますます気にくわなくなった。

悪魔には下級・中級・上級とあり、上級悪魔のみが眷属として他の悪魔を従える事が出来る。

一誠はつい最近、その上級悪魔に昇格し、眷属を持つ事が許された。そして自分の眷属に、オカルト研究部部長のアーシア、その顧問で公民科の担任教師であるロスヴァイセ、そして、今自分の目の前にいる少女ゼノヴィアを迎え入れたと聞いた。

他の二人はともかく、ゼノヴィアが一誠の眷属となっている事、一誠がゼノヴィアの主人である事が、無性に腹立たしくて仕方がなかった。

だが、それはそれ、これはこれだ。

一誠の言う通り、自分がもつと上手く立ち回れたら、村山と片瀬が被害に遭う事自体なかったのではないかと思う。

師である父を亡くし、自分の念道は半分我流のようなものなのだから、仕方がないのだ——などと、果たして二人のクラスメートに対して言えるだろうか？

言えるはずがない。

言う資格などない。

(……とはいえ、どうすりやいいのかね)

父に代わる新たな指導者など、そうそういるものではない。いたとしても、簡単に出会えるものではない。出会えたとして、果たして指導してくれるかどうかもわからない。

このまま、中途半端にしか人を守れない、中途半端な力を抱えて生きていかなばならないのだろうか……？

連也の胸に、そんな不安や危惧、焦りが渦を巻き始めていた。

「連也」

ゼノヴィアが、不意に少年の手を握った。

その瞬間、連也は全身の力みがほぐれていく感覚に見舞われる。

「あまり思い詰めるな。君は、君の出来る事をした。それでいいじゃないか……村山と片瀬は去年の同級生で、今も大切な友達だ。君はそんな私の大切な友達を救ってくれた。それだけは確かな事実なんだ。感謝してもしきれないよ……本当に、ありがとう」

彼女の言葉が、耳に心地良かった。

優しく、包み込むように握ってくれるその手は、柔らかく、暖かかった。

◆

放課後。

駒王学園の正門前に、二人の男女が立っている。

男の方は黒いマントをすっぽりと被り、大きめのサングラスを掛けている。

女は、背広とミニのタイトスカート姿だ。しかし素肌の上から着ているのか、襟口からは深い谷間が覗いている。

生徒でもなければ教員でもない二人が、下校する生徒たちの一人一人をジロジロと眺めている……が、生徒たちは誰一人として彼等に注意を払わなかった。

見えていないのではない。生徒たちからはその姿がバツチリ見えているのだが、それを不審に思わないだけなのだ。並木道に木が並んでいるのを不審に思わないように。或いは、市街地に信号機があるのを不思議に思わないように。

二人の男女はそんな認識阻害の結界を、自分たちの周りに張り巡らせているのである。

「——見付けた」

サンングラスの男が呟いた。その視線の先にいるのは、秋月連也。ピタリと足を止めて、彼等の方をじつと見ている。

しかし、すぐに「僕は関係ありません」と言う風を装い、足早に歩き出した。不審者の目的が自分らしいと感じて、わざと尾行させて学校から引き離すつもりだったが……。

「待ちなさいよ、坊や」

女がその前に立ちはだかる。背広の下にはシャツどころか下着も着けていないのか、一挙動の度に胸が重たげに揺れた。

「君に話がある」

サンングラスの男が連也の背後に回る。

「そっちはあっても、俺には不審者と話す用件も話をする暇もない」

「あら、うちの使い走りを二人も殺っておいて、ご挨拶ね」

「何の事だ」

「隠さずともよい。君は自分と友人の身を守っただけだからな。そもそも、仕事も忘れて遊び呆けた挙げ句に殺られるような間抜けが悪いのだ。気に病む事などない」

「……見てたのか？」

男の、まるで現場を見ていたかのような言い方に、連也は危険を感じた。もしあの場にいたのだとすれば、自分やリアスたちにすら気取られずにいた事になる。彼等がその気だったなら、不意打ちをくらって命を落としていた可能性も……。

「見ていたのではなく、後から見たのだよ。私の魔時眼まじがんは、時間や距離を越えてあらゆる情報を見る事が出来るのでな」

「おとなしくついてらっしゃいな。言う事聞いたら、オネーサンが気持ちいい事してあげるわよ？」

女は大事な部分が見えないギリギリまで背広の襟を広げて、豊満な胸を見せつける。

「嫌だと言ったら？」

「仕方がないから、回れ右して帰るとしよう」

「ついでにその辺の人間を持って帰って、暇潰しのオモチャにしちゃうけど、あなたには関係ない事だから別にいいわよね？」

「いい訳あるか……わかったよ、俺の負けだ。どこにでも案内してくれ、あの世以外で」

連也は両手を上げて、そう言った。

「いい子ね、坊や。それじゃあ行きましようか」

女が連也の腕に自分の腕を絡めて、胸を押し当ててくる。しかし、それを喜べるほど連也は呑気ではなかった。

野良猫だろうか。正門の塀の上にいた一匹の黒猫が、門を抜ける三人を見て塀からパツと飛び退いた。

◆  
連れて来られたのは、市街地を抜けた所にあるスクラップ置き場だ。

廃棄された粗大ゴミが積み重なって出来た袋小路の奥で、連也は二人のはぐれ悪魔と向かい合った。

「まずは自己紹介をさせてもらおう。私はキング・オルランドの僧侶ビショップを務めるクルガン。そしてこやつは」

「キング・オルランドの兵士ポーンシエザナよ。よろしくね」

女は名乗って、からかい半分に投げキッスをよこす。連也はそれをデコピンで叩き落とした。

「先程も言ったが、私の魔時眼は時間や距離を越えてあらゆる情報を見る事が出来る。君がジャンゴとミドラを倒すところも透視した。どういふものはわからんが、素晴らしい力だ」

「おだてても木には登らないぞ」

「おだててなどおらんよ。どうだろう、我々の仲間にならんかね？」

君その力を思う存分に奮える場所を、我々のボスが提供してくれるぞ」

「……」

連也はふと考えた。

ここで上手く彼等の情報を引き出してみるべきではないだろうか。

後はそれをリアス・グレモリーに教えれば、彼女たちが上手くやってくれるだろう。自分一人で奮戦するよりは効率的だ。それに生徒会長ゼノサイアの役に立てれば、気分もいい。

「お前等のボスってのは、どういう奴なんだ？ 力を奮う場所を与えるとか言ったが、世界征服とかそういうのでも考えてるのか？」

「そこまで大仰な話ではない。だが、この世界は君が思っている以上に、戦いで満ち溢れておるのだ。この日本だけでも、世界各地の神話勢力や妖怪魔物の類いが、この国を自分たちの新たな領土にしようとせめぎ合いをしておる。ましてや海の向こうともなれば、人間同士の争いも激化している。こちらから世界征服などと古ぼけたお題目を唱えずとも、戦いの種はそこかしこにあるのだ」

「で、そういう所でお前たちと一緒に戦え、と」

「そういう事だ……君の力は恐らく、長年の訓練によって得た力だ。その努力も、この町ではろくに報われる事もあるまい。我等の王ならば、君の努力が無駄ではない事を証明させてくれるだろう」

「みんな同じ事を言うんだな」

連也はガシガシと頭を掻いた。

「みんな、とは？」

「この町を管理してるリアス・グレモリーさんって人も、この前同じ事言って俺をスカウトしてきたよ」

無論デタラメのハツタリである。

「ほう、リアス・グレモリーからも……」

「そつちの返答は保留してるけど、給料も弾んでくれるらしいし、可愛い女の子もたくさんいるし、福利厚生もしっかりしてそうだ。あんたたちはその辺どうなんだ？ あんたのボスは何て言ってた？ 何なら直接会って話し合ってみたいんだけど……」

「ふふふ。こちらの情報を得ようと必死だな」

「えっ？」

クルガンの言葉に、連也は一瞬ゾクツとした。

ニヤニヤと笑いながら、クルガンはサングラスを外す。カメレオンのように隆起した眼が、ギョロギョロと左右別々に動いていた。

「私の魔時眼には、そのような光景は映し出されておらん。リアス・グレモリーからのスカウトというのは嘘だ。こちらの情報を引き出して奴に売るつもりか？ それとも、まさかボスと直接会って戦うつもりか？ どちらにせよ、あまり利口とは言えんな」

「……なら、そんなお馬鹿さんな俺を仲間にしてもしょうがないよな。この話はなかった事に……」

「いやいや、君のその積極性は評価したい。ボスに会いたいのなら会わせてやろう。しかし、その前に少し教育的指導が必要なようだ……シエザナ」

「オツケ〜♪」

シエザナが突然、奇妙な構えを取った。顔の前で、両手の親指と人差し指で長方形を作ったのだ。その長方形の中心に連也を捉えると、手を左右に広げる。

「!?!」

瞬間、連也の眉間に走る第六感！

咄嗟に念道の力で強化した脚力で、その場から後方へ大きく飛び退いた。

次の瞬間、左右から大量の土砂が雪崩となって落ちてきた！

こんな物がどこから来たのか？ いぶかしむ連也の目に映るのは、冷蔵庫や自転車、自動車などのパーツだった。そして連也は、突如発生した土石流の正体を知った。これは、さっきまで左右に積み重ねられて壁を作っていた粗大ゴミたちだ。それがドロドロに溶けて液体となり、押し寄せてきたのである。

そう理解しつつ着地した連也の足が、膝まで地面に埋もれた。アスファルトで舗装されたはずの地面も、液化化しているのだ。かなり深いところまで液化化しているらしく、連也の体は自重で更に深く、胸元まで沈んでいく。

「つつかまくえた♪」

「よし、後は固めてからボスの所へ連行しろ」

「アイアイサー」

シエザナは再び、指で長方形の枠を作った。これが液化化能力を行

使うための“スイッチ”なのだ。

連也が、右手を開いて天に掲げた。

掌から白い光が溢れて、そこから柄巻きされた木刀『飛龍』が現れる。掴んだ木刀で連也は目の前の地面を叩いた。そんな事をして、水を打つのと大して変わりはない……はずだった。

だがその打撃の反動によって、少年の体は底無し沼と化した地面から脱出し、空中へと舞い上がる！

「嘘おっ!？」

「よけろ、この馬鹿！」

クルガンが驚くシエザナの襟首を掴み、その場から飛び退く。

その時、連也は既に飛龍を横一文字に振り抜いていた。木刀からほとばしる破邪の『念』が、刃となって飛翔し、二人のいた地面に深く大きな切れ込みを入れた。

「今度こそ！」

シエザナは再度能力を行使する。指で作った棒に捉えたのは、連也が着地するであろう地面と、その周囲の液化化されてないスクラップの壁。

連也の足が地面に触れた。

スニーカーの爪先がかすかに沈み——同極性の磁石同士が反発するように浮いた。少年の体は水に浮くアメンボのように、液化化したアスファルトに波紋を浮かべながら直立して浮いていた。

そこへ左右から押し寄せる、粗大ゴミの大瀑布！

連也は地面に飛龍の先端を突き立てると、勢い良く振り上げた。液化化したアスファルトやその下の土が木刀の切っ先にまとわりつき、空中に水流となって舞い踊る！

「念道剣、波濤返し！」

左右からの雪崩にその水流を放つと、液化化した粗大ゴミの方が、木刀で巻き起こされた細かい水流に吸収されていく。そして一つの巨大な流れとなって、シエザナとクルガンに襲い掛かった。

しかし念道によって生み出された怒濤は、突如発生した業火のカーテンによって遮られて蒸発した。

「まだ、仲間がいるのか!？」

「その通り」

答えたのは、素肌の上から革ジャンを着た若い男。髪を剣山のように逆立て、細い目と薄い唇の、酷薄な顔立ちだ。

そして彼よりも頭二つ分も背の高い、コートの男。

二人とも、背中からコウモリのような翼を広げて宙に浮いていた。

「俺はキング・オルランドの騎士ナイトバズソー・バルログ。こっちのノツポは同じく騎士ナイトのドルトーレだ。よろしく頼むぜ、クソガキ」

「私は兵藤一誠の騎士ナイトゼノヴィア・クアルタだ」

連也の耳に、知ってる声が聞こえた。

上空を白い光が烈風のごとく駆け抜けると、バズソーとドルトーレの翼を切断する。二人は難なく着地したが、翼の切断面からは火であぶられたかのように煙が出ている。

「この町で暴れる事は許さん。我が校の生徒に危害を加える事は、尚の事許さん。この刃に刻まれし聖人セイントの御名において、お前たちを斬る！」

連也の背後に、ゼノヴィアが立っていた。

駒王学園の制服ではない。黒のタイツスーツに身を包み、その手には金色の鍔と青い刀身を備えた、少女の背丈ほどもある大剣が握られている。

不滅の刃デュランダルは、獅子のごとく凜猛な唸り声を上げていた。

## 敵の正体

連也が連行されていくのと入れ替わりに、正門の扉から飛び下りた黒猫が、学校の敷地内へと駆け込んだ。

旧校舎に向かおうとしたところで、ゼノヴィアたち生徒会メンバーと出くわす。

捕まえようとする彼女たちの手をすり抜けて、黒猫は人気のない裏庭へと逃げていく。その尻尾が、目の錯覚でも何でもなく二本あるのに気付いた生徒会は、一斉にそれを追い掛けた。

裏庭まで来ると、黒猫はヒラリと宙返りして、黒い着物を着崩した女の姿に変身した。

「黒歌!？」

「やつほーゼノつち。あんたんとこの生徒が一人、はぐれ悪魔に連れて行かれちゃったわよ?」

「何だと!？」

「あいつ等の匂いは覚えておいたから、今ならまだ追跡できるわ。どうする?」

「聞かれるまでもない。助けに行こう……ただし」

ゼノヴィアは生徒会メンバーの方を向く。

「みんなは学校に残っていてくれ。生徒会全員がいなくなるのはまずい。私がオカルト研究部のみんなを連れて、その生徒を助けに行く。だから匙副会長、すまないが後の事は任せた」

「了解!」

匙元士郎の威勢の良い返事に安心して、ゼノヴィアは旧校舎に向かった。幸い部室にメンバーが全員集まっている。

一誠眷属が先行し、残るグレモリー眷属も主であるリアスに連絡してから向かう事になった。

そして職員会議中で動けないロスヴァイセを除く一誠眷属たちは、黒歌に先導されて、連也の連れ去られたスクラップ置き場へと到着したのである。



バズソーとドルトーレの翼を切り落としたゼノヴィア。  
その背後には、使い魔である蒼スプライトドラゴン雷龍のラッセーを連れたアーシア。  
ア。

空中には、龍の翼を広げた一誠と、悪魔の翼を広げたレイヴェルが陣取っていた。一誠は既に禁手バランスブレイク化して、鎧をまとっている。

「クックククツ……」

クルガンが不意に笑い始めた。

シエザナとドルトーレもクスクスと笑い出す。

「うわーっはっはっはっはっ！」

バズソーに至っては、腹を抱えて爆笑し始めた。

「何がおかしい？」

ゼノヴィアの当然と言えばあまりにも当然な質問に、クルガンが答えた。

「失礼……我々は実に運がいいと思ってるね」

「もしもシトリー眷属やヴァーリチームに來られたら、ちよつとヤバかったけどねえ〜」

「ところがギツチョン、來たのは赤龍帝眷属ときやがった！ もう笑うしかねーだろ！ 力押ししか出来ねえソウリムシ単細胞の集まりなんざ楽勝だつっーの！」

「ちよ、ソウリムシ単細胞とかさすがに言い過ぎでしょ！ まあ事実だからしやうがないけど？ 事実だからしようがないけど！」

はぐれ悪魔たちはゲラゲラと笑い始める。

「こいつ等、好き勝手言いやがって……」

力押し。パワー馬鹿。脳筋。火力だけのワンパターン。今まで散々言われてきた事であり、實際幾度か骨身に染みて思い知らされた事である。

しかしはぐれ悪魔にここまであからさまな嘲笑を受けるとは思わなかった。一誠は屈辱で顔をヒクヒクさせる。

「落ち着いてください、イツセー様。私たちの真価を見せつけなければ良だけの事ですわ」

「あ、ああ。そうだな。よーし、やってや、かはっ!？」

「く、う……ゲホッ！」

空中で、一誠とレイヴェルは突如苦しみ、咳き込み始めた。息が出ない。突然不可視のゼリーを鼻や口に突っ込まれたかのようだった。

シエザナが両手の指で作った枠内に、二人を捉えている。彼女の能力によって、二人の周囲の空気がドロドロの粘液と化したのだ。

シエザナ目掛けて、連也が走り出す。木刀『飛龍』に破邪の念を込めて振り上げた瞬間、炎を纏った鞭が刀身に絡み付き、動きを封じる。バズソーだ。左手に燃える鞭を手にし、右手には短剣を携えている。その刀身からは激しい炎が噴き上がっていた。

「死ね、クソガキ！」

バズソーは嬉々としてその炎の短剣で斬りかかる。

同時に、ドルトーレも襲い掛かった。両手には長さ60cmほどの片手剣を持っている。そして前が開かれたコートの下から、同じ片手剣を持つ腕が、更に四本！ 六刀流の白刃がギリリと不気味に輝く。「ラッセーくん、アタック！」

アーシアが使い魔に命じた。小龍はバズソーとドルトーレ目掛けて稲妻を発射。かわされたものの、連也への攻撃を食い止める事は出来た。

加えて、稲妻がバズソーの炎の鞭を焼き切った。

自由になった連也は間合いを詰めて、今度こそ木刀をシエザナの脳天目掛けて振り下ろす！

「シエザナ、右に三歩だ」

クルガンが指示を飛ばしたのは、その一瞬前だった。シエザナがそれに従い、連也の一撃はむなしく空を薙いだ。

「後ろに一歩」

続く指示に従った彼女の鼻先で、デュランダル of 切っ先が真横に振り抜かれた。

初太刀をかわされたゼノヴィアと連也。二人の剣士が更に追撃しようとした瞬間。一誠がゼノヴィアの、レイヴェルが連也の頭上に落ちてきて、押し潰した。呼吸困難に陥ったパニックで前後不覚となっ

たのだ。

「す、すまねえゼノヴィア!」

「いいからどけ! 重い!」

何せ今の一誠は全身鎧を着込んでいるのだ。そんな者に乗っかられたのではたまらなかつた。

「あつはつはつ! あんたたち何? コントでもやってるの?」

シエザナは手を叩いて、大袈裟に笑う。

しかしその豊かな胸の内では、こうなる事すら見透かしていたクルガンの魔時眼ましがんに対する敬意のような感情があつた。

「さて、こちらの準備は整つた」

クルガンがそう言うのと、彼の足下の地面に魔法陣が浮き上がった。それは回転しながら面積を広げていき、スクラップ置き場全体に広がる。そして目映い光を放出した。

光が収まると、そこはスクラップ置き場ではなく、駒王学園の校庭だつた。

「な、何だこいつ等?」

「どこから出てきたの、この人たち!」

生徒たちのどよめきが聞こえてくる。

「え? 学校? え?」

一誠は訳がわからず、辺りをキョロキョロと見回す。

他の者も同様だつた。

「氣を利かせて、君たちをここまで運んでおいた。では失礼するよ、赤龍帝眷属の諸君」

「テメエ、逃がすか!」

一誠は背中から龍の翼を広げて、クルガンへ飛び掛かろうとするが

「何あれ!」

「映画の撮影とかじゃないよね?」

怯える女子生徒の声に、思わず動きが止まる。以前『禍カオス・ブリゲードの団』の魔法使いたちに白昼の学園を襲撃された時の記憶がフラッシュユバツクした。

「ははは……正体を隠さねばならないのは面倒で大変だな、『正義の味方』くん」

クルガンが嘲笑いながら、生徒たちの陰に隠れて去っていく。シエザナやドルトーレもだ。

「逃がすな、追い掛けるー!」

連也が叫んだ。

木刀『飛龍』が白い輝きを放っている。

「ええーやつー!」

気合いと共に飛龍を地面に突き立てると、閃光と突風が周囲に広がった。そしてそれらに吹き飛ばされ、薙ぎ払われるように、校内の景色が消えていく。

一同は再び、あのスクラップ置き場に戻っていた……否、幻覚を見せられたのだ。生徒たちのどよめく声も幻聴だったのだろう。

はぐれ悪魔たちの姿は見えない。既に逃げられた後のようだ。

アーシアがラッサーに探させようとした時、突然後ろから伸びた手が口を塞いできた。そしてもう一本の手が、燃え盛る短剣をその胸に突き立てる!

「アーシアー!」

一誠が気付いて駆け寄ろうとする前に、少女は傷口から嘔き上がった炎で全身を包まれていた。

「あああああああああああつー!」

アーシアの苦悶の絶叫が響き渡る。

「まずは、一匹」

アーシアの背後にいたバズソーが、得意気に呟く。

「俺は優しいから特別に教えてやるがな。液体窒素ぶっかけてたって消えやしねえぜ、バルログの魔焰はな! せいぜい頑張って助けてやりな!」

バズソーは背中から翼を広げて、高笑いしながら飛び去っていく。

「待てこの野郎! ぶっ殺してやる!」

一誠は追い掛けようとするが、ゼノヴィアが止めた。

「この馬鹿! アーシアを助けるのが先決だろう!」

しかし、そう言うゼノヴィア自身、どうすればいいかわからない。近くには水などない。あつたとしても、アーシアの全身を包む炎は火势激しく、ちよつとやそつとの水では消えそうにない。

動いたのは連也だ。

魔焰に身を焼かれるのも厭わずアーシアに駆け寄り、飛龍の刀身を彼女の身体に突き立てた。

「はあっー!」

そして木刀から、破邪の念を迸らせる。少女の全身を苛む業火が、その念によつて吹き飛び、消滅した。

連也が木刀を引き抜く。

アーシアは短剣で刺された傷や火傷の痕こそあるが、木刀を突き立てられた傷はない。制服は殆ど焼失してしまっているが、肉体そのものは比較的無事と言えた。

「アーシア、しつかりしろ!」

一誠が今度こそ駆け寄つて抱き起こす。アーシアはまだ気を失つたままだつたが、息はあつた。

ゼノヴィアは友人が助かった事で気が緩んだのか、ヘナヘナとその場に座り込む。

「大丈夫か?」

連也が手を差し出した。

「あ、ああ……」

その手を取つて立ち上がろうとしたゼノヴィアだったが、差し出された少年の手も、あちこちに火傷を負っている。手だけではなく、顔にもだ。

「連也、火傷が……」

「なあに、かすり傷だ。睡付けときゃ治るさ」

連也はそう言つて、笑つてみせた。

◆ その笑顔が、ゼノヴィアにはとても眩しく見えた。

アーシアは兵藤邸に運ばれた。依然意識は戻らないが、ルフエイの治癒魔法で一両日で完治するだろうとの事だった。

連也はリビングに通されて、一誠の母親である静江に、火傷の当てをしてもらっていた。家に招かれた連也を見るなり、彼女は血相を変え、半ば強引に手当てを始めたのである。

「何があったか知らないけど、こんなにあちこち……お父さんが心配するわよ？」もつと自分を大事にしないと」

「す、すいません……」

何故か謝る連也だった。

「あの、父とはお知り合いなんですか？」

「……テレビのニュースで知ってるだけよ。でも、子を持つ親なら誰もが、あなたのお父さんを尊敬すると思うわ。それに、大なり小なりあなたの事も気にかけてるはずよ。あなたは『愛と奇跡の子』なんだから」

「……」

それはマスコミによって付けられた名前だった。

四年前、連也は父であり念道の師でもある秋月光太郎と共に、冬の雪山に登っていた。自然に触れ、その気を吸収して『念』へと昇華させる修行が目的だった。

だが親子を、突然の雪崩が襲ったのだ。悪天候に阻まれて救助活動も遅々として進まず、親族ですら生存を諦め始めた頃。

雪崩発生から、実に一ヶ月以上も過ぎた頃。

連也を抱き締めた光太郎の姿が、雪の中から発見されたのだ。

不思議な事に、親子の周りの空気だけが春先のように暖かく、足下の地面には花すら咲いていたという。

光太郎は仮死状態だったが、連也の方はいたって健康で、発見時には穏やかな寝息すら立てていたという。

父親の愛によって守られた奇跡の子。

救助されてからしばらくの間、連也はそうやってマスコミに持て囃されていたのである。

もつとも、本人はそれどころではなかったが。

「お父さんは元気？」

「……いえ。あれから凍傷やら肺炎やら何やかんやで……結構頑張っ

たんですけどね。俺が十四になる頃に、母の所に逝きました」

「そう、だったの……ごめんなさいね」

父親より先に母も亡くしていたのだと、今の言葉でわかった。迂闊な質問をしたと、静江は後悔する。

「で、今は叔父の所にお世話になってます」

「そう。おばさんは何もしてあげられないけど、どうか元気でいてちようだいね？」

静江はそう言って、連也の手をギュツと握った。

「ありがとうございます」

その手の暖かさに、連也は癒されるような思いだった。

(俺の母さんもこんな感じだったのかな……)

同時に、物心つく前に死んだ、写真でしか知らない母を偲んだ。

その後は、リアスからの事情聴取だ。

「では、その悪魔たちは確かに『キング・オルランドの何々』という風に名乗っていたのね？」

「ええ、そうです」

「なるほど……ありがとう、秋月くん。これで彼等の正体がわかったわ」

ゼノヴィアからも同じ事を聞いた。

連也からも改めて確認した事で、リアスは敵が何者であるかを確認した。

「正体って？」

「十年ほど前に、人間から悪魔に転生した男がいたの。だけどそいつは自分の主と、自分の仲間でもあるその眷属を皆殺しにしたの」

「何でそんな事を……」

「目的は恐らく、悪魔の駒イヴァイル・ピースだったのでしょうね。眷属が死ぬと、その眷属に使われていた駒は自動的に空白となり、また別の者に使用出来るようになるの。彼は悪魔の駒イヴァイル・ピースを全て自分の物にして、自分だけの眷属を持ちたかったのかも知れないわ……上級悪魔に昇格すれば、独立して、自分だけの駒を与えられるけど、主との主従関係キングまでは消えないの。だからその男、オルランドは、純粋な意味での王キングになりた

かったのかも知れないわね。

冥界からの討伐隊もことごとく返り討ちに遭って、それからパツタリと行方がわからなくなっていたのに、まさかこの町にひよっこり現れるなんて……」

「何かやばそうな奴って感じですね」

「そうね。だけど、私たちの手で必ず討ち果たしてみせるわ。」

とにかく、今日はアーシアを助けてくれて本当にありがとう。

まだ奴等の仲間がどこにいるかわかったものではないし、今夜は泊まっついていってちょうだい？」

「……んじや、お言葉に甘えて」

連也が了承した理由は、単純に、気分的に疲れていたからだった。家まで歩いて帰るのが、無性に億劫だったのだ。

叔父である信彦の携帯電話に、『友達の家泊まる』とメールを送ってから、連也は夕食をこ馳走になり、浴場でシャワーを浴びさせてもらってから、来客用の寝室に案内された。

「ふう……」

髪が乾くのも待たず、ベッドに身を投げ出す。

うつらうつらし始めた頃、ドアがノックされた。

「連也。まだ起きてるかい？」

ゼノヴィアの声だ。急いで開けると、パジヤマ姿の彼女が、手を後ろに組んで立っていた。ややダブついたパジヤマが、なんだか可愛らしい。

「どうした？」

「怪我の具合はどうかと思ってね。それと、添い寝をさせてもらおうと思うって」

「言ったら、かすり傷だって……って、え？」

「だから、添い寝をさせてもらいたいんだ」

そう言っって、ゼノヴィアは後ろに隠していた枕を取り出した。

「え、いや、あの、でも」

「君がいなかったら、我々はアーシアをむざむざと焼き殺されていたかも知れない。友達の命の恩人にそれくらいさせてもらわねば、女が

「廃るというものだ」

「いや、あの、でも、その」

「では失礼するよ」

ゼノヴィアはその『友達の恩人』の返事も待たず、トコトコと部屋に入っていく。

「明日も学校だ。早く寝よう、連也」

そして少年の手を取り、強引にベッドへと引っ張っていった……。

## 逆襲の魔焰

「何だとおおおおお！」

はぐれ悪魔がアジトにしている、郊外の廃ホテル。

遅れて意気揚々と凱旋したバズソーは、しかし己れの行動が無意味に終わった事をクルガンから知らされた。

「馬鹿な！ 俺の魔焰がそう簡単に消せるはずがねえ！ 氷結地獄の

コキユートス

永久氷壁だつて溶かしてみせらあ！」

「実際にやった事ないでしょ」

「うるせえ、黙つてろ垂れ乳！」

「失礼ね、まだ垂れてないわよ！」

「……現に、私の魔時眼には、あの僧侶ビシヨツプが生きている姿が映っている。あの木刀を使う少年が助けたようだ」

「あのクソガキが……！」

バズソーはワナワナと震え出すと、腹いせにそこかしこに火炎を撒き散らし、手近の壁やソファを蹴り飛ばした。

「ああああ！ 許さねえ！ あのガキ殺す！ バルログの魔焰を舐める奴はどいつもこいつも、骨の一欠片も残さず蒸発させてやらあああああああ！」

「あーもう、いちいちキレないでよ馬鹿」

シエザナがうんざりした声で呟いた。ドルトーレも、無言ではあるが呆れた顔だ。

「放っておけ」

クルガンは言いながら、鍔広の帽子を被り、マントを羽織った。

「面白い物？ じゃあヤングチャンプ買ってきてくれる？ お金は後で払うわ」

「二回も払った事ないだろうが……それとヤングチャンプの発売日は明日だ。そもそも面白い物ではなく、ボスへの報告だ」

その一言で、ドルトーレはおろかバズソーまで、怒りも忘れてクルガンの方を見た。

「ちよ、ボスに報告つて、おま……！」

「D×Dに存在を知られた以上、お知らせしない訳にはいくまい。心配するな、処刑される事はない。魔時眼にも、我等全員の無事な姿が映っている……怒られはするだろうが、まあそれは仕方のない事だ」  
「だ、大丈夫よ！ いざとなったら私のおっぱいで」  
「黙れ垂れ乳」  
「だから、まだ垂れてないったらー！」

◆ シェザナの抗議を無視して、クルガンは一人駒王町を出た。

ベッドのサイズは、二人で寝ても寝返りが打てるほど余裕のあるものだった。それにも関わらず、連也の身体は今にも落ちそうなほど端に寄っている。

理由は言わずもがな、彼の背中にピットリと寄り添う少女であった。

「連也、そんな端っこだと落ちてしまうぞ。ほら、もっとこっちへ来るといい」

ゼノヴィアは少年の純情さから来る恥じらいなど露ほど気付かず、彼をベッド中央へと抱き寄せてきた。

互いの着衣越しに、少女の豊かな胸が連也の背中にムニユツと押し当てられる。

「~~~~」

そのポリリウム感溢れる柔らかさに、危うく変な声が出そうになる。

ゼノヴィアは少年の反応に、これまた全く気付く事はない。

気付く事もないまま、自分の肉体を更に密着させてきた。

「連也。君の身体はポカポカしてて暖かいな」

「さつきシャワー浴びたからな」

「うん、そういうのではなく、何だろう……君の身体の内側から、暖かなエネルギーを感じるんだ……こうして抱き締めていると、とても心地いいよ」

そりゃあそうだろうな。

連也は心中でそう呟いた。

あの時以来、自分の中には父の『念』が、父の命が宿っている。分厚い雪の下に埋もれた時、父は体内で練り上げたありったけの『念』を、自分の身体に注いでくれたのだ。

その念と連也自身の念が、彼を寒さや飢餓から守ってくれた。だから今、自分はここにいる。父は今も、自分を生かしてくれている。

それを連也が自覚しない日はただの一日もない。

——だが、それは今しとね褌しとねを共にする少女には、何の関係もない事だ。父の事を誇りに思っているが、だからこそ軽々しくペラペラと他人に話すのは憚られる。秋月連也とはそういう少年であった。

「それはたぶん、俺の中に溜め込んでいる『念』だ」

「ねん？」

聞き返すゼノヴィアに、連也は念道の説明をしてやった。

「それが君のあの不思議な力なのか……」

「半分は我流だ。父さんが死んでから、教えてくれる人がいなくなっちゃったからな」

そこまで言って、連也は余計な事を言ったと感じた。亡き父を出しにして女の子の同情を引いているみたいに思えてしまった。

「そう、だったのか……」

ゼノヴィアが後ろから、ギュツと強く抱き締めてくる。

「それでも君は、己れを鍛え続けているんだね……たった一人で、手探りの状態で……」

しかしゼノヴィアは、同情よりも尊敬の念を抱いた。

振り返れば自分たちには、教え導いてくれるコーチがいた。

共に鍛え合い、高め合える仲間もいる。

だが、今同じベッドで寝ている少年は、師も友もおらず、孤独の中で自身の力と技を磨き続けていたのだ。

果たしてそれは、どれほど大変な事だったのだろうか？ 鍛練の仕方を間違えてしまっても、それを指摘してくれる者がいない。自分の今のレベルは昨日よりも上がったのか、下がったのか、それを確かめ合える者もない。常にそんな不安や寂しさが付きまとっていたので

はないだろうか？

そんな心境を慮ると、この少年に尊敬の念を抱いた。

そして同時に、愛おしいとすら思えてきた。

何か力になってあげたい。そんな気持ちだが、ゼノヴィアの胸の内を満たしていく。

(……)

連也は、少女の肉体の柔らかさと温もりを背中いっぱい感じていた。

今すぐ振り向いて、真正面から彼女を抱き締め、その白い柔肌をまさぐりたい衝動に駆られる。

少ししてゼノヴィアの穏やかな寝息が聞こえ始めたが、連也の自分の中の獣との戦いは、始まったばかりである……。

◆

ゼノヴィアが目を覚ますと、もう夜が明けていた。カーテンの隙間から陽が差し込んでいる。

ベッドに、連也の姿はなかった。

身を起こして辺りを見回すと、部屋の隅で座禅を組み、瞑想している。

(熱心だな……)

それを念道の修行だと思ったゼノヴィアは、外泊先でも修行を怠らない姿勢に、素直に感心した。よもや年頃の少年らしい欲望を抑えるためのものなどは、少しも思っただけでなかった。

連也が目を開けて、立ち上がった。

「おはよう、連也」

「ああ、おはようさん」

二人は挨拶を交わすと、着替える事にした。

ゼノヴィアがそのために自分の部屋に戻ると、連也は借りていたパジャマから制服に着替える。

そしてカーテンと窓を開けて、日光と外気を部屋に取り込んだ。

朝のひんやりした空気を、深呼吸で体の中にも取り入れていく。ただ吸って吐くだけの、普通の深呼吸ではない。体内の気を高めて念へ

と昇華させ、蓄積させるための、念道の呼吸法である。

少年の、毎朝の日課だった。

気は普通の状態でも、呼吸法と精神の集中によって、筋肉の力をも凌駕するエネルギーとなる。

これが一定以上高まると、いわゆる相転移を起こして、感情の高ぶりに呼応して量や密度が増幅する性質を帯びるようになる。特に闘志や敵意などの積極的、攻撃的な感情とは相性が良い。

念は更にその上の段階。思念によって物理法則すら超越するパワー。

その存在に人類はかなり早い段階で気付いており、洋の東西を問わず、これを操るための技術を研究、開発していった。

念法、念術など、呼び方は色々あったが、いつしか共通の目的によって、名称が統一されるようになる。

その目的とは、聖人や達人と呼ばれる者たちの中でも更にごく一部の者だけが辿り着けた『高み』へと至る事である。そのための道という意味合いで、『念道』と呼ばれるようになったのだ。

昨日の戦いで消費した念は、呼吸法で充填された。

全身の細胞一つ一つに暖かなものが注ぎ込まれて活性化していき、感覚が鋭敏になるのがわかる。目を閉じて意識を集中させると、今いる寝室の内部どころか、周辺のロケーションまで、手に取るようになった。

(――?)

廊下の方に、二つの反応を感知した。

ゼノヴィアと一誠だ。

廊下に出ると、パジャマ姿のままのゼノヴィアを、一誠が壁に押し付けていた。二人の会話が聞こえてくる。

「なんで秋月と一緒に寝たりなんてしたんだよ」

「アーシアを助けてくれた恩人だ。お礼にそれくらいしてもバチは当たらないだろう。本当に、ただ同じベッドで寝ただけだしね」

「それだけでもダメだ！ お前は俺の眷属なんだぞ!?! 勝手にそんな事していい訳ないだろ！」

「君だって、私以外の女と寝ているじゃないか」

「う、いや、だってそれはリアスが」

「君は良くて私はダメなのか？ それは横暴というのではないのか？」

「くっ……そ、それでもお前は俺の眷属で」

一誠が最後まで言う前に、ゼノヴィアは深く長い溜め息をついた。

「眷属、か……確かにその通りだけどね。でもこういう時くらい、『お前は俺の女だ』くらいの事は言えないのか？ 王の身分を笠キンツに着て、相手を束縛する事しか出来ないのか？」

「うっ……」

一誠は黙り込む。その隙に立ち去ろうとするゼノヴィアだったが、

一誠は逃すまいとその腕を右手で掴んだ。

「何だ。離せ、痛いぞ」

「まだ話は終わってないだろ！」

「よせよ」

ここで連也はようやく、二人の間に入った。

一誠の右腕を、掌でスツと撫でる。

ただそれだけで、一誠の腕が消えた。

「えっ？」

否。

腕自体は、ちゃんとくつついてある。

だが、まるで自分の物ではなくなったかのように、力なく垂れ下がっていた。何の感覚もない。動かすどころか、力を込める事も出来なかった。腕は確かにあるのに、最初からそんな物はなかったかのよう。一誠は自分の右腕の存在を認識出来なくなっていた。

「俺とゼノヴィアの間には何もなかったよ。彼女が寝入った後、俺はベッドから出て違う所で寝たからな」

「そ、そんなの、信用出来るかよ……」

一誠の口調が急に弱々しくなった。連也の能力に、薄気味悪いものを感じたからだ。

「だったら、ゼノヴィアにも聞けばいい。ただし、もっと紳士的にな」

「イツセー、連也の言ってる事は本当だ。さつき目を覚ましたら、連也はベッドの外で寝ていたんだよ」

「という訳で、この話はもうおしまい。はい、やめやめ」

連也がパンパンと手を叩いて、会話を打ち切った。そしてダイニングルームへ向かおうとする。

「お、おい！ これ！ 俺の手はどうすんだよ！」

「二、三分もすれば戻る」

「それじゃあイツセー。また後で」

連也とゼノヴィアが揃ってその場を去ろうとした時、突然轟音が鳴り響き、家全体が揺れた。

よろめいたゼノヴィアと一誠を、連也が咄嗟に抱き止めた。

「な、何だよ今の！」

「見てくる。ゼノヴィアを頼む」

連也は一誠に言い残して、窓を開けて外に飛び出した。

「おい！ こっちは三階——!?!」

開け放された窓から顔を出した一誠は、我が目を疑った。

飛び下りた連也が、地面から二メートルほどの高さの辺りで壁に手を触れると、ピタリとその身体が静止したのだ。手を離すと、羽毛のように柔らかな動きで、フワリと庭の芝生に着地した。

その彼を囲むように、数本の火柱が噴き上がった。

「はっはっはっ！ テキトーにその辺焼け野原にすりやあ出て来るんじゃないかねかと思ってたが、ドンピシャだったなあ！」

上空からの声に見上げると、バズソーが背中から翼を広げて、空中に浮いている。両手には炎をまとった短剣と鞭を携えていた。

彼の傍らで、六階建ての兵藤邸の屋根が吹き飛ばされ、炎と煙を上げてている。

「まさか最初に狙った家に住んだとは運がいいぜ！ 昨日の続きとこういうクソガキ！ 他の奴等はボスに譲ってもいいが、テメエーだけは……バルログの魔焰を舐めたテメエーだけは、俺が殺す！」

バズソーは顔を怒りと憎しみで激しく歪ませる。まさに悪鬼羅刹の形相だ。

連也はブレザーの内ポケットに手を入れた。その手を引き抜くと、木刀『飛龍』が握られている。刀身を伝って放射される破邪の念が白光となつて、周囲の火柱の火勢を弱めていった。

「——はあっ！」

気合いと共に木刀を真横に振り抜くと、火柱は一斉に消えた。

「ほおー、見事なもんだ。まるでマジックだな。あの金髪バッキンのメスガキもそうやって助けたのか？　ますます気に入らねえーよ、お前」

「そいつはごうも」

軽口で返す連也。しかしその眼差しは険しかった。

## 水龍乱舞

バズソー・バルログ。

今は断絶した番外の悪魔エキストラデーモンバルログ家の長男だった男である。

バルログ家は代々、炎を操る能力で外敵と戦う戦士としての役割を持っており、過去の戦争においても活躍した。そのような家系であるため、当主には強さが求められる。そしてバズソーは、一族の中でも最も炎の扱いに長けていた。

しかし、その性格に問題があった。傲慢で気性激しく、幼い頃から何かと問題ばかり起こしていたのだ。

彼が当主となったら、必ず家に災いを呼ぶだろう。そう判断した父親は、次期当主には彼の弟を指名した。親族も全員がそれに賛同した。

唯一反対したのは、バズソー本人だけである。彼は激昂し、弟も父親も、そして一族の全員を赤子に至るまで、自らの魔焰で焼き殺し、そのまま姿を消した。当主の証であり、家宝でもある炎の鞭と短剣を奪って。



「死ねクソガキい！」

バズソーは地上の連也目掛けて、鞭を振る。そこからほとぼしる炎が少年目掛けて降りかかってくるが、連也は木刀を白く輝かせ、炎を雲散霧消させた。

「フッ！」

次いで上空の敵目掛けて、木刀を鋭く突き出す。破邪の念が閃光となって放たれた。

バズソーはこれをヒラリとかわした——つもりだった。

「うおっ!？」

しかし念の閃光は突如爆発し、その熱風が彼の身体を叩く。

「ハアッ！」

空中で相手の体勢が崩れたのを見て、連也は追い打ちをかけた。木刀を縦横に振り抜くと、念が十字の光刃となって飛翔する！

「舐めるなよ、クソガキい！」

バズソーの全身から、魔焰が噴き上がった。量も勢いも凄まじく、彼自身が小型の太陽になったのかと錯覚するほどだ。その炎がバリアとなって、連也の念を相殺した。

反撃に移ろうとしたバズソーだが、その手足が不意に鎖で絡め捕られた。

彼の周囲にたくさんの魔法陣が浮かび上がり、その中から伸びる鎖であった。

「そこまでです」

鎧を纏った銀髪の女性が、屋根の上に立ち、呼び掛ける。オカルト研究部の顧問であり、赤龍帝眷属の一員でもある戦乙女ヴァルキリーロスヴァイセだ。

「これ以上の好き勝手は許さないわよ、バズソー・バルログ」

その傍らには、リアス・グレモリーがいた。

「おとなしく投降なさい。私たちに協力すれば、お上の慈悲というものがあるわ」

「はっ！ 糞食らえだ！」

「あら、そう。残念ね」

パチン！

リアスのフィンガースナップが鳴り響く。

「うがあっ！」

バズソーは苦悶の声を上げた。晴天にも関わらず、上空から一条の稲妻が降り注ぎ、彼の身体を打ちのめしたのだ。既に朱乃が、頭上に陣取っていたのである。

「どう？ 気が変わった？」

リアスが問い掛ける。しかしバズソーの返答は、

「くたばれ」

「あなたがね」

紅髪の主君の言葉を合図に、朱乃がより強力な電撃を放とうとした

瞬間――、

「ぬううああああっ！」

バズソーは再び、全身から魔焰をほとばしらせる。その熱たるや、ロスヴァイセの魔法で生み出された鎖を瞬時に溶解、蒸発させるほどだ。

束縛から逃れたバズソーは炎の鞭を滅茶苦茶に振り回す。放射された魔焰が四方八方に飛び散り、地面と言わず庭木と言わず家屋と言わず、触れた物を片っ端から燃やし始めた。

それは兵藤邸だけではない。隣近所の家屋も同様だ。あちこちで火の手が上がり始める。

「バズソー！ あなた何を！」

「見ての通りさ、この辺一帯を焼け野原にしてやるんだよ！ 早く消さねえーと死人が出るぜえ〜！」

リアスの問いにバズソーは下卑た笑いを浮かべて答えた。

消火活動に自分たちを向かわせて、その隙に連也を襲うつもりだ。リアスはバズソーの狙いをそのように読んだが、それでもその策略に嵌まらざるを得ない。魔焰の火勢は強く、モタモタしているとバズソーの言った通り、死者すら出かねない。

「だが言っておく。バルログの魔焰は液体窒素ぶっかけてたって消えやしねえ。これだけの広範囲、消せるもんなら消してみな！」

「良からう」

答えたのは、ゼノヴィアだった。

庭に立つ少女は既にエクソシストの戦闘服に身を包み、手には物々しいデザインの鞘に納められた剣を携えている。その鞘の各部がスライド変型して、彼女の髪と同じ蒼い色の刃が現れた。

「エクソ・デュランダルの名において命ずる。炎よ、去れ！」

高らかに叫び、剣を掲げる。

剣から発せられる強い光が周囲に広がると、住宅街を襲った魔焰が、たちまちの内に消え去った。

エクソ・デュランダルには七本のエクスカリバーの特殊能力が宿っている。

その内の一つ、生物無生物問わずあらゆるものを支配する  
エクスカリバー・ルーラー  
支配の聖剣の能力を行使したのだ。ゼノヴィアはまだこの支配の

能力を使いこなすには至ってないが、そこでもう一つの能力の出番となる。

エクスカリバー・ブレスシング

祝福の聖剣。その効果は一言で言えば、聖なるものの効能を高める事である。悪魔や吸血鬼をその光で弱らせ、十字架や聖水の効果を強化させ、時には信徒に幸運を授ける。

この祝福の能力で、支配の能力行使の成功率を上げたのだ。

その結果は、もはや語るまでもあるまい。周囲の家々をも巻き込んで兵藤邸を襲った魔焰が、嘘のように消えてしまった。

「こ、このメスブタがああああああ！」

バズソーは激昂して喚き散らす。

「もう諦めろー！ お前に勝ち目はないー！」

バランスブレイク

禁手化した一誠が空中に舞い上がり、朱乃と挟み込むような位置に移った。連也の念で動かなくなっていた腕も、回復している。

リアスとロスヴァイセも屋根から飛び立ち、二人と共にバズソーを囲んだ。

「私たちの力を甘く見ていたのが敗因ね。さあ、おとなしく投降なさい。それとも、死体も残さず消し飛ばされたいの？」

リアスの手から放出される滅びの魔力が、不気味に揺らめく。

一誠は神器の機能で自身の力を連続倍加させて、いつでも砲撃を撃てるようにしている。

朱乃やロスヴァイセも、何かおかしな動きをしようものなら即座に攻撃する準備を整えていた。

「ククク……死体も残さず消し飛ばす、か。おー怖い怖い」

バズソーはゆっくりと降下していき、屋根の上に着地した。

「いいぜ、やれよ。やってみるよ。やれるもんならな」

両手を広げて、挑発する。

「俺の死体も残さず消し飛ばすんだろ？ オラ、やってみろやクズどもがよー！ テメエーらに出来る訳ねえーけどなあー！」

「何だと、この……！」

その挑発にカツとなる一誠だったが、怒りに任せた攻撃は出来なかった。

バズソーに向けて砲撃を放てば、彼の足下にある自宅まで破壊してしまうからだ。

「どうした、やらねえのか？ 少なめの脳ミソでもそれくらいは理解出来るってか……そおーだよ！ この町で戦う限り、地の利は俺たちにある！ テメエーらが全力を出すと、町が吹っ飛んじまうからなあ〜！」

バズソーはゲラゲラと笑い出す。

「ま、この町がどーなろうと、俺には関係ねえ事だがな……だが、テメエーらはムカつくから、全員殺す！」

再びバズソーは全身から魔焰を噴き上げた……否、彼自身の肉体その物が、炎に変わっていく。そしてそれはみるみる内にサイズを増していった。

六階建ての兵藤邸をも越える大きさにまで膨れ上がった人型の炎は、背中から炎で出来た翼を広げた。

自分自身を魔焰と化した、焰魔人と呼ばれる姿だった。

「死ねや、ビチグソどもがあー！」

バズソーは口から無数の火炎弾を発射した。

一誠たちは散開してこれかわす。

しかし外れた火炎弾は弧を描いて地上に落ち、住宅街を再度炎に染めていった。

「エクス・デュランダル！」

ゼノヴィアが聖剣に命ずる。支配の能力を帯びた光が放たれるが、今度は何の効果も現さなかった。

「馬鹿が。意思のない炎ならともかく、今のこの魔焰は俺の一部であり、俺の意思が宿ってんだよ！ そんなナマクラなんぞで消せるほど、ヤワじゃあねえ！」

バズソーは勝ち誇り、炎の巨拳をゼノヴィア目掛けて振り下ろした。

しかし、横殴りの突風が拳を叩き、狙いを逸らした。連也の念による衝撃波だ。

「しやらくせえー！」

バズソーは口から炎を吹き付け、連也に浴びせる。

「ハッ！」

連也は突き出した木刀から念を放出し、炎を散らした。だがその結果、散った炎が周囲に燃え移る。

「ヒヤハハハ！ 無駄無駄無駄無駄無駄無駄！ これがバルログの魔焰の本当の力だ！ テメエーらカスどもにどうにか出来る代物じゃあねえーんだよ！」

魔焰その物と化したバズソーの高笑いが、地獄の鐘の音のように響き渡った。

突如火災に見舞われた我が家から逃げ出した住民たちは、訳もわからずその怪物の威容を見上げ、恐れおののくしかなかった。

一誠は上空から、生まれ育った住宅街が炎に包まれていくのを見る。

今すぐあのはぐれ悪魔を消し飛ばしてやりたい。今の自分の力ならば十分に可能だ。

しかし、今の自分の力では、それは不可能だった。この戦いには何の関係もない人たちまで、巻き添えにしてしまう。彼等の住まいを破壊してしまう。

「くっそおおおおお！」

一誠は龍翼を広げて、バズソー目掛けて突撃。やりきれない感情と、犠牲をいとわない敵への怒りを込めた拳を繰り出す。

しかしそれは、むなしく巨体をすり抜けるだけだった。

「間抜けかテメエーは！ 今の俺は炎その物だ！ 炎をぶん殴れる訳ねえだろーがこのウボア!？」

罵倒の最中に突風をくらい、バズソーは兵藤邸の屋根から地面に落ちた。

連也だ。

足下には、水をたたえたバケツが置かれてあった。庭の水道で汲んできたのだろう。

バズソーはそれを見て嘲笑う。

「ヒヤハハハ！ 何だそりゃ！ まさかそのバケツの水をぶっかけよ

うってのか？ そんなんで俺様の魔焰を消すつもりか？ 出来る訳ねえだろーがこの田吾作があーっ！」

連也は答えない。

しかしその表情は、憤怒に燃えていた。

呼吸を整え、体内に蓄積された念の圧力に意識を集中させる。

木刀『飛龍』の切っ先を、バケツの水に突っ込んだ。

「念道剣——」

そしてその木刀を勢い良く振り上げる。

「舞い翔龍！」

瞬間、その場にいた誰もが、我が目を疑った。

バケツの中から、容量の何倍、何十倍、否、何百倍もあろうかという大量の水が渦を巻いて噴き上がったのだ！

その不可思議な激流は龍となって住宅街を駆け巡り、家屋を蝕む魔焰を次々と消し去っていく。

そしてバズソーの巨体を頭から丸呑みにした後、巨大な水竜巻となつて天へと伸びる！

「ぐあああああああああッッ!!」

水竜巻の中から、バズソーの苦悶の叫びが響く。連也の破邪の念がたつぷりと宿った水が、魔焰その物と化した肉体を削り取り、消滅させているのだ。

もがき苦しむバズソーの目に、水竜巻の勢いに乗って上昇してくる連也の姿が映った。

「この、クソガキがああああああ！」

炎の拳を苦し紛れに繰り出す。

だが、念の白光を放つ木刀はそれを難なく切り裂いた。

「イーエアアッッ!!」

気合いと共に、木刀『飛龍』がバズソーの眉間を稲妻のように鋭く打った！

破邪の念が衝撃波となつて焰魔人の体内に浸透し、爆発、雲散霧消させた。

水竜巻が弾けて、にわか雨となつて住宅街に降り注ぐ。

空高く舞い上がっていた連也は、重力に誘われて地上へと落下していく。

しかし空中で、不意に柔らかい物が少年の顔を包んだ。ゼノヴィアが、落ちていく彼を抱き止めたのだ。

少女は連也の顔を、その豊かな胸にうずめたまま、ゆっくりと着陸した。

連也はフラフラとよろけて、ペタンと地面に座り込む。

「大丈夫か、連也」

「電池切れだ」

今の水を操る技は、それだけ大量の念を消費させたのである。情けない話だが、ゼノヴィアがいなかったら、なす術もなく地面に激突していたかも知れない。

そんな後先を考えない大技を使わせるほど、少年は敵の非道な行いに怒りを覚えていたのだ。

ついさつき充填した念のほとんどを使いきった反動で、体が重い。連也はアスファルトで舗装された道路の上に、ごろりと寝転がった。

後頭部に、何かが当たった。一瞬ゴムの塊かと思ったが、視界に上下逆さまのゼノヴィアの顔が飛び込んでくる。それで、今彼女が膝枕をしてくれているのだとわかった。

「ああ、悪いな」

「気にするな」

ゼノヴィアはそう言って、微笑む。

邸内にいた兵藤夫妻やアーシアは、小猫やレイヴェルが地下のシエルターに避難させてくれていたはずだ。家の損壊は……グレモリー家が何とかしてくれるだろう。

今は、この剣士の健闘と勝利を労いたかった。

雨はすぐにやんだ。

「おお……でかいな」

連也が呟く。

視線を追うように空を仰いだゼノヴィアの目に、大きな虹が移る。青空を七色の光が横切る様は、さっきまでの戦いが嘘のように美し

か  
っ  
た。  
。

## 戦士の帰還

駒王町の隣にある盤内市。

クルガンは転送魔法を用いてそこにある海沿いのリゾートホテルを訪れていた。

フロントに用件を伝えると、受付の者が内線で問い合わせて確認し、ボーイが最上階へと案内する。

鰐広の帽子とマントを身に付け、顔には大きめのサングラスをかけたクルガンの風体は何とも怪しい。それでもボーイが丁寧な態度で接しているのは、ホテルの教育が行き届いているのもあるが、これから訪問する相手が創業以来の上客だからだ。

観光シーズンでもないのに、仲間を引き連れて最上階を丸々貸し切り、全員分の宿泊費一週間分を現金で一括前払いという羽振りの良さである。

そんな上客の知り合いともなれば、自然と腰が低くなった。

ボーイはエレベーターで最上階に上がると、一番奥の部屋へとクルガンを案内し、ドアをノックする。

「お客様をお連れいたしました」

ドアを開けて出てきたのは、栗色の髪を長く伸ばした女だった。バスローブを着崩しており、深い胸の谷間やへそが見えている。股間はかろうじて隠されているが、たぶん下着は着けていないのだろうと思えた。

「苦勞様」

女はボーイにチップを与えて下がらせると、クルガンを中へ招いた。

室内には他に二人いる。ソファに座り、大きな窓から海沿いの市街地の夜景を眺める、砂色の髪の男。

その男の太股の上に座り、胸元に寄り添っている赤紫の髪の少女。

男は三十代、少女は一五、六歳ほどだろうか。

帽子とマントを脱ぎ、サングラスを外したクルガンは、ソファに近付くとうやうやくひざまずいた。

「おくつろぎ中のところ大変申し訳ありません、王。<sup>キング</sup> 実を申しますと……」

「お前の雰囲気でわかるよ。D×Dに勘づかれたか？」

男は膝の上の少女の髪を撫でながら、言う。

少女はクルガンには目もくれず、毛繕いされる猫のように、目を閉じてうっとりとしていた。

「——はい。先行させていたジャンゴとミドラも殺<sup>や</sup>られてしまいました」

「まあ、あいつらはしょうがない。二人合わせても兵士<sup>ポーン</sup>一つ分の価値すらなかったしな。それより、お前たちは大丈夫だろうか？ 誰か怪我したりしてないか？」

「いえ、我等は全員無事でござ——あつ」

クルガンは、突然己れの魔時眼<sup>まじがん</sup>に映し出された光景に、言葉の途中で声を上げた。

「どうした？」

「申し訳ありません。明朝、バズソーが死んでしまいます。単身D×Dに戦いを挑んで……」

「お前にそう見えたのなら、そうなんだろうな」

男は呑気にそう言った。そこにはクルガンの持つ、未来すら見通す魔性の眼力に対する信頼が見て取れた。

(あの馬鹿め……おとなしくしていれば死なずに済んだものを……)

クルガンは胸中で仲間を罵った。実際、ここを訪れる前には、バズソーが生きている未来が見えていたのだ。それが一時間もしない内に、全く真逆の結果を見てしまうとは……。

「新しい騎士<sup>ナイト</sup>を補充せんとな」

「それでしたら一人だけ、心当たりがございます」

「ほう？」

「ジャンゴとミドラを倒し、明日にはバズソーをも倒す剣士です。  
神<sup>セイクリッド・ギア</sup> 器も持たぬただの人間で、しかもまだ少年ではありませんが、不可思議な力を使います」

クルガンはそれに付け加えて、スクラップ置き場での秋月連也の戦

いぶりも伝えた。魔時眼で透視した、ジャンゴやミドラとの戦いの様子も。

「ただの木刀で、聖剣でぶった斬ったみたいだに悪魔を消滅させる力、か……まさか、ネンドーじゃああるまいな」

「ご存知のですか？」

「会った事はないが、昔お師さんから、そう呼ばれる力の使い手がいると聞いた事がある」

「王のお師匠様、で、<sup>キング</sup>ごいますか……？」

クルガンは思わずそう尋ねた。己れの仕える主に、そのような者が存在しているのが信じられないらしい。

「今じゃあ激レアな、生まれついで天然物の聖剣使いだ。しかし、パンチ一発で馬小屋くらいは軽く吹っ飛ばせるデタラメな奴だったかな。」

そのお師さんが言っていたのさ。人間の気だか思念だかは、極限まで高めると物理法則をも無視できる霊的なパワーになる。そのパワーを極めるネンドーとかいう技術があると。異端者として教会を追放された者の中には、そういう力を自得した者もいたかも知れないらしい。

もつとも、今じゃあその手の連中はみんなチベットやらインドやら中国やらの山奥に引きこもってるという話だったが……こんな極東の島国にもいたとはな」

クックククツ……と、男は楽しそうに笑った。

「日本はつくづく素晴らしい国だな。美味しい食い物がたくさんあり、戦いの火種にも事欠かん。景色の良さも、他の国に負けてない。俺はつくづく、この国が気に入ったよ——メテオラ」

ベッドの上に所在なさげに座っていた、バスローブの女に呼び掛ける。

「はい」

「フロントに言って、酒を持ってこさせろ。ドウレンダナにはオレマジジュースをな。のんびり出来るのも今夜までだからな、飲み納めだ。他の奴等も呼んでこい。おいクルガン、お前も付き合え」

「光栄にございます」

クルガンは深々と頭を垂れる。

「ネンドー使いにチームD×D……確かお師さんからデュランダルを受け継いだ奴もいるんだったか……楽しみだ。なあ、ドウレンダナ」

男——はぐれ悪魔オルランド——は膝の上の少女に語りかける。

少女はデュランダルの名を聞いて、閉じていた目をパチツと開けた。そして、悪戯っぽく笑うのだった……。



翌日。時刻は正午を少し過ぎる頃。

クルガンは主君と、同胞たる他の眷属たちを駒王町と盤内市との境目に案内した。峠を越えた真っ直ぐな道路だ。通る車はなかった。

彼等の目には、壁のように広がる光が見えていた。普通の人間には見る事も感じ取る事も出来ない、エネルギーの壁。それが去年の駒王協定以降にこの町に張り巡らされた結界だった。

この結界に抜け穴を作り、チームD×Dに気付かれないようオルランドを町内へ迎え入れるのが、クルガンの計画だった。こちらの存在を気取られなければ、それだけ戦いで有利になる。しかし、その目論見ももはや水の泡。オルランドが最初に提案した通り、結界を破壊しての宣戦布告を行う事となってしまった。

「さて、派手にやるか」

オルランドは右手に持った剣を無造作に振り上げる。

黄金の柄を備えた、持ち主の身長ほどもある大きな剣だった。赤紫の刀身に銀色の刃が付いている。

その大剣が輝き出すと、クルガンやメテオラを始めとした眷属たちは一斉に後ずさりした。

その中に、オルランドがドウレンダナと呼ぶ少女の姿だけが、ない。

大剣は更に輝きを増し、狂暴さすら感じさせる勢いで刀身から閃光を放った。それは青空へと伸びて、天地を繋ぐ光の柱となる！

「フンッ！」

オルランドが結界に、巨大な光の刃を叩きつけた！

結界はガラスのように脆く砕け散り、消滅する。

目の前にある部分だけではない。彼の放った一撃は、その衝撃波が満遍なく浸透、伝達されていき、駒王町全体を覆う結界全てを、跡形もなく破壊し、消し去ったのだ！

大剣から伸びる光が、役目を終えたのを察したかのように収まっていく。

「ふふん。上出来だぞ、ドウレンダナ」

オルランドは、この場にいない少女の名を、手中の大剣に対して呼び掛けた。

「……王<sup>キング</sup>。何もここまで派手にやる必要は、なかったのでは……」  
「派手な方がいいだろ？」

クルガンに対して、オルランドは自慢げに笑う。

「さて、行くか。二天龍にネンドー使い、それにデュランダル使い……  
楽しい事が待っているはずだ」

町へ向かう王の足取りは、ピクニックに行く子供のように軽やかだった。

◆  
時間は少々遡る。

兵藤一誠は昼食も取らず、校舎の裏庭に向かった。

秋月連也に用があるのだ。教室を訪れたが彼の姿はなく、元同級生の桐生藍華に尋ねると、晴れた日は裏庭で弁当を食べているらしいと聞いた。

その情報に間違いはなかった。連也は既に食事を終えたらしく、大きな木の下で座禅を組み、目を閉じていた。

「何か用か？」

一誠が声をかける前に、少年の方が彼に気付いて口を開いた。

「あ、悪い。邪魔したか？」

「いや。それより、何か用か？」

「あ、ああ……今朝、学校行く前に、リアスから聞いたんだ。お前のあの凄い力の事を……それでさ」

一誠はわずかな間を置いて、ズボンが汚れるのも構わず、両膝をついた。

そして、両手も地面につけて、深々と頭を下げる。いわゆる土下座であった。

「お願いします！ 俺にその念道つて技を教えてください！」  
「断る」

連也は一ミリ秒の間も置かずに即答した。

一誠は土下座の体勢を崩さずに続けた。

「……今朝の戦いで、俺は痛感したんだ。ただでかい力をぶつけるだけのスタイルじゃ限界があるって。みんなを守るようになるためにも、俺はこれからもっといろんな事を勉強しなくちゃいけない……今朝、あのはぐれ悪魔を倒してみんなを守ったのは、間違いなくお前だ！ 俺はお前のその力、技を学びたい！ だから俺に、念道を教えてください！ お願いします！」

「断る」

連也は一ミリ秒の間も置かずに即答した。

一誠は土下座の体勢を崩さずに続けた。

「これから、あのはぐれ悪魔の仲間たちが町にやって来るかも知れない。そうなったら俺の家族や友達が危険にさらされる。俺はそれを防ぎたい、みんなを守りたい。駒王町も、駒王町に住んでるたくさんの人たちも守りたいんだ！ お前は確かに強い！ でも、俺が今より強くなればお前だつて負担が減るし、もつと確実にこの町を守るようになるはずなんだ！ だから俺に、念道を教えてください！」  
「断る」

連也は一ミリ秒の間も置かずに即答した。

「なんでだよ！ 人が土下座までして頼んでんのにツツ!!」

あまりにもつれない態度に、一誠は立ち上がって怒鳴った。

「理由はいくつかある。まず、俺自身他人様ひとさまに教えられるレベルじゃない」

「嘘つけ！ あんな凄い水芸かましといて！」

「水芸とか言うな。」

次に、お前が習った技を悪用しないという保証はない。何かあった時、俺は責任持てない」

「悪用なんてする訳ねえだろ！ 何を根拠に」

「お前の日頃の行い」

その返答に、一誠は思わず黙り込んだ。これはさすがに、反論出来ない。

「次に、お前が今言った『町を守るため』ってやつ。そういうのは、念道においては危険な思想だとされてる」

「町を守る事の、何が悪いってんだ？」

「そもそも念道の基礎理念は、『自分の限界を超える事』であり、『人間の可能性を極める事』にある。『誰かのため』とか『何かのため』ってのは尊いものだけど、同時に危険なものでもあるんだ」

「だから、どう危険なんだよー！」

「図書室にでも行つて、宗教の歴史を調べてこい。そうでなくとも、今も外国じゃ何かのために地雷を埋めたり、爆弾抱えて人混みに突っ込む奴等がいるんだ、それでわかるだろ」

「わからねえよ！ 誰かのために戦う事が、何でいけない事なんだよー！」

「悪いとは言つてない。念道では危険なものだと教えているだけだ。だから、お前に念道を教える事は出来ない」

「なら、お前は何のために戦つてるんだよ！ 何のために念道の修行してんだよ！ 誰かのためじゃねえのか！」

「——自分自身のためだ」

連也は一誠の目を見て、ハッキリとそう答えた。

「俺が俺自身を、人間の力を極めるためにやつてる。ただ、その結果、得をする人間が出てくるというのなら、まあそれはそれで別にいいかなって感じだな。」

言っておくが、別にお前が何のために戦おうが、それを間違つてると思うつもりはない。マジで命を懸けるだけの価値をお前が感じているのなら、それはそれでいいさ。ただ、念道を教えてやる事は出来ない。

他人が持つてるものを欲しがるより、自分の中にあるものを大切にしろ。俺が教えてやれる事があるとしたら、それだけだ」

「ふうもういいい！ お前に頼んだ俺が馬鹿だったぜ！」

一誠は言い捨てて、立ち去っていった。

彼は今まで、アーシアのため、リアスのため、仲間のため、その一心で戦い抜いて来たのだ。

その想いが、今の自分の強さを支えるものだと考えている。

それを『危険な思想』と切って捨てられたのが我慢ならなかった。自分の今までの戦いや成長を否定されたような気分にならなかつた。

（こつちが土下座までして頼んだつてのに……あんな自分勝手な奴だとは思わなかつたぜ！）



同時刻。

午前の講義を休んで、住宅街の修復と今後の対策のために、リアスは兵藤邸にソーナ・シトリーを招き、話し合っていた。

その二人の前に、思わぬ来客があったのだ。

二メートルはある高身長に、過積載とすら思える量の筋肉を搭載した、頑強な肉体だった。

しかし、その面貌は間違いなく、八十を越す老人の顔つきだった。

「ヴァスコ・ストラーダ……？」

リアスはフラリと現れた人物の名を、信じられないとばかりに呟いた。

ほんの数カ月前に教会でクーデターを起こし、戦いに敗れた老剣士。今は全ての地位を剥奪され、イタリアの僻地にある農場で暮らしている——もつともその農場は、天界の結界で覆われた牢獄でもあるのだが。

「お取り込み中のところを失礼。予感がしたものでな、田舎から飛び出して来たのだよ」

「よ、よく出て来れましたわね……」

ただ農場周辺を結界で囲っているだけでなく、監視だつて付いているはずだ。今も教会内には彼の信奉者がたくさんいるだろうが、彼等の手引きを考慮しても、そう簡単に出られるはずがない。

「うむ、実はまだ少々、拳が痺れておる。日本についた辺りで、ようや

く感覚が戻ってきたくらいだ」

ストラーダはそう言つて、両拳を交互にさすつた。

まさか、結界を殴つて壊したのだろうか……この老人ならやりかねない。リアスもソーナも、そう思つてしまふ。

「そ、それで、どのようなご用向きでしょうか？」

リアスよりも早く冷静さを取り戻したソーナが、尋ねた。

「今、この町をはぐれ悪魔が狙つておると聞く」

「ええ、その通りです」

ソーナが答えた。

「はぐれ悪魔の頭目の名は、オルランドというそうなの」

「はい」

と、リアス。

「やはりか……」

老人は深い溜め息をついた。

「あの、いったいどういう……」

「この国には、『兇つ鳥、跡を濁さず』という諺ことわざがあるそうだが、まさにそれ。老兵最後の一仕事に、不肖の弟子の後始末をさせてもらいたい」

「弟子つて、まさか……!」

リアスは思わず、座つていたソファから立ち上がった。

「左様。はぐれ悪魔の頭目オルランド。あやつはこのヴァスコ・ストラーダのかつての弟子だった男なのだ」

吐き出すように言ったストラーダは、岩のような拳をグツと握り締めめた。

## 魔聖劍

ストラードが腰を下ろすと、その質量で一人用のソファがギシリと音を立てた。

まさに『要塞』と呼ぶにふさわしい偉容は、いつ見ても八十代後半の老体とは思えない。

思わず緊張してしまいうリアスとソーナ。彼女たちの前で、老戦士はポツポツと語り始めた。

「以前から私は、エクソシストたちの中に私と太刀筋の似た者がいれば、率先して指導を行っていた。オルランドもその一人であり、私を手ずから鍛えた弟子たちの中では、間違いなく最高の剣士だった。聖劍使いの因子も生まれつき備えており、ドウレンダナに選ばれた事もあって、私を超える逸材だと期待していた……お師さんと気さくに呼び掛けてくれるあやつを、実の息子のように思っていた……」

老人は遠くを見るような柔らかな眼差しで語る。過去を懐かしんでいるのだろう。

しかしその表情に、鬨りが走った。

「十年以上前の事だ。とある小さな山村が、冒瀆的な教義を掲げるカルト宗教に支配されてしまつてな。その教祖がかつて教会から逐電した背教者だったとわかり、オルランドに討伐の命が下った。しかし無事に任務から戻った後、あやつは私の元を訪れて尋ねて来たのだ。『神は本当にいるのか?』と。」

私はその一言で、全てを察した。

恐らくあの教祖は、何らかの理由によって主の身罷みまかられた事を知つたのだろう。そしてオルランドも、討伐任務の最中に教祖からそれを聞かされたのだろうとな。そして私は……あやつを追放処分した。その後の動向は、君たちの方が詳しくかろう。

……私は元々、あやつを教会に縛り付けておくつもりはなかった。もっと広い世界で見聞を広め、教養を深めてほしかった。追放が決まったあの日、当座の金を渡し、『これからは自由に生きろ』と言つて送り出したのだ……それが、まさかこのような事になっていようとは

……！」

ストラダーは岩塊めいた拳をグググッと握り締める。  
リアスもソーナも、返す言葉がなかった。

目の前の老人が、寄る年波など歯牙にも掛けない規格外の戦士である事は、身をもつて知っている。その彼の直弟子であり、『最高の剣士だった』と言わしめる敵の存在に驚いていた。

しかも彼は今、『ドウレンダナ』と言った。ギリシャ神話のトロイア戦争で活躍した英雄、ヘクトールの愛用した剣だと伝えられている聖剣である。その強度と破壊力は、エクスカリバーやデュランダルにも匹敵するという。敵の頭目は、そのドウレンダナの使い手だというのか？

オルランドを転生させた上級悪魔やその眷属も、冥界が派遣した討伐隊も、ことごとくが殺されているため、なかなか情報が入って来なかった。その分、老人が語った内容は衝撃的であった。

場に重い沈黙が訪れる。

かと思えば、ストラダーがソファから不意に立ち上がった。

リアスとソーナの背筋に、怖気が走る。

まさにその瞬間こそ、オルランドによって駒王町を覆う結界が破壊され、消滅した瞬間であった。

ストラダーたちは聖剣ドウレンダナの獰猛な波動を感じ取ったのである。

「……オルランド」

老人はポツリとつぶやき、部屋から飛び出していく。二人の少女も後を追った。

そして同時刻。

駒王学園のD×Dメンバーも、聖剣ドウレンダナの波動を感知し、その正体を探るために学校を出ようとしていた。

彼等に先んじて、学園の敷地から出て行ったのは、秋月連也だった。

◆

駒王駅前のふれあい広場には、いくつかの屋台が並んでいる。

はぐれ悪魔の一団はそこに集まっていた。

屋台で買ったタコ焼きのパックを手にした少女ドウレンダナが、身を一つ爪楊枝で刺して、クルガンに無言で薦めているが、彼は困った風だった。

「い、いえ女王……おかまいなく」

しかし少女は、意に介さず口元に押し付けようとする。

「お、お許しくださいドウレンダナ様。私はタコが苦手です……」  
「共食いになるからか？」

ドウレンダナの背後で、オルランドがクスクスと笑う。

タコは『デビルフィッシュ悪魔の魚』とも呼ばれている。それに掛けたジョークだろう。

オルランドはパックからタコ焼きを一つ、爪楊枝で取ると、パクリと食べた。そして、

「あんたも食うか？ 美味しいぞ」

言うなり、爪楊枝を指で左方向へと弾き飛ばす。

小さな飛矢となったそれを、人差し指と中指で挟み止めたのは、ストラーダだった。

「人様に尖った物を飛ばすではない。この悪タレめが」

「すまん、お師さん。何せ俺はもう、悪魔なんぞね」

オルランドはかつての師の前で、肩をすくめた。

その背後から、メテオラがおずおずと尋ねる。

「キング王、もしやあの男が……」

「ああ、俺の聖剣使いとしての師匠。ヴァスコ・ストラーダだ」

その名前を聞き、ドウレンダナを除く配下全員が震え上がった。

聖剣デュランダルの先代所有者であり、教会の戦士として悪魔に対して猛威を振るい続けた、生ける伝説。

そんな男が目の前にいるのだから、無理はなかった。

「……オルランド。貴様が今、冥界から指名手配を受けている事は聞いておる。悪い事は言わぬ。おとなしく縛につき、罪を償うがよい。お前ほどの戦士ならば、魔王庁も無下には扱わぬはずだ」

「久しぶりに会ったと思ったからお説教か？ あんたも変わらん。そんな月並みな台詞を言うためだけに、こんな極東の島国にまでやって

来るとは、さてはリストラされて暇を持て余してるのか？」

「私には、お前を育てた責任がある。師としての責任がな」

「よく言うよ。自由に生きろと言って俺を追い出したのは、あんただろう？ だから俺は、自由にやらせてもらっている。今になって文句を言うくらいなら俺を追放したりせず、あの時異端審問にかけて火炙りにでもしておけば良かったじゃあないか、ええ？ ——何なら、今からやろうか？」

その一言で、両者の間の空気が一気に張り詰めた。

「……そのつもりで、私はこの国に来た。しかしここでは狭すぎる。場所を変えるぞ」

「その必要はないよ」

オルランドはスツと右手を高く掲げた。その掌に、光の玉が生まれる。

周囲でのどかな時間を思い思いに過ごしていた人たちが、その輝きに気付いた。

ストラーダがかつての弟子の意図を察して、制止の声を上げようとした。

しかしそれよりも早く、オルランドは手中の光を地面に叩きつける。

直後、轟音が響いた。

猛烈な熱を孕んだ爆風が周囲一帯を薙ぎ払う。並んでいた屋台も、民間人も、何もかもを。

「これで広くなった」

ふれあい広場を消し飛ばして更地にしたオルランドは、事も無げに言い放つ。

彼の眷属たちは……空中に逃れていた。そしてゆっくりと地面に降り立つ。

ストラーダは、うつむいている。今の爆発で吹き飛ばされて胸板にぶつかったある物を、じっと見下ろしていた。

焼け焦げた、人間の手首だ。そのサイズからして、まだ小学校にも上がっていないだろう。丸っこい形の飛行機のオモチャを握ったま

ま、地面に転がっていた。

「オルランドおとおおおおツツ!!」

怒号を轟かせ、老戦士は虎のごとく弟子に躍りかかる!

怒りを込めて放たれた破城鎚のごとき右拳は——しかし、オルランドの右手一本で、軽々と受け止められた。

「おいおい。この期に及んで、まだ手加減してるのか?」

オルランドは溜め息をつく。

「それともまさか、全力でこれなのか? 日本までの長旅の疲れで肩凝りでも起こしたか! 貧弱貧弱う!」

そして無造作に、師の身体をゴミか何かのように放り投げる。年齢を感じさせない、筋肉の要塞めいた巨体を。

空高く投げ上げられたストラーダは、空中で身体を回転させてバランスを取り、難なく着地する。

「貴様……自分が何をしたかわかっておるのか!」

「あんたが『ここじゃ狭すぎる』って言ったんだろう? だから広くしてやったんじゃないか」

非はそちらにあると言わんばかりの態度に、ストラーダは憤怒に顔を歪め……その怒りの色もすぐに消えた。その目にはただ、哀しみだけがある。

「悪魔に転生しても、その優しさを失わずにいる者たちもいるというのに……お前は、そこまで堕ちたのか……ならば、もはや弟子とは思わぬ」

右手を前にかざすと、老戦士の足下に光の紋様が浮かび上がり、その中から青い刃を持つ剣が出現した。本来ならば大剣と呼ぶにふさわしい偉容だが、ストラーダがそれを握ると小さく見える。

「私のこの手で、貴様を断罪しよう」

「……いくらお師さんとはいえ、舐められたもんだな」

オルランドは嘆息しつつ、傍らに歩み寄った少女ドウレンダナの腰に腕を回し、抱き寄せた。

「貴様、乙女を盾にするつもりか」

「何を寝惚けてるんだ。こいつは盾じゃあない、剣だ。俺の頼もしき

女王クイーンにして、俺がこの世で最も信頼する、最強の刃……」

オルランドの腕の中で、少女の華奢な身体が光を放つ。純白の輝きに全身が包まれ、激しい光輝が収まった時、オルランドの手には赤紫色の刃を備えた大剣が握られていた。

ストラーダが手にするデュランダル・レプリカと、色以外は形も大ききも同じだった。

「ドウレン……ダナ……？」

目の前で起きた変身劇に、ストラーダは我が目を疑う。それは紛う事なき聖剣ドウレンダナ。しかし少女の姿に擬態する能力などなかったはず……。

「悪魔の駒を手に入れた後でな、こいつに使ったのさ。そしたらパワーアップしただけじゃなく、こういう事も出来るようになった。改めて紹介しよう、お師さん。これが俺の女王クイーン。聖剣にして悪魔、悪魔にして聖剣……魔聖剣ドウレンダナだ」

「神より賜りし聖剣に、何という事を……」

「人間だけが神から授かれるはずの神セイクリッド・ギア 器を、悪魔に転生させて横領した奴だっているんだ。俺なんざまだお行儀の良い方さ」

冗談めかした事を言いながら、オルランドは無造作に距離を詰めた。

ドウレンダナが上段から打ち下ろされる。

稲妻のような一撃を、ストラーダは模造品の聖剣で受け止めた。舗装されたアスファルトの地面に、衝撃でヒビが入る。

オルランドは次いで、左右から連続して斬りつける。老戦士はこれも軽々と防いでみせた——最初の内は。

オルランドの連撃は止まる様子を見せない。それどころか、子供が棒切れを振り回すような無造作な片手打ちだが、一打ごとにどんどん速く、強くなっていく。

七打目を防いだ時点で、ストラーダは早くも限界を感じた。次の一撃は、自分の処理能力を超えるスピードとパワーで繰り出されるだろう。

これ以上の消耗を強いられる前に、決着を付けなくてはならない。

地面を力一杯に蹴り、大きく後ろへ飛ぶ。オルランドの八打目は、空を切った。

「ぬうううんっ！」

ストラーダはデュランダル・レプリカで天を指し、そのパワーを解放した。聖なるオーラが白い奔流となって噴き上がる！

一瞬。

ほんの一瞬だけだが、老戦士は弟子と過ごした日々を思い出した。お師さんと気さくに呼び掛けてくれる弟子と一緒にいる間は、自分の地位や、それに伴う権限と責任から解放されていたのではないだろうか……。

「おおおおおおおおおッツ!!」

郷愁の想いを振り払うように、ストラーダは吼えた。

巨大な閃光と化した聖剣を、全力で振り下ろす。

オルランドのドウレンダナも、同様に聖光の奔流を放った。

そして同じように、大上段からの打ち下ろしをぶつける。

二つの聖なる光刃がぶつかり合い、一瞬だけ拮抗してみせたが、すぐに一方が縦に裂かれて、雲散霧消した——デュランダル・レプリカの光刃が！

ドウレンダナの光刃は勢いの減衰すら感じさせず、そのまま最後まで振り下ろされ、デュランダル・レプリカもろともストラーダの巨体を切り裂いた！

とっさに身を捻り、幹竹割りにされるのだけは避けてみせたのは、歴戦の勇者だからこそ成せる業だろう。

だがダメージは大きかった。右肩から左脇腹へと、胴体を斜めに横切って傷が走り、鮮血が滝のように溢れ出していた。

ストラーダは、自らの血溜まりの中に膝をついた。

「歳は取りたくないもんだな、お師さん……ほんのわずかながら、やはりあんたは衰えていたよ」

オルランドが師の前に歩み寄る。

「そしてその剣も、しよせんレプリカにしか過ぎなかったな。衰えた力で振るう紛い物のナマクラで、俺と俺のドウレンダナをどうにか出

来ると、本当に思っていたのか？」

「貴様……何を……した……」

ストラードは息も絶え絶えに、弟子を見上げる。

「人の話はちゃんと聞けよ。俺があんたに何かしたんじやあない。あんたが寄る年波に勝てなかつたと言ってるんだ」

「私の事では、ない……悪魔に転生すれば、確かに身体能力は強化される……ドウレンダナも、悪魔の駒イヴィル・ピースによって強化されておろう……だがお前は……お前のパワーには……それだけでは説明のつかぬものを……感じる……」

「完全に耄碌した訳じゃあないんだな」

オルランドは心当たりがあるのか、クスクスと笑った。

「だが、それをあんたに説明して、俺に何か得がある訳でもなし。謎解きはあの世でゆつくりとやればいいさ……神のいるあの世で、な」

ドウレンダナが老戦士の首筋に振り下ろされた。

死を覚悟して目を閉じたストラードだったが……、

「……？」

しかし、トドメの一太刀は来なかった。

目を開けて顔を上げると、信じられない光景があった。

自分の首筋目掛けて振り下ろされたドウレンダナを、見知らぬ少年が受け止めていたのだ。

少年が手にする得物は、柄卷きを施した木刀。その刀身は白い光輝を放ち、金属製の刃に一ミリほども切り込まれる事なく、しっかりと受け止めていた！

「……ほう」

オルランドが感心したように声を漏らし、剣を引いて下がる。

「い、いかん……下がりたまえ、少年よ……君が太刀打ち出来る相手では……」

「うるやい」

少年は言い捨てて、たった今助けた老人を木刀で打った。無造作な片手打ちで、老人の巨体は体重など消えたかのように軽々と吹き飛ばす。

飛んでいった先には、リアスとソーナが駆けつけていた。彼女たちがストラーダを受け止める。不思議な事に、少女たちの腕にはほんのわずかな衝撃すらなかった。まるで風船をキャッチしたかのような、軽い手応えだ。

そして重傷のはずのストラーダは——穏やかに寝息を立てていた。出血は止まり、骨にまで到達していたはずの傷も半ば以上塞がっている。

オルランドが呆れたように言った。

「……応急処置にしても、荒っぽいな」

「怪我人は邪魔だからな。おとなしくさせてもらった」

秋月連也の声は、かすかに震えていた。

「王<sup>キング</sup>、彼です。あの少年がバズソーを倒した少年です」

背後からのクルガンの言葉に、オルランドはピュウツと口笛を吹いた。

「俺の子分が世話になったというのは、君か」

「気にするな、人間<sup>ひと</sup>として当然の事をしただけだ」

「ふふん……で、今度は俺の事も世話してくれるのかな？」

「お前だけじゃあない」

連也は木刀『飛龍』の切っ先で、オルランドとその背後の眷属たちを指した。

「——お前ら全員だ」

秋月連也の声は、かすかに震えていた。

激しい感情は念の純度を低下させる。そうはわかかっていても抑えきれない、憤怒によって震えていた。

## 魔劍烈劍

焦土と化したふれあい広場に、異質な剣戟の音が響く。

魔聖剣ドウレンダナと木刀『飛龍』、鋼と木のぶつかり合う音だが、とてもそうは聞こえなかった。大きな太鼓を打ち鳴らしたような、あるいは地面の下で爆弾が爆発したかのような、そんな重い音だ。そして二つの剣がぶつかり合うごとに、四方八方に衝撃波が撒き散らされる。その激しさに、リアスもソーナも連也の加勢に入れなかった。

オルランドの眷属たちも、主君の戦いをただ見守るだけだ。しかし彼等の表情には、何の心配も不安も見られなかった。それほどまでに信頼しているのだ、王の強さを。

「ふははははは！ いいぞいいぞ！ 俺とドウレンダナを相手に十合以上打ち合えたのは、昔のお師さん以外じゃあ君が初めてだ！ さあ頑張れ頑張れ！」

オルランドは無邪気に笑いながら、ドウレンダナを振り回す。だが、決してデタラメな太刀筋ではない。わずかでも連也の構えに隙があれば、真つ直ぐ正確にそこを突いてくる。そして下手な受け方をすれば、その防御もろとも叩き潰されるような威力が、一撃一撃に込められていた。

連也はその超重量級の連撃から生み出される衝撃を、自身の体内と『飛龍』に宿る念の力で、時に散らし、時にいなして、受け流す。

「なかなかやるな……なら、これはどうだ！」

オルランドは少年の脳天目掛けてドウレンダナを振り下ろした——かと思えば、剣尖が途中で翻り、左脇腹へと狙いを変えた。連也はフェイントに引っかけられて木刀を上段に掲げたため、そこはから空きとなっている。

ガギイン！

そんな音がした。

何たる怪現象か。連也の左脇腹の辺りの空間に、円形状の陽炎が発生しており、その揺らめく空間内から木刀『飛龍』の刀身が生えて、

ドウレンダナの刃を受け止めていた！

上段に掲げていた『飛龍』にも同様の陽炎が発生しており、刀身が半分以上もその中に呑み込まれて消えていた。

念で作り上げた空間ゲートを通して、木刀の刀身をテレポートさせる秘技……。

「念道剣、水輪みなわくぐり！」

「大した手品だ！」

オルランドはなおも愉快そうに笑う。

楽しいのだ。己れの力を存分に奮う事が楽しくて仕方がないのだ。

「うるせえ！」

空間ゲートから引き抜いた木刀で、連也は反撃に出た。

連続突きからの、相手の両肩を狙った打ち込み。どれも速く、鋭く、激しい。

オルランドはドウレンダナを、休む事なく繰り返される木刀に叩きつけていく。ガードするなどという消極的なものではない。迫り来る相手の得物を粉々に打ち砕こうとする積極的な意思が感じられた。木刀『飛龍』はその身に宿す歴代の念道家の念の力で、桁外れの頑丈さを誇る。だがそれでも、連也の手に強烈なしびれが伝わってきた。

オルランドの剣質は剛剣などという生易しいものではない。相手の心も体も、その得物さえもドロドロに溶かし尽くさずにはおかぬ、るっほ増埒の剣と表現すべき苛烈さがあった。

木刀と聖剣が何度目かの鏝迫り合いとなった。

「ふふん、怖い顔だな。男前が台無しだぞ？ 何をそんなに怒ってるんだ？」

「何をだと……自分がたった今何をやったのかもわからねえのか！」

「——ああ、それか」

この広場を焦土に変えた事を怒っているのだと、オルランドは理解した。

「神様がいつもおやりになっていた事じゃあないか。あのお方が一度もそれを気にした事はないんだから、君も気にする事はない。主の御業みわざに比べれば俺のして来た事なんぞ、子供の悪戯みわざみたいなもんさ」

「子供の悪戯だと……」

木刀を握る連也の手に、力がこもった。

「何の罪もない人たちを殺しておいて……言う事はそれだけかああああああっ！」

連也の体から、怒気が炎のごとく噴き上がる！

全身の力と怒りを込めて、オルランドを突き飛ばした。

「いええええええやつ！」

雷鳴を思わせる気合いと共に振り抜かれる『飛龍』。ほとぼしる念が刃となつて、オルランドを追いかけた。

ドウレンダナが吠えて、その刃を打ち払い、消滅させた。

「お返しだ」

オルランドはドウレンダナのパワーを解放する。

莫大な聖なるオーラが白い光となつて溢れ出す。オルランドが魔聖剣を振ると、その光が凄まじい破壊力を秘めた津波となつて、地表を削りながら連也に襲い掛かった。

連也は目を閉じた。

戦いを放棄したのか——否。

木刀『飛龍』を迫り来る巨大な白光の壁に突き立てると、光の侵攻がピタリと静止したのだ。そして木刀へと吸い込まれていく。

相手の攻撃を受け止め、自身の念を上乗せして打ち返す秘技。

「念道剣、波濤返し！」

横一文字に振り抜かれた『飛龍』から、聖剣のオーラと破邪の念が融合した圧倒的なエネルギーが放射された！

自らの攻撃を自ら受ける事となつたオルランドだが、驚き慌てる訳でもなく、楽しいげな笑みを崩さない。

ドウレンダナで虚空を縦に切り裂くと、その太刀筋に沿って光の激流が左右に分かれ、掻き消されていく。

そして閃光が完全に消えた時——連也は既にオルランドの懐に飛び込んでいた。

みぞおち目掛けて放たれる、電光石火の突き！

オルランドはこの戦いにおいて初めて、防御に回った。ドウレンダ

ナの幅広い刃を盾代わりにかぎず。

だが木刀の刀身は聖剣にぶつかると寸前に消失し、その向こう側へと現れる。

ズドンッ！

砲弾が直撃したかのような凄まじい激突音。

オルランドはサッカーボールのように後方へと吹っ飛ばされた。眷属たちが駆け寄って、受け止める。

「ぐおおおおおおおっ！」

彼等は我が目我が耳を疑った。最強無敵と信じていた王が、たった一人の少年に吹っ飛ばされ、苦悶の声を上げているのだ。

突きと共に打ち込まれた破邪の念が、オルランドの悪魔と化した肉体を苛んでいた。

「イツセーくん、こっちだ！」

「な、何だよコレ！ 広場がなくなってるじゃねえか！」

そこへ、兵藤一誠と木場祐斗も駆けつけた。

「片付けなさい、ドルトレー！」

メテオラの命令に、長身の騎士が前に出る。

「禁手化」

誰にも聞こえない小さな声で、彼はそうつぶやいた。

一誠は神器を顕現させようとした。

祐斗は神器の力で、聖魔剣を造ろうとした。

連也は木刀を振りかぶり、突撃していく。

そんな彼等の周囲の景色が、突如一変した。

青空は赤錆色の曇天となり、地面も赤茶けた土と化した。

そして、錆び付いた空から、何十本、いや、何百本もありそうな無数の剣が、雨あられと降り注いできた。

一誠はかろうじて禁手化が間に合い、鎧をまとう事で防御出来た。祐斗は両手に創造した聖魔剣の二刀流で、頭上から落ちてくる剣を払い落としていく。

リアスが滅びの魔力でバリアを生成し、ソーナとストラダを守る。

連也は落ちてきた剣の一本を、木刀で空へと打ち返した。それが別の剣に当たって弾き飛ばし、また別の剣を弾き、その連鎖反応によって、白刃の群れは少年に掠り傷すら与えられず、むなしく地面に突き刺さる。

だが、剣の豪雨は止む気配がない。

「つの野郎！」

一誠がドルトーレ目掛けてドラゴンショットを放つ。しかし地面から生えた複数の剣が重なりあい、盾を形成して彼を守る。

その間に、連也は祐斗の元へ駆け寄った。

「十秒だけ、俺を守ってくれ」

「え？ 一体何を……？」

「何かの結界っぽいこの空間を斬る」

「は？」

間の抜けた声を上げながら、祐斗は自分たちに降り注ぐ剣を打ち払い、叩き落とす。

連也は木刀を正眼に構えて、目を閉じた。

感覚を研ぎ澄ませ、気配を探る。視覚や聴覚などではない霊的な感覚、いわゆる第六感だ。その第六感が、周囲を囲む壁のような物を感じた。

体内に残った念を込めて、木刀『飛龍』で虚空を縦に切り裂く。

「何だと……？」

ドルトーレが空を見上げてうめいた。

赤錆色の曇天が二つに分かれ、そこから白い陽光が射し込んできたのだ。

空の裂け目はぐんぐん大きさを増していき、錆び付いた色の空が完全に消え去った。

同時に剣の雨も止んだ。

オルランドたちの姿はない。ドルトーレも足下に展開した転移魔法陣を用いて、姿を消していた。

「ありがとう」

連也は祐斗の背中をポンと叩き、守ってくれた札を言った。そして

広場の外へと歩き出す。

「秋月くん、どこに行くの!？」

リアスが駆け寄り寄って尋ねる。連也は煩わしげに振り向いた。その顔は疲労で青ざめている。汗も凄い。

「奴等を探すんですよ。見つけ出して、全員ぶちのめしてやらなきやあ気がすまない」

「で、でもあなた、今にも死にそうな顔してるわよ?」

「——今にも死にそうだよ」

そこまで言って、連也は意識が遠退いていき、リアスの胸に顔面ダイブする形でぶっ倒れた。

ストラダーの応急手当、そしてオルランドとの戦いで念を大幅に消耗していたのだ。加えてたった今、際限なしに剣が降り注いでくる謎の亜空間を切り裂き、連也の体内の念は完全に枯渇した。しかもわずか半日の間に二度も念を使い果たした事で、体力も精神力も限界に達してしまったのである。



町外れの廃ホテル。

転移魔法陣でここに避難した後もなお、オルランドの苦悶の声はやまなかった。魔力で念の侵食を防いではいるが、念そのものを消し去る事が出来ずにいるのだ。

様々な魔術や妖術に精通するクルガンやメテオラでも、手の施しようがなかった。

「こうなったら、この身体は諦めるしかないな……」

ベッドの上で、オルランドはそう言った。

「肉体が消滅すれば、このおかしなパワーも消えるだろう……その後で、肉体を再構成させる……三日もあれば何とかなるはずだ……その間の指揮はメテオラ、お前に任せる……」

「かしこまりました、<sup>キング</sup>王」

メテオラは震える声で答えた。

「ドウレンダナ……少しの間お別れだ……だが俺は、必ず戻ってくるからな……」

そばに寄り添う聖剣の化身たる少女に優しく語りかけた時、オルランドの肉体が砂のように崩れ去った。

眷属たちの間に、動揺が走った。主君の敗北と消滅を目の当たりにして、この世の終わりが来たかのような絶望が一同の顔に現れている。

「静まりなさい」

しかしメテオラの態度は、毅然としたものであった。

「今聞いたように、三日の後に王は必ずや甦ります。我々の為すべき事は、その間D×Dどもをこの場に近付けぬ事です。王の護衛はドウレンダナ様にお任せし、我々はこれより駒王町に繰り出します。一人でも多くの人間を殺し、一つでも多くの建物を破壊すれば、奴等はその対応に追われて後手に回るでしょう。そうなればそうなった分、王は安心して復活に専念できるのです。さあ、行きなさい！ 全ては我等が王オルランド様のために！」

鞭打つような苛烈な声に、眷属たちはすぐに従った。

メテオラは未だにベッドに寄り添う少女の方を振り向く。

「では女王ドウレンダナ様。私も出陣いたします。王の護衛、何とぞお頼み申し上げますわ」

見た目は十歳以上年下の少女に一礼すると、彼女もまた退室した。後には、人の形に出来上がった砂の山と、それに寄り添う少女のみ。静寂の中で、変化が起きた。

かつてオルランドだった砂山の中から、チェスの駒が光を発しながら浮かび上がって来たのだ。

これぞ悪魔の駒。他種族を悪魔へと生まれ変わらせる魔性の物体。

しかしおかしい。

その駒は、悪魔への転生に使われる物とは形が違っていた。

女王でも戦車でも僧侶でも兵士でもない。

オルランドが手にかけてた主から埋め込まれた騎士の駒とも違う。

ではいったいこれは、何の駒だというのか？

正体不明の悪魔の駒は、光の糸を無数に吐き出し、自らを中心に、

繭を形作っていった……。

## 決意と衝突

駅前のふれあい広場にて爆発事故が発生。犠牲者多数。現場及びその周辺に、見慣れない外国人の集団が目撃されたため、爆弾テロの可能性もあり。

生徒の安全のため、学校を一週間休校。そのまま連休に入り、授業の再開はゴールデンウィーク明けからとする。

緊急職員会議で以上の事が決定し、その旨が全校生徒の家庭に、その日の内に伝達された。

部活動も中止となり、放課後の駒王学園はいつもより静かだ。

ゼノヴィアは生徒会の面々と共に、校内に居残っている生徒がいないか見回りをしていた。

生徒会長という立場上、いの一番に先陣を切って戦いに赴く事が出来ないのがもどかしい。

(だが、仕方がない。これも大事な務めだ)

少女は心の中で、そう自分に言い聞かせた。

各教室のドアを開けて、一つ一つ念入りに見回っていく。

最後に廊下の一番端っこ、E組の教室を覗くと、人影が一つあった。

秋月連也だ。

「連也、帰らないとダメじゃないか。先生に言われたはずだぞ」

「……荷物取りに来ただけだ。今から帰るよ」

少年はそう答えて、机のサイドフックに掛けてあった自分の鞆を取った。

念を使い果たして気を失った後、兵藤邸で介抱され、家人に礼を言ってから学校に戻ってきたのである。

「……どうかしたのか？」

いつもの彼らしからぬ険しい雰囲気を感じ取って、ゼノヴィアはつい尋ねてしまった。

「別に。何でもない」

「とてもそうは見えないが……」

「一日に二回も念を使い切っちゃまって、へ口へ口なんだよ」

そう言われて見れば、少し顔色が悪い。

「何があつたんだ？ まさか広場の爆発と関係があるのか？」

「後でグレモリー先輩に聞け。俺は今忙しい」

突き放すような口調で言い捨てて、連也は教室を出た。

「……」

後を追い掛けたいところだが、まだ見回らねばならない所がある。

ゼノヴィアは私情を抑え込み、生徒会長としての務めを優先した。



桂馬川区の住宅街。

その片隅にある広い庭付きの一戸建て。

連也はその正門を開けて、中に入った。ここが彼の住まいだ。

「あら連くん。お帰りなさい」

玄関のドアの開く音に、台所からヒョッコリと顔を出して出迎えたのが、秋月克美。連也の叔父信彦の妻であり、連也からすれば義理の叔母だ。

「さつき学校から電話があつたわよ。駅前ふれあい広場で爆発事故があつて、危ないから学校は明日からお休みですって」

「んー、わかった」

連也は答えながら、鞆から空の弁当箱を出して、台所の流しに入れる。

そしてさつきと二階の自室へ上がった。

部屋に入ると制服からジャージに着替える。

そして部屋の真ん中で座禅を組んで、目を閉じた。

——わずかな静寂の後、少年の体に五つの光点が灯った。

人体に備わるエネルギー吸収口、チャクラだ。

正中線に沿って、下から尾てい骨、丹田（へその下）、みぞおち、胸部中央、喉、眉間の六ヶ所に存在する。

下の二つが物理的な、その上の三つが感情的な力を発揮する。

そして眉間のチャクラから吸収されたエネルギーは、霊的な力に変化する。

自前の念や、自然の気を吸収・昇華させた念だけではとても足りない

いと感じた連也は、このチャクラを開放してパワーの補充をしているのだ。

では、この六つのチャクラからどんなエネルギーを吸収しているのかと言えば、それは宇宙に満ちる理力である。

まるで怪しい新興宗教を思わせるが、科学者の間でもその存在は結構真面目に論じられている。

いわく、宇宙空間の何も無いように見える部分に、何かが存在してなければ起こり得ない現象が確認されている。何かはわからないが、何かがあるのは間違いないだろう、という事だ。

その『何か』を、念道家たちは『理力』と呼称しているのである。自然の気以上に念に近い性質を持つているらしく、これを取り込むと非常に迅速かつ大量に念を充填出来る。

他の五つよりも少し遅れて、眉間のチャクラも開放された。霊的な力を司るこの部位は、開くのが難しい。連也がチャクラコントロールを身に付けたのも、今年に入ってからだ。

全身の細胞の一つ一つに、清らかで暖かなエネルギーが注ぎ込まれ、染み渡っていくのが感じられた。

パワーを充填すると、連也はリュックサックを取り出し、その中に財布と歯ブラシ、タオル、四日分ほどの替えのシャツとパンツを詰め込んだ。

それを持って部屋を出る。

「叔母さん、ちよつと出掛けてくるよ」

「あら、帰ってきたばかりなのにな？」

「ちよつと山にこもる。連休に入ったらいつペン戻るつもりだけど、もし帰って来なかったら、『秋月連也は男の中の男だった』って墓石に刻んで、末代まで語り継いでくれ」

冗談とも本気ともつかない事を言い残し、連也は叔母の返事も聞かずに家を出た。

「生水には気を付けてね」

克美は呑気な言葉を投げ掛け、心配する素振りすら見せない。甥っ子が使う摩訶不思議な力の事を、夫婦ともども知っているのだ。ま

た、「山にこもる」と言つてフラリと出掛けて、三日くらい戻つてこない事も何度かあつたので、慣れてもいた。

そもそもこの家に住めるようになったのが、彼のお陰だった。

今でこそ落ち着いた佇まいの家だが、かつてここでは凄惨な殺人事件があつた。夫が妻のあらぬ浮気を疑い、包丁で刺し殺したのだ。家中を逃げ回りながら、妻は数十ヶ所に嫉妬の凶刃を突き立てられたという。

以来この家では血まみれの女が夜中に家中を這いずり回るようになったし、昼間も全体的に暗い雰囲気をもとつていた。

数度のお祓いも効果がなく買い手が付かなかつたのだが、駒王町に引越すに当たつて住む家を探していた秋月夫妻が、この家を買つたのである。決め手は、連也の言葉だった。

「確かに良くないものが憑いてるけど、俺一人で祓えるから」

中学を卒業して間もない甥っ子のその言葉には、不思議な信頼感があつた。

現に引越して初日の夜、現れた女の幽霊は連也の木刀の一撃によつて雲散霧消し、家全体を覆っていた暗く淀んだ空気も綺麗さっぱり消え去つたのである。

後日克美は、秋月家に代々受け継がれてきた念道という技の事を、夫の信彦から聞かされた。そしてマスコミが甥っ子に付けた『愛と奇跡の子』という名前に、違う意味で納得したのである……。



兵藤邸では、リアスがソーナと共に、今後の方針を話し合つていた。それぞれの眷属も集まり、本来ならかなり広いリビングが、今だけは少々狭苦しい。

「今回のはぐれ悪魔は、これまでとはまったく違つています。逃げ隠れするどころか、白昼堂々と姿を現し、破壊活動を行う……リアス、失礼ながらあなた方だけでは、彼等を討伐するどころか、逆に被害が広がる恐れの方が大きいでしょう」

「認めたくはないけれど、あなたの言う通りね……」

リアスはソーナの手厳しい意見に、敢えて反論はしない。ただ人差

し指に燃えるような深紅の髪をクルクルと巻き付けている。

手慰みをしながら、ルフエイに尋ねた。

「ねえルフエイ。ヴァーリたちとは連絡は取れないの?」

「ヴァーリ様たちは今、須弥山しゅみせんで修行中です。世界の危機でもない限り、闘戦勝仏様が下山をお許しになるとは思えません」

「困ったわねえ……」

溜め息をつきながら、リアスはふと従兄弟の顔を思い浮かべて——すぐに脳内から消去した。あのパワー馬鹿を呼んでも状況が悪くなるだけだ。

そこへ静江が入室してきた。

「リアスさん、お客様よ」

彼女が連れてきたのは、ジャージ姿の秋月連也だ。

「あら秋月くん。何か忘れ物?」

「……あいつらをやっつける、その手伝いがしたくて」

連也はそう答えた。

その眼差しは険しく、非道な破壊活動を行ったはぐれ悪魔への怒りがひしひしと伝わって、思わず気圧されそうになる。

「どうやら本気のようなね……わかったわ」

リアスは連也へ手を差し出して、握手を求めた。

「あなたが手を貸してくれるなら百人力よ。よろしくね」  
「ども」

連也は小さく答えて、手を握る。

「冗談じゃない! 俺は反対だ!」

異を唱えたのは一誠である。

「いくら強かったって、こんな自分勝手な奴と一緒になんて戦えないよ! 俺が念道教えてくれって土下座して頼んだのに、コイツは断りやがったんだぜ!」

その言葉に、その場にいた何人かは眉をひそめる。

「それは仕方ないでしょう? 彼には受け継いできた技に対する責任があるのだから……秋月くんの実力は、あなたも見てきたはずよ?」  
「でもリアス……!」

「何より、今はあなた個人の好き嫌いに構ってる場合ではないの。目的のためには、嫌いな人に頭を下げなくてはいけない時もあるのよ。覚えておきなさい、イツセー」

ピシヤリと言われて、一誠は黙り込んだ。彼とて状況はわかっているのだ。

「いつでも動けるよう、しばらくここに住まわせてもらいたいんですが……」

「ええ、構わないわ。お部屋はいくらでも空いてるし。誰か、来客用のお部屋に案内してくれる？」

リアスの言葉に率先して立ち上がったのは、ゼノヴィアだった。彼女に連れられて、連也はリビングを出ていった。

二人が客室の並ぶフロアに上がると、そこでヴァスコ・ストラードと出会でくわした。

かつての弟子だったオルランドから受けた傷は、連也の念で半ば治癒しており、ここに運ばれた後もアーシアの神器《トワイライト・ヒーリング聖母の微笑み》での治療を受け、すっかり完治している。

老人はゼノヴィアの隣の少年を見て、顔をほころばせた。

「おお、昼間の木刀ボーイではないか。無事で何よりだ」

「……日本語、喋れるんだ」

厳つい外国人の流暢な日本語に、連也は驚いた。昼間助けに入った時は何やら外国語で喚いていたので、尚更だった。

「ははは、自慢ではないが母国語イタリヤの他に英語・ドイツ語・フランス語・中国語・日本語をマスターしておるのでな……昼間は不肖の弟子が、すまない事をした」

ストラードはそう言っつて、孫のような年齢の少年に深々と頭を下げた。

「俺に謝ったって、何にもならないでしょ」

「……そうであったな……この手で弟子を捕らえてやりたいところだが、最早老いさらばえて、そのような力もない」

「ご謙遜を。猊下はまだまだ現役ではありませんか」

ゼノヴィアがフォローした。

リアスから、はぐれ悪魔の頭目が目の前の老戦士の弟子だった事、そしてこの老戦士を倒した事は聞いている。しかし、正直言つてとても信じられなかった。

「はは、慰めてくれるのは嬉しいが、今の私には追い討ちにしかならんよ。まだ現役だとしたら、それでも弟子に真っ向から敗れたのだという事になる……」

ストラダーの声は、若干暗かった。

「しかし、その木刀ボーイは、その弟子を真っ向から撃退したと聞いておる……どうかな、その技の冴え、この老いぼれにも見せてもらいたいのだが」

「俺は構いませんよ」

連也はあつきりと引き受けた。

チャクラコントロールによってどれだけのパワーが充填出来たか、実践で確かめておきたかったのだ。筋肉の鎧で重武装したようなこの老人は、その相手にちようどいいと感じた。

「おお、ありがたい。では戦士ゼノヴィアよ、庭を貸してもらえよう、家主殿に頼んでもらえるかね？ それと、この家にある一番大きくて重い木刀も用意してもらいたい」

◆  
ちよつとした運動場くらいはありそうな広い庭で、風切り音が響く。ストラダーが木刀を振っているのだ。

木刀は、刀身の幅と厚みが通常の倍近くある。本来は素振り用の物であり、試合に使うような物ではない。ましてや八十歳を越える老人が片手で振り回す物でもない。

「ふむ……少々軽いが、まあ良かろう」

しかしこの男にはまだ物足りないらしい。ポツリと漏れた呟きに、チームD×Dの面々は改めて彼の超人ぶりを実感し、半ば呆れていた。

「君の得物は用意せずとも良いのかね？」

「自前があるんで」

五メートルほどの間を置いて対峙する連也が、背中の襟口に右手を差し込んだ。

引き抜かれた手には、柄巻きを施した木刀『飛龍』が握られている。二人の剣士は、同じ構えを取った。

日本剣術においては八双、西洋剣術においては屋根から落ちてくるかのように上から剣を振り下ろす事から『屋根の構え』と呼ばれる、垂直に立てた刀を顔の横辺りに持つてくる構えだ。

数秒の睨み合い。

その後、連也が動いた。木刀を下段に下げながら、間合いを詰めてきたのだ。姿勢は前傾になり、まるで自ら頭を差し出して「どうぞ、打ってください」と言わんばかりだ。

誘いだとわかったストラーダだが、じつとしていれば下から木刀が飛んでくるのもわかっている。

「ムンッ！」

打たれる前に打つ。

充分に体重を乗せた上段打ちが、暴風の如く連也の頭上に迫った。かと思えば、連也の姿が急に遠退いた。後ろに飛んだのだ——連也ではなく、ストラーダが。

少年の軽い一突きで、筋肉の要塞めいた巨体が軽々と吹っ飛んだのである。

ストラーダは宙でクルリと一回転して着地した。

連也が一步踏み出す。その一步で、両者の間に開いた数メートルの距離があつという間に縮まった。

「ぬうっ！」

ストラーダ、咄嗟に横殴りの片手打ち！

刃の付いてない木刀でも人体を真っ二つにしてしまいそうな、剛力の一撃だ。

連也はこれをジャンプしてかわした。木刀の刀身を蹴って、更にジャンプ。後方へと跳んで元の位置に戻る。

「ううむ、摩訶不思議としか言いようがないな……」

ストラーダはそう言つて唸った。

最初の突きも、突きとは呼べない木刀で押しただけの軽いものだった。にもかかわらず、自分の巨体を軽々と吹き飛ばす。それでいて体には何の痛みもなかった。

年甲斐もなく、好奇心がムクムクと膨らんでくる。少年の操る魔法のような剣法を、もつと見てみたい……！

ストラダーは、木刀を大きく振り上げた。

グググツと下半身に力を込め、地面を蹴る。

人間ミサイルと呼ぶにふさわしい勢いと速度で、連也に肉薄した。

対して連也は、『飛龍』を顔の前で垂直に立てた。腕を曲げて刀身を体にくつつける、窮屈な構えだ。

ストラダーが間合いに入った。

振り上げた木刀が、落雷にも似た一撃を放つ。

試合を見る誰もが、連也の敗北と死を確信した。少年の肉体が、落雷を受けた大木のように真つ二つに裂かれる様をイメージしてしまい、アーシアにいたっては両手で顔を覆うほどだ。

しかし次の瞬間、地面に倒れていたのはストラダーの方だった。

——何が起きた？

ギャラリーだけでなく、ストラダーまでもが同じ事を思った。

祐斗とゼノヴィアが、かろうじて一部始終を見る事が出来ていた。

ストラダーの打ち込みが頭に触れるか触れないかという、本当にギリギリのタイミングで、連也は片足を引いて腰を落とし、『飛龍』を振り抜いたのだ。

ストラダーの木刀は『飛龍』の細い刀身と交差すると、軌道が逸れて連也の右側の地面に突き刺さった。

とても威力があるとは思えない『飛龍』の一撃は、それだけにとどまらず老人の肩を打った——否、触れた。その途端に、ストラダーは糸の切れた操り人形のようにその場にぶつ倒れたのである。

ストラダーは動かなかった。

動けなかった。

打たれた肩には何の痛痒もない。なのに、体に一切の力が入らず、指一本動かさなかった。

それだけではなく、このまま明日の朝まで眠っていたくなるような、妙に落ち着いた気持ちになっている。

「す、すっげえ……い！」

思わず呻いたのは、匙元士郎だった。その感嘆の声を皮切りに、ギャラリーはパチパチと勝者に拍手を送った。

それから数秒ほどで、ストラーダの肉体は元通り動けるようになった。立ち上がり、少年と握手を交わす。

視界の端で、連也の勝利を讃える面々を見ながら、老人は安堵した。彼はリビングでのやり取りを、廊下で聞いていたのだ。

なまじつか強い絆で結ばれたチームに、面識のない人間が新たに加われれば、逆に異分子として扱われかねない。

そこで、大急ぎで客室のフロアに戻り、何気ない風を装って連也に試合を申し込んだのである。それで連也が勝てば、チームD×Dも彼の実力を認めて、無下には扱うまい。敗れたら敗れたで、少年に無謀な戦いを諦めさせる事が出来ただろう。

ストラーダの急ごしらえの計画は、良い結果に終わったようだ。連也の参戦に強く反対していた一誠ですら、称賛こそしないものの、何の抗議もせず黙り込んでいる。

何より、若い世代にまだまだ未知の逸材がいるとわかって、それがストラーダの一番の喜びであった。

## 駒王戦線

ふれあい広場では朝から警察による現場検証が行われようとしていた。

到着した警察官たちが、それぞれ必要な道具を持って広場内に足を踏み入れた瞬間、その足が一気に膝まで地面に沈んだ。アスファルトで舗装された地面にだ。

見た目には何の変化もないが、何故か地面が液体化しているのだ。予想だにしない事態に、何人も警察官がバランスを崩して、その液体化した地面の中に落ちてしまう。

「おい、しっかりしろ！」

一人の警官が、地面に沈んだ同僚の腕を掴んで引っ張り上げる。しかし、軽い。

それもそのはずで、彼が引き上げたのは掴んだ同僚の腕だけだったのだ。

我が目を疑い呆然とするその警官の足下も液体化して、彼はアスファルトの海に頭まで引きずり込まれた。

液体化現象はどんどん範囲を広げていき、警察車両までズブズブと沈んでしまう。

我先にと逃げ出す警察官たちの足首に、地面の中から伸びた蛸の脚が絡み付き、無情にも引きずり込んでいく。

運良く蛸足から逃れた者もいたが、彼等はどこからともなく飛来したオレンジ色の光の矢で、正確に頭部を撃ち抜かれた。



スクランブル交差点の真ん中に、ロングコートを着込んだ長身の男が立っている。行き交う行人や信号待ちをしている車の運転手たちは、彫像のごとく立ち尽くす男に一瞬だけ視線を向けるが、「まあ春だしな」と各々が適当に納得する。

彼等のその視線が、男がコートを脱いだ瞬間に再び引き寄せられた。

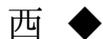
コートの下は上半身裸。六本の腕がそこから生えていた。

「『魔劍創造』」  
ソード・パース

六本腕の男ドルトールレがポツリと眩いた瞬間、スクランブル交差点のアスファルトの地面から無数の剣が生えて、通行人の足を貫いた。激痛と恐怖の悲鳴がそこかしこから響き渡る。

信号を無視して逃げようとした車が、他の車とぶつかったり倒れた通行人を轢いてしまい、被害と混乱が更に拡大していく。

ドルトールレは虚空から六本の剣を創造し、六本の腕で持つ。そして手近な通行人の首を、無造作に切り落としていった。



西駒王駅にはサラリーマンや学生がごった返している。

間もなく快速列車が通過する予定の三番ホームで、ざわめきが始まった。

ポンチョを着た男が、我が家の階段を下りるような気安い足取りで、ホームから線路へと下りたのだ。

「おい、危ないぞー！」

「何してんだ、早く上がれ！」

サラリーマンたちが口々に叫ぶが、男は意に介さない。

「『護法輪』」  
タリスマン・ホイール

眩きと共に、男の体を軸に四つの車輪が現れた。そして彼を守るように高速回転を始める。

その頃には、快速列車が到着していた。

ブレーキの軋む音がけたたましく響く。

そして列車の鼻先が、男の車輪に触れた瞬間、列車はその回転に弾かれて真横に吹っ飛んだ。利用客で溢れ返るホームへ。

轟音と共に、列車は駅舎を突き破って外にまで飛び出した。



駒王警察署に、十数台にもわたる大量の自動車群れをなして押し寄せてきた。中にはダンプカーや、たくさんの乗客を乗せた大型バスも混じっている。

それらの運転手たちは、揃って困惑と恐怖で顔がひきつっていた。ブレーキを踏んで車を止めようにも、ブレーキペダルが動かない。

エンジンを止めようとしても、キーが回らない。ハンドルは運転手の意思を無視して勝手に動く。

負傷を覚悟で逃げ出そうにも、ドアも窓も全く動かない。中には、無人の車も混じっていた。

自動車その物が意思を持ち、動いているとしか思えなかった。

そしてこの奇っ怪な暴走自動車群の先頭を走るダンプカーの屋根に、顎髭を生やした男が立っていた。

警察署が見えてくると、男の背中からコウモリの翼が生えて、彼の体を空中へと運ぶ。

男がオーケストラの指揮者めいて腕を振ると、自動車の群れは一直線に警察署へ突っ込んでいく。

ダンプカーやバス等の大型車両が、門や塀を破壊する。

そして大小様々な自動車たちが、次々と警察署内へと飛び込んで行った。



兵藤邸に、町内のいたる所で大規模な事故や事件が発生して、多数の死傷者が出ているという報せが届いた。

リアスとソーナは場所を確認すると、眷属たちを現場へと向かわせる。

木場祐斗は通り魔による大量殺傷事件が起きたスクランブル交差点へ向かった。

現場に到着した祐斗は、余りに濃すぎる血の臭いに、思わずむせた。所狭しと散乱する、無惨な斬殺死体。

地面から生えた剣で股間から頭まで串刺しにされた者もいた。

たくさんの剣で、中のドライバーもろとも針鼠にされた車もあった。

その屍山血河のただ中に、ドルトローレが返り血で全身を赤く彩り、たたずんでいた。

六本の腕に、剣はない。

「木場祐斗か……運がいい」

「どういう意味かな」

「以前から戦いたいと思っていた。同じ神器を持つ者同士としてな」  
「同じ神器？」

意味がわからなかった。昨夜リアスから渡された資料によると、この六本腕の男ドルトールレは、冥界の辺境に住む多腕族の出身——つまり純血の悪魔。神セイクリッド・ギア器を有するはずがない。

疑問に思う祐斗の前で、ドルトールレの六つの手の中に、飾り気のない片手剣が現れた。

その創造現象を、祐斗はよく知っている。

《魔剣創造》……!？」

彼が持つ神セイクリッド・ギア器と全く同じ能力だった。

「君は純血の悪魔のはず……なのに、何故？」

「俺にもわからん。ただ、誰かから奪った訳ではない。気が付いたら使えるようになっていた」

「そんなはずはない。神セイクリッド・ギア器は人間か、その血を引いた者しか持てない能力だ」

「……そうだな。だからきつと、俺はかつて人間だったのだろう」

ドルトールレは答え、空を見上げた。地上の惨劇が嘘のように晴れやかな青空を。

「小さな頃から、この青い空をよく夢に見た。行った事のない人間界の空……夢の中で見上げる度に、懐かしいと感じた。きつと俺は、生まれる前は人間だったのだ。本来なら別の人間の元へ行くはずだった神器を宿したまま、その魂はドルトールレという悪魔へと生まれ変わったのだろう……聖書の神が死んだ事によるバグという奴かも知れんな」

「何故、その事を……」

「王が、俺に教えてくれた」

ドルトールレは視線を祐斗に戻すと、六本の剣を構える。

「同じ神器を持つ者同士、どちらが上か……決めようじゃないか」  
「いいだろう……!」

祐斗は端正な美貌を怒りに歪ませながら、二本の魔剣を創造した。これだけの殺戮を行いながら、何事もなかったかのように平然とし

ている敵の態度が許せなかった。

そんな殺人鬼が自分と同じ能力を使っていると思うと、ますます腹立たしい。

しかし、怒りで我を忘れるような事はなかった。

このまま戦っても、あの六本の腕が操る六本の剣に翻弄されるのは目に見えていた。

だから祐斗は、剣以外の者も創造した。龍の意匠が施された鎧兜に身を包む五人の騎士。彼が有するもう一つの神器《ブレイド・ブラック・スミス聖剣創造》のバランス・レイカー禁手状態《グロウリイ・ドラグ・トルーパー聖覇の龍騎士団》だ。更に、その龍騎士一人一人にも二本の剣を創造して与えた。

祐斗は五人の龍騎士と共に、ドルトールレを取り囲む。

「——無駄だ」

ドルトールレが右足で地面をトンと叩いた。

瞬間、地面から生えた剣が龍騎士たち全員を串刺しにした！

祐斗だけが、かろうじて回避に成功していた。

(は、速い……！)

敵が地面を足で叩いたと認識した瞬間には、もう剣が生えていたのだ。もう一度同じタイミングでやられたら、次は回避出来る自信がなかった。

バックステップで距離を取る祐斗。しかしドルトールレが中段左腕の剣を前に突き出した瞬間、少年の腹に激痛が走った。刃が突き刺さっている——刃だけが。

ドルトールレの手中の剣から、刃が消えていた。

魔力を流し込む事で、柄の中で爆発が起きて刃を飛ばす、スペツナズナイフの亜種のような剣だ。

予想外の攻撃に、祐斗の足が止まる。

ドルトールレは六本の剣を全て投げ捨て、悠然とした足取りで近付いてくる。

近付きながら、剣ではなく薙刀を創造して、左右上段の腕で掴んだ。

「薙刀……!?!」

剣以外にも造れるのか？

驚く祐斗の脳天目掛けて、その薙刀が振り下ろされる。二本の剣が十字に交差して、その一撃を受け止めた。

「薙刀？ 何を言っている、これは柄がとて長い刀だ」

「そんな、屁理屈をー」

押し返そうとする祐斗だったが、視界の端で、敵の左右下段の腕が別の剣を所持しているのを捉え、剣を捨てて離れた。

距離を取り、新たに聖魔剣を創造する。

同時にドルトーレも、今創造した剣を捨てて、また新たに魔剣を造り上げていた。

祐斗の手中に新たな聖魔剣が出来上がったのは、それよりも後だった。

——速い。

剣を造るスピードが全く違う。

よーいドンで何の属性もギミックも持たないシンプルな魔剣を造っても、それでも自分の方が遅いだろう。恐らく敵は、イメージした瞬間には既に剣が出来上がっているというレベルにまで達しているのではないだろうか。

(どうする……!?)

神器以外にも、かつてジークフリードとの戦いの中で手に入れた魔剣群がある。自分で使うにはリスクが伴うが、龍騎士たちに持たせればそれもカバー出来る。

だが、あれだけの速さで魔剣を創造出来る敵が、わざわざ龍騎士の創造を待ってくれるだろうか？

「……失望した」

ドルトーレはポツリと呟いた。

「どれ程の男かと期待したが、どうやら聖魔剣だの『フレードブラック・スミス聖剣創造』だのと、物珍しいオモチャではしゃぐだけの子供だったようだな。己れの本来の力を極める事を怠ったのが、お前の敗因だ」

「何を……」

言い返そうとした祐斗だったが、言葉は出なかった。

周囲の景色が、いつの間にか変わっているのだ。赤錆色の空と、赤

茶けた大地に。前日の記憶が甦った。

「これは、俺の《魔劍創造》ソート・パースの禁手状態……《魔劍創世》ソート・ユニパース……あの木の小僧なしで、どう対処する？」

ドルトーレが言っている間にも、魔劍の豪雨が降り注いで来た。

地面からも無数の劍が生えてくる。足の踏み場もないほどに。

祐斗は龍騎士団も創造して、四方八方から雲霞のごとく押し寄せる魔劍を次々と打ち払い、落としていく。

だが、手数があまりにも違いすぎた。

狙いの外れた劍が地面に突き刺さり、地面から生えた劍と重なり合って林立して退路を塞ぐ。

無数の魔劍が無限に降り注ぐ異空間。

シンプルだが、恐ろしい能力だ。

龍騎士たちも防御が追い付かなくなり、一人二人と串刺しにされて消えていった。

その度に新たな龍騎士を補充するが、焼け石に水だった。

何より、祐斗の消耗が激しすぎた。

大量出血を避けるために腹に刺さったままにしていた刃は、毒を持っていたのだろう。

手足から徐々に感覚がなくなっていき、頭がボンヤリとしてきた。

そしてついに、その身で魔劍の雨を受けてしまう。だが毒で弱った祐斗の肉体は、痛みを感じる事すら出来なくなっていた。

力なく仰向けに倒れる少年に、更なる追い討ちの刃が降り注いでくる。

幻聴だろうか——どこか遠くで、壁を叩くようなドオオオンという鈍い音が響いた。

どうやら幻覚も見え始めたらしい。赤錆色の空に、白い亀裂が走るのが見えた。

——否！

幻覚でも何でも無い。白い光が巨大な刃となって空間を切り裂き、祐斗とドルトーレの間の大地に深い裂け目を刻み込んだ。

魔性の空間は消滅し、周囲の景色は再び元の駒王町に戻った。

「木場、無事か！」

戦闘服をまとい、エクス・デユランダルを携えたゼノヴィアがそこにいた。その聖剣の何たる破壊力か、外側から禁手空間を切り裂いたのだ。

仲間の元へ駆け寄りゼノヴィアだったが、祐斗は既に気を失っていた。

「エクス・デユランダルの名において命ずる……木場の傷よ、癒えろ！」

聖剣の鞘に宿る、支配と祝福の能力を併用して、治療を試みる。

完治には到らなかったが、出血は止まった。

ゼノヴィアの肩に、一羽の小鳥が止まっている。

その小鳥が光を発したかと思うと、巨大化した。

この鳥は祐斗の使い魔。主人の危機に、別の現場に向かう途中だったゼノヴィアを呼んできたのだ。

「急いでアーシアの所へ運べ」

ゼノヴィアという言葉に従い、鳥は祐斗の体を嘴でくわえて、空へと舞い上がった。

「逃がさん」

ドルトーレがその鳥へと剣を向ける。また新たに創造した魔剣は今までよりも長く、大きい。刃根本には鮫のヒレを思わせる枝刃が付いており、柄の内部には魔力を動力源とする発射機構が仕込まれている。

バズーカ砲のごとき勢いで、刃が発射された！

だがそれを白い烈風が叩き落とす！

「貴様の相手は私だ」

ゼノヴィアは刃のような鋭い眼差しで、敵を睨みつけた。

しかし次の瞬間、背中からコウモリの翼を広げて宙に舞い上がった。少女の足下から、彼女を取り囲むように五本の魔剣が生えたのだ。

悪魔にとって聖剣は天敵。ましてや最強クラスの破壊力を持つデユランダルだ。

しかしドルトーレの心中に、恐れはなかった。

今の攻撃は手加減したものだだったが、それでもゼノヴィアの回避するタイミングやスピードは、かなりギリギリだった。

本気になれば彼は、もっとたくさんの剣をもっと速く創造出来る。決して捉えきれないものではない。

そんな勝算があった。

ゼノヴィアは空中にとどまり、地面から生えた剣と、それを生み出した者を交互に見やった。

「なるほど、木場と同じ能力か……」

「同じではない。奴以上だ」

「ならばこちらも、切り札を使わせてもらおう」

エクス・デュランダルは鞆に納まったまま、その鞆のパーツがスライドして刃を露出させて攻撃する。

しかしゼノヴィアは、何を思ったかデュランダルからその鞆を抜き払った。

「アムド鎧化！」

叫びながら鞆を頭上に放り投げる。

すると鞆が白光を放ちながら小さなパーツに分かれ、ゼノヴィアの体に装着されていく！

光が収まると、両肩、両膝、胸部中央、背面中央、そして眉間。計七ヶ所に宝玉が埋め込まれた全身鎧が、少女の体を包み込んでいた。

エクスカリバー・ミミック擬態の聖剣の能力を利用して、七つのエクスカリバーの加護を剣士に与える鎧へと変化させたのだ。

「木場の……そして貴様等に殺された罪なき者たちの仇、取らせてもらおう！」

聖剣の鎧に身を包んだゼノヴィアは、獅子のごとく唸るデュランダルを振りかぶり、地上のドルトーレ目掛けて突撃していった。

## 王の駒

聖剣の鞘を変化させて形作った鎧をまとい、一直線に飛翔するゼノヴィア。

ドルトールは彼女の頭上に無数の魔剣を生み出して、落下させる。しかし降り注ぐ魔剣の雨は、ことごとくが狙いを外した——否、外された。不可視の力によって、剣の軌道が彼女の体から逸れてしまうのだ。

エクスカリバー・ルーラー 支配の聖剣の力で、自分に向けられる全ての攻撃は狙いが外れるようにしてあるのだ。加えて、エクスカリバー・ブレッシング 祝福の聖剣の力で、ゼノヴィアには幸運も備わっている。飛び道具に対してはほぼ完璧な防御を、この鎧は備えていた。

そして天閃の聖剣によって高まったスピードは、ゼノヴィアを瞬く間にドルトールの懐に飛び込ませていた。

デュランダルが吼えて、横殴りの一刀がドルトールの胴体を真っ二つにせんと唸る。

ドルトールは六本の腕全てに、とにかく耐久性のみをとことん重視した魔剣を生み出して、これ等をもってその一撃を防いだ——つもりだった。

しかし、デュランダルの元々の破壊力に加えて、エクスカリバー・デストラクション 破壊の聖剣の加護によって、ゼノヴィア自身のパワーも上がっている。六本の魔剣はガラス細工のようにたやすく砕かれた。

だがそれでも、聖剣の刃が彼自身の肉体に届くのを、一瞬とはいえ遅らせる事は出来た。

その一瞬の隙に、ドルトールはゼノヴィアの足下に剣を生やしながら、自らも背中中の翼を広げて飛翔して、距離を取った。

そして攻撃の成果を確認するが、ゼノヴィアは全くの無傷だった。地面から伸びる剣と剣の間の空白のスペースに、その身を滑り込ませていたのだ。エクスカリバー・ブレッシング 祝福の聖剣がもたらす幸運があればこそ為せる回避だった。

自身を囲む魔剣の林をデュランダルで薙ぎ払い、ゼノヴィアはドル

トーレと対峙する。

両者の距離は二十メートルほど。

元々騎士<sup>ナイト</sup>として転生してスピードが強化されている上に、今は聖剣の鎧がもたらす神速も得たゼノヴィアにしてみれば、一秒もかからず歩く事すら可能だ。

しかし、敵のどこからでも魔剣を無尽蔵に生成出来る能力は、油断がならない。自分の体から離れた所にも創造出来る上に、その創造のスピードもかなりのものだ。

(木場以上と豪語するだけの事はあるな……)

迂闊に接近戦を挑むと、思わぬカウンターをくらいかねない。

そう判断したゼノヴィアは、デュランダルを真横に振った。

しかし、聖剣からは衝撃波や光刃の類は発射されない。

それでも、デュランダルに対する警戒心故か、ドルトーレは手中に魔剣を創造し、十字に交差させてガードの体勢を取った。

「うおっ!？」

直後、その魔剣に衝撃が走り、彼は後ろにもんどり打って倒れた。見えない刃が飛んできて、剣とぶつかった……そんな手応えだった。

ゼノヴィアは透<sup>エクスカリバー・トランスペアレインシイ</sup>明の聖剣の能力で、デュランダルの光刃を透明化させて放ったのである。

ドルトーレが防御体勢を取ったのは、防護ネットがあると思われる。それでもボールが飛んでくると思わず避けてしまうのと同じ、反射行動によるものだった。だが、それが幸運に働いたのである。

「ならば、これはどう対処する?」

ゼノヴィアはデュランダルを縦横無尽に振り回す。

放たれた光刃は透明化された上、支配<sup>ルイファイ</sup>の力でその軌道を変え、ドルトーレの正面以外の全方位から襲い掛かってきた!

「ぐおおおっ!」

苦悶の叫びを上げて、ドルトーレは六本の腕と両足を切断され、芋虫のような姿になって地面に這いつくばった。

ゼノヴィアはそれを見ても、冷静だった。

彼の行った殺戮行為を考えれば、可哀想だなどとは全く思わない。しかし、ざまあ見ろとばかりに勝ち誇る気持ちもなかった。

残虐非道な敵に対する怒りは確かにあるが、思考はいたって冷静沈着。

そんな精神状態を、エクスカリバー・ナイトメア 鎧を構成する夢幻の聖剣が授けているのだ。対象の精神に働きかけて幻覚を見せる剣だが、その精神に働きかける力が、ゼノヴィアの思考を曇らせる過剰な怒りや敵意を鎮めて、平常心を保たせてくれていた。

チエックメイト  
「詰 みだ」

ゼノヴィアはデュランダルを大上段に振り上げた。身動きの取れない敵を、フルパワーの光刃で完全に消滅させるつもりだ。

「ま、まだだ……まだ俺には、切り札がある！」  
ドルトーレが叫ぶ。

直後、彼を中心とした半径二十メートル圏内に、無数の魔剣が創造された。

翼を広げて宙に舞い上がったゼノヴィアが見下ろす中、魔剣は更に次々と生成されていく。そしてそれ等が集まり、重なり合って、ドルトーレを飲み込みながら、何かを形作っていった。

それは、巨人だった。  
身の丈は十メートルを越すだろう。

無数の魔剣が重なり合って出来た六本腕の巨人、鋼の阿修羅だった。

「ジャンヌの禁手に似ているな……」

ゼノヴィアが思い出したのは、昨年<sup>カオス・ブリゲード</sup>に戦った『禍の団』英雄派の一員である、フレッド・ブラック・スミス 《聖 剣 創造》の使い手だった。

彼女の禁手状態<sup>バランスブレイカー</sup>は、創造した無数の聖剣で巨大な龍を形作るというものであり、今日の前で起こった現象は、その魔剣バージョンであり、巨人バージョンと言えるだろう。

その巨人が、拳を振り上げて殴り掛かってきた。  
デュランダルが唸り、巨拳を打ち払った。

今度は左右から巨大な掌が迫る。蚊やハエのようにゼノヴィアを

叩き潰すつもりだ。

しかしゼノヴィアはこれをかわした。

六本の腕が繰り出す攻撃を蝶のようにヒラリヒラリと避けながら、間合いを詰めていく。

右側下段の腕が放ったストレートパンチを回避して懐に飛び込むと、巨人の腹部を横一文字に切断する。

「何っー！」

驚愕したのは、しかしゼノヴィアの方だった。

切り裂いた胴体が、傷口から生成された魔剣によつて塞がれたのだ。

（再生機能付きか……と、なれば……！）

巨人の体内のどこかに潜んでいるであろう、ドルトーレ本人を直接狙うしかあるまい。

神器の力で生み出された巨人ならば、その神器使いが死ねば消滅するはず……。

だが、再生機能を持つ巨人の体内を、どうやって探す？

「トランスペアレんシィー！」

ゼノヴィアの呼び声に応え、鎧の一部のパーツが外れて、聖剣の姿に戻った。

「ブレッシング！ トランスペアレんシィに力を貸せ！」

命令に応じ、また鎧のパーツが外れて、エクスカリバー・トランスペアレんシィ透明の聖剣に装着される。

ゼノヴィアはその聖剣を掴むや否や、巨人目掛けて投擲した。

巨人はその一投を腕でガードする。腕に刺さった聖剣は、傷口から生えた魔剣の群れに包み込まれ、哀れ巨人の腕の中に飲み込まれてしまふ。

だがゼノヴィアは落ち着いていた。

「トランスペアレんシィ、私に敵の急所を示せ！」

瞬間、巨人の腕が消失した。

いや、消えたのではない。透明化したのだ。

ゼノヴィアの声が届いたのか、はたまた聖剣その物が己れに課せら

れた役割を最初から理解していたのか——聖剣に宿る透明化の力が発動し、更に祝福の能力によってその効果範囲が広げられたのだ。

透明化は腕だけではなく、たちまちの内に巨人の体全体にまで広がり——ゼノヴィアの前に、ドルトローレの姿をさらけ出させた！

「そこか——行くぞ、デユランダール！」

ゼノヴィアの呼び声に、不滅の刃は咆哮と光輝で応えた。

聖なるオーラが、大上段に振り上げられた青い刀身からほとぼしる！

いったいどこにこれだけ溜め込まれていたのかと、見る者が疑問に思うほどの大量のエネルギーが、ゼノヴィアと蒼天を繋ぐ巨大な光の柱となった。

「これで終わりだあああああつ！」

ゼノヴィアは、その巨大な光刃を振り下ろした！

それはたやすくドルトローレを飲み込み、透明化されたままの巨人の体を幹竹割りにした。

敵を切り裂いた時の確かな感触。

いわば勝利の手応え。

それがゼノヴィアの両手に、確かに伝わったのである。

役目を終えた透明<sup>エクスカリバー・トランスペアレインシイ</sup>の聖剣が、透明化を解除したようだ。

虚空から無数の魔剣が現れて、バラバラと道路に撒き散らされている——そして塵となって消滅した。

ゼノヴィアが地上に降り立つと、鎧となって装着されていた聖剣たち、そして巨人に取り込まれた透明と祝福の聖剣も集まって、また元の鞘へと戻った。

ゼノヴィアはその鞘にデユランダールを仕舞おうとした。

デユランダールは唸り声を上げて抗議した。まだ暴れ足りないらしい。

しかし、鞘から笛の音に似た音が発せられると、それも静まった。

(さすがに、エクスカリバーには頭が上がらないのか?)

フツと微笑みを浮かべながら、今度こそゼノヴィアは相棒<sup>デユランダール</sup>を鞘に納めた。

◆  
兵藤邸。

リアスは自室で、グレイフィアと連絡を取っていた。義姉の方からコンタクトを取ってきたのだ。

机の上に広がる小さな魔法陣。その中に、小さなメイドの姿が浮かび上がっていた。

「……ごめんなさい、グレイフィア。私ちよつと耳がおかしくなつたみたい。もう一度言ってくれる？」

『聞き違いではありません。こちらの調査ミスでもありません。オルランドは、王の駒を持っています』

有り得ないわ！

喉元まで出掛かっていた叫びを、リアスはグツと飲み込んだ。

王の駒とは、四大魔王の一人アジュカ・ベルゼブブが開発したキング悪魔の駒の一種。イヴァイル・ヒリス

その名の通り、王——すなわち、眷属を持つ事を許された上級悪魔に与えられるはずだった駒だ。

しかしそれは、製作者であるアジュカ自らの手で禁止された。

危険すぎるのだ。

駒の能力は、単純な強化。しかしその倍率は少なくとも十倍、下手をすると百倍以上にもなる。

それだけの力を得て増長し、現魔王政権に反旗を翻す者が現れるのを防ぐため。

また、眷属悪魔が昇級してこの駒を取り込んだ場合、既に埋め込まれた駒と重複・融合して、どんな影響を及ぼすかわからないため。

そして、元々強すぎる力、あるいは特異な能力の持ち主が使うと、高すぎる強化倍率と相まって、オーバーフローを引き起こし、最悪の場合には命に関わるため。

以上の理由から、アジュカは王のみ登録制にして、駒の使用を禁止したのである。

製造も止められている。そもそもアジュカ本人にしか造れない。

それでも、製造された幾つかがレーティングゲームのトップラン

カーたちの手で非公式に使用されている。

しかし、上級悪魔に昇格せぬままはぐれとなったオルランドに、それを手に入れる事など出来るはずがなかった。

だからリアスは、有り得ないと言い掛けたのだ。

——だが、しかし。

オルランドはあの規格外の戦士ストラダを、真正面から完封してみせたのだ。

昨夜、リアスはそのストラダの口から、オルランドの強さには、ただ悪魔に転生しただけでは説明のつかない「何か」があると告げられていた。

その「何か」が、王の駒による超強化だったなら……？

それならば奴の強さにも納得がいく。

だからリアスは、有り得ないという言葉を飲み込んだのだ。

「いったい、オルランドはどうやって手に入れたの……？」

『彼が殺害した上級悪魔、シユターゼン伯爵から奪った物です』

「……え、ちよつと待つて。シユターゼン伯爵はレーティングゲームでは下位ランカーだったでしょう？ 王の駒を持つているなら、どうして自分に使わなかったの？ そもそも彼は七十二柱でもない——

失礼な言い方だけど——金の力で成り上がった田舎の成金で、駒自体手に入れられるはずが……まさか……」

『そのまさかです』

グレイフィアの横に、一人の男性悪魔の顔写真が浮かび上がった。

『こちらは、七十二柱の一柱、ダンタリオン家の現当主クリムイン・ダンタリオン様です。ダンタリオン家は財政難に陥っていたのですが、そこへシユターゼン伯爵が経済援助を申し出て来ました。そして、その援助の条件が、王の駒の譲渡でした』

リアスは文字通りに頭を抱えた。

王の駒が金で売り買いされていたという事実についていけなかったのだ。

「ま、間違いないの……？」

『アジユカ様自ら家宅捜査に赴いた際に、クリムイン様が自白いたし

ました。シユターゼン伯爵の居城も徹底的に調べましたが、駒は見付かっておりません。ですの……』

「オルランドしかいない、という訳ね……ありがとう」

グレイフィアは一礼すると、映像通信を終わらせた。

リアスは頭を抱えたまま、考え込む。

今町で起きている事件や事故は、オルランドの仲間たちによるものだろう。

では、その目的は何か？

連也との戦いでオルランドが死んでしまい、自暴自棄を起こしたのか？

それは違うだろうと、リアスは考えている。現場と現場とが離れすぎているのだ。そこに、自分たちD×Dの戦力を分散させようという意図を感じる。

では、何故分散させようとするのか？

（私たちの注意を、何かから逸らすため……？　だとしたら、恐らくは負傷したオルランドからよね……）

昨夜、連也から聞いた限りでは、オルランドは本来ならその場で消滅してもおかしくないレベルの念を撃ち込まれたという。

その念に耐えてあの場合から撤退出来たのも、<sup>キング</sup>王の駒の恩恵だろう。<sup>キング</sup>（王の駒の能力は、十倍から百倍以上の強化……強化……筋力、感覚、魔力……）

「魔力？」

思わず口に出た。

上級悪魔ともなれば、自身の魔力で肉体年齢すら操作出来る。現に母ヴェネラナは、リアスの姉でも通じるほどの若さを保っている。

老化した肉体を若い頃にまで再生させているとも言えるだろう。

応用すれば、傷を治す事も出来る。

ひよつとするとオルランドは今、<sup>キング</sup>王の駒で強化された魔力で、連也との戦いで受けたダメージを回復させている最中なのではないだろうか？

はぐれ悪魔たちの行動は、その時間稼ぎなのではないだろうか？

そこまで思考が及んだ瞬間、リアスは出動済みの朱乃とロスヴァイセ、ルフエイの三人に通信を繋いだ。

「朱乃、ロスヴァイセ、ルフエイ！ 超特急で戻ってきて！ オルランドを探すわ！ 手がかかり？ そんなものはないけどルーン魔術とかこつくりさんとかダウジングとかあるでしょう！ とにかく何でもいいから探し出して！」

まずは頭を潰す。

町で暴れているはぐれ悪魔たちも、本丸が攻められたとあればそこへ戻ってくるだろう。そこを一網打尽にする。

そんな作戦が、リアスの頭の中で出来上がっていた。

## 電光石火作戦

駒王神社の本殿内。

照明器具のない室内を、かがり火が薄明かるく照らす。

そんな中で、豊満な肢体を巫女装束で包んだ姫島朱乃が、二体の雛人形と向かい合うように座っていた。

否。

雛人形ではない。

古来より駒王町とその周辺を治めていた土地神である。

今でこそグレモリー家に管理を任せてはいるが、土地の中で起きた事ならば彼等の方がはるかに詳しい。駒王の自然の精気が凝り固まって生まれた土地神は、いわば駒王そのものなのだ。

敵の潜伏先も、彼等なら知っているかも知れない——朱乃はそう考えてコンタクトを取ったのである。

「そやつ等の根城は、香車山の中腹にある廃業したホテルじゃ」

甲高い声で、土地神の石柱がそう答えた。

「そこで恐ろしい魔物が生まれようとしておる。今すぐに向かえば、討ち取るのも容易からう」

「感謝いたします」

朱乃は三つ指をついて深々とお辞儀をした。

「しかし、何じゃな……姫島の。貴様等は口先だけか？」

「我等はそなた等悪魔のような力ある者が土地を守るのが最善じゃと考えた。そなた等も——『ばある』だったか『ぐれもりい』だったか——この土地を守ると約束した。故にこの土地をそなた等に任せたのじゃ」

「しかるに……近年のそなた等の醜態は見るに耐えぬ。守るどころか厄介事を招いてばかりではないか」

「それもそなた等羽根つきどもの内輪揉めと来ておるぞ？」

二柱の土地神は交互に不満を口にする。

彼等からすれば、天使・墮天使・悪魔の三勢力は、みんな同じ『羽根つき』でしかないらしい。

「返す言葉もございません」

朱乃は反論しなかった。

反論出来なかった。

「お二方のお言葉、我が主にもしかと伝えておきます」

「くれぐれも、頼んだぞ」

「我等の判断を後悔させるような事、ゆめゆめなきようにな」

土地神は本殿奥の暗がりには、溶け込むように姿を消していった。

◆

朱乃から報告を受けたリアス・グレモリーは、ルフエイとロスヴァイセに兵藤邸の守りを任せて、朱乃と共に香車山へと向かった。

翼を広げて駒王町の上空を突っ切っていると、壊滅した警察署に向かう途中の連也を見付けた。

リアスは急降下して、少年を後ろから抱き上げる。

「うおっ!? な、何ですか先輩!」

「かくかくしかじか!」

リアスは状況を説明した。

「それはわかったけど、たった二人ですか? 俺入れても三人?」

「いちいちみんなを集めてたら奴等にもこちらの目論見がバレてしまうでしょう? 敵はほぼ全員が町に繰り出してるから、ホテルにいるのはオルランドとその護衛が一人か二人くらいのはずよ。いいから

ついてらっしゃい!」

リアスはピシヤリと言つてのけた。

どの道、空高く抱えあげられている連也には、どうする事も出来なかった。

空路だと、移動時間も短い。

転移魔法陣を使えばもつと早いのだが、魔法陣の反応を敵に察知される恐れがあった。

香車山がすぐに見えてきた。隣町へ続く道路沿いに、古ぼけたビジネスホテルも見える。

そこは廃業後、解体工事中に死亡事故が発生して、それ以降は放置

されている。

そのホテルから、突如オレンジ色の光の矢が十本ほど放たれた！  
リアスと朱乃は散開してこれをかわす。

しかし光矢は空中で弧を描いて旋回し、しつこく彼女たちをつけ狙う。

朱乃が指先から稲妻を発射した。

光矢の群れは、それを意志があるかのようにかわした。

一本が不意に爆発し、まばゆい閃光を周囲に撒き散らす。

リアスと朱乃は、その光の強烈さに、思わず閉じた眼に痛みすら感じた。

直後、残りの矢が分裂した。

一本の矢が、より小さな十本の矢に。

それが九本——計九十本の光矢の弾幕と化して降り注ぐ！

「秋月くん!」

リアスが悲鳴にも近い声を漏らした。

何を思ったか、連也が彼女の腕の中から飛び出して、虚空に躍り出たのだ。

「エヤアツ!」

掛け声も勇ましく木刀『飛龍』を一閃させる。

木刀で打たれた小光矢が、弾かれて他の光矢に当たった。

その光矢がまた別の光矢に当たり、それが更にまた別の光矢を弾き

——九十本の光矢が連鎖反応でことごとく軌道を変えられ、むなしくリアスたちの周囲を通過していくのだった。

連也は——朱乃がキャッチしていた。

光矢はなおも軌道を変えて襲ってくるが、リアスの両手から放射された滅びの魔力で消し飛ばされる。

改めて廃ホテルへ向かおうとする彼女たちを、今度は巨大な鳥のよ  
うな影が襲った。

いや、鳥などという生易しいものではない。

全長十メートルはありそうな巨体には、鱗がびっしりと生えている。

翼はコウモリのそれに似た形をしており、尻尾の先端には鋸状のトゲが付いている。

「ワイバーン!？」

リアスが、思わずその名を叫んだ。

冥界に生息するモンスター的一种……それが何故、人間界の空を飛んでいるのか？

ワイバーンは巨体からは想像もつかない速さで、リアスたちに攻撃を仕掛ける。

脚の爪で。

尻尾の毒針で。

牙で。

飛竜の猛攻に加え、ホテルからオレンジ色の光矢が飛来して来るため、リアスも朱乃も身をかわすのが精一杯だった。

「先輩、俺をあのドラゴン目掛けて投げてください」

連也が朱乃にとんでもない事を言い出す。

「ええ？ で、でもそんな事したら……」

「いーから早く!」

「は、はい!」

声音に有無を言わさぬ迫力を感じて、朱乃はつい従ってしまった。

放り投げられた連也に、ワイバーンの牙が迫る。

連也は飛竜の鼻先に手をつけて、そこを支点に身をひるがえして、攻撃を避ける。

そしてワイバーンの首にまたがり、木刀の柄で鱗に覆われた脳天を打った。

その一撃は、相手の頭部を陥没させる——などというような事はなく、それどころか傷一つ付けていない。

ただ、ワイバーンは一瞬だけ、呆けたように動きを止めた。

「ほら、お前の獲物はあっちだ」

連也が飛竜の角を掴んで、ホテルの方を振り向かせる。

飛竜の眼が、ホテルの屋上でオレンジ色の光で出来た弓矢を構える一人の男の姿を捉えた。

次の瞬間、ワイバーンは翼をはためかせて、その男目掛けて飛翔する。連也を乗せたまま。

「チッー」

屋上の射手は舌打ちして、ワイバーン目掛けて光矢を連射した。

男の名はマンセル。

セイクリッド・ギア スターリング・オレンジ  
神 器 《橙 光 矢》を操る転生悪魔。

しかし彼のかつての主は、より強力な神 セイクリッド・ギア 器の持ち主を転生させるため、彼を殺して体内の駒を回収しようとした。それに反抗したマンセルは主を射殺して逃亡。

その後オルランド眷属の《兵士》ポーンとなったのである。

ふれあい広場で警官を殺害したのもこの男である。

その彼が、何故ここにいるのだろうか？

マンセルの放った矢は、三本がかわされて、四本目が額を貫き、脳を破壊した。

連也の念で操られていたワイバーンは、哀れ屋上をかすめてホテルの向こう側の森に巨体を墜落させた。

乗っていた連也は、いち早く飛び下りていた。

「念道剣、流れ星ー」

槍投げの要領で、マンセル目掛けて木刀を投擲する！ その一投は、名前の通り流星のごとく真っ直ぐに、マンセルの胸を貫いた！

屋上の地面に、転がるように着地する連也。

マンセルは少年に向けて光矢をつがえ……そのまま黒い塵となって消滅した。

連也が木刀を拾い上げると、リアスと朱乃が屋上に舞い降りたのは、ほぼ同時だった。

三人はホテル内へと続くドアを開けて、中に入っていく。

上空から、両手の親指と人差し指で作った枠の中に、その姿を捉える者があった。



「さて、どこから手を着けたものかしら……」

入るなり、リアスはぼやいた。一口にホテルと言っても、人一人を

探すにはなかなか広い。

「俺が探ってみます」

連也はそう言うと、目を閉じた。

二人の少女が見守る中、彼の眉間に光が灯り、徐々に大きく、強く  
なっていく。

霊的な力を司るチャクラだ。

その光点を通して宇宙の理力を吸収して充填した念を、このホテル  
内全域に放射する。

力の性質故か、リアスと朱乃は、思わず身震いした。

数秒の間を置いて、連也は目を開けた。

眉間のチャクラは閉じられ、輝きも失せた。

「一階に、人の気配が一つだけあります」

「行きましょう」

リアスが先頭に立って、ホテルの階段を下りていった。

一階のロビーにたどり着くと、フロントのカウンター前にあるソ  
ファに、ケープを羽織った男が一人、座っていた。やけに大きなサン  
グラスを掛けている。

「ようこそ」

彼は立ち上がり、サングラスを外した。その下から、カメレオンの  
ように隆起した両目が現れる。

「千里眼のクルガン……」

リアスが相手の名を口にする。

「知っていたとは光栄だな」

「ここにいるのは、あなただけ？ オランダはどこにいるの？」

「教える義理はないが、まあ、ここにはいないとだけ言っておこう」

答えるクルガン目掛けて、朱乃が雷光を放つ。

だが稲妻は、彼の手前の空間で、見えない壁にぶつかった。

「君たちが来る事はわかっていたのでね、防御結界を張らせてもらっ  
てある。もちろん、リアス・グレモリーの滅びの魔力をフルパワーで  
撃てば破れるだろうが、その場合、私の命も失われる」

「あら、私たちからすれば、あなたが死んでも別に困らないのだけど」

「そうかね？ 我等が王の居場所を知りたくはないのか？ 私が死ぬば、しらみ潰しに探す事になる。少なくとも、再び居場所を特定するまでの間、駒王町で犠牲者が増えるのは確かだ」

「……なら、質問を変えましょう。あなたたちの目的は何？ 駒王町を覆う結界を破壊したり、いいえ、それ以前から、あなたたちは自分の力を誇示するかのように暴れ回っていたわね」

「はぐれははぐれらしく、ゴキブリのように逃げ隠れしていると言いたいのかね？ それに、答えならすでに君が言ったではないか」

「え？」

「我々は、力を誇示するかのように暴れ回っている、と。正確には『誇示するかのように』ではなく、『誇示している』のだがね。まあ、言ってしまえば営業パフォーマンスといったところだ」

「営、業……？」

言わんとする事がわからず、リアスだけでなく朱乃も首を傾げた。

しかし連也には、おぼろげながら理解出来た。スクラップ置き場の会話を思い出したのだ。

「あんたこの前、世界中の神話勢力がこの国を狙ってるみたいな事言ってたな……ひよっとして、そいつ等に自分たちの腕を売るつもりか？」

「正解」

クルガンはニヤリと笑った。

「顧客は彼等だけではない。人間たちも候補に入れてある。ミサイルや戦闘機よりも安く、それ以上の性能を持つ戦闘集団を使えるとなれば、どこの国でも飛び付いて来るだろう。そして君たちチームD×Dは、人間たちの間でも注目を浴びている。つまり君たちは、我々の強さを知らしめるための試金石という訳だ。悪く言えば踏み台だな」

「わざわざ悪く言わなくてもいいわよ……」

突っ込むリアスの声は、怒りで震えていた。

何の理想も大義も持たない連中によって、自分の治める駒王町が荒らされているのが我慢ならなかった。

クルガンに向けて手をかざすと、滅びの魔力が溢れ出し、禍々しい

輝きを放つ。

「あなたと話す事などもうないわ。消えなさい！」

「仰せのままに」

クルガンは胸に手を当て、嫌みたらしく大袈裟に一礼する。

その足下に魔法陣が浮かび上がり、光を発すると、リアスが充填した滅びの魔力を撃つ前に、彼の姿はその光の中に消えていった。

ポタツと、朱乃の豊満な胸元にしずくが落ちた。

見上げると、天井からだ。しかし、結露してはいない。

天井その物が、液体となって滴り落ちていた！

外から見る者があつたなら、その奇怪な光景に声を上げていただろう。五階建てのビジネスホテルが突如液体となって、崩れ落ちて来たのだ。

ホテルだけではない。

香車山の頂上部までもが、ドロドロの粘液と化して、雪崩となってホテルを飲み込む！

その様を上空から眺めるシエザナの隣に、クルガンは転移魔法陣で姿を現した。

魔時眼まじがんで敵の襲撃を予知した彼は、駒王町からマンセルとシエザナを呼び寄せ、また、召喚術でワイバーンをも呼び出していたのである。

「よくやったシエザナ。あの少年は、少々惜しかったがな」

「可愛い子だったわね。私のお胸で可愛がってあげたかったけど、

……《王》キングを傷付けた罪は、万死に値するわ」

「同感だな」

二人の声は冷たかった。

それほどまでに、彼等の中でオランダの存在は大きいのだ。

山その物が粘液と化した土石流は、そのまま麓まで流れていく——はずだった。

「——!？」

二人のはぐれ悪魔が見守る中、土石流はホテルのあつた辺りで動きを止めた。

そして渦を巻き、巨大な水柱となって天へと昇る。その様はまさに

昇り龍！

「な、何よこれ！」

「これはバズソーを倒した技……逃げるぞシエザナ！」

「ちよつと遅いんだよ！」

クルガンが新たに転移魔法陣を開く前に、水柱の中から連也が躍り出た。

破邪の念で白く輝く木刀がうなり、クルガンの体を幹竹割りに斬割した。

クルガンは黒い塵となって消滅した。

シエザナは恐怖に顔を歪め、背中の翼を広げて逃げようとするが、連也に続くように、水柱からリアスと朱乃も姿を現す。

雷光と滅びの魔力の二重攻撃を浴びて、彼女もまた、跡形もなく消滅した。

リアスは連也を抱き止める。

「助かったわ、連也くん」

「でも、奇襲は空振りに終わっちゃいました……」

「そうね。でも、あの二人を倒せただけでも、収穫はあったわ」

「そうですね。シエザナの能力は、町の中で使われたらもっと厄介でしたし、クルガンのあの眼も充分脅威でしたもの」

朱乃もそう言つて、連也を労う。

最初は、最愛の一誠を木刀で打ち据えた相手として好きになれなかった。しかし彼がいなければ、ホテルと山の大質量からなる土石流に呑み込まれて、リアスが滅びの魔力を放つなり自分が転移魔法陣を開くなりする前に死んでいたかも知れない。死ななかつたとしても、長時間行動不能になっていたのは確かだろう。

それを見事救ってみせた少年に対する印象が、少し変わり始めていた。



香車山から駒王町へと続く道を、一台の救急車が走っていた。

駒王町に入ると、駒王総合病院へと向かう。

そこはすでに、はぐれ悪魔たちの襲撃による怪我人たちが山のように

に運ばれていた。

救急車は搬送口を無視して、まるでそこが本当の出入り口だと言わんばかりに、玄関へと突っ込んだ。

多くの患者や看護師、職員等をタイヤで踏みつけ、車体で壁や柱に押し付けていく。

後部のドアが開き、中から二人の女性が下りてきた。

一人は《僧侶》<sup>レシヨップ</sup>メテオラ。

もう一人は少女だった。聖剣にして転生悪魔、《女王》<sup>クイーン</sup>ドウレンダナ。

運転席から出てきたのは、無数の車を操り警察署を襲った顎髭の男だった。

《兵士》<sup>ボーン</sup>のルドラク。元はハーフヴァンパイアだった。

人間との混血故か、彼には、自分の血を数滴与えるだけで、無生物すら吸血鬼に変えてしまう能力があった。車を操ったのもこの能力によるものだ。

しかし、純血を重んじる吸血鬼社会においては、彼の能力も出生も、疎ましく汚らしいものでしかない。

吸血鬼の里を追放された彼は、放浪の果てにオランダの眷属に入ったのだ。

クルガンからD×Dがホテルを襲うと知らされたメテオラの命により、彼は一台の救急車を乗っ取って吸血鬼に変えて操り、オランダとドウレンダナをホテルから運び出していたのである。

無論、救急車にはオランダの繭が積まれている。

その繭から、細い触手が無数に伸びて、周囲の人間たちの体に突き刺さった。

すると触手にコブが出来た。

コブはスルスルと先端から根本へ移動し、そして繭へと吸い込まれる。

全ての触手に、同様の現象が連続して起きた。

コブを呑み込む度に、繭は脈打つような光を放つ。

ドウレンダナが繭の表面を撫でた。

「こんな所に運んで、どうする気だ？」

ルドラクがメテオラに尋ねる。

「見ればわかるでしょう？ 《王》<sup>キング</sup>への捧げ物よ。人間どもの生命力を捧げれば、王の復活はそれだけ早まるというものだよ」

答えるメテオラの目線は、救急車の中で脈動する繭に注がれていた。

我が子を見守る母親のような、あるいは、恋人を見つめる少女のような、そんな優しい眼差しで……。

## 牙剥く駒王町

列車の脱線事故が起きた駅へと向かっていた一誠。同行していたルフェイがリアスからの緊急呼び出しを受けて離脱したため、レイヴェルと二人で行く事となった。

だが、駅まであと少しという所で、車が飛んできた。まるでミサイルのように一直線に、大型ワンボックスカーが彼等の向かう先から飛んできたのだ。一誠は驚きつつもこれをかわした。しかしレイヴェルはよけずに、炎でこれを蒸発、消し去った。

「やっと来たか。のんびりしたご到着だな」

駅の方角から、ポンチョを風になびかせて一人の男がやって来た。フラフープのように、鉄の車輪を被っている。しかもそれは土星の輪のように宙に浮いており、ただの車輪でない事がわかる。

「しかも赤龍帝か。俺もつくづくラッキーだな。これも日頃の行いか」

「駅で脱線事故が起きたらしいけど、お前がやったのか!? さっきの車も!」

一誠の問いに、男は辺りをキョロキョロ見回しながら言った。

「なんだ? 他に犯人それっぽい奴でもいるのか?」

「何の罪もない人たちを……許さねえ!」

「カリカリするなよ。お前は台風とか地震とかにも同じ事言うのか?」

「どんな奴でも、死ぬ時は死ぬんだよ。それが今日、ここであったっただけだ」

怒りに燃えて《ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手》を顕現させる一誠に、男はそう答える。

「戦う前に、名前くらいは教えておいてやるか。俺は——」

しかし、聞く耳持たぬとばかりに一誠とレイヴェルは動いた。左右に別れて、ドラゴンブラスターとフェニックスの炎を同時に放つ。閃光と業火が二方向から男に迫った。

だが、二人の攻撃は突如猛烈な勢いで回転を始めた車輪によって弾かれる。あらぬ方向へと軌道を逸らされて、周囲の建物に当たった。

「——俺はオルランド様の盾。オルランド様の戦車ルークキルカーン。オルランド様以外の何者も、俺の絶対防御を破る事は出来ん……ましてや、お前等のような馬鹿力の火力馬鹿どもにはな」

「ああ、そうかよー！」

一誠は《赤龍帝の籠手》ブリストッド・ギアから、複数の小さな光の玉を生成した。龍のオーラを圧縮したそれは、狭い場所や市街地での戦闘用の技だった。

「でもそれって、結局一度は破られたって事じゃねーか！ 俺が二人目になってやるよ！」

生成したオーラ光弾が一齐に発射された。それ等は弧を描いて、キルカーンの上下左右、あらゆる方向から襲ってくる。

「お前ごときが、あの御方と同格のつもりか？ 笑わせるぜ」

本当に口元に笑みを浮かべるキルカーン。鉄の車輪が一つから四つに増えて、高速回転する。四つの車輪が、飛来する光弾を全て弾き飛ばし、周囲の建物に穴を空けさせた。

「じゅ、十発とも全部弾きやがった……！」

「九発だ」

「は？」

「弾いて逸らしたのが九発だって言ってるのさ。一発は、そちらのお嬢ちゃんに返しておいた」

「——っ！」

背筋にゾクリと冷たいものが走る。一誠が振り向くと、レイヴェルの胸に風穴が空いていた。

一瞬遅れて、レイヴェルは口から血を吐いて仰向けに倒れた。



塔城小猫とギヤスパーク・ヴラデイは、ふれあい広場へ向かっていた。その道中、サイレンをけたたましく鳴り響かせる消防車とすれ違ふ。大型の水槽を備えたタイプの車両だ。

二人を追い越した赤い車両は、少し先で突如停止した。

どうしたのかといぶかしむ二人の前で、車内に収納されていた放水用のホースが蛇のようにスルスルと飛び出して、二人に水を浴びせ

た。

だが、二人を驚かせたのは水を浴びせられた事でも、ひとりで動いたホースでもない。自分たちに浴びせられた液体の臭いだった。

——それは水ではなく、ガソリンだった。

気付いた瞬間、車体前方の窓から腕が出て来た。指先に灯る光は、魔力の輝きだ。魔力は小さな光点となった。赤熱化して小さな火の玉となったそれが発射される。

ボンツ！

そんな音がして、小猫とギヤスパーは火だるまになった。

消防車は走り去っていく。

これまでそれなりに実戦を経験してきた二人だったが、今は頭が混乱していた。火を消すための消防車が、何故自分たちに火をつけたのか？ その矛盾と、全身を包む炎の熱が、冷静な思考を妨げていた。

そこへ、一陣の烈風が吹き、二人の体を打った。

そしてその風は、まるで薄紙を剥がすように、二人を包む炎だけを吹き飛ばす！

薄れ行く意識の中で小猫とギヤスパーが見たのは、柄巻きを施した木刀を携えた秋月連也の姿だった。

連也は二人の後輩の元に駆け寄る。すぐに消火出来たものの、それでも二人の火傷は軽くはなかった。

「――！」

不意に連也は立ち上がり、木刀を正眼に構えた。

さっきの消防車が戻って来たのだ。

放水用のホースが再び動き出して、ガソリンの激流を放射した。

「エヤアツー！」

連也が木刀『飛龍』で虚空を下から上へと斬り上げると、突如一陣の烈風が巻き起こり、ガソリンを吹き飛ばして、消防車に浴びせ返す。消防車はエンジンを唸らせて発進した。連也を轢き殺す算段のようだ。

これに対して連也、よける素振りも見せない。木刀を八双に構えて迎え撃つ。木刀の刀身が連也の念によって、白く輝き始めた。

「念道劍、巖碎き！」

上段から振り下ろされた一刀！

ほとぼしる白光が刃と化して、迫って来た消防車を真つ二つに切り裂いた！

これも念の力のなせる業か、水槽内に満たされたガソリンまでもが、まるで固体化しているかのように真つ二つに切り分けられて、地面には一滴もこぼれない。

左右に斬割された消防車は、連也たちのいる位置を通り過ぎた後、黒い塵となって消滅した。

連也がその現象を不思議がる暇もなく、今度は救急車がやって来る。

しかし、その救急車を目にした瞬間、連也は眉間にチリチリとした感覚を覚える。それは第六感もたらす警告だった。それに従い、連也は木刀を口に咥えると、小猫とギヤスパアを両脇に抱えて跳躍した。

まさに危機一髪。

跳躍した一瞬の後に、救急車はブレーキも踏まずに彼等のいた地点を通過する。そしてそのまま、近くに止められていた無人の軽自動車に激突した。

着地した連也は、目を疑った。

救急車の前の部分が上下に開いたのだ。そうやって出来た“口”には牙が生えている。

そしてその牙で、軽自動車に獣のように噛みついていった。

軽自動車の白い車体に、血管を思わせる黒い筋がいくつも走る。

救急車が離れると、軽自動車はガクガクと生き物のように激しく痙攣して……ぐるりと連也の方を向いた。

ボンネットがガバツと開くと、そこには牙が並んでいる。

そして獰猛な肉食獣の咆哮めいてエンジンを唸らせた。

(なんで勝手にエンジンかかってんだ……?)

少年の疑問に答える者はいない。

二台の車が、猪のごとく連也目掛けて突撃してきた。

同時に、ではない。動く速さにはズレがある。連也から見て右手の方向から来る軽自動車の方が速い。

そちらが彼を仕留めればそれで良し、叶わずとも、その隙を突いて救急車が襲うという算段だろう。

そう予測しつつも、それでも連也は木刀を八双に構えて、迎え撃つ。よけるといふ選択肢は、ない。彼の後ろには、全身に火傷を負った後輩が二人、未だ意識を失ったままなのだ。

「イイーエヤアッ！」

ボンネットの口を開けて肉薄する軽自動車を、連也は真つ正面から木刀でぶっ叩く！

巨人に踏み潰されたかのように、白い車体はその場でペシャンコに潰れ、黒い塵となつて消滅した。

そして連也は、その上段打ちの反動で、体重など消えてしまったかのように宙に舞い上がっていた。

空中でクルクルと回転し、その遠心力と落下の重力速度を加えた一撃が、救急車に稲妻のごとく炸裂。これもまた消滅させる。

複数の敵を同時に相手取るための技、念道劍ましら猿斬りであった。

しかし、一息つく間もなく、四方八方からエンジン音が響いてきた。大小様々な自動車が、群れをなして姿を見せる。先程の三台同様、運転手の姿は見えない。

——消防車にはルドラクが乗っていたのだが、彼は一度走り去った後、連也の接近に気付いて下車し、他の車を吸血鬼に変えて回っていたのだ。

自分を取り囲む無人自動車が、連也には餓狼の群れに思えた。

連也が小猫とギヤスパーに気遣わしげな視線を送った瞬間、吸血自動車たちが一斉に襲い掛かってきた。

同時に、二つの巨大な光刃が上空から飛来して、吸血車の群れを吹き飛ばす！

「ほら見てゼノヴィア！ やっぱり秋月くんよ！」

「連也、無事か！」

舞い降りたのは、エクソシストの戦闘服に身を包んだ紫藤イリナと

ゼノヴィアだった。それぞれ、手には聖剣オートクレールとエクス・デユランダルを携えている。

「俺よりもあのチビツ子たちの方がヤバイ」

「ひどい……全身大火傷じゃない！」

後輩の惨状に、イリナの声は震えていた。

ゼノヴィアがエクス・デユランダルの能力で治療を試みるが、効果は低い。

「あんた等、空を飛べるんならこの二人をアルジエントさんの——」

——アルジエントさんの所へ超特急で運んでくれ。

そう言おうとした連也の言葉を遮るように、激突音が響いた。

見れば一台の黒い乗用車が、電柱にぶつかつたようだ。

……否。

その乗用車はボンネットを開けて、電柱に噛みついていていた。

電柱の表面に、血管めいて黒い筋がいくつも走る。

直後、電柱がガタガタと震え出した。

「な、何？ 何なの？」

「……待てよ、確かりアス前部長から渡された資料に……」

ゼノヴィアがその資料の内容を思い出している間にも電柱は痙攣を続け、両隣の電柱との間に繋がる電線を引きちぎつた——かと思えば、その電線がちぎれた傷口から火花を散らしながら、鞭のように連也たちに振り下ろされる！

「エヤアツ！」

連也の木刀が唸り、風を巻き起こしてこれを払いのけた。

同時に、石と石をこすり合わせたような不気味な悲鳴が響く。電柱にゼノヴィアの投擲したエクス・デユランダルが突き刺さっていた。そして電柱は、黒い塵となって消滅した。

電柱に噛みついていた黒い乗用車が突っ込んで来たが、これはオートクレールの一閃で、同様に黒い塵と消えた。

「これで確信出来た……これははぐれ悪魔ルドラクの仕業だ……奴は元はハーフヴァンパイアで、自分の血を数滴与えるだけで、無機物を吸血鬼に変える力がある」

ゼノヴィアがエクス・デュランダルを拾いながら言う。

「そういえばそんな事書いてたわね……じゃあさっきの自動車たちも、今の電柱も……?」

「恐らく。吸血鬼は吸血鬼を生み出すからね」

「呑気に言ってる場合じゃないわよ! どうするの!? それってつまり——最悪の場合——文字通りこの町の全部が私たちの敵になるって事じゃない!」

「もう遅いっほいぜ」

つぶやく連也の視線の先を追った二人の聖剣使いたちは、言葉を失った。

線路の敷かれていない、アスファルトで舗装された車道を、五台編成の列車が大蛇のごとく這いずって現れたのだ。

閉めきられたドアや窓に、いくつかの人体が挟まっていた。身動き一つせず、うめき声すら上げない。ルドラクの能力で吸血鬼と化した列車に閉じ込められた乗客たちは、異形の吸血鬼の仲間ではなく、文字通りの餌食にされてしまったのだ。

列車の正面部分がバキバキと音を立てて上下に裂ける。その裂け目からは、血に染まった牙が並んでいた。



匙玄士郎が目を覚ますと、目の前には病院のロビーが見えた。

だが、おかしい。何故か上から見下ろしているかのようなアングルなのだ。

数秒の困惑の後、自分の体が何か粘液のような物で壁に貼り付けられている事に気付いた。

自分だけではない。一緒に行動していた花戒桃や仁村留流子も同様だった。

ロビーの中央には巨大な繭のような物があり、そこから伸びる無数の触手が、周りの人たちに突き刺さり、何かを吸い上げているかのように入っている。

そしてその触手は、自分たちにも刺さっていた……!

(な、何だよこれ……何で俺たち、こんな事に……)

匙はぼんやりとした意識の中で、記憶の糸を手繰り寄せる。

二人と一緒に出勤した彼は、怪しい救急車とすれ違ったのだ。

何が怪しいのかと言えば、やって来た方角だ。香車山の方からその救急車は来たのである。町中のあちこちで怪我人が出て、駒王町内の病院はどこももてんでこ舞いのはずだ。香車山方面なら、山を越えて隣の病院に行った方がまだ受け入れ先もあるだろう。

そう思い、三人でその救急車を追い掛けた。

そして駒王総合病院から、交通事故を思わせる激しい音が聞こえてきたのでそこへ向かう。

しかし、いざ駆けつけてみると事故が起こった様子は何もない。香車山方面から来た救急車が、病院前の駐車場に止まっているだけだ。

では、さっきの音は？

余計に怪しんだ三人は、玄関の自動ドアを叩く音を聞いた。見れば看護師たちが必死の形相で、閉めきられたままの自動ドアを叩いて助けを求めている。

匙たちは反射的に玄関のドアに駆け寄り、自動ドアを開けてやろうと手を触れた――。

(……そうだ、そしたらいきなり物凄い電撃が走って……気を失ったのか……)

そして拘束されたのだと理解した匙は、自分を壁に貼り付けているネバネバを引き剥がそうともがく。しかしそれはゴムのように伸び縮みするものの、ガムのように自分の体にベットリと貼り付いて、まったく剥がれなかった。

「あら、目が覚めたようね」

ふと声を掛けられる。

メテオラがこちらを見上げていた。

「でもおあいにく様。それは馬鹿力では振りほどけないわよ。私は、自分の魔力に様々な性質や属性を持たせる事が出来るの。さっきはこの病院を包む結界に強力な電撃属性を。そして今はその魔力塊に、粘着性と伸縮性を与えてあるわ」

「くっ……このっ……!」

「あらあら、セイクリッド・ギア 神 器を使うつもり？ 無理よ。あなたの可愛いガールフレンドさんたちがどうしてピクリとも動かないか、わからない？」

「――」

匙は改めて仁村と花戒を見る。彼女たちの肌からは生気が失われ、土気色になっていた。

「精気を吸われて、もうセイクリッド・ギア 神 器を発動させるだけの力すら残ってないのよ。あなたは男の子だからあの娘たちよりは活力も有り余ってるみたいだけど、それも時間の問題ね――あんな幻覚にまんまと騙されるなんて、ホント子供って単純で可愛いわ」

玄関のドアを叩く看護師たちは、この女が見せた幻影魔法だったのだ。そしてさつき言っていた電撃属性の結界に、自分たちは触れてしまったらしい。

しかしそれがわかったところで、どうにもならなかった。メテオラの言う通り、もはや匙にはセイクリッド・ギア 神 器を発動させるだけの力はない。

「き、きたねえぞ……！」

「だってしょうがないじゃない。戦えば勝ち目はないんだもの。だったら、戦わなければいいだけ。ただ狩るだけなら、やり方なんていくらでもあるわ。あなたたち人間だって、動物を狩る時には武器を持つし、罾も仕掛ければ毒だって使うでしょう？――あら、失礼。あなたたちはもう人間じゃなくて悪魔だったわね」

メテオラはクスクスと笑うと、繭のそばに歩み寄り、愛おし気にその表面を撫でた。

「安心なさい、坊や。あなたの他の仲間も、この町の人間どもも、すぐにあなたと同じあの世に送ってあげるわ――キング 王が復活した暁には、ね」

肩越しに匙へと告げるメテオラ。その頬にはかすかな赤みが差している。

三人の転生悪魔の生命力を吸収したためか、繭の中で鼓動が早まっている。院内の人間の生命力を全て吸収させれば、復活の時は更に早まるだろう。そんな確信が、彼女を高揚させていた。

ドウレンダナもそれがわかって安心しているのか、窓際のソファに座って絵本を黙々と読んでいる。

匙は愛する人の厳しい顔を思い浮かべながら、無念の内に再び意識を失った――。

## 魔劍豪、再臨

五台編成の長大な巨体が、大蛇のごとく連也たち三人に襲い掛かる。

散開してその突撃をかわす三人。

「吸血鬼のくせになんでこんな明るいうちから動けるのよ!」

小猫を抱え、天使の白翼を羽ばたかせて宙に逃げながら、イリナは叫ぶ。今はようやく正午になろうという辺りだ。吸血鬼にとっては最も苦手な時間帯であろう。

普通の吸血鬼ならば。

「ルドラクは父親がデイウオーカーで、奴もその特質を受け継いでいる」

答えたのは、ギヤスパーを抱えて飛ぶゼノヴィアだ。

デイウオーカーとはその名の通り、昼日中でも活動可能な吸血鬼の事を指す。

「そしてその特質は、奴の生み出す吸血鬼にも受け継がれる。資料に書いてあっただろうが!」

「そ、そうだったかしら?」

「貴様、リアス前部長がちゃんと目を通しておけとあれほど言っただろう!」

「ご、ごめんなさ〜い! 途中で眠くなっちゃって、最後まで読んでないのぉ〜!」

「ええい、なんでこんなのがオートクレールを使えるんだ! 謝れ、騎士オリヴィエに謝れツツ!!」

ゼノヴィアはあきれのしかなかった。

そんな凸凹漫才を演じながらも、吸血列車の攻撃はちゃんとかわしているのだから大したものではあるが……。

「えやあつー!」

連也が木刀を振るい、吸血列車の三両目の胴を打った。空中の二人を執拗に狙っていた列車は、その一撃で巨体をくの字に曲げて倒れる。

「今のうちにそいつ等をアルジエントさんの所に連れていけ！」

「でもこいつは!? まさか秋月くん一人で相手するつもり!?」

「そうだよ、わかったら早く行け! こうしてお喋りしてる間もそいつ等は弱っていくんだぞー!」

「そ、それもそうね……オツケー、超特急で戻るから!」

「連也、くれぐれも無理はするな!」

イリナとゼノヴィアは言い残して、その場から飛び去って行った。

二人の下級生をゼノヴィアとイリナに任せ、連也は一人、吸血鬼と化した列車と対峙した。

下段に構えた木刀『飛龍』から、念の光が溢れ出し、陽炎めいてゆらゆらと揺らめく。

吸血列車はその白き輝きに一瞬ひるんだが、すぐに攻撃に移った。本物の蛇がそうするように自身の身体を縮めるや否や、連也目掛けて首を伸ばしたのだ。先頭の裂け目が変化した大口が、連也を噛み砕こうと牙を剥く。

連也、これを左にかわしつつ、車体側面を斬り上げた。木刀は金属製の車体に易々と大きな裂け目を作り出す。そこから破邪の念が浸透していき、吸血列車を黒い塵へと変えて消滅させる——先頭車両のみを。

なんと吸血列車は、攻撃を受けた瞬間に素早く先頭車両を切り離していた。そして二両目が新たな頭部へと変型して、再度連也に襲い掛かる。

その噛みつき攻撃をかわした連也は、木刀に体内で練り上げた念を送り込んだ。『飛龍』は光輝を高めていき、白い炎と化する。

「念道剣、百歩斬り!」

白炎となった木刀を真横に振り抜くと、念が光の刃となって飛翔する。

高速で飛来した光刃をかわせず、吸血列車は二枚下ろしに両断され、黒い塵となって消滅した。

それを確認して息をついた連也。

その首筋に、痛みが走った! 二本の牙が頸動脈に深々と食い込ん

でいる！

ルドラクが忍び寄り、襲い掛かったのだ。連也が自分の作った吸血鬼との戦いで隙を見せるのを待っていたのだ。

ルドラクは連也から飛び退き、距離を置いて向かい合う。そして首筋を押さえる少年を見て、ニヤリと笑った。

勝利を確信した笑みだった。

「終わりだ。たった今、お前の体内に俺の吸血鬼のエキスを流し込んだ。俺は自分の血を分け与える事で無機物を吸血鬼に変える事が出来る。そして他の吸血鬼と同様に、この牙から出るエキスを注入する事で生物を吸血鬼に変える事も出来るのさ」

勝利を確信した余裕か、説明しながら、自分の口から伸びる二本の牙を指で指し示した。

連也が、ガクツとその場に片膝をつき、座り込む。それを見てルドラクの顔はますます歓喜に歪んだ。

「ハツハツハツ！ 早速変異<sup>アルタード</sup>シヨックが始まったようだな！ お前の身体は今、急速に吸血鬼へと内側から造り替えられている真つ最中だ！ その苦しみは副作用さ！ だがそれもすぐに治まる……そして、俺の忠実なしもべとしての新たな人生が幕を開けるって訳だ！」

ルドラクが解説する中、連也は地面に手をついてうずくまる。顔からは大量の汗をかき、呼吸も荒い。

そして、それから更に数秒もすると、ピクリとも動かなくなってしまう……。

「終わったようだな」

ルドラクは連也のそばに歩み寄る。

「立て。これから町の人間どもを片っ端から捕まえにいくぞ。そして王復活のための生け贄<sup>キング</sup>として捧げる」

「はい、ルドラ、ク、様……」

ああ、連也は完全に吸血鬼と化したのか？ ルドラクの命令に、たどたどしくも答える。

「捕まえ、た、人間は、どこに、運べ、ば……」

「駒王総合病院だ。そこで王は復活の時を待ち続けている」

「——ありがとうございます」

不意に返ってきた軽い返事にルドラクが耳を疑う前に、連也の木刀がその名のごとくひるがえった！ 下から上へと稲妻めいて走る一刀が、ルドラクの身体を真っ二つに斬割する！

事態が飲み込めず、呆けた顔のまま、ルドラクは黒い塵となって消えた。

連也は、近くに潜むルドラクの気配にとっくに気付いていたのだ。彼が吸血鬼である事はリアスから渡された資料でわかっていた。だから吸血鬼対策を、自身の肉体に施していたのだ。

それは練り上げた破邪の念を、自身の血液に宿らせて全身に循環させる事だ。吸血鬼が彼の血を吸えば、宿った念で自らの身を焼かれる。吸血鬼のエキスとやらも、注入されたその瞬間には浄化されてしまっていた。

それっぽい芝居で相手を油断させる作戦だったが、それが予想以上の収穫をもたらしてくれた。

「総合病院、か……」

連也はジャージのポケットから携帯電話を取り出すと、今得た情報をリアスにメールで伝えた。

◆  
そして自分も駒王総合病院へ向かった。

「レイヴェル！」

一誠は倒れたレイヴェルに駆け寄る。

金髪の少女は、自らの体から噴き出した炎に包まれたかと思うと、胸の穴がたちどころに塞がり、何事もなかったかのように起き上がった。

「ほおー。噂には聞いてたが、こうして目の当たりにすると、何とも凄いな」

その再生シーンを見て、キルカーンは戦闘中とは思えない呑気な声を上げる。

その余裕綽々の態度に、一誠は苛立ちを覚えた。

『《護法輪》……持ち主が変わっても、その防御力は健在か』

そんな彼の左腕から、声がした。神器に宿る赤龍帝ドライブだ。

「ドライブ、お前あの輪つかの事知ってるのか？」

『ああ。四百年前、別の所有者が使うあの神器と戦った事がある。その時の赤龍帝の覇龍での攻撃すら防ぎきった……俺の、数少ない敗北の記憶の一つだ』

「……じゃあ、その時の先輩の仇、ここで取らせてもらおうとするか！」

一誠は鎧の背部に備わる推進器官から噴炎を上げながら、キルカーン目掛けて突撃していく。

キルカーンは自らの神器を回転させ、防御の姿勢を取った。

「無駄だあつー！」

『penetrator!』

一誠が放つ右ストレートに合わせて、ドライブが詠唱する。

ドライブには複数の能力がある。

《倍加》と《譲渡》。神器の機能としても作用する

そしてこれは、それとは別の能力である《透過》。あらゆる防御も障害も、この能力ならすり抜けられる。

四百年前は使えなかったが、一誠との絆の果てに取り戻したこの能力ならば雪辱も果たせる——はずだった。

「なっ!?!」

一誠が間の抜けた声を上げる。

右拳は高速回転する車輪をすり抜け、キルカーンの肉体に突き刺さるはずだった。

だが、《透過》の力を宿したはずの一撃は、車輪に触れた瞬間、それまでの攻撃と同様に弾かれ、軌道を逸らしたのだ!

パンチを左に受け流され、一誠は突撃の勢いそのままに吹っ飛んで、その先の建物の壁に頭から突き刺さった。

「確かに無駄だったな」

キルカーンはクスクスと笑った。

「俺の神器の名は『御守りの車輪』。ただ回転して弾くだけじゃない。おおかた何でもすり抜ける《透過》とかいう能力でも使ったんだろうが、この車輪はそういった力だけでなく、目に見えない呪いだって弾

く。外からの干渉に対してなら、絶対無敵なのさ……我が王以外にはな

「く、調子に乗りやがって……さっきも言ったけどな、それって結局、一度は破られてるって事じゃねーか！」

「そうさ」

一誠の指摘を、キルカーンはあっさりとは肯定した。

「王はこの車輪と車輪のわずかな隙間を正確に狙って、一太刀浴びせた。動きの速さと無駄のなさに、俺は何の反応も出来ず、気が付くとやられていた。」

豪快無比なパワーと、それをミリ単位でコントロールする精妙な技術。それをあのお方は持つておられる。

ただデカい力をぶつけるだけのお前たちとは、鍛え方が違う、格が違う、ものが違う」

その時の事を思い出したのか、彼の声には陶醉にも似た色かにじみ出ていた。

だがそれも束の間、スツと手を振ると、周辺の瓦礫や石、ガラス片等が一斉に宙に浮き上がる。魔力による物体操作だ。そしてそうやって浮かび上がらせた様々な物を、未だ回転し続ける己れの車輪へと引き寄せる。

「——っ！ レイヴェル、伏せろおーっ！」

一誠は顔の前で両腕を交差させて防御体勢を取りつつ叫んだ。

レイヴェルも敵の意図を察して、伏せながら全身を超高熱の炎で包み、バリアとする。

車輪の回転に弾かれて、瓦礫が、石が、ガラス片が、高速弾となって飛んできた。

ただデタラメにばらまいているのではない。一誠とレイヴェルの二人に向けて、正確に飛ばしている。鎧に防がれ、炎で蒸発させられ、ダメージこそ与えられなかったが……。

「王と出会う前もかなり練習してたが、あのお方の眷属に迎えられてからは更に精進してな。こういう事も出来るようになった。」

お前はどうか、赤龍帝。その鎧にはヒーロー番組のビックリどつき

りメカ並みにいろんな機能があるようだが、果たしてこの俺の絶対防御を破るような都合のいい能力はあるか？

——言っておくが俺は、まだバランス・ブレイク禁手化していないぞ？」

キルカーンの最後の言葉に、一誠とレイヴェルは言葉を失った。

通常形態であんなら、バランス・ブレイク禁手化したらどうなってしまうのか……

過去の所有者がジャガーノート・ドライブ覇龍での攻撃にも耐えたというドライブの言葉に、嫌でも説得力が出てくる。

「ど、ドライブ……何か方法はないのかよ？」

『——あるけどない』

「どっちだよ！」

『クリムゾン・ブラスターやロンギヌス・スマツシャーなら、あるいは奴の防御の上から潰せるだろう。だが、それではお前たちも困るだろう？』

相棒の言葉に、一誠は黙るしかなかった。

どう控えめに考えても、駒王町の半分以上が更地となってしま……。

「打つ手なしだつて言うのかよ……」

ドラゴンショットは弾かれるどころか打ち返される。

《透過》の力を使つての格闘戦も、《透過》自体が弾かれる。

ウエルシュ・ソニックブー・ナイト龍星の騎士にプロモーションして攻撃しても、奴の車輪の操作技術をもってすれば、恐らく防がれる。

「どうした赤龍帝。やる事がないならお家に帰って宿題でもするか？」

攻略法が思い浮かばず立ち尽くす一誠たちを、キルカーンは挑発する。

不意にその肩がポンポンと叩かれた。

思わず振り返ると、いたのは一人の女。

黒い髪と豊満な胸、白い肌をした、金色の目をした女だ。黒い着物をだらしなく着崩して、胸の谷間を強調している。

頭頂部からは、黒い猫耳が生えていた。

その女の事をキルカーンが思い出す前に、女の顔がグツと近付い

て、彼の唇に自分の唇を重ねてきた。

「——っ！」

キルカーンはビクツと身をすくませる。

集中力を欠いたのか、《タリスマン、ホイール護法輪》が消えた。

「あんた、運がいいわね。人生最後のキスの相手が私だなんてさ」

女はそう言い残し、一誠の方へとコトコと歩き出す。

「く、黒歌……？」

「スイツチ姫から連絡あったわよ。オルランドは駒王総合病院。大至急向かうようにだつてさ」

「で、でも、アイツは」

「もう死んだわ」

黒歌が言い終わらぬ内に、キルカーンの上半身が突然、270度近くねじ曲がった。

手足の関節の一つ一つが、デタラメな方向に曲がり、可動域を越えて骨が折れる音や靱帯のちぎれる音が、生々しく一誠たちの耳に響く。

腰が180度折れ曲がり、キルカーンは身体を支えきれず倒れる。

首が360度回転した。

バキバキと胸骨を突き破って心臓が飛び出る。鼓動のリズムはメチャクチャで、すぐに自身のその激しい動きに耐えきれずに張り裂け、吹き出た鮮血がキルカーンの死体を赤く染めた。

「な、何だあれ……」

「気配を消して近付いて——あの輪つかは危ないからその下をくぐつて——で、口づけを介して仙術で気脈を操作して、アイツの筋力を暴走させたのよ」

黒歌は何て事なさそうに、普通に解説した。

「外からの干渉には強いけど、内側からの干渉には弱かったみたいね」  
「で、でも、何もあそこまでなさる事もなかったのでは……」

「そーお？」

レイヴェルに言われて、黒歌はクルリとキルカーンの方を振り向いた。

巨人の手で捏ね繰り回されたような、無惨な死体だ。

黒歌はそれを見て、興味なさげに肩をすくめた。

「今までアイツが仲間と一緒に殺した数を考えれば、ま、あんなもんでしょ？」



駒王総合病院。

リアスと朱乃、ロスヴァイセとルフエイ、そしてアーシアの  
トワイライト・ヒーリング  
《聖母の微笑み》で回復した木場祐斗が、そこにたどり着いていた。

「……遅かったようね」

到着するや否や、リアスはつぶやいた。

静かすぎる。

無人の静けさだ。それも、ただ院内の全ての人間が避難したからと  
いうような感じではない。

リアスは眼前の病院から、死だけがもたらす事の出来る冷たい静寂  
を感じ取っていた。

たおやかな白い手の中に、滅びの魔力を充填し始める。

「朱乃、ロスヴァイセ。フルパワーで攻撃するわ。祐斗とルフエイは  
周囲の警戒。病院から何か出て来たら、それも逃さないようにね——  
生死は問わないわ」

「ですがリアス様。匙くんたちがここに捕らえられている可能性も  
……」

祐斗は聖魔剣を創造しながら言う。匙たち三人と連絡が取れなくな  
ったと、ここに向かう前にソーナから報告を受けていたのだ。

普段は『リアス姉さん』と呼ぶよう心掛けているが、今はグレモリー  
眷属としての任務中だ。故に『リアス様』呼びである。

「わかってるわよ」

答えるリアスの声は、かすかに震えていた。

「だけど、オルランドを逃せば被害は広がる一方よ。町に散らばった  
眷属たちはイツセーたちがやつつけてくれるでしょうけれど、肝心の  
オルランドを逃してしまったら、奴は新たな仲間を引き連れて復讐に  
やって来るに違いないわ。」

何よりも、奴は私たち悪魔の最大の天敵である聖剣使い……それも、剣士・聖剣どちらも最強クラスのね」

リアスはストラードの言葉と、彼が昨日受けた傷を思い出していた。

あの規格外の戦士をして『最高の剣士』と言わしめ、実際に死んでもおかしくない重傷を負わせた男。

それだけで、危険視するには充分過ぎた。

たとえ祐斗の危惧した通りだったとしても、それでも確実に倒しておかなくてはならない。

ソーナには一生恨まれ、憎まれるだろう。しかし――、

(それも仕事の内よね……)

駒王町を預かる身として、受け入れるしかない、リアスは半ば諦めていた。

「朱乃、ロスヴァイセ、やるわよ。少しでも手加減したら、私が許さないわ！」

二人に発破を掛け、リアスは病院に向けて、滅びの魔力を全開で放った。

朱乃とロスヴァイセも、彼女の意を汲み、全力で攻撃した。

雷光龍と各種攻撃魔法の一斉射。

しかし三人の攻撃は、建物全体を覆う魔力の壁に防がれた。防御结界が張られているのだ。

「構わず撃ち続けて！　いつまでも耐えられるものではないはずよ！」

リアスは命令しながら、魔力を放射し続けた。

果敢な攻撃は、病院の中に振動を響かせる。

メテオラは眉根を寄せた。

「……使えないクスどもね」

院内の最後の人間である、足の怪我で入院中だった小学生の男の子に向かって、憎々しげに言い捨てた。

その男の子は、繭から伸びる触手に生命力を根こそぎ吸い取られて、すでに息絶え、ロビーの絨毯の上に倒れている。

病院内の全ての人間の生気を吸い取らせても、それでもオルランドは復活の気配を見せない。

ルドラクに生け贄の補充を命じたものの、どうやらチームD×Dが攻めてきたらしい。これでは無意味だ。

「あと一人、せめてあと一人分の命さえあれば……」

振動は少しずつ大きくなっている。結界が破られつつあるのだ。このままD×Dの突入を許せばどうなるか、考えるまでもない。

メテオラは、繭に寄り添うドウレンダナの方をチラリと見た。

目線に気付いて、ドウレンダナも見返す。

「……女王<sup>クイーン</sup>。王<sup>キング</sup>の事、何とぞお頼み申し上げます」

言うや否や、繭から伸びる触手を自分の胸に突き刺した。

繭はそれを己れの眷属と知ってか、知らずか……その生命力をどんどん吸収していく。

「ああ……私の命が、王<sup>キング</sup>と一つに……う……嬉しい……!」

メテオラの顔に、しかし恐怖は全くなかった。頬は赤く染まり、恍惚としている。

ロビーの壁に亀裂が走った。結界はもはや崩壊寸前だ。

その時、繭が光り始めた。

ロビーの中が光輝に満たされていく中、一本の腕がドウレンダナに差し出される。

ドウレンダナはその大きくたくましい手を、両手で握った。

そして次の瞬間、病院内部から巨大な閃光がほとぼしり、結界もろともに建物を吹き飛ばした。

真ん前にいたりアスたちは、爆風で吹き飛ばされる。

起き上がったリアスは、目の前の光景に総毛立った。

オルランドが、そこにいた。

天を指す右手には、魔聖剣ドウレンダナ。

左腕で、メテオラを抱き抱えている。

「お帰りなさいませ……オルランド様……」

メテオラの声はかすれていた。

「……お前たちのおかげだ。メテオラ、お前は最高の女だった」

オルランドは眷属に優しくささやき、口づけを交わす。

王の腕の中で、生命力を捧げ尽くしたメテオラは灰になって消え、後には僧侶ビショップの駒だけが残った。

その駒を握り締め、ズボンのポケットにしまうと、オルランドはリアスたちに鋭い眼差しを向ける。

「さて、始めるか……皆殺しだ」

完全なる殺意は、もはや感情と呼べるものではない、それ以上の冷徹なる意思。

オルランドは静かに、その完全なる殺意に燃えていた――。

## 念道烈風（前編）

白い光が地に走った。まるで太陽が地上に落ちてきたかのような、激しい光が。

その光は熱と衝撃波をともなって、辺り一帯を薙ぎ払う。その光の中から、リアス・グレモリーたちが吹き飛ばされて来た。着衣のあちこちが破れ、あらわになった肌には火傷の痕が痛々しく覗いている。

全員が、光の中心を驚愕の眼差しで見据えた。白光の奔流の収まった後から、魔聖剣ドウレンダナを携えたオルランドが、悠然たる足取りで近付いて来る。

「可哀想にな……今ので死んでいた方が、まだ楽だったんだが……」彼の言葉に、誰も言い返す余裕はなかった。

先ほどオルランドが魔聖剣から放射した聖なる光の波動は、祐斗が創造した龍騎士の一団が盾となって防いでくれた。龍騎士たちは結果瞬く間に跡形もなく消え去り、守られたはずのリアスたちは無傷では済まなかった。悪魔ではないルフエイですらダメージを負っているくらいだ。

今の一撃だけで、聖剣使いが自分たち悪魔にとってどれほど恐ろしい存在か、改めて思い知ったのである。

「散開して、各自攻撃——フレンドリーファイアは気にしないで全力でやりなさい！」

リアスは指示をするなり、背中から翼を広げてオルランドの頭上に舞い上が——れなかった。

足が地面から離れるより速く、オルランドが間合いを詰めてドウレンダナで刺突を放ったのだ。

魔聖剣の切っ先はリアスの心臓目掛けて正確に、閃光となって走る。

それを紙一重でくい止めたのは、ロスヴァイセとルフエイが同時に遠隔展開した、魔法による防御障壁だった。二重に重なったそれが、致命的な一撃を一瞬だけ受け止め、しかしガラス細工のように碎かれ

る。それでも、リアスが距離を取るだけの時間を稼いでくれた。

二人の魔法使いはすかさず攻撃に入る。炎が、稲妻が、光が、弾幕となってオルランドに襲い掛かる。朱乃の雷光龍やリアスの滅びの魔力もそれに加わる。

「ふん……貧弱貧弱……」

オルランドはつまらなそうにつぶやき、魔聖剣を振るった。

爆発的な白光が嵐のごとく吹き荒れ、四方八方から迫る攻撃を全て掻き消した。

そこへ聖剣で武装した祐斗と龍騎士団が一齐に攻撃を仕掛けるが、オルランドはそれを紙一重で全て見切っていた。

祐斗の視界を白い光線が縦横無尽にほとばしったかと思うや、龍騎士団がごとく薙ぎ払われた。

とつさに聖剣で正中線を守った祐斗は、その盾に使った剣に凄まじい衝撃を受けて吹き飛ばされる。聖剣は刀身の半ばから折られ、少年の胸には一文字に刀傷が走っていた。

「う、くっ……い！」

傷口から全身に、熱と倦怠感が広がっていき、祐斗はその場に片膝をついた。

そこへオルランドが歩み寄り、首筋目掛けてドウレンダナを振り下ろす！

ガキインツ！

しかし横から赤い閃光が走って、金属音を響かせて魔聖剣を受け止めた。それは真紅の鎧だった。一誠が助けに入ったのだ。

レイヴェルも一緒だった。黒歌は——途中まで一緒だったのだが、いつの間にか姿を消していた。

「俺が相手だ！」

一誠は魔聖剣を払いのけて猛速の拳打を繰り出す。

その勇姿に、祐斗は安心感を覚えた。今の一誠の鎧は、背中から翼を生やした真『女王』——カーディナル・クリムゾン・プロモーション真紅の赫龍帝だ。龍神化を除けば一

誠の主力形態であり、最強の姿と言える。恐らくここに来る途中で変身しておいたのだろう。

繰り出される打撃の一つ一つに、『騎士』の速さと『戦車』の重さが兼ね備わっていた。

しかしオルランドはドウレンダナで、真紅の鉄拳の弾幕を軽々と受け流した。

左右からのフックを打ち払い、がら空きになった胴体へ刺突を繰り出す。

「させるかー」

一誠は背中の中の翼の中に収納していた砲身を展開、威力を抑えた光弾を連射した。

オルランドはカウンター気味に放たれたこの光弾を魔聖剣で軽々と打ち払う。威力を抑えているとはいえ、対人戦闘には充分すぎるほどの攻撃力が秘められていたのにだ。

「だったら——」

『Blade!』

一誠は左手に収納されているアスカロンを展開する。

そして翼を広げ、全身に備わる推進器官から噴炎を上げて——消えた。

同時にその姿は、オルランドの背後に現れていた。

真『女王』のスピードで敵の死角に回り込めた一誠は、左拳から伸びる聖剣の刃を背中に突き立てんとしたが、ドウレンダナの幅広の刃が盾となって、その攻撃を防いだ。

次の瞬間、刀身から放射された白光の奔流が、一誠を吹き飛ばした。

「くそ、マジかよ……」

まさか真『女王』のスピードが見切られるとは……信じがたい現実  
に、一誠はうめいた。

彼の目の前で、オルランドはドウレンダナを逆手に持ち直し、何を思ったか地面に突き立てる。

一瞬の間を置いて、大地が唸り、アスファルトの地面がオルランドを中心に四方八方にひび割れ、周囲360度全てが聖なる光の大噴火によって吹き飛んだ。

白光の大噴出は一誠やリアスたちをことごとく呑み込み、そして消

えた。

赤龍帝の鎧に守られていた一誠だったが、それでもダメージはあった。

リアスたちも、聖なる光の衝撃と、爆発に巻き上げられ降り注ぐ瓦礫の雨によつて、大きなダメージを受け、動けなくなっていた。

度重なる轟音と閃光に、近隣の住民や警察官などが様子を見に集まって来る。

「そう言えば、昨日から何も食ってなかったな……ちようどいい」

オルランドは彼等に視線をやると、魔聖剣を真横に振った。

長大な光刃が飛翔して、民衆の身体を真つ二つに両断し、血と臓物を地面にぶちまけた。

見るも無惨な屍となった人間たちから、何やら白い煙のような物が立ち上る。

オルランドが口を開けると、その無数の煙がたちどころに吸い込まれていった。

「ふう……」

満足そうに溜め息をつくオルランド。彼の魔力が、途端に量と密度を増し、充実していくのを一誠は感じ取った。

(こ、こいつまさか……人間の魂を、食ったのか……?)

リアスや朱乃も同じように推測した。

朱乃は土地神が言っていた『恐ろしい魔物が生まれようとしている』という言葉を思い出し、身震いした。

腹ごしらえを済ませると、オルランドは一誠にトドメを刺さんと歩を進める。

しかしそこに、三つの影が立ちはだかった。

秋月連也、そしてゼノヴィアとイリナの三人。

ゼノヴィアは七つのエクスカリバーを変型させた鎧を装着していた。

「ほう……また会えたな。昨日の続きといくか」

オルランドは連也の姿を視界の中心に据えて、殺意を多分に含んだ笑みを浮かべた。

「いいぜ。ただし、ここで完全に終わらせる！」

連也は木刀を八双に構えて、正面から打ち掛かった。

同時にゼノヴィアとイリナも、左右から聖剣を振るう。

オルランドは魔聖剣を地面に突き立て、聖なる白光の間欠泉を噴き上げて連也とイリナを吹き飛ばした。

ゼノヴィアだけは、聖剣の鎧の加護によつてダメージを免れていた。二人には敢えて構わず、デュランダルで斬り掛かる。

ドウレンダナがその獰猛な一撃を受け止めた。

「デュランダルか……つまりお前がお師さんの後を継いだって訳だ。ふん、なかなか可愛らしいお嬢さんじゃあないか」

「そうだ。だからその私が、猊下に代わつて貴様を断罪する！」

「出来ない事は口にしない方がいいぞ？」

オルランドがドウレンダナを振り抜くと、ゼノヴィアは軽々と弾き飛ばされた。

「デュランダル！」

主の呼び声に應えて、デュランダルは雄叫びを上げる。青い刀身が閃いて、長さ3メートルはある光刃が二つ、十字架クルスとなつて発射された。

「少し稽古をつけてやれ、ドウレンダナ！」

魔聖剣もまた、主の呼び掛けに咆哮で応え、光を放つ。それは巨大な矢となつて、迫る光の十字架を打ち砕いた。

オルランドはすかさず魔聖剣を左に振った。そこにはすでにゼノヴィアが回り込んでおり、二つの聖剣が再度刃と刃をぶつけ合う。

金属音と咆哮を鳴り響かせて、激しい剣劇が繰り広げられた。

そこヘイリナと連也も加わるが、オルランドは三人が別々のタイミングで別々の方向から放つ攻撃を、軽々と捌く。

「無駄無駄無駄無駄無駄あつ！」

そしてドウレンダナの白光をまとつた一撃で、ついには三人ともまとめて吹き飛ばされてしまった。

「まずは一匹」

オルランドは連也に向けて魔聖剣を振るつた。

白い光刃が、大地を深々と切り裂きながら少年に迫る。そのスピードに、連也はかわせないと判断して受けに回った。

木刀『飛龍』が破邪の念で白く輝き、光刃を受け止める。だが、魔聖剣の光刃は止まらなかった。

二つの白光がぶつかり合い、火花を散らし、辺り一帯をまばゆい白に染め上げていく。

連也の目に、信じられない光景が映った。

木刀が——代々の念道家の念を宿した『飛龍』が、ひび割れ始めたのだ。

亀裂はたちまちの内に大きくなり、刀身全体に広がって、ついには砕けて散った！

連也の胸部が深々と切り裂かれ、鮮血が噴き上がる。

そして連也は、魔聖剣が大地に刻んだ亀裂の中へと落ちていった。

「連也！」

「秋月くん！」

ゼノヴィアとイリナが駆け寄り、地割れを覗き込む。

だがその奥は暗く、連也の姿は見えなかった……。

「悲しむ事はない。すぐにお前たちも後を追わせてやる」

そう言って歩み寄るオルランドに、二人の少女は憤怒の形相で聖剣を振るい、斬り掛かった。

だがその激しい怒りを以てしても、実力差を埋めるには至らなかった。

エクスカリバーの加護によるゼノヴィアの神速すら、オルランドは易々と見切っているのだ。

しかしそれでも、二人は果敢に戦った。

オルランドの背後に希望を見出だしていたのだ。

それはリアスと朱乃。

そして彼女たちと手を繋ぐ一誠。

限界まで倍加した力を二人に譲渡し、強化された滅びの魔力と雷光龍で攻撃するつもりだ。

そうと察したが故の、決死の時間稼ぎであった。

それが功を奏した。

「二人とも離れて！」

リアスの叫びに、ゼノヴィアとイリナはサツとその場から飛び退いた。

リアスの手から滅びの魔力が。

朱乃の手から雷光龍が放たれる。

そしてそれ等は一つに混じり合い、膨れ上がり、赤黒く輝く光の巨龍となってオルランドに襲い掛かった！

オルランドは背中から翼を広げて空中に逃げるが、『滅びの雷光龍』とても呼ぶべきそれは、意思を持つかのように追い掛けて来る。

「ふん、なかなか面白い手品だが、こんなもので俺たちを倒す事など出来ん——ドウレンダナ！」

オルランドは魔聖剣に呼び掛けながら、柄を両手で握り、大上段に振り上げた。

魔聖剣は咆哮を上げ、聖なる光をその身にまとう。

巨龍が口を開けて、オルランドを呑み込まんと迫ってきた。

だが光をまとう魔聖剣の刃が、その巨体を真つ二つに切り裂き、消滅させた！

「無駄無駄無駄あつ！」

地面に切つ先を向けると、魔聖剣から放たれた閃光が地面を穿ち、爆発を起こしてリアスたちを吹き飛ばした。

「何をしたところで、お前たちでは俺たちには勝てん。俺は己の死さえも……全ての生物が決して越えられない死という限界さえも乗り越えた……俺こそ、真の超越者だ！」

「馬鹿な事言わないで！ あなたなんてただのはぐれ悪魔でしょ！」

「そうだ！ 貴様はストラーダ殿下の元でいったい何を学んで来たんだ！ この薄汚い背教者め！」

イリナとゼノヴィアが、口々にオルランドを非難した。しかしオルランドはまったく堪えていない。ただ肩をすくめるだけだ。

「ひどい言われようだな。だが、俺ほど師匠孝行な弟子もそうはいないぞ？」

お師さんは常々言っていたんだ、『師匠を越えるのが弟子の務めだ』とな。そして俺は、その務めを果たした。

お師さんは俺を追放した日、こう言った。『自由に生きろ』とな。だから俺は今、こうして自由に生きている。善に悪にも、あらゆる規範に縛られず自由にな——だと言うのに、ずいぶんとしけた顔をしてるじゃあないか、お師さんよ」

オルランドは地上に降り立ち、言った。

彼の目線の先には、ヴァスコ・ストラーダが立っている。手には連也との試合で使った木刀が握られていた。

「それがお前の答えなのか、オルランド……本当の、心からの言葉なのか!? 私にはむしろ、お前は悪に縛られているように見える……!」  
「だとしたら、そりゃあ大変だ。眼医者に行った方がいい——もつとも、ここの病院はついさつき俺がぶっ壊しちまったんで、他を当たってもらうがね」

「このような、飽くなき破壊と殺戮が、本当にお前の求めた自由なのか?」

「その通りさ……何か問題でも? 主がいつもおやりになっていた事じゃあないか。あのお方が、自分の言う事を聞かなかったからというだけでどれだけの人間を殺したか知っているだろう? 主の大いなる御業に比べれば、俺のやってる事なんざ子供の悪戯のようなものさ」

「言うな、この悪タレ! これ以上、貴様に罪を犯させる訳にはいかん!」

ストラーダは木刀を構える。

しかしオルランドは、面倒くさそうに溜め息をついた。

「まだわかってないようだな……もうあんたの時代じゃあないんだよ。出番を終えた役者がいつまでも舞台上に上がりたがるなんざ、この上なく見苦しいぞ」

「元より勝つつもりなどない……この命と引き換えに、貴様を討つ——」  
「よく言うよ、余命残高ゼロに近いくせになあ……貴様の枯れ果てた命ごときで、俺とドウレンダナが倒せ——うん?」

「……………む？」

師弟は同時に、ある気配に気付いた。

連也が落ちていった亀裂から、白金色の光が溢れ出ている。

「ひっ……………!?!」

リアスが自分の肩を抱いて竦み上がった。彼女だけでなく、その場にいる悪魔たちは純血・転生問わず、その光が持つ冷たくおぞましい気配に身震いする。

亀裂からたゆたう光が勢いを増し、爆発的に噴き上がった。

その光の中から、連也が姿を現す。

胸の傷は、跡形もなく消えていた。

黒髪は白金に輝き、逆立っている。

そして彼の頭頂部には、光輪が輝いていた。

謎の発光現象を起こしながら、連也は亀裂から完全に浮上して、更に高くへと舞い上がっていく。

「来い、『飛龍』！」

少年が叫び、地に手をかざす。

砕け散った木刀の破片がその手に集まり、ビデオの逆再生めいて修復されていった。

「まだ、そんな力を隠していたか……………だが、だから何だ？ 勝てると思

うな、小僧！」

オルランドもまた、魔聖剣を振り上げ、背中から翼を広げて宙に舞い上がっていった。

## 念道烈風（後編）

秋月連也が病室に顔を見せると、父の光太郎はいつも必ず起き上がり、背筋をピシッと伸ばして胡座を組んでいた。

しかし最近はそれもきついらしく、寝たまま息子を出迎える事が多かつた。

今日は叔父夫婦も一緒だが、二人は主治医と別室で話をしている。

連也は、穏やかに寝息を立てている父を起こさぬよう、静かに椅子に座つた。

「連也」

そこへ、父が呼び掛けてきた。

「んー？」

しかし連也は、特に驚く事もなく答えた。

「今まで、よく頑張つたな……修行は、きつかつただろう？」

「まったくだよ。でも、つらくはなかつた」

「そうか……お前には、苦勞を掛けた……これからは、友達と遊び回るのもいい、彼女を作るのもいい。修行をやめたかつたらやめてもいい——自由に生きろ」

「もうやつてるよ。俺のやりたい事と、父さんが俺にやらせたい事が一致してるだけさ」

氣休めではない、心からの言葉だった。

「そうか……」

光太郎もそれがわかつているのか、安堵の笑みを浮かべた。

そして、息子へ手を伸ばした。

「手を、握ってくれないか」

「俺の手なんか握つても面白くないよ？」

言いながらも、父の要望に応じる。

「母さんもな、いつもそう言つて、いつも握つてくれた。お前のこの手の温もりは、母さんにそっくりだ……生まれてきてくれて、ありがとうな……父さんと母さんの分、生きてくれ……連也……お前は、お前こそが、母さんの形見だった……父さんが生きていく上で、お前こそ

が光だったよ……」

それきり、光太郎は黙り込んだ。

眼も閉じられている。

連也はその安らかな顔をしばしみつめた後、廊下に出た。

ちようど叔父夫婦が主治医と共にこちらに来るところだ。

「……連くん、どうした？」

叔父の信彦が尋ねる。

連也はぼやける視界の中に立つ叔父に、静かな声で言った。

「——父さんが、死んだ」



目を覚ますと、辺りは真っ暗闇だった。

地割れの中に落ちたものの、途中で断層の出っ張りが上手い事ジャージに引っ掛かって止まってくれたようだ。宙吊りに似た状態で頭上を仰ぐと、それでもかなりの深さまで落ちたらしく、空は細い線としか見えなかった。しかし、決して這い上がれない高さでもなさそうさ。

（問題は、その後か……）

オルランドは昨日戦った時以上の力を付けている。別人どころか、もはや別の生き物と言ってもいい。木刀を失った今、あの怪物にどう立ち向かえばいいのか？

（何かないか……何か……）

連也は記憶の糸を手繰り寄せ、父との修行の日々を思い出し、そこから何かしら手がかりはないものかと思案する。

——答えは、すぐに出た。

チャクラの解放だ。ただし、今コントロール出来る六つではない。頭頂部に備わる第七のチャクラ。別名を『王冠のチャクラ』という。

他のチャクラは宇宙の理力の吸収口だが、この王冠のチャクラは放出口である。ここを開く事が出来れば、肉体を通して宇宙の理力が循環され、念のエネルギーはとてつもない強化を果たす事が出来る。

しかし果たして、自分にそれが可能だろうか？ チャクラコントロール自体最近になってようやく身に付いたものだ。頭頂部のチャ

クラにいたっては、その存在を臍氣にでも感知する事が出来ないでいた。

これを開けるのはよほど徳の高い聖人くらいであり、仏像の頭頂部が隆起しているのはこのチャクラの存在を表現しているからだとも言われている。それくらい至難の業なのだ。

(でも、やるしかない……！)

連也は目を閉じて、精神を集中させた。六つのチャクラが下から順に開いていき、眉間のチャクラも開いた。

宇宙の理力が満ち満ちていき、それを念へと相転移させて、怪我の治癒に充てる。

更に意識を頭頂部へと移していく。そこに王冠のチャクラがあるはずなのだ。

出来ると強く信じる事。

出来ると強く念じる事。

その思念が結果を引き寄せる。

それが人間の強さであり、念道の方だ。

亡き父の教えを胸に、連也は意識を集中させる。

——かすかだが、頭の中で水車がゆつくりと動き出すような、そんな重々しい感覚があった。

更に集中すると、重さは徐々になくなっていく。

頭の中で、白金に輝く水車が猛烈な勢いで回転していくのが感じられた。

その瞬間、連也は頭頂部から凄まじいエネルギーが駆け抜けていくのを感じた。

そのエネルギーが六つのチャクラを通して再び体内に入り、そして頭頂部から放出される。

今までに感じた事のない、圧倒的なエネルギーの循環が行われている。

それでいて、心はとても静かで、穏やかだった。

連也が『上に行きたい』と念じると、彼の身体は閃光となって飛翔した。

地上に舞い戻った連也は、地面に散らばる『飛龍』の破片の一つ一つをはつきりと見た。

「来い、『飛龍』！」

地に手をかざして呼び掛けると、木刀の破片がその手に集まり、ビデオの逆再生めいて修復されていた。

「まだ、そんな力を隠していたか……だが、だから何だ？ 勝てると思うな、小僧！」

オルランドが背中の翼を広げて舞い上がる。

魔聖剣が吼え、連也の心臓目掛けて真っ直ぐに切っ先を突き出した。

連也も木刀で突きを放つ。

二つの切っ先がぶつかり合い、ピタリと止まった。突きの精度と威力がまったく同等でなければ、まず起こらない現象だ。

「ちいっ！」

舌打ちしつつも、オルランドはドウレンダナで横から斬り掛かる。

しかしその時、連也は木刀を立ててその太刀筋に置いていた。魔聖剣の刃は、木刀であっさりを受け止められる。

「馬鹿な……！」

オルランドは目を見開き、後退して距離を取った。

今の二合で、理解したのだ。目の前の少年が、さっきまでとはまったく別物であると。

「えやあっ！」

連也が木刀で虚空を薙ぐと、オルランドは腹に鞭で打たれたような衝撃を感じて吹っ飛んだ。

その背後に回り込んだ連也が、木刀を振り上げる。

とっさに魔聖剣で身を守るオルランド。だが稲妻にも似た鋭い打ち込みが、彼を流星めいて地面に叩きつけた。

「がはっ……！」

何とか立ち上がったものの、オルランドは全身に、骨の髄にまで響く熱のある衝撃を感じていた。

「……何あれ。秋月くん、天使になっちゃったの？」

「い、いや、あれは違うような……」

「そうよね、羽も生えてないし……じゃあなんで空飛んでるの？ なんで髪の色まで変わってるの？」

「私を知るか……」

いつもの凸凹漫才をしながら、二人は同時にストラダーの方を見た。

「すまんが、私にもわからんよ……ただ、木刀ボーイの力は『念道』と呼ばれるものらしい……教徒たちの中にも、修行を通してその力を自得した者が何人かいた……彼はひよつとしたら、その念道の深奥に到達したのかも知れん……今の木刀ボーイならば、あるいはオルランドにも……」

勝てるかも知れない。

そうは思ったが、それを口にしたくなかった。

オルランドは、自分が手塩にかけて育てた最高の弟子なのだから……。

(この期に及んで、私という男は……)

自分自身に、呆れて物が言えなかった。

オルランドは、地上に降りてきた連也を睨む。

連也は、木刀を正眼に構えた。

「図に乗るなよ、小僧……少しパワーアップしたくらいで勝てるつもりか？」

「つもりじゃない——勝つ」

「笑わせるな、人間風情が……どんなにあがいたところで、貴様等人間には超えられない限界というものがあるんだよ。ネンドーの修行努力なんぞ無駄無駄無駄……だが、俺は違う。悪魔に転生し、『王』の駒を取り込み、死の壁すら乗り越えた……限界という壁の手前で右往左往してるだけの貴様等に、その壁を飛び越えた俺を倒す事など出来ん！」

言うなりオルランドは獅子のごとく躍り掛かった。

魔聖剣が唸りを上げ、暴風のごとき連撃を繰り出す。

連也にはその動きの一つ一つが、はつきりと見えていた。

次にどう動くかすら、感知出来た。

一撃必殺の斬撃の連続をことごとくかわしていき、木刀を振るって打ち掛かった。

だが、オルランドもまた、この攻撃を全て迎撃し、弾き、払い、捌いていく。

木刀と魔聖剣が、互いに相手の喉笛を狙って噛み合う野獣のように、激しくぶつかり合った。

十三合目の打ち合いで、連也に焦りが生まれた。押し始められている。

同時に、王冠のチャクラが閉じつつあるのも感じた。持ってあと5秒。だがそれは、この魔剣豪を討つにはあまりにも短く感じられた。

連也は思考をフルスピードで回転させて、攻略法を考える。

しかし、悪魔に転生した聖剣を振るう、悪魔に転生した男——そんなデタラメな存在を、どうすれば倒せるというのか？

(……悪魔に転生した聖剣……?)

そこに思い至った連也は、何を思ったか木刀を下段に構えて、頭のガードを下げた。

「観念したか——ならば死ねっ！」

オルランドが魔聖剣ドウレンダナを振り上げる。

連也の木刀が、稲妻めいて跳ね上がった。

下から上へと斬り上げた一刀が、振り下ろされたドウレンダナとぶつかり合う。

瞬間、悲鳴が上がった。

ドウレンダナが、金属をこすり合わせるような甲高い音を響かせて……黒い塵に変じて消滅する。

「なっ……ドウ、ドウレンダナああああ——っ！」

突然の『女王』<sup>クイーン</sup>の消滅に、オルランドは戦いの中で戦いを忘れた。

「いいいい——えやあっ！」

すかさず連也、渾身の抜き胴！

破邪の念で白く輝く一刀が、魔剣豪の腹を通り抜ける。

オルランドは、己れの敗北にすら気付かず、魔聖剣同様に消滅した。

ドウレンダナは悪魔に転生し、強化された。  
同時に、悪魔の弱点も備わってしまった。

連也は、破邪の念をオルランドではなくドウレンダナに向けたのだ。それが魔聖剣消滅の理由だった。

風が吹いて、かつてオルランドだった塵を巻き上げる。

ストラダーがそれを掴もうとしたが、塵はその手を逃れて、そして消えた。

「オルランド……」

老人の目から、一筋の涙がこぼれ落ちた……。



二日後。

空港に、ストラダーはいた。

見送りにはゼノヴィアとイリナ、リアスにソーナ、そして連也も来ていた。他の者は駒王町にいる。

本来ならストラダーは、書き置きを残して黙って去るつもりであった。たまたまそれに気付いた数名が、見送りに強引についてきたのである。

「短い間だったが、世話になったな。その上見送りまでしてもらって、感謝の言葉もない」

「いえ……ですが猊下。本当にお戻りになるのですか？ あなたは天界の監視から無断で抜け出したのでしょうか？」

戻れば、今度は厳罰が待っているのではないか。リアスはそう言いたいのだ。

「猊下さえよろしければ、私どもの元に身を寄せてみてはいかががでしょうか？」

それは、ソーナも同じだった。だから提案してみる。

「私は賛成です！ 猊下には教えてもらいたい事が山ほどありますし！」

「共にいてくだされば、それだけでも充分心強いです」

イリナとゼノヴィアが、ソーナの提案に賛同した。しかし……、

「すまないが、そのつもりはない。私には、やらねばならぬ事がある」

「やらねばならぬ事……？」

リアスが小首を傾げた。

「——君たちには、そして駒王町の方々には、本当に申し訳ない事をした。だが、こんな事になってもなお、私はあの子が可愛いのだ。私だけでも、祈ってやらねばならぬ。たとえ私の余生があと数分で終わるとしても、それでも祈りたい。オランダの罪を焼く煉獄の炎が、少しでもやわらぐように……」

哀しい顔だった。

リアスたちは、それでもう何も言えなくなった。

「連也くん」

ストラーダは、彼女たちの後ろに無言で立つ少年に、声を掛けた。

王冠のチャクラが閉じて、彼の髪は元の黒髪に戻っている。

老人の大きな手が、優しく肩に置かれた。

「君には感謝している。君のおかげで、あの子は悪から解放されたのだ。もうあの子は、誰も傷付けなくて良くなったのだ……君は、正しい事をした。だから、どうか胸を張ってほしい」

「……………」

連也は、何も言わなかった。

何も、言えなかった。

ストラーダは無言で見つめ返す少年に微笑み、やはり無言で、握手を求めた。

連也はその手を握った。

「では諸君、達者でな。来れなかった者たちにもよろしく言っておいてくれ——もう、会う事はないだろう」

ストラーダはそう言って、去っていく。

寂しい背中だった。

離陸した飛行機の中で、老人は弟子に思いを馳せる。

そして、自分自身に問い掛ける。

何故オランダを追放したのか、と。

教会に縛られず、広い世界を知ってもらいたい。見聞を広め、教養を深め、より大きな人間になってほしい。そんな親心からだ、自分

では思っていた。

——だが、本当にそうなのか？ あの時、自分の地位が揺らぐ事を、一瞬たりとも思わなかった訳ではない。

(……私は結局、我が身可愛さに逃げたのだ。あの子と無関係を装いたかっただけなのだ……あの子が悪に走ったのは、それがわかっていなかったのではないのか？)

そんな思いが、胸を刺す。

「……教えておくれ、オルランド」

知らず、言葉が漏れた。

だが、その問いに答える者は、もういない。

もう、いないのだ……。

## 第二章

ヒーロー！……俺？

深夜の駒王町。

チームD×Dとオルランド眷属との戦いの直後という事もあり、人影はまったく見当たらない。

そんな静まり返った町内のある河原に集まる、五つの人影があった。

「どうだ、俺の言った通りだろう？」

「ああ、境界が綺麗さっぱり消えてやがる」

「しかも町中あっちこっちがメチャクチャで、死体もゴロゴロ転がってやがる」

「今更新しく増えたところで、わかりやしないって事だ」

「さしずめ食い放題の人肉バイキングってどこか？」

最後の一人の物騒なジョークに、他の四人はゲラゲラと笑った。

彼等は人間ではない。はぐれ悪魔だ。D×Dが秘密裏に敷いていた駒王町の警備が文字通りに瓦解したのをいい事に町内に潜入、暴れるだけ暴れてやろうという魂胆である。そこに何かしらの目的がある訳では、ない。強いて言うなら暴れる事が目的だ。

「とりあえず、近くに幼稚園がある。明日辺りそこでガキどもを捕まえて腹ごしらえといこうじゃねえか」

「——そうはいかん」

はぐれ悪魔の一人の提案に、凜とした少女の声が答えた。

五人が一斉に声のした方角を見やると、橋の上に白いフード付きマントを頭から被った人物が立っていた。

「チームD×Dか……へっ、だがよおー！ 一人で勝てると思ってん

のか!? 出る、《龍の手》！」

《紫 光 矢》！」

はぐれ悪魔の内二人が、それぞれの持つ神セイクリッド・ギア器を顕現させた。右腕を覆う銀色の籠手と、紫色の光で出来た弓矢だ。

別の一人は体がみるみる膨れ上がり、身の丈3メートルはある人狼に変身した。

もう一人は、全身を蟹のような外骨格で覆い、腕もハサミに変化した。

最後の一人は額から角を生やし、皮膚は緑色に変色し、全身の筋肉が膨張して体が二回り以上も大きくなった。

「お前たち程度なら、私一人でも役不足だ」

白マントの少女——ゼノヴィアはマントを脱ぎ捨て、愛刀にして相棒たるエクス・デュランダルを起動させた。

鞘を構成するパーツがスライド変型して、彼女の髪と同じ深い青に彩られた刃を露出させる。

はぐれ悪魔たちは橋上のゼノヴィアに一齐に襲い掛かった。

だが、突然彼等の視界内を白い閃光が縦横無尽に駆け巡った——かと思えば、五人ともが全身を細切れにされ、そのまま黒い塵となって消滅した。

ゼノヴィアは元々《騎士》<sup>ナイト</sup>としてスピードが強化されているのに加え、《天閃の聖剣》<sup>エクスカリバー・ラピッドリイ</sup>の加護により更なるスピードを得た。

そして《擬態の聖剣》<sup>エクスカリバー・ミミック</sup>の加護でデュランダルの刀身を長く伸ばせば、相手の攻撃が届く前に一方的に切り刻めるのが道理である。

後方から光の弓矢を射ようとした悪魔すら、弓につがえた矢を放つ前に切り刻まれていた。

「……うん、だいぶコツが掴めてきた気がするぞ」

ゼノヴィアは己れの戦果に、満足げに微笑んだ。

その後、更に周辺区域をパトロールして回り、兵藤邸に戻ろうとしていた道すがら、ジャージ姿の秋月連也を見掛けた。町の治安維持のため、連休明けまでという条件付きで、彼はまだ兵藤邸に同居しており、今夜もゼノヴィア同様深夜のパトロールに出ていたのだ。

そして、彼の後ろには十数人からなる行列が続いていた。

彼等は一人の例外もなく、肉体が著しく損傷している。中には割れた頭から脳を一部露出させている者すらいる。そして、全員の姿が半透明であり、いわゆる幽霊と呼ばれる存在だとわかる。

連也は……背後の行列に気付いていた。むしろ彼が率いていると言つてもいいだろう。左手で逆手に握つた木刀『飛龍』から、絹のような柔らかな白光が優しく溢れ出しており、その輝きが、幽霊の行列をおびき寄せていた。

「ゼノヴィアは連也を追う。」

幽霊の集団を引き連れて、連也は公園の中に入っていく。

そして噴水のある広場で、足を止めた。

その間にも、幽霊は数を増しており、広場を埋め尽くすほどだ。

「今夜はこれくらいかな……まとめて、高い所へ行け」

連也の額に、光輪が生まれた。霊的な力を司るチャクラが開かれたのだ。

連也は白く輝く木刀を右脇構えに構えた。

「念道剣、影送り！」

振り抜かれた木刀から、白光がほとばしった。

それは絹のような柔らかな輝きで、ひしめき合う幽霊たちはその光輝に触れるや否や、白い影となつて天へと昇っていく。連也はそれを見送った。

離れた所から見ていたゼノヴィアの耳に、彼等の感謝の声が聞こえたような気がした。

浮遊霊たちが一人残らず昇天した後も、連也は夜空を見上げていた。

「連也」

ゼノヴィアが、少しして声を掛けた。

「帰ろう」

「……ああ」

連也はぼんやりとした声で答えると、不意に自分の頭のでっぺんを左手で押さえた。

「どうした？ 怪我でもしたのか？」

「いや……修行が足りないなって思つてな」

「――？」

少年の言葉の意味がわからず、ゼノヴィアはただ小首を傾げるしか

出来なかった。

◆  
——翌朝。

連也は、恐らく人生最悪の目覚めを経験していた。

何か柔らかい物が、横から自分の身体に絡み付いているのだ。

目を開けて確認すると、それは裸の女だった。

裸の女だった。

「……………ツッ!!」

驚きのあまり、声すら出なかった。

カーテン越しに差し込む朝日に照らされ、白い肌はうっすらと輝いているかのようだ。

長い黒髪がその白い肌にかかり、何とも言えない色香をかぐわせる。

頭頂部からは、ピヨコンと黒い猫耳が覗いていた。

豊かに膨らんだ胸が、連也の身体に押し当てられて形を変えていく。

ムツチリとした尻からは、二本の黒い尻尾が生えていた。

琥珀色の瞳が、連也に悪戯っぽい眼差しを注いでいる。

「お・は・よ・よ♪」

黒歌は艶かしい声でささやくと、連也の上に覆い被さり、それが当たり前であるかのように唇を重ねてきた。

ニユルリと、舌が潜り込んで来る。

「……………ツッ!!」

不覚にも連也は、抵抗どころか思考する事すら出来ないでいた。

それをいい事に、黒歌は舌を妖しくうごめかせ、連也の舌と絡ませ合う。

左手はシャツの中に潜り込んで、彼の胸板を撫で回し、右手はズボンの中に侵入し、情熱的に動いていた。

しばらくの間、連也の口を散々に貪った後、黒歌は唾液の糸を引きながら唇を離した。

「んふふ……………とろけたお顔しちゃって……………可愛い♪」

「あ……あんだ、いったい……?」

「アタシは黒歌。白音——塔城小猫の姉よ。エッチしよう?」

「——はあああああつ!」

何の脈絡もない言葉に、連也はすつとんきような声を上げた。

「な、な、なんでいきなり! 俺たち会話したのすら今が最初ですよね!?!」

「うん、そうね。だから何? 坊やだって準備オツケーじゃない」

連也のズボンの中で、黒歌の右手は更に動きを激しくする。

連也は思わず仰け反って悶えた。

「んふふ、身体はホント正直よねえ。大丈夫、アタシとっても上手いから、朝ごはんまでには済ませてあげるよ」

黒歌は起き上がり、連也のズボンを脱がしにかかった。当然彼は両手でズボンを掴み、抵抗する。

「いやいやいやいやいや! だからちよつと待って! いきなりそんな事言われても困る! なんで俺なんですか!」

「アタシ、子供が欲しいの。で、どうせなら強い子供が欲しいなっと思うのよね」

「だったら何を当たってくださいよ! ——あ、ほら、兵藤とかどうですか? アイツは性欲の方もカウンセリングが必要なレベルで強いですよ?」

「えー? でも赤龍帝ちんの強さって神セイクリッド・ギア 器ありきだし、身体もリニューアルしたとはいえまだ割りと不安定で、資質がどこまで子供に遺伝するかは博打なのよね……その点、坊やは違うわ。これ以上ない優良物件よ」

黒歌は再び連也の上へのし掛かった。

豊満なバストが胸板に押し当てられて、またもや柔らかさをアピールするかのように、形を変える。

「見てたわよ、オルランドとの戦い……王冠のチャクラを開ける人間なんて、アタシ初めて見たわ!」

琥珀色の瞳を小さな子供のようキラキラと輝かせ、黒歌は言う。

だが連也は、それを聞いて気まずそうに視線を逸らした。

「あれは、偶然です。あれから何度か開こうとしてみたけど、うんともすんとも言いやしない……それどころか、存在すら感知出来ないし……」

「偶然でも何でも、その歳で王冠のチャクラを開いたのは確かでしょう？ 坊やは間違いなく才能があるわ。その才能、アタシの子供に分けて欲しいの……坊やの心も身体も、お姉さんがとろけさせてあげるから」

「姉様、そこまでです」

後ろから黒歌の肩を掴む、小さな手があった。

いつの間にか部屋に入ってきた小猫であった。

小猫は凄まじい力で姉の体を空中高く放り上げると、自分もそれを追ってジャンプする。

そして黒歌の両足首を掴み、両腕を足で押さえた。

逆大の字に姿勢を固定された黒歌は、哀れそのまま変型のツームストーン・パイルドライバーで、床に頭から叩き付けられる。

「し、白音……お姉ちゃんはもつと労って……」

「だったら、もつと労られるような言動を心掛けてください」

妹のつれない言葉を耳にしながら、黒歌はガツクリと意識を失うのであった。

「どうも、姉がお騒がせしました。それと、もうすぐ朝ごはんですよ、連也先輩」

一部始終を呆然と眺めていた連也にそう告げて、小猫は黒歌の足を掴んでズルズルと引き摺りながら部屋を出ていった……。

◆  
気を取り直して、連也は着替えを済ませて一階のダイニングに下りた。

既に一誠の父の五郎が席に着いており、新聞を読んでいる。その周りに朱乃と小猫、アジアもいて、横から五郎の読んでいる新聞を覗き込んでいた。

連也が「おはようございます」と挨拶すると、五郎は新聞から視線を上げた。

「おはよう秋月くん。ほら、ごらん。君の事が早速記事になってるぞ」  
「……はあ？」

何の事やらさっぱりわからず、連也は間の抜けた声を上げる。

そして五郎が差し出した新聞に目を通して——ワナワナと震え始めた。

「な、な、なななっ！ 何じゃこりやあああああッツ!!」

その叫びを聞き付けて、パタパタとリアスが駆け込んで来た。

「なあに、今の？ どうしたの、連也くん！」

「これはアンタの陰謀かああああッツ!!」

連也はリアスの顔を見るなり、新聞を突き付ける。

『正義の木刀、冴ゆ！——愛と奇跡の子が外国人犯罪者を逮捕——』

赤い太字で、そのような見出しが書かれている。

「ア、アハハハハ……」

それを見た瞬間、リアスはひきつった笑みを浮かべつつも、あからさまに視線を逸らした。

「やっぱりアンタの差し金かあああああッ！」

「ご、ごめんなさい！ 実はオルランドとの戦いをどこかで報道関係者が見てたらしくて……大急ぎで特定して記憶とか記事の内容とかを改竄したんだけど……前にも説明したけど、人間の記憶って根こそぎ書き換えるのは不可能なのよ……最も後を引かない形で隠蔽するには、あなたを矢面に立たせるしかなかったの……」

リアスは両手の人差し指をツンツンさせながら、しどろもどろに説明した。

何かのコスプレとしか思えない格好だったルフエイやレイヴェル、ロスヴァイセ。

本物の刀剣を所持していたゼノヴィア、イリナ、祐斗。

全身を真紅の鎧で武装した一誠。

なるほど、あの時の彼等を世間の耳目にさらす事は出来まい。

何の武器も持ってなかったのはリアスと朱乃だが、うら若き乙女が徒手空拳で犯罪者を捕らえるという設定も、アクション映画ならともかく現実的に考えれば無理がある。

「……わかりました。じゃあそれはいいとして、ここー！」  
連也が指差したのは、見出しのすぐ横である。

そこには記者たちにマイクを向けられる連也の写真が載っているのだが……、

「何ですか、コレ！ 俺、こんなインタビュ―を受けた覚え全然ないんですけどー！」

「あ、それはうちが用意した影武者よ。だ、大丈夫よ。インタビュ―とか取材とかは、今後もグレモリー家を通すように段取りを整えてあるから」

「そういう問題じゃねえよ！ うあああつ！ 俺もう恥ずかしくて外歩けねええええええっ！」

連也は頭を抱えてその場にしゃがみ込む。

「まあまあ秋月くん。リアスさんたちにも事情があったんだ、許してやってくれ……それに、敵の親玉を君がやつけたのは本当なんだろう？ 君は正しい事をしたんだ、胸を張りなさい」

「すいません、無理です……穴があつたら入りたいです……誰か埋めてください……」

五郎の慰めも、今の連也には何の気休めにもならなかった。

朱乃とアーシアが駆け寄り、慰めの言葉を掛ける。

「まあまあ連也くん、元気を出してくださいな」

「そうですよ。それに、人の噂も四十九日って言うじゃないですか」

「アーシア先輩、それを言うなら七十五日です」

小猫は連也の頭をよしよしと撫でながら、突っ込んだ。

◆ 連休最終日。

リアスは自室で書類の山に囲まれて、うめき声を上げていた。

何せ今回の事件は、『外国人犯罪者による爆弾テロ』という形ではあるが、全国的なニュースとなっている。報道と警察の両方に手を回して、何とか自分たち悪魔の存在が表に出ないようにする必要があった。

そして、破壊された町の復興や、被害者及びその家族への補償。

目撃者の記憶の改竄。

やる事が今まで以上に多すぎる。

グレモリー、シトリの両家共に、この事件の後始末には金も労力も一切惜しむつもりはない。

それでも、駒王町を管理しているのはリアスなのだ。当然、彼女の承認を必要とする事柄がたくさん出てくる。サイン待ちの書類だけで、デスクの上に要塞が出来上がるほどだった。

「手伝おうか？」

そう言いながら、デスクの上に突っ伏すリアスに、コーヒークップを差し出す手があった。

背の高い、筋骨隆々とした男だった。

太い眉には意思の強さが感じられる。

黒い半袖シャツに、ベージュ色のスラックスとベストを着ている。

その半袖から覗く腕の太さは、リアスの腰回りほどもあった。

「……………砂糖と塩、間違えてないわよね？」

リアスはカップを受け取りながら、尋ねる。

「この奥方がお前にと入れてくれた物だから、その心配はないさ」

男はそう言って、歯を剥いて笑った。まるで野生のライオンを思わせる笑みだ。

サイラオーグ・バル。

七十二柱の一角であるバル家の次期当主で、リアスとは従兄弟同士の間柄だ。

「何か用？ イッセーなら事務所の方よ」

「ああ、ちよつと息抜きに、兵藤一誠と手合わせをと思つてな……それなら、そちらには後で顔を出そう。——大変だったようだな」

「今も大変よ。ある意味、今の方が大変かしら」

リアスは答え、カップのアイスココアを一口飲んだ。

少し強めの甘味が、今は気持ちをはっとさせてくれる。

「一声掛けてくれれば、俺も加勢に来たものを……」

「殴るしか能がないあなたを呼んだって、町の被害が広がるだけだしよ」

「ハツハツハツ、ひどい言われようだな。まあ事実だから仕方ないが」  
サイラオーグはそう言つて、豪快に笑い飛ばした。  
そこへ、ノックの音がする。

リアスが「どうぞ」と返すと、ドアが開いて連也が入室してきた。右肩に、荷物の入ったリュックサックを掛けている。

「先輩。学校の準備もありますんで、家に帰らせてもら——あ、ども、こんにちは」

サイラオーグの姿に気付いて、連也はリュックサックを下ろしてお辞儀をする。

リアスは従兄弟を簡単に紹介した。

「そうね。お家の方も心配してるでしょうし……ありがとう連也くん。ただ、もうしばらくの間はあなたの手を借りる必要があると思うの。その時は申し訳ないのだけど、またよろしくね？」

「わかりました。じゃあ、失礼します」

「——その前に、いいか？」

サイラオーグが連也のそばに歩み寄った。

「新聞を見たのだが、オルランドを倒したのは君で間違いないか？」

「はい」

「そうか……従姉妹が世話になったな。俺からも礼を言わせてほしい。ありがとう」

そう言つて、右手を差し出して握手を求める。

連也はそれに応じた。

サイラオーグの手は大きかった。

だがそれ以上に、手を通して感じ取れる、肉の内側からみなぎる気の圧力が凄まじい。

「……あの、失礼ですが……流派は？　何かやってます？　お師匠様は、どんなお方でしょう」

「うん？　……ううむ、特にいないな……我流だからな……強いて言うなら、参考にした本やDVDのモデルさんたちが、俺の師匠と言えは言えるかも知れん……」

——喧嘩売ってんのか。

連也はその言葉を、グツと飲み込んだ。

「……だとしたら、とんでもない天才ですね」

「ハツハツハツ、そんな風に言われたのは初めてだな」

サイラオーグはお世辞と受け取ったらしく、黒髪を左手でガシガシと掻きながら、豪快に照れ笑いだした。

「さて、兵藤一誠の顔も見てくるか。じゃあな、リアス」

そして、そう言っつてそそくさと退室した。どうやら本当に照れ臭くなっただらう。

バタンとドアが閉ざされると、連也はリアスの方を見た。

「今の話、本当ですか？」

「少なくとも私は、彼がどこかの道場に入門してたとかそんな話は聞いた事ないわね。彼の性格なら、道場の先生への感謝の気持ちとか、尊敬の気持ちとか、事あるごとに口にするはずだし……」

「だとしたら、やっぱり天才だな、あの人……」

「そうなの？」

「あの人、鬨気使えるでしょ？」

「ええ」

「誰にも師事せずに鬨気の扱いを覚えるなんて、努力だけじゃ出来ませんよ。」

ちなみに、俺が念道の修行を始めたのは小学校に上がる前でしたけど、父の指導を受けても、気を念のレベルにまで高められるようになつたのは、小学校卒業する頃でした」

「……………そうね。確かに、言われてみればその通りね……………」

ちよっぴり従兄弟を見直すリアスであった。

## モテ期襲来

イタリアのとある僻地にある葡萄畑。

その片隅の小さな一軒家。

ヴァスコ・ストラダーはそこにいた。

天界の監視を抜けて勝手に姿をくらました行為について、駒王町からその詳細を記した報告書が教会に送られた。

その報告書のおかげで、今回のストラダーの逐電に関してはほぼお咎め無しに近い処分となったのだ。

——もつとも、老人には何の喜びも安堵もなかった。

今は、午後八時を過ぎている。

窓の外には夜の帳とぼりが下りていた。

夕食と入浴を一時間前に済ませたストラダーは、机に向かい、書き物にいそしんでいた。

自分の剣術を自分なりに分析した、教本である。

ある程度書き貯めると、それをスキャナーに読み込ませ、パソコンに保存する。

紙媒体と電子媒体の両方で、後世に残しておくつもりだった。

「パソコンとは、何とも似つかわしくないものを……」

若い男の声がした。半分はからかっているが、もう半分は本気で驚いている——そんな声色だった。

ストラダーがおもむろに振り向けば、窓際に一人の男が立っている。背後の、閉めていたはずの窓は、開いていた。

学生服の上から、漢服を腰巻きのように巻き付けた、髪の高い男だ。

曹操。

その名の通り、三国志の英雄『曹操孟徳』の血を引く男だ。

「年寄りを舐めてもらっては困る。新しい事を覚えるのに必要な時間だけは、たっぷりとあるのでな」

「これは失礼」

曹操は胸に手を当て、大袈裟な身振りで一礼した。

「それで、この老骨にどのような用向きだね？」

「特に何も——ちよつと世間話の相手が欲しかったのですよ。猊下は、お時間だけはたっぷりとあるようですし。日本旅行の土産話でもあればお聞かせ願いたく、推参つかまつった次第」

「君に話すような愉快的な事など、何もなかったよ」

「はて、お弟子さんに会いに行つたと聞いてますが」

「うむ、会いに行つた。倒しに行つた。救いに行つた——そして、何も出来ず、ただズタボロにされた。こうして今生きているのが不思議なくらいだ」

「あなたほどの勇者が、それほど一方的に負けたとは思えませんね」

お世辞ではなく、曹操の心からの言葉だった。

「負けたよ、負けた。真つ向からの力比べ、腕比べで、文句のつけようのない大敗を喫したのだ。さすがは、私の最高傑作だった……」

「しかし、その最高傑作もまた、敗れたのでしょうか？ 相手は赤龍帝ですか？」

「いや。彼等に協力していた民間人だ」

「——ほう」

曹操の声色が、かすかに変化した。

「君は、念道ネンドというものを知っているかね？」

「念道……極限まで高めた気は、物理法則をも超越した霊的なエネルギーに変化する。それを武道に応用した技術体系である……と、昔聞いた事があります」

「その念道を使う少年だよ。私の弟子を倒したのは……興味があるなら、会つてみるといい。彼は君と同じく、『受け継ぐ者』だ。それ故の強さがあり、また、それ故の苦悩もあろう。会えば、君にとつても何かしら得る物があるかも知れん」

「そうさせてもらいましょう。で、その念道使いの名は？」

「秋月連也」

「アキツキ・レンヤ……」

曹操は口の中で名前を繰り返した。

「やはり足を運んだ甲斐がありました。面白い事を教えていただき、感謝いたします。ではこれにて失礼」

曹操は再度大袈裟な一礼をすると、窓から外へ出て、夜の闇に消えていった。

窓枠に残された靴跡を見ながらストラダーダは、  
(ドアから出入りしてほしかった……)

と思わずにはいられなかった……。

◆  
とあるオーブンカフェで、眼鏡を掛けた金髪の青年が、手にしたスマホの画面を眺めていた。

聖王剣『コールブランド』を所有する剣士、アーサー・ペンドラゴンである。

そこへ、別の男がやって来て、彼の前にコーヒーを置いた。

あの『西遊記』の孫悟空の子孫にあたる、美猴だ。アーサーの真向かいに座り、自分の分のコーヒーをズズツとすすると、アーサーに問い掛けた。

「さつきから何ニヤニヤしてんだ？ エロ画像でも見てんのか？」

「いえ、妹からのメールをチェックしていたところですよ。駒王町で、ちよつとした祭りがあったようですね」

駒王町で起きたチームD×Dとオルランド眷属との戦いの顛末を纏めた、ルフエイからのメールを読んでいたのだ。

「あのオルランドが駒王町に現れて、そして敗れたとの事です」

「オルランドって、確かずっと前にお前が話してた聖剣使いだっけか。あのヴァスコ・ストラダーダの弟子だったとかいう」

「ええ。彼は悪魔に転生し、さらに王の駒<sup>キング</sup>も取り込んで、凄まじい強さを手に入れていたようですね……闘戦勝仏様の課題がもつと早く片付いていれば、私も参加出来たのですが……」

アーサーはそう言っつて、小さな溜め息をついた。本当に残念そうに。

「お前も好きだねえ……」

そんな仲間の様子に呆れつつも、美猴はグツと身を乗り出す。

「で？ そいつをやっつけたのは誰なんだよ。赤龍帝か？」

「いいえ。ルフエイからのメールによると、D×Dに協力していた民

間人だそうで」

「ほおー、そんなスゲーのがまだ野に潜んでたつてののか？」

「そのようですね……なんでも、念道なる武術の使い手だとか」

「ねんどー？ まだ残ってたのか？」

「おや、ご存知で？」

「昔じーさんから話を聞いた事があるだけだがな。自分が強くなる事しか頭のない偏屈の集まりだとか言ってたぜい？」

「偏屈という点に関しては、我々も他人の事はあまり言えませんがね——うん？」

横から不意にスマホを引ったくられて、アーサーが珍しく間の抜けた声を漏らした。

引ったくったのは、銀髪の少年だった。アーサーや美猴と同年代か、やや下に見える。

彼はスマホの画面をじつと覗き込んでいた。

十三の神滅具の一つ《ロンギヌス白龍皇の光翼ディバイン・ディバイディング》を持つ男——そして魔王ルシファアの血筋も引く、ヴァーリ・ルシファア。

「アキヅキ・レンヤ……か……」

◆ ポツリとつぶやいた後、その口角がかすかに上がった。

「うおっ!？」

昼休み。

秋月連也は弁当を食べている最中、突如背中に走ったゾワゾワとした感覚に、思わず変な声を上げた。

「どうした、連也」

同じ長机で弁当を食べていたゼノヴィアが、手を止めて声を掛ける。

「わ、わからん……何か、急に悪寒が……」

「風邪かい？」

「それなら、薬飲んで寝れば治るからまだマシなだけだな……」

連也はそう言って、苦笑した。

二人は、室内の長方形に並べられた長机で昼食を取っていた。

ここは生徒会室である。他の役員たちは、それぞれ思い思いの場所で昼休みを過ごしている。

外国人犯罪者を逮捕したヒーローとしてマスコミに取り上げられてしまった連也は、学校でも注目の的となってしまうため、昼食も落ち着いて取れなくなってしまう。

そこへ、ゼノヴィアが生徒会室の使用を許したのである。

他の生徒会の面々も、異論はなかった。

そんな訳で、ここ数日はこの生徒会室が、連也の安らぎの場所になつていた。

同時に、修行の場所にもなっている。

弁当を食べ終わり、無言の『ご馳走さまでした』をすると、連也は立ち上がる。

その少し前に食べ終わっていたゼノヴィアが、尋ねる。

「今日もやるのか？」

「ああ、頼む」

「わかった」

ゼノヴィアはうなずくと、部屋の片隅で座禅を組む連也の背後に、膝立ちになった。

そして、両手で連也の頭頂部を押さえる。

連也は目を閉じて、体内の六つのチャクラを下から順に開放していった。

ゼノヴィアは押さえる手に、軽く力を込めた。

筋トレでも、鍛えたい部位を触ってもらおう事で、その部分に意識を集中させる事が出来、効果が高まるという。

連也はそれをチャクラコントロールに適用させる事で、王冠のチャクラの再度の開放にチャレンジしているのだ。

未だに成功の兆しすら見えてこない。

やはり、あれはただの偶然だったのか……そう思い、半ば諦めていた連也であったが、

——偶然でも何でも、その歳で王冠のチャクラを開いたのは確かでしょう？

黒歌の言葉が、はからずも励みとなっていた。

彼女の言う通り、一度は開く事が出来たのは確かなのだ。もう一度出来ない理屈はあるまい。

かと言つて王冠のチャクラにばかりかまけて他の事がおろそかになつては意味がないので、連也は昼休みの間、この生徒会室でゼノヴィアに手伝ってもらいながら練習するだけにとどめていた。

——そして、今日も徒労に終わった。

「ありがとうございます」

連也は軽い口調で礼を言うと、立ち上がり、屈伸運動をやる。

ゼノヴィアは、自分の手を眺めていた。

「連也。本当に熱があるんじゃないか？」

「ん？」

「何だか、今日は手に熱を感じた。本当に風邪だったりしないか？」

ゼノヴィアは連也と向かい合つと、自分の前髪を手で掻き上げ、丸出しにした額を連也の額に重ねた。

意識せずとも呼吸が聞き取れるほどの至近距離に、女の子の顔がある。

ほんのわずかな身じろぎで、唇と唇が重なりそうだ。

ゼノヴィアの豊満な胸が、互いの着衣越しに連也の胸板に押し当てられている。

健全な男子高校生には、なかなか刺激的な状況であった。

(お、落ち着け……静まれ……！)

連也は己れにそう言い聞かせ、同時に、感情の力を司る中位のチャクラを開き、自身の劣情の高ぶりを抑制する。

それでもしなければ、彼女の身体を力いっぱい抱き締めてしまいかねなかった。

「ふむ、熱はないようだね……」

「ああ、実際何ともないしな」

離れたゼノヴィアに平然と答えつつ、連也は念道を授けてくれた亡き父に、胸の内で感謝するのだった……。



放課後。

オカルト研究部がある旧校舎から、乾いた音が響いていた。木刀と木刀がぶつかり合う音だ。

連也が、木場祐斗と木刀で打ち合っているのである。

同じ剣士として、祐斗は連也の念道に興味があるらしい。手合わせを申し込んだら断られたので、『じゃあ僕の稽古の相手を務めてもらえないか?』と聞いたたら、そういう事ならと了承してくれた。

祐斗の打ち込みは速く、鋭く、まるで稲妻だ。

それを連也は、涼しい顔で受け流していた。

たとえ一時的にでも、王冠のチャクラが開いた影響は確かにあるようだ。

連也の五感は鋭さを増し、集中力も高まっている。

祐斗もまだ本気ではないが、それでも彼の動きがゆっくりと、そして鮮明に見て取れた。

祐斗が、連也の顔めがけて、左右に激しく木刀を振る。見せ太刀――早い話が目眩ましのフェイントだ。

連也が一步下がった隙に、フルスピードでその背後に回り込もうとした。

しかし回り込もうとして踏み出した一步が地面に着く前に、突如身体が動かなくなつた。不可視の力で、その場に縫い止められたかのようだった。

(これは、いったい……?)

連也が何かしたのか?

そう思つて彼の方に視線をやると、彼の足が祐斗の影を踏んでいた。

しかし、おかしい。

影を踏めば、その踏んだ足に影が掛かるはずだ。

だが、連也の足には影が掛かってなかった。地面に敷かれた敷物を踏んでいるかのように、連也の足は影の上に置かれていた。

「ほい、一本」

おどけた口調で、連也は祐斗の頭を木刀『飛龍』でコツンと軽く打つ

た。

それから影を踏んでいた足を離すと、祐斗を束縛していた力が消えて、彼はたたらを踏んだ。

「参ったな……」

祐斗はぼやいた。

以前のストラーダと連也の試合を見た時も思ったが、まるで魔法だ。

おぼろげではあるが、念道の剣質は力や速さ、技巧にあるのではないのと理解出来た。

思えば、公園で一誠に打ち込んだ抜き胴といい、ストラーダに使った技といい、物理的なスピードやパワーとはまったく別のものだった。

今日、実際に手合わせをして、祐斗はそれを確かめる事が出来た。

「ありがとう、秋月くん」

「まあ、これくらいはお安い御用だ」

答えながら、連也は『飛龍』の切っ先を左の掌に当てて、押し込んだ。まるで手品のように、木刀は左手の中に消えた。

「……秋月くん。僕からも改めてお願いするよ。どうか君の念道を、僕たちに指導してくれないかな」

「断る」

連也は一ミリ秒の間も置かず、答えた。

「グレモリー先輩にも兵藤にも同じ事言われたけどな。たどえお釈迦様が土下座してお願いしたって、答えは同じだ。

俺はまだ、他人様に教えられるレベルじゃない。

習った奴が、習った技を悪用しないと言う保証はないし、そんな事になったら責任が持てない。

だから俺は、誰にも念道を教えない」

「悪用、か……」

祐斗の脳裏に、一誠の顔が浮かんだ。

確かに彼なら悪用しかねないだろうと言う確信があり、自分でもちよつと哀しくなった。

「……君のその言い分はわかるよ。でも、今すぐという訳じゃない。君が念道を完成させた時でも構わない。僕たち悪魔は、半永久的に生きていられるからね」

「それでもお断りだ。念道は基本、一子相伝でな。俺の父さんには弟がいるんだけど、叔父さんは基本の基本を習った後、『才能がない』って事で修行はそこで終わったんだとさ」

「でも、君がその習わしに従う必要はないだろう？ それじゃあ廃れていく一方じゃないか」

祐斗の声色が、かすかに暗くなった。

後継者を得られず、その伝統ある歴史に幕を下ろさざるを得なかった武術はたくさんある。

知ってからあまり時間は経ってないが、それでも、念道がそれ等の仲間入りをするのかと思うと、哀しくてたまらなかった。

「ま、しょーがないさ」

連也は軽く言って、肩をすくめる。

「こればかりは、ラジオ体操みたいにみんなでイチニーサンシとはいかないんだ……それに、念道は俺だけが受け継いでる訳じゃあない。秋月流念道剣は俺の代で終わっても、念道そのものはどこかで誰かが続けてくれてるはずさ」

そう言い捨てて、連也はズボンのポケットに手をつ込み、去っていった。



女子生徒から黄色い声を浴びせられながら学校を出た連也は、一人家路につく。

「連也」

その背中に呼び掛ける声があった。

連也が振り向くと、ゼノヴィアがいた。

「連也、一緒に帰ろう」

パタパタと駆け寄るなり、ゼノヴィアは彼の腕に自分の腕を絡め、しなだれかかってくる。

豊満な胸が、連也の腕をホールドした。

はあ……。

連也は、疲れたように溜め息をついた。

「——何やってんですか、黒歌さん」

そう言われたゼノヴィアは、目をパチパチさせる。

「あれ？　なんでわかったの？」

言いながら、ゼノヴィアの顔に霞が掛かり、それが解けると、黒歌の顔になった。

「この前抱きつかれた時と、感触が同じだったの」

「いやん♪　もうアタシの抱き心地覚えてくれたのね、嬉しい♪」

黒歌は自分の胸を更に押し付けながら、空いた手を連也の股間に這わせる。そしてその手を払いのけられた。

「そーいう意味じゃなくてですね」

「どんな意味でもいいわよ。ね、もつとアタシの肉体、<sup>カラダ</sup>知りたくない？」

そう言つて、片手で器用に自分の制服のシャツのボタンを外していくと、大きく前を開いた。

真っ白な二つの膨らみが、深い谷間を造り出している。

ブラジャーは、なかった。

「……あのですね。『あなたの身体が目当てです』って面と向かって言われると、男でも二の足踏んじやうもんなんですよ」

「だってしよーがないでしょ、カラダ目当てなんだから……いいじゃない、カラダだけの関係。わかりやすいし、後腐れもないでしょ？」

言いながら、更にしつこく連也の股間に手を這わせようとする黒歌。

連也はその手を押さえて抵抗する。

と、その時——、

「フニャツ!?!」

突如、金色に輝く鎖が伸びてきて、獲物を捕らえるアナコンダめいて黒歌の身体に巻き付いた。連也と密着しているにも関わらず、二人の間のほんのわずかな、有るか無いかの隙間を縫って。

「黒歌……私が生徒会長を務める駒王学園の制服を着て、天下の往来

でソドムの市を開こうとはいいい度胸だな」

現れたのは、本物のゼノヴィアだった。エクス・デユランダルの刀身を鎖に変化させたのだ。

「ニヤハハ……お、お呼びじゃなかったみたいね……」

引きつった笑みを浮かべた黒歌は、ブルツと身震いすると、黒い子猫に化けて鎖の拘束から逃れ、そのまま逃走した。

「大丈夫か、連也」

「ああ、助かった……でもゼノヴィア、なんでここに？」

「今日は生徒会の仕事も早く終わったからね。またあのバッテリーセンターに、一緒に行こうと思って」

「そういう事か……ま、生徒会長さんのお誘いを無下に断る訳にも行かないしな。お供するよ」

「ありがとう。じゃあ行こうか」

ゼノヴィアはニツコリと笑うと、エクス・デユランダルを異空間にしまい、連也と並んで歩き出した。

## 生徒会長の決意

放課後。

ゼノヴィアは単身、新聞部の部室を訪れた。

一昨日新聞部から送られた、校内新聞『駒王通信』の最新号の原稿を携えて。

記事の内容に問題がないかどうかをチェックしたので、その回答を伝えるに来たのだ。

「羽黒<sup>はぐろ</sup>、私だ。生徒会長だ」

ドアをノックして呼び掛けると、中から「どうぞ」と声がした。入室すると、部室内には女子生徒が一人いた。彼女が新聞部の部長の羽黒だ。

長方形に並べた長机の端に着席している。

机の上には購買部で買った缶コーヒーとお菓子が置かれてあった。

「原稿のチェックが終わったので、結果を報告に来た」

ゼノヴィアはそう言って、羽黒の隣に座る。

「二つだけ、承認出来ない記事があった。それ以外はオーケーだ……まずは、これだな」

ゼノヴィアはそう言って、原稿の一部を机に広げた。

女子陸上部の着替えを覗こうとしたところを生徒会に見付かり連行される、一誠・松田・元浜の三人の姿を捉えた写真が、大きく載っていた。

「彼等を糾弾するのはいいが、イジメに発展する危険性が考慮される」「いいんじゃない？ 自業自得でしょ」

「まったくもってその通りなのだが、許せない相手になら何をしても良いという訳でもないだろう？」

「そりゃそーだけどさあー」

羽黒は不服そうだ。

「もう一つは、これだ」

次にゼノヴィアが広げたのは、彼女と連也の写真を並べた記事だった。

写真の横には、『みんなが選んだ、校内ベストカップル!』という見出しがあった。

「生徒会でも話題になっていたぞ——『そんなアンケート、いつやったんだ?』とな」

「あ、あははははは……」

羽黒は目をそらし、引きつった笑みを浮かべてごまかす。

「やはり捏造か」

「いやいやいやいや、百パー捏造って訳でもないんだよ? あたしもタツミンもお似合いだなーって思ってるし」

タツミンとは、新聞部の写真担当の辰巳という女子部員である。

「他には誰が言っているんだ?」

「え、えーつと……」

羽黒の目はこれ見よがしに泳いでいた。

ゼノヴィアは大きく溜め息をつく。

「いずれにせよ、君の周辺のごく一部という事だな? それを全校生徒の総意のように言うのは問題だ。ましてや、連也は今マスコミにも追われて大変なんだ。これ以上彼の平穩を脅かすような行為は、友人としても生徒会長としても見過ごせないな」

「ごめんなさい」

観念した羽黒は、素直に謝った。

「わかればいい。だが、この二つ以外は、相変わらず面白い記事ばかりだ。来月号も楽しみにしてるぞ」

「はあーい——ねえねえ、これはオフレコだけだよ」

「ん?」

「実際にゼノヴィアさんは、秋月くんの事どう思ってるの?」

羽黒は鼻息荒く質問してきた。

ゼノヴィアは「ふむ……」と少し考えてから、

「友人としての好意ならある。尊敬出来る部分もある。彼とはこれから友達でいたいと思ってるよ」



下校中の秋月連也は、通学路の途中にあるコンビニでスナック菓子

を買うと、店を出た。

道行く人の好奇の視線や黄色い声を掻い潜り、自宅へは向かわずに、町から離れていく。

スナック菓子を頬張りながら、しばらく歩き、町外れの森へと向かった。

森の中を突っ切る石畳の道を抜けると、古ぼけた寺があった。住む者も訪れる者もない、廃寺である。

連也は空になった菓子の袋をクシャクシャに丸めると、敷地の片隅にある錆びだらけの屑カゴに無造作に放り投げた。丸まった袋は、吸い込まれるようにカゴの中に入ってしまった。

「——もういいよ。そろそろ出てきなよ」

どこにもなく呼び掛けると、連也の背後の木陰から一人の男が出てきた。

眼鏡を掛けた金髪の、スーツ姿の美丈夫である。

連也は彼の顔をマジマジと見てから、首を捻った。

「うーん……どっかで見た事があるような……ないような……」

「初めまして、アーサー・ペンドラゴンといいます」

金髪の美丈夫は、静かに名乗った。

「チームD×Dのルフエイ・ペンドラゴンは、私の妹です」

「おお、それですか！」

連也は納得した。

「そっかそっか、ルフエイさんのお兄さんか。兄妹ならそりやあ似てるに決まってるわ——んで、そのお兄さんがどんなぐ（用で？）」

「最近、この駒王町で派手な祭りがあったそうですね……そしてその祭りの主催者たる聖剣使いオランダを倒したのが、あなただと聞いています」

「祭り、ね……」

連也の好むところではなかった。

そのような表現も、そのような表現を使う者も。

「そのオランダを倒したあなたの腕前、是非とも見せていただきたい」

「ごめん、今日はNOVAの日だから」

冗談混じりに拒否する連也の目の前で、アーサーの足下に光が生まれた。

その光の中から、一振りの長剣が柄を上にして現れる。

これこそが聖王剣コールブランドであった。

「嫌だとおっしゃるなら構いません。どうぞご自由に。こちらも自由に斬りかかるだけです」

言い終える頃には、アーサーは一足一刀の間境を越えていた。

光が、走った。

コールブランドの白刃が連也の首筋を狙う。

その太刀筋の上に、いつの間にか木刀が置かれてあり、斬撃を防いだ。

いつ出した？

どこから出した？

そんな疑問を浮かべつつも、アーサーはそこで一旦間合いを広げる——などという事はせず、立て続けに攻撃を加えた。

様々な方向から神速で迫る聖王剣を、しかし柄巻きを施した木刀は難なく受け止め、受け流していく。

アーサーは連也の足目掛けて聖王剣を振るった。

かと思いきや、剣尖が跳ね上がり喉を狙う。

が、これもフェイント。

アーサーは体を独楽のように一回転させて、胴を狙って斬りつけた。

回転によって勢いを増した一刀は——むなしく空を切った。

そこにあつたはずの連也の姿は、ない。

彼は、振り抜かれたコールブランドの刀身の上に立っていた。

人一人が乗っているのにも関わらず、アーサーの右手には愛剣の重さ以外、全く感じない。

「さあ、どうする？……こちらでお開きにしないか？」

「そんなもつたいたい事は出来ませんよ」

アーサーは落ち着き払って、答えた。

彼が手中の聖王剣を離すのと、連也が刀身を蹴って宙に飛んだのは、ほぼ同時だった。

アーサーは聖王剣を靴で蹴り上げる。

剣は回転しながら空中の連也を襲った。

連也、これを木刀で打ち払い、着地する。

着地した時、アーサーの手にはコールブランドが舞い戻っていた。

(あれ?)

連也はいぶかしんだ。

コールブランドは、アーサーのいる方とは真反対に弾き飛ばしたつもりだった。

アーサーの位置は変わっていない。

なのに、何故?

コールブランドは空間すら切り裂く力を有する。その能力で、離れた場所と場所をつなぐゲートのようなものも生成可能だ。

そのゲートを通って、主の手中に戻ったのである。

そしてこの能力は、当然、攻撃にも応用可能だった。

アーサーが眼前の空間を聖王剣で切り裂き、その裂け目に剣を差し込んだ。

直後、連也は真横に跳んだ!

直前まで彼のいた場所に、空中から聖王剣の刃が生えてきたのだ!

回避が遅れていれば、心臓を串刺しにされている位置であった。

「お見事。いつまでかわせるか、見せてもらいましょうか」

アーサーは口許に酷薄な笑みを浮かべて、矢継ぎ早に空間の裂け目に突きを入れる。

連也の足下から、真横から、頭上から、正面から——四方八方どころか、全方位360度から、コールブランドが空間を越えて襲い掛かる。

アーサーの動き自体は、正面の裂け目に対して剣を突き入れるだけなので、どこから刃が出てくるかは全く予測不可能だった。

連也は念によって高めた直感だけを頼りに、この魔性の転移攻撃をかわしていた。

かわしつつ、木刀の切っ先を左手で握る。

左の握り拳を柄の方へと滑らせると、刀身が消えた。

「エヤアッ！」

柄だけになった木刀を連也が横一文字に振り抜いた瞬間、アーサーは後ろに吹き飛んだ！

空間の裂け目を通して、聖王剣が押し返されたのだ。

(空間移動中のコールブランドを、打ち払ったというのか……！)

たたらを踏みつつも、尻餅をつく無様だけは回避したアーサーは、そう理解した。

口角が、更に大きく上がった。

「なるほど……念道とはこれほどのものなのです……」

「帰って宿題やんなきゃだから、今日はこの辺で勘弁してくれないか？」

「いえいえ、そんな不粋を言わず、もっと楽しもうではありませんか」

アーサーはにこやかに、しかし頑なに、戦闘続行を申し出た。

不意に、彼の足下に広がる影が面積を増した。

かと思いきや、アーサーは自身の影の中にその身を沈ませてしまう。一瞬にして、全身が影の中に沈み、影もまた消えてしまった。

己れの影に呑み込まれる瞬間、アーサーは木陰に立つ妹の、怖いくらい朗らかな笑顔を見た。

「……あれ？」

木刀を正眼に構えていた連也が、間の抜けた声を漏らした。てつきり、アーサーの新たな技が発動したのかと思ったのだ。

「お怪我はありませんか、連也様」

木陰からルフエイが現れ、トコトコと歩み寄る。

「あ、ああ……大丈夫……今のは、ルフエイさんが？」

「はい。私が魔術で創った疑似空間内に閉じ込めておきました。狂暴な魔物をいくつも閉じ込めてありますから、きっと兄も気に入ると思えますわ」

「助けてもらつたって何だけど、いいのか？ お兄さん、だよな？」

「ええ。可愛い妹にも会わずに、よその殿方の元へ決闘を挑みに行く

ような不出来な兄ですもの。これくらいの悪戯はさせてもらわなくては業腹というものです」

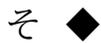
ルフエイはあくまでも、ニコニコと微笑んだままだ。

しかしその愛らしい笑顔の奥に、何やら怖いものを、連也は感じた。

「さあ連也様、帰りましょう。お近くまでお送りいたしますわ」

「アツハイ」

そんな訳だから、ルフエイの言われるがままに、彼女にエスコートされて家路につくのだった。



その日の夜。

リアス・グレモリーは自室でルフエイからの報告を受けて、大きく溜め息をついた。

デスクの上には、依然として書類の山が要塞めいて鎮座している。

「そういえば、いたわね……強い相手と戦えれば何でもいいってタイプが、D×Dにも……」

「兄が本当に申し訳ございません」

「あなたが謝る事ではないわよ、ルフエイ」

リアスは平謝りするルフエイに、優しく答えた。

「それより、アーサーが戻ってきているという事は、ヴァーリも駒王町にきている可能性が高いわね……何とかしないと」

何せ連也は、オルランドを倒して駒王町を救った恩人である。自分たちの存在を秘匿するため、敢えてマスコミの矢面に立たせた負い目もある。

リアスとしては、可能な限り援助してやりたいのだ。

「とはいえ、迷惑だからやめてくれなんて言ったら、彼等の事だからまますます連也くんに絡もうとするでしょうし……当面は、連也くんに護衛を付ける事にしましょう」

そこへ、ドアをノックする音がした。

「リアス様、ゼノヴィアです」

「どうぞ、開いてるわ」

リアスの返事に、パジャマ姿のゼノヴィアが「失礼します」と言っ

て入室した。手にはコーヒーカップを乗せたトレイを持っている。

「母上から、これを届けるようにと言われまして」

カップの中身は、一誠の母静江が入れてくれたアイスココアだった。

「ありがとうゼノヴィア」

リアスはトレイを受け取ると、ココアを早速一口飲む。

「今、廊下でそれとなく聞いてしまったのですが、連也に護衛を付けるとはどういう事でしょう。彼の身に、何か？」

「かくかくしかじか」

「まるまるうまうまで、連也を狙ってアーサーが……そういう事でしたら、護衛には是非私を。アーサーは聖剣使いです。他の者ではやはり分が悪いでしょう」

「それもそうねえ……それじゃあ、お願い出来るかしら？」

「喜んで」

ゼノヴィアは意気揚々と答えた。

（私が連也を守護まもらねば……生徒会長としても、友人としても……！）

少女の胸の内では、そんな使命感が炎と燃えていた。

## 生徒会長のとぎめぎ

「——という訳で、私は当分の間、連也を護衛する事になったので、報告しておく」

放課後、旧校舎のオカルト研究部を訪れたゼノヴィアは、開口一番そう告げた。そうなった経緯も説明する。

そこには部員一同が勢揃いしていた。

「確かに、アーサーやヴァーリ相手なら、聖剣使いの君の方が適任だろうね」

「ゼノヴィアさん、気を付けてくださいね」

祐斗やアーシアを始め、全員が事情を理解し、納得した。

たった一人を除いて。

「ちよつと待てよ！ 俺はそんなの聞いてないぞー！」

そういきり立ったのが、ゼノヴィアの王である一誠である。

「だろうな。昨夜リアス様が決めた事だからな」

「しれつと言うな！ 王の俺に黙ってるなんておかしいだろ！」

「だから、こうして報告に来たじゃないか。リアス様は私のかつての主で、君にとっては今も主だろう。そうおかしな事ではあるまい。それに、さつきも言ったようにアーサーが連也を狙っている。ヴァーリも同様である可能性も高い。誰かが付いていてあげなくてはね。では誰がいいかと言えば、私しかないだろう」

「そもそも、護衛自体いらないだろ。あんな奴ほつとけよ。アーサーやヴァーリだって、別に殺し合いをやるうつつて訳じゃないんだし」

「そうはいかない。こちらの都合でマスコミの矢面にさらしてしまっただ。彼の平穩は我々の手で守るのが義務であり、筋というものだろう」

「妹でありチームメイトでもある私の観点から言わせてもらいますと」

ルフェイが口を挟んだ。

「お兄様もヴァーリ様も、確かに殺し合いは望んでおりませんでしょう。ですが『お互いに全力で戦った結果、どちらかが死んでしまっ

も仕方がない』とは、考えていると思いますわ。しかも、そういった事態を最悪の結果ではなく、雨の日に外出すれば靴が濡れてしまうのと同じ程度の事と認識している節があります」

「ルフエイが言うのなら、まず間違いないだろうね。ではイツセー、そういう訳だから」

ゼノヴィアはそう言って退室した。



それから二、三日ほど過ぎたある日。

夕焼けに染まる駒王駅から、大きな男が出てきた。

サイラオーグ・バルである。

「遅くなってしまったな……まだいるといいのだが……」

ボソツとつぶやく男の足は、駒王学園へと真っ直ぐ向かう。

兵藤邸にでも、兵藤一誠眷属事務所にでも、ない。

駒王学園に、である。

何故なら、目的の相手のいる場所を知らないからだ。駒王学園に当たりをつけているのは、「リアスを先輩と呼んでいたから、たぶんそうだろう」という大雑把な推測からである。

サイラオーグの目的の相手とは、秋月連也であった。

サイラオーグは努力の人である。生まれつき魔力量が少なく、そのハンデを克服するため、地道に、愚直に、己を鍛え続けてきた。鍛練の日々は血反吐を吐くような厳しきであっただろう。その日々が、今の彼の強さとなっている。

そのサイラオーグを「とんでもない天才」と呼んだ、唯一の相手。

そう言われた次の日の鍛練の最中に、それが自分の使う闘気の事であろうと思いついた瞬間、サイラオーグは連也の事が急に気になり始めたのだ。

——俺が闘気を操る事を見抜き、そしてそれをとんでもない天才と評した男。ではその男は、どれ程の力を秘めている？

それが知りたくて知りたくて、たまらなかった。

たまらなくてたまらなくて、居ても立ってもいられず、こうして人間界の駒王町にやって来たのだ。

遠くに駒王学園の校舎が見え始める辺りで、サイラオーグの足が止まった。

上下を黒で統一した銀髪の少年が、前方を歩いていた。両手をズボンのポケットに突っ込み、サイラオーグと同じ方向に歩いている。

「ヴァーリ・ルシファー……？」

サイラオーグが相手の名をつぶやくと、相手もまた背後の気配に気付いて、まるでつぶやきに答えるかのように振り向いた。

「サイラオーグ・バアルか……兵藤一誠に会いに来たのか？」

「いや。お前こそ、兵藤一誠に会いに来たのか？」

「いや。彼とはいずれ、嫌でも雌雄を決する事になる。そう決着を焦る必要はない。ただ、奴と同等か、それ以上に興味深い相手が出てたのですね。居ても立ってもいられなくなったのさ」

「……奇遇だな。俺も、アイツと同等か、それ以上に興味深い相手が出て来た。そして、そいつに会いたくてここに来た」

「ほおー……もしかその相手とは」

「そうだ」

二人は同時に、同じ名前を口にした。

「秋月連也」

互いに同じ目的とわかり、サイラオーグは眉間にシワを寄せ、目を細めた。

ヴァーリは面白そうに、口角をキュツと上げる。

「ふん。どうやらたつた今、俺たちはライバル同士となったようだな」

「そのようだ……だが、お前ともいずれ拳を交えたいと思っていた。ちようどいい機会だ」

「拳を交える、か……届けばいいがな、そのノロマな拳が」

サイラオーグはハンマーのような拳を握り締めた。

ヴァーリはポケットに手を入れたまま、構えもしなかった。その身に宿す神滅具《ロンギヌス白龍皇の光翼》を顕現させようともしない。

しかし体内で、無限にも近い膨大な魔力が高まり、充実していくのが、サイラオーグには感じ取れた。

(存外、いやらしい男だな……)

ヴァーリの意図を読み、サイラオーグは胸の内毒づいた。

神セイクリッド・ギア器は使わず、圧倒的な魔力量をもって彼を屈服させるつもりなのだ。ヴァーリにしてみればただの気まぐれ、たまには神セイクリッド・ギア器なしで戦ってみようかと思つた程度だが、その気まぐれが、サイラオーグの闘志を激しく燃え上がらせた。

コオオオオオツ！

サイラオーグの呼吸音が、空気を震わせた。

自己鍛練の中で自得した、闘気を高める呼吸法だ。

鎧めいた筋肉に覆われた体から、高まつた闘気が金色の炎となつて立ち昇り、獅子を形作る。

ヴァーリの体からも魔力がほとぼしり、龍を形作つた。

両者の間の空気がビリビリと震え、陽炎めいて歪んでいく。二人の放つ圧がぶつかり合い、より大きな圧となつてとどまっているのだ。

その圧に耐えきれず、道路や壁に亀裂が走つた。

不可視のエネルギーの圧が渦を巻き、ますます強く、大きく、激しくなつていく。

爆発寸前にまで高まつた時、何か小さな棒状の物が、そのエネルギーの中に投げ込まれた。

カツツと音を立てて、それはアスファルトの地面に突き刺さる。

瞬間、風が巻き起こつた。

サイラオーグとヴァーリの放つエネルギーが散らされて、消滅する。

地面に刺さっているのは、一本のボールペンだった。

「復旧作業が始まったばかりなんだ。これ以上壊さないでくれ」

そう言ったのは、二人が探していた相手——秋月連也。その傍らには、ゼノヴィアがいた。

「何をピリピリしてるのか知らないし、知りたくもないけど、六十分一本勝負ならよそでやってくれよ」

「秋月連也……」

サイラオーグは闖入者の名前を思わずつぶやく。向こうからやって来るとは、願つてもない事だった。

彼のつぶやきを、ヴァーリは耳聴くみみでと聞き付けた。

「ドウレンダナ使いのオルランドを倒したというのは君か……うちのアーサーも世話になったそうだな」

「俺は気にしてないから、そっちも気にしなくていいよ。別にお礼とかお詫びとか本当にいらさないから」

「そうはいかないな。どうだ、近くに美味しいラーメン屋がある。そこで奢らせてもらえないか」

「ラーメン……？」

連也が反応した。彼はラーメンが好きなのだ。

「騙されるな連也。そう言つて人気がない所へ連れて行って、戦いを挑んでくるような奴だぞ、こいつは」

ゼノヴィアがクイクイと連也のブレザーの裾を引っ張り、忠告する。

「バレたか」

ヴァーリは悪びれもせず、ヒョイツと肩をすくめた。

ゼノヴィアは大きく溜め息をついた。

「ヴァーリ……お前は今は、義理とはいえオーデイン様の息子だ。軽率な行動はお前を息子として迎え入れてくれたオーデイン様の名誉を傷付ける事になるんだぞ？」

「心配するな、デユランダル使い。俺のような若造が跳ね回つたくらいで傷付くほど、アースガルの主神の名誉は安くはないさ。そもそも、この駒王町は特別な場所だ。それを守り、救った英雄に興味があるのは、悪い事か？」

「お前の興味は、相手がどれだけ強いかだけだろう」

「当然だ。男は女以上に強い者に惹かれる。強者を見れば、挑まずにはいられないのさ——なあ、サイラオーグ・バアル」

ヴァーリは唐突に、サイラオーグに話を振る。

サイラオーグは、沈黙をもって肯定した。

「君はどうだ、秋月連也。俺も彼も、アーサーに優るとも劣らぬ実力者だ。ちよつと力比べをしたくならないか？」

「興味ないね」

連也は一ミリ秒の間も置かず、即答した。

「今俺が考えてるのは、早く帰って宿題を終わらせないといけないなって事くらいさ。ちゃんと期日までに提出しないと、怖い先生にお尻ペンペンされちゃうからな」

冗談混じりに言うと、ゼノヴィアに「帰ろう」と呼び掛けて、さつさと歩き出す。

彼の背中を見たヴァーリは、スツと目を細めた。その美貌に、鋼のような暗く冷たいものが浮かぶ。

右の拳をグツと握った瞬間、連也が振り向きもせずと言った。

「やめときなよ。そっちの手でラーメンが食べられなくなるぜ。少なくとも、明日の朝までは」

その言葉に、ヴァーリとサイラオーグは辺りを見回して、何か背後を確認出来る鏡のような物でもあるのかと探した。

しかし、そんな物はどこにもなかった。

その間に、連也は「ちよつと失礼」と言つて、ゼノヴィアの腰に腕を回して抱き上げた。

そのまま歩き出すと、歩調はそのままであるにも関わらず、まるで見えないベルトコンベアーで運ばれるかのように、二人はどんどん遠ざかり、曲がり角の向こうに消えてしまった。

サイラオーグが、嘆息混じりに言った。

「……振られたな、お互い」

「ああ」

ヴァーリはただ、苦笑した。だが、獲物を逃がした怒りは湧いてこなかった。

サイラオーグの方を向き、険の取れた柔らかな微笑を浮かべる。

「ラーメンでも食いに行くか。奢るぞ」

「うむ」

二人は並んで歩き出した。先程までの緊迫した空気は、もはやなかった。

◆ 角を曲がってからしばらく歩いてから、連也は抱き上げていたゼノ

ヴィアを下ろした。

「いきなりごめんな。お前一人を置いていく訳にもいかないから、こ  
うさせてもらった」

「あ、ああ……それは構わないが……今のは、何だったんだ？」

ゼノヴィアは連也の不可思議な歩行について尋ねた。

「ああ、あれは縮地しゆくちって言って、念道の技の一つだ」

「しゆくち……不思議な技だ……でも、ちよつと面白かった」

「そっか、そりや良かった。で、これからどうする？ 宿題があるのは

本当だから、俺は真つ直ぐ家に帰る予定だけど」

「では、家まで送ろう。私は君のボディガードだからね」

「正直、護衛もいらんだけどな」

「そうはいかないさ。オルランドの件で、リアス様は君に恩義を感じ  
ている。少しでも君の助けになりたいんだよ。それは、私も同じ気持  
ちだ」

「そっか……じゃあさ、せめてボディガード代えるよう、先輩に言っ  
てくれないか？ 男だったら誰でもいいから」

「私では不服か？」

「うん……」

連也はガシガシと頭を搔いた。

「不服じゃないし、ゼノヴィアと一緒に居られる時間が増えて嬉し  
いってのもあるんだけど……俺個人の、つまらない見栄さ。女の子に  
対しては、守られる側じゃなく、守る側でいたいんだよ」

「ほう？ つまり、私を守りたいという事かい？」

「うん、まあ、そんな感じ」

「女性の社会進出めざましいこのご時世に、いささか時代錯誤な考え  
方だね」

「ほつといてくれ」

ムスツと膨れる連也は、幾分幼く見えた。

「あいにくと、そんな理由では護衛の交代は認められないと思うよ？

我慢してくれ」

「へいへい、仰せのままに」

これ見よがしにおどけた言い方で、連也は答えた。  
それから二人は並んで歩き出し、桂馬川区の住宅街で別れた。

(俺は、何を言ってるんだろう……)

ゼノヴィアの背中を見送りながら、連也はさっきの自分の言葉を思い返し、恥ずかしくなった。

ゼノヴィアと一緒に居られる時間が増えて嬉しい。

ゼノヴィアを守りたい。

本当に他意はなく、自然と口をついて出た言葉である。

だが、思い出すと無性に恥ずかしくてたまらなかった。

ゼノヴィアが変な意味で受け取ってはいないか、不安でもあった。

一方のゼノヴィアも、胸中は決して穏やかではない。

守りたいなどと言われたのは、初めてだった。

腰に腕を回されて抱き上げられた時の、互いの着衣越しに感じた連也の肉体のたくましさに、驚いてもいた。

思えば、男性からそのような行為をされたのもまた、初めてであった。

(イツセーにさえ、してもらった事はなかったな……)

ゼノヴィアの方からアプローチする事は何度もあったが、一誠の方から抱き締めるような事は全くない。

初めての経験に、ちよつぴり胸がざわついていた。

## 山ごもり

土曜日。兵藤一誠は朝から自宅のトレーニングルームで、筋トレに勤しんでいた。タンクトップと学校指定のジャージのズボンという格好である。

魔力をこめる事で重さをいくらでも増やせる、冥界製のダンベルを両手に持ち、腕を曲げたり伸ばしたりしている。

一誠の体は、全体のシルエットこそ細くはあるが、同年代の男子に比べれば遥かに鍛え込まれている。腕を動かす度に、皮膚の下で筋肉が動いた。

しかしその表情からは、今一つトレーニングに集中出来ていない事がうかがえた。

理由は、ゼノヴィアだ。いつもなら一緒にこの部屋でトレーニングしているのだが、今日はいない。先程、「連也の様子を見てくる」と言ってお掛けたばかりだ。

「あんな奴ほつとけって。あいつの腕ならそう簡単にはやられないだろうし、それにあいつだって、戦う相手がいて喜んでるかも知れないぜ。いい修行になるって言ってるさ」

一誠はそう言ったが、ゼノヴィアは聞き入れなかった。

「たく、俺はあいつの王で、あいつは俺の眷属だつてのに……」

『そんな理屈だけで、心は縛れんという事だな』

一誠の左腕から、声が響いた。《赤龍帝の籠手》に宿る赤龍帝ドライブだ。

『お前だって、主従関係だけでリアス・グレモリーに従っていた訳ではあるまい』

「そりゃ、そうだけどよ……ちよつと前まではいつも一緒だったんだぜ？　それが最近急に冷たくなって……納得出来るかよ」

『人の心はうつろいやすいものだ。ましてや、女心は秋の空などという言葉もあるくらいだからな、なおさらだろう』

「……ゼノヴィアが、俺じゃなくてあいつを好きになつてるつてのかわかるか？」

それは聞き捨てならない事である。一誠の声も、知らず荒くなつた。

『さて、まだそこまではわからんが……そんなに心配なら、学校での言動を少しは改めて、ポイントを稼いでおく事だ。本当にゼノヴィアがお前に愛想を尽かす前にな』

忠告するドライグの声音には、からかうような響きがあった。

「改めるったって、そもそも前は覗きとかやっても、あいつは何も文句言わなかったじゃねえか」

『一生徒と生徒会長では立場が違う。立場が変われば考え方も変わるだろう』

「とにかく！ 俺は秋月みたいな心の狭い奴なんて認めない！ 確かに町を救ってくれた恩はあるけど、それはそれ、これはこれだ！ もしいつがつまらない勘違いでゼノヴィアに手を出すようなら、絶対に許さねえ、ぶっとぼしてやる！」

『それはやめておけ。お前がぶっとぼされるのがオチだ』

相棒のつれない返答に、一誠は耳を疑った。

「な、なんでだよ」

『秋月連也にあつて、お前にはないものが一つある』

「何だよ」

『積み重ねだ』

「——はあ？」

一誠は間の抜けた声を上げた。

「何言つてんだよドライグ。自分で言うのもなんだけど、俺がどれだけ基礎鍛練を積み重ねてきてるか、お前も知ってるだろ。実戦経験だってあるし」

『確かに、お前がここ一年ちよつとで重ねてきた経験の密度は、歴代の赤龍帝と比べても優るとも劣らん。だが、しよせん一年は一年だ。しかしあの秋月連也は、お前が何も知らない普通の学生だった頃から、己れを鍛え続けてきた。恐らくその年月は十年くらいはあるだろう。土台の厚みが違う』

「やってみねえとわかんねえだろ！」

『……まあ、それはそうだ』

実際、一誠が格上の相手に勝利するのを、ドライグは誰よりも間近で見てきた。

最強無敵の二天龍たるドライグやアルビオンですら神セイクリッド・ギア器——  
言い方は悪いが——人間に使われるだけの道具と成り下がってしまった。

確かに、戦いというものは何が起こるかわからないのだ。

『どの道、今はおとなしくしている事だ。リアス・グレモリーも秋月連也に好意的だしな。下手にちよつかいを出せば、どんなしっぺ返しをくらうかわからんぞ』

「それが一番ムカつくんだよおおおおおッツ!!」

一誠がにしている事に触れられて、一誠はたまりかねて吠えた。

「イツセー様、大声を出さないでください」

その背中にそう呼び掛けたのは、レイヴェル・フェニックスだった。「ドライグ様とお話なさっておられたのはわかりますけれど、端から見るとちよつと怖い光景ですよ」

「あ、ああ、悪い悪い。それより、何か用か？」

一誠がそう尋ねたのは、レイヴェルの服装がいつものドレス姿であり、なおかつA4サイズの封筒を手にしていたからだ。明らかに、トレーニングのためにこの部屋を訪れた訳ではないとわかる。

「はい。以前イツセー様がおっしゃっていた強化合宿のための施設の事で、ご報告を。」

県境に、条件に見合う場所がありましたので、その周辺の山林もろとも購入しました」

さらりと物凄い事を言いつつ、レイヴェルは封筒を開けて、中の書類の束を手渡す。

一誠が受け取ると、それは場所を示す地図と現地の写真であった。もう一枚は、建物の見取り図である。

「宿泊のためのペンションも建設中です。三階建てで、一ヶ月ほどで完成するかと」

「そうかー……山ごと買っちゃったかー……」

今後も、どんな強力な敵が現れるかわからない。

そうでなくとも、一誠もゆくゆくは自分の眷属を率いて、リアス・グレモリーの眷属としてではなく独立した一上級悪魔として、レーディングゲームに参加する。

その時に備えて、眷属とみんなで強化合宿を行える場所が欲しいとリアスやレイヴェルに相談した結果が、これである。

まさか山とその周辺の土地まで買い占めるとは思わず、二人の思いきりの良さに、一誠は言葉もなかった。

「イツセー様はまだ高校生ですから、名義はグレモリー家にしてあります。とは言え、あくまでも持ち主はイツセー様です。お暇な時にも、せめて一度は視察なさってください。お声を掛けてくだされば、私が案内いたしますわ」

「ああ、ありがとうレイヴェル」

一誠はレイヴェルに礼を言うのと、ペンションの見取り図を見つめる。

あくまでも強化合宿のための施設だが、自分の持ち物として別荘が出来るのかと思うと、ちよつとワクワクしてしまうのである。



その頃、ゼノヴィアは山の中にいた。

川に沿って上流を目指す内に、舗装された道路から離れ、森の中に入り、次第次第に山に入ってしまったのだ。

水色のカッターシャツとタイトジーンズ、スニーカーという町歩きのような格好で。

肩に下げたショルダーバッグも、中身は財布と携帯電話、あとはハンカチとポケットティッシュくらいだ。

そんな軽装で何故このような所にいるのかと言うと、連也を探しているからであった。

秋月家を訪れたゼノヴィアは、連也の義理の叔母にあたる秋月克美に出迎えられた。

「ごめんなさいね。連くんは昨日から山にこもってるの」

克美は隠そうという素振りすら見せず、素直にそう言った。

特に口止めはされていないからだ。

「山ご？ キャンプでしようか？」

「さあ、そこまでは……あ、でも、確か角行山かどゆきやまに行くって言ってたわね」

「そうですか……どうも、ありがとうございます。失礼します」

ゼノヴィアは克美にペコリとお辞儀をした後、着の身着のままで行山へと向かった次第である。

ゼノヴィアの記憶では、そこにキャンプ場はなかったはずだ。実際に行ってみたが、やはりなかった。

となれば野宿であろう。

どの道、水場の近くにいたはずだ。

軽装のままなのは、万が一迷っても、空を飛んで道を探すなり転移魔法陣で兵藤邸までテレポートするなり、帰る方法があるからだった。

源流にかなり近付いているらしく、川原の石は大きくゴツゴツとした物が目立ってきた。

そんな時、頭上から声がした。

「よう、何してんだゼノヴィア」

のんびりした声音に、思わず上を仰いだゼノヴィアは、近くの木の高い枝の上に立つ、秋月連也の姿を捉えた。駒王学園のジャージに身を包み、ウエストポーチを腰に巻いていた。

「やあ、連也。ご家族から、君がこの辺で山ごもりしていると聞いたので、ちよつと様子を見に来たんだ」

『ちよつと』で来るような場所じゃないんだけどな」

ぼやく連也であったが、他ならぬ彼こそ、そんな場所にちよつと友達の家泊まってくるような感覚で山ごもりしているのだ。他人の事はとやかくは言えまい。

連也は木の枝から飛び降りて、岩の上にフワリと着地した。

「まあいいや。もうちよつと上の方で野宿してるから、そこまで案内するよ。お茶くらいは出せるから、休んでいきな。せっかくここまで来たのにUターンってのも嫌だろうしな」

「ああ、ありがとう連也」

ゼノヴィアはそう言うと、更に上流を目指して歩き出す連也の後を追った。

元々エクソシストとして鍛えられ、悪魔に転生する事で更に強化された少女の身体能力は、子供用のベッドほどもある岩すら物ともせずに進んでいく。

先導する連也は、いざとなれば彼女を背負ってやるつもりであったが、その必要もなさそうに安心すると同時に、感心もした。

五分ほどで、拓けた場所に着いた。

石で組んだかまどから、煙が立ち上ぼっている。飯ごうが火に掛けられていた。テーブル代わりであろう傍らの平らな石の上には、プラスチック製のコップが伏せて置かれてあった。

そのそばに、テントがあった。

細木で組んだ骨組みに、枯れ草や枝葉を束ねた物を掛けただけの、簡素なテントであった。

闇に強い悪魔の視力で、テントの中の暗がりにはリュックサックが置かれてあるのが、ゼノヴィアにはわかった。

「ほら」

連也は飯ごうの中身をコップに注ぎ、ゼノヴィアに差し出した。

飯ごうの中身は沸かしたお湯だ。その湯に、細長い物がたくさん入っている。

松葉だ。

松葉で作ったお茶であった。

「熱いから気を付けてな」

「いただきます」

ジーパンが汚れるのも構わず地面に体育座りしたゼノヴィアは、フーフーと息を吹き掛けて冷ましながら、少しずつコップのお茶をすすする。

香りも味も、普通のお茶と変わらなかった。

松はだいたいの山にある木で、見分けもつきやすい。

ビタミンやミネラル、カルシウムなども含まれている。

連也が山ごもりの際に必ず作る物であった。

「君は、ここで修行してるのか？」

「うんにゃ」

連也はあつさり否定した。

「修行ってほどじゃあない。ただ二、三日山の中で過ごすだけ。稽古は時間があればやるけど、ここで何か特別な事をする訳じゃない。でも、何て言うか、ここで暮らすだけで、ちよつと感覚が冴えて、頭の中がシャキツとしてくる……そんな気がする」

「そうか。アーサーやヴァーリたちは来なかつたか？」

「この山で会ったのは、ゼノヴィアだけだ——骨折り損だったな」

「そうでもないさ。君が無事だとわかつただけでも充分だ。美味しいお茶ももらえたしね」

そう言つて、ホウツと息をついた。

チラリと草木で出来たテントの中の荷物を見る。

やはり、荷物はリュックサック一つだけだった。

「食糧はどうしてるんだ？」

「一応、チョコレートを二つ三つ持つてきてるけど、基本的には現地調達だな。蛇とか虫とか」

「寝床は？」

「そこにあるだろ」

連也は草木のテントを顎で指し示した。

「いや、そうではなくて、毛布とか寝袋とか」

「出入口に蓋をして瞑想してれば平気だ。松葉のお茶で体も暖まってるし、それでも足りなきや、火にくべた石をタオルにくるんで腹に巻いとけば、二泊三日くらいなら大丈夫だ」

「……本当に、野宿なんだね」

「だからそう言ってるだろ」

連也はケラケラと笑った。

実際、念の力を行使すれば道具の不足はある程度補える。

ゼノヴィアには言っていないが、今回の山ごもりに限れば、実は食事は入山してから一切取っていない。腹が減らないのだ。それでいて、体力は全く衰えない。松葉のお茶は、単に生活が味気なくなるので作っ

てるだけであり、喉の渇きすらなかった。

一時的にでも王冠のチャクラを開いた影響であろうと、連也は考えている。

ゼノヴィアに関しても、そうだ。

松葉のお茶を作ってる最中に、不意に人の気配を感じた。

ハイキングコースですらないこんな場所で、もしや遭難者かと思いい、枝から枝へと飛んでいき、様子を見に行くと彼女がいた。

同じ建物の中ならともかく、徒歩で五分は掛かるほど遠くにある気配を感じしたのは、初めてだった。

二人はそれからしばらく、ポツポツとはあるが雑談に興じた。

日が傾き始めた。

空はまだ明るいのが、木々に日光が遮られるせいか、山では夜の訪れも早い。暗くなる前に、連也はゼノヴィアを山の麓まで送った。

「じゃ、また学校でな」

駒王町に続く道路でそう言ってゼノヴィアと別れた連也は、木から木へと跳び移り、あつという間に山の中へと消えてしまう。

「……ふふつ、まるでニンジャだな」

ゼノヴィアは何だか可笑しくなって、笑ってしまった。

◆

その日の夜。

連也は焚き火のそばに座り、星を眺めていた。

川の上空は木の枝も伸びておらず、空がよく見える。

町の明かりで掻き消される事もない山中での星空は、実に明るく、美しい。

山ごもりの際の、ちよつとした楽しみだ。

しかし、今はちよつぴり不満だった。

一人で眺めるのが、ちよつぴり物足りなかった。

(ゼノヴィアにも見せてやりたいな……)

そう思う。

ゼノヴィアが隣に来てくれないのが、不満だった。

ゼノヴィアがこの場にはいないのが、寂しかった。



## アルバイト

サイラオーグ・バアルは部屋の片隅に置かれた小さな机に、大柄な体を折るようにして着席していた。

机の上には書類の山があり、その一枚一枚に、彼は丁寧にスタンプを押していく。

スタンプはグレモリー家の紋章が刻まれていた。

先日ヴァーリ共々道路や壁に亀裂を走らせたペナルティとして、リアスに捺印の仕事を押し付けられたのだ。

鍛え上げた巨体を縮こまらせて、せつせとスタンプを押すその姿には、愛嬌と侘しさが同居していた。

チラリと横目で見やると、この労働を課した従姉妹の机には、より大量の書類が要塞の如くそびえている。あれでもかなり片付いた方らしい。

その書類の要塞の向こうで、リアス・グレモリーはスマホで誰かと話をしていた。

「……そう、それであなたの力を借りたいの。もちろんバイト代は弾むから、ね？ ……ありがとう、それじゃあ明日の晩、お願いね。ゼノヴィアを迎えに行かせるから」

そこまで言うと、リアスは電話を切った。

「……電話の相手は、秋月連也か？」

サボると鞭が飛ぶので捺印する手は止めず、サイラオーグは尋ねた。

「ええ。はぐれ悪魔のシュベルトがこの近辺に逃げ込んで来たらしくて、討伐命令が下ったの」

リアスの返答に、サイラオーグの手が止まった。

「お前の言うシュベルトとは、あの『生まれながらの聖剣使い』か」

「そうよ。フレッド・ブラックスマイス《聖剣創造》を使う純血悪魔。駒王町の近くに逃げ込んだ……というより、こちらに来るよう誘導されたと言うべきかしらね」

リアスは答えながらデスクの下から乗馬鞭を取り出す。サイラ

オーグは慌てて作業を再開した。

思い描いた聖剣を具現化させる神セイクリッド・ギア 器 《聖剣創造》。シユベルトは下級とはいえ、純血悪魔でありながらそれを所有していた。

その力を以て成り上がろうと考えていたのだが、悪魔を殺す力を持つ悪魔である彼は、周囲から恐れられ、危険視された。

ついには領主である上級悪魔が自らやって来て彼を殺そうとしたため、抵抗。これを殺害。

以降、領主殺しの罪ではぐれ悪魔に認定され、追われる身となった男である。

「オルランド眷属のドルトーレも、純血悪魔でありながら《魔剣創造》ソード・パースを所有していたわ。祐斗の話だと、彼の前世は人間で、悪魔に輪廻転生した際に神セイクリッド・ギア 器が魂にくつついたままだったそうよ。シユベルトも同じかも知れないわね」

「それで、秋月連也に加勢を頼んだという訳か」「そういう事」

聖剣は物によって強弱に差はあれど、悪魔にとっては天敵である。どんなに弱い聖剣でも、かすり傷一つで大きなダメージとなる。

実際、兵藤一誠が紫藤イリナと決闘を行った時も、腹に受けた浅い一太刀で戦闘不能になっている。

悪魔にとつて聖剣とは、それほどの物なのだ。

「でも、あの子を呼ぶのは、他にも三つの理由があるの」「何だ?」

「二つ目はイツセーね。イツセーに連也くんの事を認めさせたいの。あの子ったら連也くんの事、妙に毛嫌いしてるんだもの。別に無理矢理仲良くしろと言うつもりはないけれど、嫌いだから何もかも認めないなんてダメよ。時には嫌いな人の力でも借りなくてはいけない事もある。相手の良いところや、自分にとつて有益な部分は受け入れる。イツセーには、そういう事を学んでもらいたいの」

リアスは言いながら席を立ち、サイラオーグが捺印した書類の山を受け取る。

「それと、二つ目はもつと単純に、連也くんの援助がしたいだけ。可能

な限り、あの子の助けになってあげたいのよ」

「惚れたか？」

バチツツ!!

サイラオーグの背中に、リアスの乗馬鞭が炸裂した。

「ふざけた事言ってるよ、ぶつわよっ」

——ぶつ前に言ってくれ、という至極真つ当な抗議は、あまりの痛さに出て来なかった。

「い、いいじゃないか……兵藤一誠とは違った魅力が、アイツにあるんだらう？ 二人目の夫として迎えるのもありと思うがな……種族の違いなら、イーヴィル・ピース悪魔の駒で転生させればいい」

「確かに連也くんの事は好きよ。でもそれは、祐斗やギヤスパー、ミリキヤスに対するのと同じ意味の好きなの」

「そうか……だが、それならそれで、眷属に迎え入れればいいだろう。ナイト騎士なんてどうだ？ 確か兵藤一誠とトレードして、空いているはずだろう？」

「無理よ」

リアスは肩をすくめた。

「何となくだけど……あの子は、きつと悪魔にはなりたがらないのではないかしら。念道は人間が生み出した、人間の技。連也くんはその念道を誇りに思い、念道に人生を捧げるつもりみたい……だからきつと、志半ばで倒れても、最期まで人間であろうとする……そんな気がするわ」

「そういうものか……」

「そういうものよ——ところで、次に勝手に手を休めたら剥ぐわよ？」  
「は、剥ぐって、何をだ？」

いつの間にか止まっていた手を再びせせと動かしながら、サイラオーグは尋ねる。

リアスは冷たい眼差しで答えた。

「かわ生皮よ」



上弦の月が、まるでこちらを見下ろす目のように見える夜だった。

兵藤一誠はイライラしていた。

はぐれ悪魔の討伐に、あのいけすかない秋月連也の力を借りるとりアスが言い出したからだ。

しかも主である自分の許可もなしに、ゼノヴィアを彼の迎えに行かせたからだ。

ゼノヴィアもゼノヴィアで、その命令に妙に素直に従うものだから、余計にイライラした。

集合場所は、はぐれ悪魔が潜伏している廃工場から少し離れた河川敷だ。ゼノヴィアの転移魔法陣で、ジャージ姿の秋月連也が彼女と一緒に現れた。

ゼノヴィアが連也の隣に立っているのも気に入らないが、逆隣に何故か黒歌がいて、腕まで組み、豊満な胸を押し付けているのを見て、一誠は怒鳴り散らしたくなった。

「こんばんは連也くん。今夜はよろしくね」

リアスがにこやかに語りかけ、連也もペコリとお辞儀で答える。

他の面々も、連也が来てくれて、どこか嬉しそうだ。その面子の中に、何故かサイラオーグもいた。

リアスが、連也に振り払われてもしつこくくつついてくる黒歌に尋ねた。

「ところで黒歌、どうしてあなたも?」

「だってえ、ダーリンが心配だし」

「誰がダーリンですか」

連也が言いながら、黒歌の尻尾を引っ張ると、黒歌は「ふぎやっ!」と声を上げた。

「お揃いのようだな」

低い声が、響いた。橋の下だ。

一同が振り向くと、くたびれたマントを着た一人の男が立っていた。

焦げ茶色の短い髪で、年の頃は三十を少し過ぎたくらいか……もつとも、見た目は実際の年齢を知るのにはあまり参考にならない。

はぐれ悪魔にして、セイクリッド・ギア神器を所有する純血悪魔シユベルトであつ

た。

「はぐれ悪魔シュベルトね。自分からノコノコとやって来るなんて、  
どういうつもりかしら。投降するつもりなら殊勝な心掛けね」

「ねぐら時の周りを悪魔がウロチョロしてれば、近々討伐隊が送られて来る  
だろう事くらいわかる。だから、待っていた——返り討ちにするため  
にな」

リアスに答えるシュベルトの右手から、白い光がほとぼしかった。  
その光は形を変え、実体化する。

長さ30cmほどの柄に、左右に真っ直ぐ伸びた十字鰐。刀身は  
切っ先を備えた細身の両刃で、刃渡りは80cmほどか。

何の飾り気もない、簡素な作りの西洋剣である。

だが、その剣が現れた瞬間、連也を除く全員が怖気を震った。

「マジかよ……」

一誠が小さく呻いて、一步後ずさった。心なしか、去年の夏に紫藤  
イリナに斬られた腹がうずく。

創造系の神セイクリッド・ギア器で生み出された被造物は、どんなに精巧な物でも  
本物には及ばない。

《ソード・パース魔剣創造》と《ブレイド・ブラックスマイス聖剣創造》の両方を持ち、聖と魔の二つの力を  
併せ持つ聖魔剣を創れる祐斗でさえも、例外ではない。

だが、今シュベルトが目の前で創造した聖剣から感じる聖なる波動  
は、本物の聖剣と比べても何ら遜色のない物だった。事前情報がなけ  
れば、彼が本物の聖剣を取り出したのだとすら思っただろう。

祐斗が創造した聖剣の完成度を90くらいとすれば、シュベルトが  
創造した聖剣は99……いや、ひよっとすると100にまで達してい  
るかも知れない。

シュベルトは聖剣を正眼に構えた。

「全員で来るか？ それとも一人ずつか？」

「俺が」

連也が前に出た。

背中の襟口に右手を差し込み、引き抜くと、柄巻きを施した木刀『飛  
龍』が現れる。

破邪の念が高まり、白い光を放つ木刀を、連也もまた正眼に構えた。

——途端に、シユベルトが間合いを詰めて、鋭い突きを打った。

連也、これをサイドステップでかわす。

それを回し打ちの連撃が追い掛けた。

シユベルトの攻撃は鋭く、速い。連続攻撃のバリエーションも多く、予備動作おこりも小さい。その剣術は祐斗やゼノヴィアも感心するほどだった。

連也はそれを、文字通りの紙一重でかわしていた。端から見ているアーシアが、何度も『斬られた』と思って声を漏らすほどである。

不意に、連也の眉間に光点が灯った。

それは光輪となって回転しながら、輝きを強めていく。

霊的な力を司るチャクラを開放したのだ。

「虚仮脅しを！」

シユベルトは聖剣を下から斬り上げた。

バックステップでかわした連也の頬をかすめて、その聖剣が飛んでいった。すつぽ抜けたのではない。相手に向かって飛んでいくよう、わざと手放したのだ。

空になった両手には、すでに新たな聖剣が創造されて、握られている。それをシユベルトは渾身の力で打ち下ろした。

これに対し連也、前に踏み込みつつ身を沈め、シユベルトの懐に飛び込んだ！

木刀が腹部に柄まで突き刺さる！

しかし、背中から飛び出るはずの切っ先は、全く顔を覗かせなかった。

一瞬の静寂。

連也が木刀を引き抜くと、シユベルトがゆっくりとその場に倒れた。

聖剣は二本とも、粒子状に分解されて消滅した。

「終わりました」

立ち上がった連也が、木刀を背中にしまいつつ言った。

アーシアが駆け寄り、シユベルトの傷の具合を見たが、そもそも傷

などついてなかった。思わず安堵の息が漏れた。

次いで連也の方を振り向く。

「連也さんは、お怪我はありませんか？」

「ああ、大丈夫」

答える連也の声は、決闘の直後とは思えないくらいのにびりしていた。

そこへリアスがやって来る。

「お疲れ様。お見事ね、連也くん」

「ドーモ」

「だけど、どうして彼を殺さなかったの？ あなたの力なら簡単なはずよ？」

「あれ？ 殺しちゃまずいから、俺を呼んだんじゃないんですか？」

連也は小首を傾げた。

「あら、そんな事言ったかしら」

「言ってませんけど、殺してもいいんなら、先輩たちならいくらでもやりようはあるでしょ。それじゃまずいから、俺にやらせたんだと思ってましたよ」

その言葉に、リアスは満足げに微笑んだ。

生け捕りを厳命された訳ではない。

しかしシユベルトは、持つて生まれた望んでもいない能力ゆえに迫害され、ただ己れを守ろうとした結果追われる身となった。

持つて生まれた神セイクリッド・ギア 器ゆえにつらい思いをした者たちを知っているだけに、リアスは彼に対して同情的だったのだ。

無論、罪は罪として償わなくてはならないが、命を奪うほどではないとも思っていた。

連也を呼んだ理由の三つ目が、これであった。

「あー、ちなみにそいつの『セイクリッドギア』ってやつ、一週間くらいは使えなくしてありますんで」

「……そんな事も出来るの？」

「みたいです」

どこか他人事のような、呑気な返事であった。

王冠のチャクラは依然として開けないが、念の威力は日に日に高まり、しかしそのコントロールも比例して精度が上がっていく。悪魔を殺さず、その異能だけを封じるのも可能なほどに。

◆ 連也は、己れの確かな進歩を感じ取っていた……。

一同はその場で解散した。

リアスは拘束したシユベルトを魔王庁へ引き渡しに行き、朱乃と祐斗がお供をした。

駒王町を共同管理する立場上、一誠もレイヴェルを連れて同行する。

他の者はロスヴァイセの転移魔法陣で、兵藤邸へと移動した。

連也は——夜風に当たりたくなかったので、歩いて帰る事にした。

ゼノヴィアがそれに付き添った。

二人は肩を並べて、川沿いの夜道を歩く。

「今夜はありがとう、連也。私からも改めて礼を言わせてもらおうよ」「気にするなよ。困った時はお互い様だろ」

「そうか。それなら君も、困った事があつたらいつでも我々を頼ってくれ。リアス様は君の事を好ましく思っているし、私だってそうだ。私に出来る事やしてほしい事があつたら、何でも言ってくれ。君の頼みとあらば、何でもするぞ」

「……んー、じゃあその時が来たら、甘えさせてもらうかな」

ゼノヴィアが発した『何でもする』の一言に一瞬うずいた下心を抑え付け、連也は軽い口調で返した。

二人の足が同時に止まった。

前方に大きな人影がそびえ立っていた。

サイラオーグである。

「あれ？ どうしました？」

「何か忘れ物か？」

「いや。秋月連也、お前を待っていた」

「俺？」

連也は自分を指差して、聞き返す。

「うむ。やはり、自分に嘘はつけん。この気持ちを抑えるなど、到底出来ん」

サイラオーグはおもむろに、ズボンが汚れるのも構わずその場に正座をした。

「これがこの国での最大の礼儀だと聞いた」

そして、両手を地面につける。

「秋月連也殿。どうか一手、お手合わせをお願いしたい」

サイラオーグはそう言っ、深々と頭を下げた。

「どういうつもりだ」

問い詰めたのはゼノヴィアである。

「わかっている。彼が今、俺たち悪魔の一方的な事情で大変な状況なのは、俺も大いに理解している。リアスにも散々説教されたからな……だが今も言っただよように、自分に嘘はつけん。先程のシュベルトの戦いを見て、この想いはますます強くなり、もう抑える事など出来ん……この気持ち、まさしく愛だツツ!!」

「勢いだけで喋るの、やめた方がいいですよ」

冷静に言いつつも、連也は三歩後ずさった。

冷静に突っ込まれて、サイラオーグもちよっぴり恥ずかしくなつて、それを誤魔化すように立ち上がった。

「おかしな事を言っすまない。だが、俺は真剣だ。

秋月連也。リアスから聞いたが、お前の使う念道というのは、大元は“気”にあるのだろうか？」

「ええ」

「俺もまた、根元を同じくする力“闘気”を操る。“念”と呼ばれる力、それを操る念道、どれほどのものなのか、後学のためにも是非確かめたいのだ。この身で」

サイラオーグは自分の胸に手を当てた後、グツと握り拳を突き出した。

「そして、この拳で」

「……………」

連也は溜め息をついた。

頭をガシガシと搔く。

「そこまで熱烈なラブコール送られたら、断りづらいなあ……」  
「では」

「今度の日曜日にも。場所はそっちで都合つけてもらえますか？」  
「了解した。感謝する」

サイラオーグは嬉しそうに言うと、握手を求めた。  
連也がそれに応じる。

やはり、大きな手をしていると感じた。

## それぞれの一週間

月曜日の夜。

兵藤一誠眷属事務所の地下にある、トレーニングルーム。

サイラオーグはタンクトップとトレーニングパンツ姿で、同じ服装の兵藤一誠と打ち合っていた。両者とも、拳にはオープンフィンガーグローブを付けている。

拳と蹴りの激しい応酬が続き、相手の打撃がヒットする度に、その衝撃で汗が飛び散った。

一誠はサイラオーグの顔や腹目掛けてフックの連打を繰り出した。サイラオーグは丸太のような太い腕でこれを受け、連打を打ち終えるタイミングに合わせてローキック。鉞のような一撃が一誠の左太股の側面を直撃し、物凄い衝撃がほとばしって、一誠は顔を苦痛に歪めた。

「ふんっ！」

そこへサイラオーグ、破城槌めいたボディアッパーを叩き込む。一誠の体がくの字に曲がり、数センチほど宙に浮いた。

「おおおっ！」

更に獅子吼を上げながらの顔面ストレート！

まともに食らった一誠は一直線に宙を飛んで、後方の壁に叩き付けられ、床に落っこちた。

「それまでですわ」

隅のベンチに座って観戦していたレイヴエルが、試合終了を告げた。

隣に座っていたアーシアが、一誠にパタパタと駆け寄り、トワイライト・ヒーリング《聖母の微笑》で一誠の傷を癒していく。

レイヴエルはサイラオーグのそばに歩み寄り、彼の顔を見上げた。「相変わらず見事な剛力ですこと。ですがサイラオーグ様、今日はいつになく熱が入っておられましたわね？」

「む、すまん……秋月連也と試合をする事になってな。つい……」

サイラオーグは決まりが悪そうに、人差し指で頬をポリポリと掻い

た。

「秋月と試合って、ホントですか？」

今のスパーリングの傷をすっかり癒してもらった一誠は、アーシアに礼を言っていると、サイラオーグに尋ねる。

「ああ。奴の使う『ねんどう』という技は、力の根源は俺の闘気と同様、生物に宿る『気』にあるそうだからな。となれば、こだわらん訳にもいくまい。それにこの前のシユベルトとの戦いも見事だった……それでどうにも、自分の気持ちを抑えきれなくてな」

「そうなんですか……頑張ってください！俺はサイラオーグさんを応援しますよ！絶対にあの野郎をぶちのめしてやってください！」

「無論やるからには勝つつもりだが……どうした兵藤一誠。ずいぶんと秋月を嫌ってるな」

「アイツ、なんか気にくわないんですよ。悪い奴じゃないんだろっけど、心が狭いっていうか自分勝手というか……俺が念道教えてくれて頼んでも断るし……何より」

一誠は、グツと拳を握り締めた。

「アイツは、自分が修行してるのはあくまでも自分自身のためだと言いつつ……まあ、それはいいとしても……俺は今まで、リアスやアーシアのために、仲間のために、誰かのために戦ってきたし、強くなった。でもアイツはそれを、危険な事だつて言い捨てたんです。そんな事言う奴、好きになれって方が無理ですよ」

「耳が痛いな。俺とて、あくまでも己れの力を認めさせるために鍛え続けて来た」

「サイラオーグさんは違う！スタートラインはそこだったかも知れないけど、今のサイラオーグさんは力のない悪魔たちの希望なんです！血筋とか才能とかなくても強くなれるって、サイラオーグさんはその生き様でみんなに教えてくれてるじゃないですか！」

「そう言われると、照れるな……」

サイラオーグは目を逸らし、頭をガシガシと掻く。冗談ではなく、本当に照れていた。

「とにかくそういう訳だから、秋月の野郎をブツ飛ばしてやってくだ

「やー！」

「よしよし、わかったわかった——なら、少し休憩してから、またもう一手頼めるか？」

「はいー！」

一誠は、嬉しそうに返事をした。

誰とでも仲良くなれるはずの一誠がここまで毛嫌いする相手がいるとは、サイラオーグにはちよつと信じられない。

フツと秋月連也の顔が、脳裏に浮かんだ。

神秘の剣技を振るう戦士とは思えない、むしろ家で寝転がって、煎餅でもかじりながら漫画本を読むのが似合ってそうな顔が。

（秋月連也……今頃お前は、どのように己れを鍛えているのだ……？）

◆

「本当に大丈夫なのか、連也」

水曜日の昼休み。

いつものように生徒会室で弁当を食べる連也に、ゼノヴィアがそう尋ねた。

「何が？」

「試合だ、試合！ 今度の日曜にサイラオーグの旦那と試合するんじゃないのかよ！」

問い返す連也に、匙元士郎が言う。

「俺は戦った事ねえけど、端から見てても『この人とは絶対やりたくない』って思うくらいいともなく強いぞ、あの人。なのにお前と来たら何か妙にのんびりしてるしよ。特訓とかしなくていいのか？」

「特訓？ なんて？」

「いや、なんでって……」

「別に俺が負けたら世界が滅ぶ訳でもなし、無理して勝つ必要ないだろ。あくまでも互いに手の内を見せ合う手合わせだし」

「いや、そうだけど……」

「だいたい、一週間かそこらで何が出来るんだよ。稽古の量増やしたってダイエツト効果くらいしか期待出来ないぞ？ 何か新しい超必殺技を編み出すにしても、一週間で開発出来るような付け焼き刃が

通用するのか？ そんな事するくらいなら、試合当日まで平常心とベストコンディションを保って、当日フルパフォーマンスをお見せした方がよっぽどいいよ」

「ふむ、一理あるね」

ゼノヴィアが同意した。実際に戦った事がある彼女からしてみれば、サイラオーグは確かに付け焼き刃が通用するような相手ではない。それどころか、その付け焼き刃が打ち付けた途端に粉々に砕けるような男である。

それは匙も同じ評価のようで、彼もそれ以上反論はしない。

「でもお前は、俺たちの命の恩人でこの町を救ってくれたヒーローだからな。俺たちに来れる事があつたら、遠慮なく言ってくれよ」

ただ、そう言っただけである。そしてそれは、その場にいる生徒会全員の気持ちでもあつた。

「ヒーローはやめてくれ」

うめく連也は、頬にかすかな赤みが差していた……。



夜の9時を過ぎる頃。

黒歌は妹の白音こと塔城小猫の部屋で、彼女と、テレビゲームに興じていた。落ちてくる色んな色のブロックを操作して、同じ色を三つ揃える事で消していくパズルゲームだ。

「……ところで姉様、つかぬ事をお聞きしますが」「なに？」

「連也先輩を狙ってるって本当ですか？」

「まあ、ねえ」

黒歌は気楽な返事を返した。

「ちよつと前まではイツセー先輩を狙ってたのに」

「んー、でも赤龍帝ちんつてぶつちやけメンドくない？」

「どういう意味ですか？ むしろイツセー先輩って凄くわかりやすい気がしますけど」

「だってさあー、普段からおっぱいだハーレムだ言ってるくせに全然手を出して来ないし、こつちからモーションかけたらヘタレちゃう

し。天界が用意してくれた子作り部屋も、全然使っていないっぽいし。やりたいのかやりたくないのかハッキリしなくてぶっちやけウザいってゆゑか」

「ひどい言い様ですね」

「でもホントの事じゃない?」

「ハイ」

小猫も不満に思うところがあるのか、割りとあっさり肯定した。

「でもそれはそれとして、どうして連也先輩なんですか? 強い子供が欲しいのなら、父親候補は他にも姉様の周りにはいると思いませんか?」

「でもねえく……ヴァーリは戦う事とラーメンすすする事しか頭にお子ちやまだし、アーサーは強い奴とチャンバラする事しか考えてなくてキモいし、トビーはいつまでも昔の女に操立ててるのがアーサーと別方向でキモいしてゆゑか左手が恋人だからいざって時に締め上げられそうで怖いし」

トビーとは、『刃 狗』のコードネームでも呼ばれる、墮天使陣営に属する神器使い幾瀬鳶雄の事である。

「美猴は?」

「お猿はお猿の時点で論外」

「それで、消去法で連也先輩を?」

「半分はね。でも、もう半分は、真剣に考えてやっぱりあの子しかいないなって思った訳。少なくとも今挙げた面子よりは、資質が子供に遺伝する可能性はかなり高いからね」

「なるほど」

小猫は納得した。

黒歌が話題に出した面々は、アーサーと『論外』とまで言った美猴セイクリッド・ギア以外は、全員が神 器所有者である。そして神 器セイクリッド・ギアは基本的に、遺伝しない。非所有者の子供が目覚める事もあるが、逆に所有者の子供が必ずしも神 器セイクリッド・ギアを持っているとは限らない。一代限りの突然変異と言ってもいい。

そしてこれは、聖剣使いが体内に宿す『因子』に対しても言える。因

子が遺伝しないからこそ、教会は『聖剣計画』にゴーサインを出したのだ。

一代限りの資質であると確定した神セイクリッド・ギア器や聖剣の因子に比べれば、確かに武道の才能の方がまだ可能性は高いだろう。

「それにあの子、普通に性欲はあるし、女の好みもそんな特殊って訳でもなさそうだし、落としやすそうって意味でも他の連中よりずっとマシだしね」

「そうですか……リアス姉様やゼノヴィア先輩を怒らせない程度に頑張ってくださいね」

「白音。それ、励ましてないわよね？」

「ハイ」

小猫はあつさりと肯定した。

◆  
同時刻。

秋月連也はジャージ姿で、夜の町を一人歩いていた。

柄巻きを施した木刀『飛龍』を小脇に抱えている。

その木刀からは、絹のような柔らかな白光が溢れ出していた。

そしてその光に引き寄せられるように、たくさんの人影が集まってくる。

老若男女問わず様々だが、一つだけ共通している事がある。それは、彼等が皆、死者であるという事だ。

オルランドとその眷属による大規模な破壊と殺戮の被害者たちであった。己れの死を受け入れられない者、己れが死んだ事にすら気が付いていない者たちの、さまよえる魂であった。

放っておけば、生への執着や生者への妬みで悪霊化しかねない。

そうなれば、彼等の手でこの町から新たな被害が出るだろう。

どちらも想像するに忍びない事であった。

だから連也は、こうして夜な夜な外に出ては、さまよう魂たちを然るべき場所へと送ってやっているのだ。

また、それは彼にとっての念道修行の一環でもあった。

連也は多くの霊たちを引き連れて、無人の公園に入っていく。

眉間に光点が生まれた。霊的な力を司るチャクラを開放したのだ。絹のような白光を放ち続ける『飛龍』を脇構えに振りかぶると、横一文字に振り抜いた。

白光が広範囲に渡って放射され、彼を取り囲む死者の靈魂に触れると、その魂は白い影となつて空へと昇っていく。

死者の妄執を消し去り、その魂を浄化させる念道の秘剣『影送り』であつた。

連也の耳に、彼等が口々に感謝の言葉を述べるのが聞こえた。

「礼を言われるような事じゃないんだけどな」

天に昇っていく影たちを見送りながら、連也はポツリと呟いた。

「いや、充分英雄的行為だと思いがね」

その呟きに答える声があつた。

連也が振り向くと、若い黒髪の男がブランコに座っていた。詰襟の制服に、漢服を腰巻きのように巻き付けている。

「ドーモ、ハジメマシテ。俺は曹操。三国志の英雄、曹操孟徳の血を受け継ぐ者だ」

曹操は立ち上がり、丁寧なお辞儀をした。

「はあ、どうも。俺は……」

「ヴァスコ・ストラダーダ猯下から聞いているよ、秋月連也くん」

そう言つて、右手を差し出す。

連也は柄を上にした木刀を左手に持ち換えて、空けた右手でその握手に応じた。

「それで、俺に何か用ですか？」

「いや、別に」

曹操はあっさりと否定した。

「猯下から聞いて、君に興味が湧いてね。一目会いたかった。ただそれだけさ。こうして握手出来て光栄だよ、ヒーロー」

「やめて、それマジでやめて」

新聞に取り上げられてから、同級生を始め周りの人間に何度もそう呼ばれてきたが、その度に何とも言えない気恥ずかしさを感じている。そしてその気恥ずかしさは、何度呼ばれても消えない。

「照れる事はない。伝え聞いた話だけでも、君のやった事は真正正義の行いだ。今の一幕も含めてね……だから、君が英雄ヒーローなのは紛れもない事実だ」

「じゃあこの際そういう事でいいから、せめて面と向かってヒーロー呼ばわりするのはやめてくれ。頬つぺた赤くなる」

「……そのようだな」

頬つぺたどころか、連也は耳まで赤くなっていた。

「俺、まだ見回りがありませんんで、これで失礼します」

「同行しよう」

「……ついてきても、お菓子は買ってあげませんよ？」

「問題ない。自前がある」

曹操は懐から一枚のチョコレートを取り出し、一口かじった。

二人は無言で、しかし肩を並べて歩き出した。

連也は歩きながら、先程のように『飛龍』から溢れる光で死霊を誘き寄せ、ある程度集まると影送りの太刀で浄霊する。

曹操はそれを、ただじつと見ていた。

浄霊をもう二回ほどやって、時計の針が11時を回る頃、連也は家路に就く事にした。

「曹操さん。俺、今夜はこれで帰ります」

「そうか、ではここでお別れだな。おやすみ、ヒーロー」

「だから、やめてくださいって」

「失敬。ではおやすみ、秋月くん。またいずれ——ああ、それとサイラオーグ・バアルとの試合、頑張ってくれ。俺も見学させてもらおうよ」

——かつて英雄を名乗った男は、英雄ヒーローと呼ばれる少年にそう言うって、立ち去った。

「……何だったんだ、あの人」

結局相手の意図するところがわからないままで、連也は思わずぼやいた。

## 悪魔の申し子

土曜日の夜。

連也は明日の試合に備えて、木刀『飛龍』の手入れをしていた。柄卷きをほどいて剥き出しになった木刀を、まずは濡れタオルで拭いてから、別に用意してある乾いたタオルで拭く。

それから、もう一度柄糸を巻いていった。ゆっくりと、丁寧に。

それが終わると、『飛龍』を両手で握った。

父の形見であり、代々の念道家の念が宿った魂の木刀。鋼鉄の刀剣とも打ち合い、この世ならざる妖魔悪霊を調伏する神秘の聖剣。

しかし今、この木刀に宿るのは連也自身が込めた念だけであった。父を始めとする先祖たちの念は、オランダとの戦いで一度破壊された際に、消えてしまっていた。

戦車のリアクティブアーマーが、爆発する事で着弾の衝撃を相殺するように、先祖たちの念もまた、そうやってオランダの攻撃を緩和させたのだ。そうでなければ、連也の体は真つ二つに両断されていただろう。

——俺は、たくさんの人たちの遺志で生かされてるんだな。

そう思った。

そして、だからこそこの命は無駄には出来なかった。父のため、先祖のため、念道を極めて秋月流念道剣を先人たちの目指した『高み』へと近付けなくてはならないと思った。

自分を生かしてくれた人たちを軽んじるのは、自分の命をも軽んじるも同然なのだ……。



翌朝、連也はジャージ姿にウエストポーチを身に付けて、家を出た。待ち合わせ場所は駒王学園高等部の旧校舎だ。そこにリアスとゼノヴィアがいて、連也を待っていた。彼女たちが、試合場所に案内してくれるらしい。

「サイラオーグさんは？」

「彼なら向こうで待ってるわ」

連也の問いにリアスが答え、彼を旧校舎の中に案内した。そしてオカルト研究部の部室に入る。

リアスとゼノヴィアが部室の真ん中で、連也を挟むようにして立った。

三人の足下に光が発生した。それは連也がファンタジー物のゲームなどで見る魔法陣である。

魔法陣の輝きが室内を満たすと、三人は部室から姿を消した。

次に連也の視界に入ったのは、どこまでも広がる草原と、彼方に連なる山々、そしてドロドロした色合いの、紫色の空だった。

悪魔と墮天使が棲む異界——冥界である。ここはその冥界の中の、グレモリー家が治める領土内であった。

「へえ〜……」

リアスからそのように説明された連也は、物珍しそうに辺りをキョロキョロと見回した。

ゼノヴィアとリアスは、自分たちも初めて修学旅行で京都に行った時はこんな感じだったのだろうか、ふと思う。

連也がウエストポーチからスマホを取り出して、冥界の空を撮影しようとした。悪魔の存在を公にしてしまう可能性は、どんなに小さくとも排除せねばならない。リアスがやんわりと連也の写真撮影を制止した。

「待ちかねたぞ、秋月連也」

そこへ、サイラオーグが呼び掛けて来た。

彼は最初からそこにいたのだが、連也は初めて訪れた異世界の物珍しさに、完全に気付いていなかったのだ。

「どうも。今日はお手柔らかに」

小さな子供みたいにキョロキョロしてるところを見られた恥ずかしさからか、のんきな挨拶とは裏腹に、連也の頬には赤みが差していた。

待っていたのはサイラオーグだけではなかった。その場にはグレモリー眷属と赤龍帝眷属、生徒会メンバーにシトリー眷属まで、大勢が集まっている。

「……なんでこんなたくさんいんの？」

「お前に興味があるのは、俺だけではないという事だろう」

「俺は珍獣かよ」

まさかこんな大勢のギャラリーがいるとは夢にも思わず、連也はぼやく。

ぼやきつつギャラリーの中に曹操の顔を探したが、彼は見当たらなかった。

「俺はいつでも構わん。そちらの準備が整い次第始めようか」

「んじや、早速」

連也は軽く答えて、背中の襟口に右手を突っ込んだ。引き抜かれた右手には、木刀『飛龍』が握られている。連也はそれを正眼に構えた。

サイラオーグはボクシングのファイティングポーズを取った。上体をやや前傾させたクラウチングスタイルだ。

試合開始の合図は、サイラオーグがそのまま一步踏み出して放った左ジャブだった。

連也の木刀がわずかに動いてその左拳に触れると、サイラオーグのジャブは簡単に軌道を逸らされた。

しかしサイラオーグは意に介さず、更に踏み込んで、左右のフックを次々と打ち出す。

連也はバックステップでかわすが、下がれば下がった分、サイラオーグが距離を詰めて食らいついてくる。

岩から削り出したような巨拳が、凄まじい風切り音を上げて繰り出された。

そのことごとくをかわした連也は、何を思ったか木刀を下ろした。そこへ迫る、サイラオーグ渾身の右ストレート！

だが、おお何という事だろうか——連也は空けた左手の、人差し指一本で、その猛烈な一撃を止めてしまった！

サイラオーグも、試合を見守るギャラリーも、目を丸くして驚いた。一誠や匙にいたっては、顎が外れたのかと思うほど口を開けている。

「つくづく、凄い人だね……」

「ああ。我々でも出来ない事はないが、実戦でやれるかと言ったら、

まあ無理だろうな」

祐斗のつぶやきに、ゼノヴィアが答えた。

二人の会話を聞き付けて、一誠が尋ねる。

「出来ない事はないって、お前らいつの間にかそんなパワー身に付けたんだ？」

「イツセーくん、あれは力で止めたんじゃないよ。パンチの射程の一步外に出て、伸びきった拳に指を置いただけさ」

「つまり連也は、サイラオーグの動きを完全に見切っているという事だ」

「マ、マジかよ……!」

二人の解説に、一誠は連也の才能に改めて戦慄した。

同時に、歯痒い思いもある。サイラオーグの努力が、連也の才能の前に否定されたような気分になったのだ。

サイラオーグは己れの可能性を信じ、たった一人でひたすらに鍛え続けて来た。何もかもが手探りの状態で、血反吐を吐くような厳しい鍛練を課してきたに違いない。

それは自分も同じだ。突然目覚めた神セイクリッド・ギア 器という未知の力に対して、最初はそれがどういうものかすらわからず、アザゼルというコーチを得られるまでは手探りの日々だった——今はそのアザゼルとも、会う事は出来ない（話くらいなら出来るが）。

対してあの秋月連也は、ちゃんとした師匠の元で、念道とかいう技のちゃんとした指導をしてもらったに違いない。そんな恵まれた環境でのびのびと育てられた奴には、勝ってほしくなかった。

一方サイラオーグはというと、もちろんいつまでも固まったままではない。間合いを取って、構え直した。

拳の感覚で、連也がパンチを人差し指一本で止めたのではない事はわかっていた。

それはつまり、連也が自分の動きを完璧に見切っているという事であり、それくらいなら力で止めてくれた方がまだマシだったかも知れないと思っている。

「サイラオーグさん」

そこへ連也が呼び掛ける。

「これはただの手合わせ。別に命がかかっている訳じゃあない。言ってしまうばただのコミュニケーションだけど、だからってそこまで気を遣わなくてもいいんですよ」

「……すまんな」

サイラオーグは別に、連也を気遣った訳ではない。

しかし、初めて見る冥界の空を撮影しようとした姿を見て、気が抜けると同時に、相手を無理矢理付き合わせてしまったような罪悪感すら抱いてしまった。

それが自分の動きに、力に、無意識のうちにブレーキを掛けてしまっていたようだ。

連也がわざわざパンチを指先一つで止めるパフォーマンスを行ったのは、『手加減なんて必要ないですよ』というメッセージなのだと、解釈した。

「ならばお言葉に甘えて——いや、違うな。お前を付き合わせたのは俺だ。全力で戦う事こそが、お前という戦士に対する礼儀というもの……これは、俺の考え方が甘かった」

サイラオーグは大きく息を吸い、コオオオオツ！ と鋭く吐き出す。体内の気を高める呼吸法だ。

「ハアツ！」

そして気合いを放つと、上半身を覆っていたタンクトップが千々に破れて弾け飛んだ。全身にみなぎらせた気の圧力によるものだ。

気のせいだろうか、連也にはサイラオーグの体が一回り大きくなったようにすら見えた。

「——始めよう、秋月連也」

「お手柔らかに」

相変わらずのんびりした返事だったが、

(余計な事するんじゃないか……)

◆ 先程のパフォーマンスを早くも後悔する連也であった……。

◆ そんな二人を、少し離れた場所から眺める者がいた。

太い木の枝に座り、幹を背もたれにしている。  
曹操だ。

どこで買ってきたのやら、手にはペットボトルのメロンクリームソーダを手にもっている。

「やつと始まるようだな……」

ポツリとつぶやいた。

連也のパフォーマンスも、彼はゼノヴィアや祐斗同様に見抜いていた。

秋月連也への興味がますます強くなる。

サイラオーグが果たしてどう戦うのかも楽しみだ。

スポーツ観戦の気分で、曹操はソーダを一口飲んだ。



——時間は少し遡る。

森の中を、連也とサイラオーグの試合が行われている予定の草原へ向かって進む、二人の男がいた。

ヴァーリ・ルシファーとアーサー・ペンドラゴンであった。

場所は、アーサーがルフエイから、兄妹の雑談の中でそれとなく聞き出した。

どんなに魔術に長けていようとその辺はまだまだ子供だなど、アーサーは微笑ましい気持ちになったものだ。

二人の目的は同じだった。『横取り』だ。

サイラオーグには戦士としてそれなりに敬意を抱いているが、かと言って抜け駆けされるのは、それはそれで気に入らない。

だから、誰が連也と戦うかを公平にあまりくじで決めるよう、直談判するつもりなのだ。

——あまりくじが果たしてどれほど公平なのかは、触れないであげてほしい。

サイラオーグがこれを拒めば、武力行使も辞さない構えであるし、どちらかと言えばそういう展開を二人とも望んでいた。

森を抜けて、二人は足を止めた。

そこは無人だった。

そもそもそこは、草原ですらない。

広い部屋の中に、二人はいた。

ソファやテーブル、本棚などがあり、床はピカピカに磨き上げられたフローリングに、赤い絨毯が敷かれてある。絨毯の柄はアーサーにも見覚えがあった。ペンドラゴン家の屋敷の居間に敷かれているのと同じだ。

いや、それを言うなら室内のレイアウトその物が、昔懐かしきペンドラゴン邸の居間とほとんど同じだった。

違うところと言えば、部屋の片隅に置かれた大きなモニターとスタンドマイクくらいか。

「……なんだ、ここは」

「どうやらルフェイの悪戯のようですね。我々の考えを見抜いて、隔離结界を作ったのでしよう。我々はまんまとそこに嵌まってしまったといったところですね」

『その通りです！』

やたら明るくキャピキャピした声が響いた。

モニターがいつの間にか点灯しており、そこに三頭身くらいのミニルフェイとも呼ぶべきキャラクターが映っている。

『ここは私が創造した異法结界。私が定めた条件をクリアしなければ決して出られない幽閉空間となっております。ネットをよくある《○》しないと出られない部屋』とだいたい同じような物だとお考えください。もともと、何もなくても24時間ほどで自動的に外に出られるようにはしておりますから、そこでおくつろぎになるのもありますよ。』

「馬鹿馬鹿しい……ルフェイ、いい子だから早く我々を解放しなさい。父上や母上にある事ない事言いつけますよ？」

『そのためには、この部屋から一刻も早く脱出するべきですよ、お兄様。でないとルフェイちゃんがお父様やお母様に、お兄様の事である事ない事言いつけちゃいますから』

——チッ！

アーサーは柄にもなく舌打ちした。

「で、俺たちが脱出する条件とは何だ」

『それはこちらです！』

モニターの中でミニルフェイがバレリーナのようにクルクルと回転しながら右端に引っ込み、空いたスペースにテロップが現れた。

《部屋の中にいる者全員が一人ずつ、マイクに向かって『ルフェイちゃん萌え萌え』と大きな声で百回叫ぶ事》

……アーサーは眼鏡を外すと、内ポケットにしまっていた眼鏡拭きでレンズを丁寧に拭き、もう一度掛け直してからモニターを見た。

……ヴァーリは目を閉じて、その目を手で押さえた。何度か深呼吸を行い、もう一度目を見開き、モニターを見た。

《部屋の中にいる者全員が一人ずつ、マイクに向かって『ルフェイちゃん萌え萌え』と大きな声で百回叫ぶ事》

見間違いでも何でも無い。

非情にも、モニターには確かにそう書かれてあった。

アーサーは青ざめた。

ヴァーリはワナワナと震え出す。

(あいつ、本物の悪魔だ……ッツ!!)

二人は全く同じ事を、胸中で叫ばずにはいられなかった。

## 拳と剣

全ての生物に宿るエネルギー『気』。

通常の状態でも、精神の集中や呼吸法によって、筋力を凌駕するパワーとなる。

これを高めていくと相転移を起こして、感情に呼応して質量と密度が高まる性質を帯びるようになる。特に攻撃的な感情とは非常に相性が良く、闘争に適しているため、『闘気』と呼称されている。

この闘気の更にもう一段階上が『念』である。思念のままに物理法則をも超越する、神秘のエネルギー。

ここまで聞くと、読者のみなさんの中には闘気は念よりも下位にあると思う方もおられるのではないだろうか？

——だが、しかし。

戦闘という目的にのみ限定すれば、闘気は決して念に劣っていない。

秋月連也は、サイラオーグ・バアルとの試合において、それを嫌になるほど実感していた。

「むおっー」

サイラオーグが唸り声を上げて、ストレートパンチを放つ。その拳は金色に光り輝き、連也が紙一重でかわそうものなら、凄まじい熱風が吹き荒れてその身を叩くのだ。

連也は念を込めた木刀『飛龍』でもって、サイラオーグの突きや蹴りをいなすしかなかった。拳足に宿る、物質化寸前にまで密度を高めた闘気を、念で散らし、雲散霧消させながら。

「むんっー」

大振りのフックが飛んできた。

連也、これを搔い潜りつつ抜き胴！

しかしその一撃は、サイラオーグの胴体を透過せず、見事に割れたシックスパックにわずかにくい込んだだけであった。サイラオーグの闘気の圧が、連也の念を受け止めている……！

動きが一瞬止まった。

そこへサイラオーグの拳が破城槌めいて飛んでくる。

連也は木刀を手放し、その腕を捕らえて投げ飛ばした。

宙に舞ったサイラオーグはクルクルと空中で回転してバランスを取り、しなやかに着地。

連也も木刀をキャッチして、正眼に構えた。

そこへサイラオーグ、地を蹴って跳躍し、一気に懐に跳び込む。

連也の視界で、サイラオーグの右拳が小さく振り上げられる。

しかしその動きには、『圧』が感じられない——これはフェイント。

開いたままの左手に、軽い『圧』を感じた——これは牽制打。顔めがけて飛んできた左の掌打を、紙一重でかわした。

サイラオーグは次いで、左足を大きく踏み出した。なら次は右手、もしくは右足での攻撃——そして『圧』は、右足から感じ取れる。サイラオーグの姿勢から、恐らくは中段蹴り——直後、丸太のような右のミドルキックが飛んできた。

「エヤアツー」

連也はその右足に、木刀を打ち付けた。瞬間、念と鬨気のぶつかり合いで発生した衝撃が八方に風を巻き起こした。

考えてやっているのではない。

連也はサイラオーグの全身を視界におさめて、各部の動きを同時に捉えているのだ。

サイラオーグの動きは無駄が少ないが、完全に消せているという訳でもない。予備動作はまだまだ大きい。

そして（本人の性格もあるのかも知れないが）動きの一つ一つに、気持ちが出過ぎている。その気持ちを、動作から放たれる『圧』として連也は察知していた。

そしてそれ等の情報を、見た瞬間に処理している。

フェイントは無視して、牽制打はギリギリでかわす。そして鬨気がこめられて実際のリーチ以上の攻撃範囲を持つ本命打は、念の一撃で相殺する。

サイラオーグの攻撃に対して、連也はそうやって対処していた。

一方サイラオーグも、ただがむしやりに攻撃し続けているだけでは

ない。

自分の攻撃が完全に見切られている事には、既に気付いていた。フエイントや牽制打と、本命打との違いを読まれている。フォームのせいなのか、それとも秋月連也の使う念道に、そういうものを見極める技や力があるのか……そこまではわからないが、とにかく彼がこちらの攻撃を完全に見切っている事だけはわかった。

(ならば、その見切りを利用する！)

サイラオーグは左足を上げた。

普通なら前蹴りが来ると思うだろう。

しかし連也はその動きに、攻撃の意志を感じなかった。ならこれはフエイント——無視して木刀を打ち込もうとした瞬間、

ズドンッ！

轟音が轟き、両者の間の地面が爆ぜた。

サイラオーグが前蹴りに見せ掛けて上げた左足を、勢い良く地面に打ち下ろしたのだ。その衝撃で地面が吹き飛び、間欠泉めいて吹き上がった土砂が、幕となって連也の視界を遮った。

「おおおおおあつー！」

その幕の向こうから、獅子吼が響き渡り、剛拳が飛んできた。

物質化寸前にまで質量と密度を高めた闘気をまとった、金色の右ストリート。

それが連也の胸板に突き刺さった！

連也は体の中で、枯れ枝の折れるような音を聞いた気がした。

打ち込まれた拳打の衝撃が、体内に浸透していくのがわかった。

咄嗟に、全身に走る気の流れ——気脈の一部を閉じ、一部を開放した。

そうして出来た通り道バイパスに沿って、パンチの衝撃が胸から足へと流れていく。

衝撃は足から地面へと放出されて、連也の足下の地面を吹き飛ばした。

連也の胸に突き刺さったサイラオーグの右拳は、まだ薄皮一枚ほども離れてもいない。そんな刹那の早業であった。

サイラオーグには、何が起きたのか理解出来なかった。必倒を期した一撃をまともに受けてなお倒れぬ秋月連也。

そして何故か弾け飛んだ大地。

何をやったかさっぱりわからないが、自分のパンチの衝撃が受け流されたのだとはわかった。

だが、そう連続して使えるものではあるまい。それなら最初から使っているはずだ。

サイラオーグは更にもう一步踏み込み、やはり一打必倒の威力を秘めた左ストレートを放つ。

連也、これを木刀『飛龍』で受け止める。

木刀から腕へと、凄まじい衝撃がほとばしるのを感じた。

その衝撃を、先程のように気脈を操作して誘導する。木刀から右腕、右肩、左肩、左腕、そして再び木刀へと、上半身を一周させて放つ。

直後、サイラオーグは後方に軽く十メートル以上は吹っ飛んだ。

「――??」

サイラオーグは頭が混乱していた。

秋月連也は木刀でパンチを受け止めただけ。特に押し返したようには見えなかった。なのに、打ち込んだ左拳に物凄い衝撃を受けて、自分は吹き飛ばされてしまった。

まるで、自分の攻撃がそのまま跳ね返されたかのようなだった。

「い、今の、何? どうしてサイラオーグの方が吹っ飛んだの?」

遠巻きに勝負を見守っていたリアスが、傍らの木場祐斗に尋ねる。

「す、すいません、僕にも何が何やら……」

祐斗も困惑気味である。

答えは背後からした。

「たぶん化勁かけいだな」

いつの間にか曹操がそこにいた。遠くで見物するのに飽きて、もっと近くで見たくなったのだろう。

「カ、ケー?」

聞き慣れない言葉に、リアスは間の抜けた声を漏らす。

「中国武術において、相手の攻撃の力を吸収したり受け流したりする技術を、そう呼んでいる。秋月連也は、一発目の衝撃は地面に受け流し、二発目の衝撃は自分の体を通してサイラオーグ・バアルに送り返したのさ」

「……ひよつとして、あなたも出来たりする?」

「入念な打ち合わせとリハーサルをさせてもらえれば」

冗談とも本気ともつかぬ口調で答え、曹操はメロンクリームソーダをゴクリと飲んだ。

そこへ一誠が問い掛ける。

「てゆうか、なんでお前がいるんだ?」

「秋月連也に興味があるのは、サイラオーグ・バアルや君たちだけではないという事さ」

「俺はあんな奴興味ねえよ! サイラオーグさんにアイツの鼻っ柱折ってほしいだけだ!」

「なら声援の一つでも飛ばしたらどうだ? 君たちお得意の何かよくわからないミラクル不思議パワーでサイラオーグが何か凄い究極奥義とかに目覚めるかも知れないぞ?」

「……………それ、皮肉?」

「もちろん」

リアスの問いに、曹操は悪びれる風もなく答えた。

(……やってみるもんだな)

連也も連也で、自分の行動に驚いている。

最初の右ストレートからして、受け流せるとは思ってたなかった。本当に、咄嗟の行動である。

しかしやってみたら出来た。

じゃあ相手にお返しする事も出来るんじゃないか? と思って試してみたのだが、本当に出来るとは思ってたなかったのだ。

体内に念を張り巡らせて、自らのダメージを調べる。

右ストレートの直撃で、肋骨が三本ほど折れているようだ。しかしそれが内臓を傷付けたりはしてない。

念を送り込んで治癒力を高めれば、折れた肋骨はすぐにくつつくだ

ろうが、さすがに消耗が大きい。

今は痛覚を抑制するだけにとどめて、連也は木刀を後ろに引き、右脇構えとなった。

サイラオーグも身を縮め、拳を固く握り締めた。

「おおおおおおあああつー！」

サイラオーグが、吼えた。

全身の筋力と闘気を爆発させて、ロケットのような勢いで距離を詰める。

連也の目には、ダンプカーよりも更に一回りほど大きな金色の獅子が突進してくるかのように見えた。

連也は目を閉じた。

現在コントロール可能な六つのチャクラを全て開き、念を練り上げ、全身にみなぎらせていく。木刀の先端にまで行き渡らせて、連也は『飛龍』と自身が一体化するのを感じた。

サイラオーグは全身に闘気をみなぎらせており、それが体の内でエネルギーの鎧と化している。

その防御を破るには、より大きな力をぶつけるか、あるいはもう一つ――。

熱風が、全身を叩いた。

サイラオーグの右ストレートが飛んでくる。

全身の闘気を拳ただ一点に圧縮・集中させ、太陽にも似た輝きを放つ一撃であった。

その拳が頬の皮膚に触れた瞬間、連也は右足を引いて、スリッピングアウエーでかわした。

「エヤアツー！」

すかさず電光石火の抜き胴！

木刀『飛龍』は、今度は受け止められたりはせず、サイラオーグの分厚い胴体を透過した。

サイラオーグは突撃の勢いで七歩ほどたたらを踏み、そして力なく地面に倒れた。

フウーツ！

連也は大きく息をつきながら、木刀を左手の中に収めた。

サイラオーグの鬨気の防御を破る方法は、より大きな力をぶつけるか、あるいはもう一つ、その体内のエネルギーすらも集約させた最大攻撃を誘い、後の先を取るか。

連也は後者を選んだ。

彼の鬨気の量を上回るほどの念を出せる自信がなかったし、仮に出来たとして、殺さずに済ませる自信もやはりなかった。

サイラオーグの性格なら、これまでの流れで、生半可な攻撃では相殺されるとわかれば、必ずや防御すらかなぐり捨てた最大攻撃を仕掛けてくるだろうとも予測出来た。

「ありがとうございます」

連也は倒れたままのサイラオーグに向かって正座をして、深々と頭こゝろを垂れた。



「ルフエイちゃん萌え萌え！ ルフエイちゃん萌え萌え！ ルフエイちゃん萌え萌えええええええっ！」

ヴァーリ・ルシファーがマイクに向かって、顔を真っ赤にしながらかぶ。

モニターの中ではミニルフエイがプラカードを持っており、ヴァーリが一回叫ぶごとにピンポンという音が鳴り、プラカードに書かれている数字が97から一つずつ増えていって100に変わった。

結果脱出の条件を提示された後、ヴァーリとアーサーは力づくでの脱出を試みたのだが、二時間掛けても境界内の壁や天井にはヒビ一つ入らない。

ヴァーリの『魔王化』を使えばあるいは破壊も出来るかも知れないが、彼等の目的は脱出した後、秋月連也と戦う事である。ここで力を使い果たしては元も子もない。

やむを得ず断腸の思いでミニルフエイの提示した条件のクリアに動んでいるのである。

先にクリアしたアーサーは、身も心も凌辱し尽くされたかのように、ソファに横たわっている。

合言葉がほんのちよつとでも早口だったり声が小さかったりすると、カウントされないのだ。そのミス分も含めると、二人が条件をクリアするまでには実際には余分に20回近く合言葉を叫ばねばならなかった。

「やつと……終わった……!」

ヴァーリはその場に座り込んだ。精神的な疲労が、未だかつてないほど彼を蝕んでいる。

しかしこの後の秋月連也との戦いを思えば、そんな疲れもたちまちの内に吹き飛んだ。

「行くぞアーサー、こんな馬鹿げた場所からはおさらばだ」

すつくと立ち上がり、入ってきたドアのノブに手を掛けて、ぐつと回し——回らない。

「??」

何度も回してみるが、ドアノブはびくともしない。

他に出口があるのか？ 室内を調べるが、それらしき物は見当たらなかった。

かといって、自分たちがどこかへ転送される気配もない。

「……まさか、俺たち二人が同時に合言葉を言わなくてはいけなかったのか？」

「いえ、それなら一人ずつ叫べば失敗扱いになりますから、カウントは動かないはずですよ。ルフェイが提示した条件も、百回ずつとありましたしね。百回ずつという事は、つまり一人ずつという事でしよう？」

「では何故出られないんだ？ 部屋の中にいる者全員が百回ずつ合言葉を叫ぶ。そして俺たちはそれをクリアしたんだぞ？」

「——全員？」

アーサーが何かに気付いたようだ。

「なるほど、わかりましたよヴァーリ。答えは簡単です。我々はまだ条件をクリアしてはいないので。あと一人、合言葉を百回叫ばねばならない者がいます」

「……おい、それはまさか」

「ええ、そうです。さつきから不自然にだんまりを決め込んでる御仁

「がいるではありませんか」

「アーサーはスツとヴァーリを、否、彼の中にいる“あと一人”を指差した。」

「さあ、お願いしますよアルビオン」

『いやだあああああッ!!』

ヴァーリの内から、白龍皇アルビオンの悲痛な叫びが響き渡る。もしも彼が肉体を持っていたならば間違いなく血の涙を流しているであろうと容易に想像出来るほどの、悲痛な叫びが。

それからヴァーリとアーサーによる説得が始まったが、五時間に渡る説得も効果がなく、しかもアルビオンが呼吸困難と軽い幼児退化まで引き起こし始めたため、結局二人は脱出を諦め、自動的に外へ転送されるのを待つしかないのであった……。



サイラオグが目を覚ますと、視界いっぱい真っ白な天井が広がっていた。

「どうやらベッドに寝かされているらしい。」

「あら、やっと起きたの?」

声のした方を振り向くと、リアスが椅子に足を組んで座っていた。一誠も一緒だ。

「ここは?」

「一番近くにある、グレモリー家の別荘です」

「秋月連也は?」

「別の部屋でアーシアに手当てを受けているわ」

連也は肋骨が折れただけでなく、最後のサイラオグの一撃で頬の皮膚が半分以上ちぎれ飛んでいたのである。

ちなみにたくさんいたギャラリーは、みんな連也の所に集まっている。

曹操は姿を消していた。

黒歌も来ていたのだが、試合後に連也に抱きつこうとしたところを小猫に捕まった。空中に投げ上げられた黒歌は、喉に小猫のフライングニードロップがくい込んだまま地面に叩きつけられた。小猫いわ

く「百八つの完猫技かんびようわざの一つ『地獄猫の断頭台』』らしい。

「なのにあなたは無傷だなんて、これじゃあどちらが勝ったかわからないわね」

「ダメージは関係ない。最後に立っていた者が勝者だ」

答えながら、サイラオーグは上体をムクリと起こした。体に痛みはない。

最後の全身全霊の拳をかわされた瞬間、胴体を何やら熱いものが通り抜けていった。あれが『念』と呼ばれるエネルギーの感触かと思う。

よほど純粹で清らかな、白き力なのだろう……思い出した瞬間、サイラオーグの太い腕が粟立ち、背すじがブルツと震えた。

出来れば、二度とくらくいたくない力であった。

しかし、だ。

自分の攻撃を読み取る見切り、パンチの衝撃を受け流し、跳ね返す防御、そしてパンチが当たってからよける回避技術……思い出すだに、どれもこれもが素晴らしいものだ実感した。

特に最後のスリッピングアウエーなど、サイラオーグからは自分のパンチが連也の体を透過していったかのようにすら見えたほどだ。

「嬉しそうね、負けたくせに」

「負けたからさ。負けるという事は、俺にはまだまだ強くなる余地が残っているという事だ。実際、今日の試合で色々と学ぶ事が出来た」  
「あっそ」

リアスは素っ気なく返した。

「……連也くんから、伝言を預かってるわ」

「伝言?」

「命がいくつあっても足りないから、もうやりたくない。勘弁してくれ、ですって」

「……本当に秋月連也がそう言ったのか?」

「ええ」

「……そうか」

負けた自分は無傷で、負けた悔しさはなく、新たなライバルを得られた喜びがある。現に胸の内では再戦に向けて早くも闘志が湧いて

いる。

一方で、勝った連也はアーシア・アルジェントの手当てを必要とするほどの傷を負い、しかもサイラオーグとはもう戦いたくないと言っている。

サイラオーグはガシガシと頭を搔いた。

「前言撤回だ、リアス。お前の言う通りだな」

「何が？」

「確かに、これではどっちが勝ったかわからん」

そう言つて、サイラオーグは苦笑いするばかりであつた。

そんなサイラオーグを見ながら、一誠は拳を握り締めた。

魔力がなかったというだけで周りから蔑まれ、それでも歯を食い縛りひたすらに鍛練を続けたサイラオーグに、一誠は歴代最弱の赤龍帝とまで言われ、力のなさ、才能のなさに悔しい思いをした自分を重ねている。

そのサイラオーグの敗北を、我が事のように受け止めているのだ。

（秋月の野郎、絶対許さねえ……っ！）

一誠は静かに怒りを燃やしながら、ライバルの雪辱を心密かに誓うのだった。

## ヒーローズトーク

秋月連也は、毎朝4時には目を覚ます。

起きるとジャージに着替えて顔を洗い、叔父夫婦を起こさぬよう静かに家を出た。

日課の走り込みである。

と言っても、普通に道を走るのとは最初だけだ。公園に入ると、人目のないのを確かめてから、公衆トイレの屋根の上に跳躍する。

そして、時に塀を、時に民家の屋根を、果ては電線の上などを走る。

傍迷惑と言え言えば言えようが、バランス感覚や反射神経を養う事が出来る。

父が健在だった頃は、山の中を朝な夕な猿のように駆け回り、跳び回ったものだ。

そうやって住宅街の外周をグルリと回ると、河川敷に出た。

日の出前の薄暗い河原で、背中から愛用の木刀『飛龍』を取り出し、素振り稽古を始める。

面。

胴。

小手。

袈裟。

逆袈裟。

突き。

各種の打ち込みを、

正眼。

八双。

霞。

脇構え。

各種の構えから繰り出していく。

それが一通り終われば、木刀を右太刀から左太刀に構え直す。つまり、右手を上・左手を下にする持ち方から、左手を上・右手を下にする持ち方に替えるのだ。

そして再び、同様の素振りを行う。

それが終わる頃には陽も昇り、川面が鏡めいて空模様を映し出した。

連也は深呼吸をしてから、木刀を正眼に構え、目を閉じた。

——動かない。

彫像めいて動かない。

そばで見ていると、立つたまま眠っているのではないか、それどころか呼吸をしているのかすら心配になってくるほどの不動であった。やがて、一羽のスズメが飛んできて、木刀の上に止まった。

そして少しの間羽繕いをして、再度飛び立とうとした——が、飛ばない。木刀の上で翼をばたつかせるだけである。

飛ばないのではなく、飛べないのだ。

よくよく観察すれば、連也の木刀が時折、かすかに上下しているのがわかるだろう。

連也はスズメが飛び立つために足下を蹴ってジャンプしようとする時の、そのかすかな圧力や意思の動きを感じ取り、木刀を下げているのだ。そのためスズメは踏ん張りが効かず、飛び立てなくなるのである。

それを幾度か繰り返した後、連也は木刀を上げてスズメが飛び立つのを助けてやった。

スズメはパタパタと飛び去っていく。

それを見送った連也は、満足げに木刀を背中にしまった。

「精が出るな」

そこへ、声を掛ける者がいた。

連也は特に驚く風でもなく、落ち着いて振り返る。

曹操が土手の上に立っていた。

斜面に設置された手すり付きの階段をゆっくりと下りてくる。

連也はペコリと頭を下げた。

「おはようございます」

「ああ、おはよう。それにしても、朝から面白いものを見せてもらったよ。日本でもやっているんだな」

「何がですか？」

「これさ」

曹操はスツと右手をかざした。

伸ばした人差し指にスズメがまた一羽飛んで来て止まり、羽繕いした後飛び立とうとして、先程の連也の時のようにその場で羽ばたきするのみであった。

「俺もちよつと前までやっていた。最近は忙しくてなかなか鍛練に時間を割けないがね」

「それで、今朝は早起きして稽古ですか？」

「いいや。日本の早朝の景色を眺めて、目の保養をしている」

曹操はそう答えた。なるほど、服装は学生服に漢服を腰に巻き付けたいいつもの格好で、汗もかいていなければ呼吸にも乱れはない。

「ひなびた田舎もいいが、都会の街並みもこれはこれで味わい深いものだ。見てて心が落ち着くよ」

「どーも」

連也はそんな曖昧な返答を返した。

曹操はスズメを解放すると、

「君は毎朝ここで鍛練をしているのかい？ ヒーロー」

「だから、ヒーローはやめてください」

「失礼」

曹操は肩をすくめた。特に悪びれている様子は、ない。

「確かに君は、大それた目的意識からオルランドと戦った訳ではないのだろうな。だが、この街の誰もが君をヒーロー、英雄として認めている。それもまた確かな事だ。誰もが君の行いを讃え、君もまた、誰からも讃えられる行動を取った。英雄とはそういうものだ——どこぞの自称英雄とは大違いだよ」

「……それは、曹操さん自身の事ですか」

連也がそう考えた理由に、特に根拠はない。

ただ、曹操の声色に暗いものを感じた。しかしそれは、誰かに対する憎しみともまた違う感じだった。

曹操は目をパチパチとまばたかせ、苦笑した。

「まあね」

そして、素直に認めた。

すぐそばにあるベンチに腰を下ろす。

何となくだが、連也もその隣に座った。

曹操はポツポツと、自分の過去を語り出す。

聖槍を持って生まれた事、その槍の顕現が切っ掛けで両親に売り飛ばされた事、槍が理由で様々な刺客に狙われた事。

いつしか同じ英雄の子孫や生まれ変わり、異能の力を持つ者たちを束ねるようになった事。

彼等を率いて何を行ってきたのかも語った。

そして、つい最近あの赤龍帝・兵藤一誠に敗れた事も。

「拳げ句、ヴァスコ・ストラード猊下にまでダメ出しされたよ。民に求められた訳でもないのに英雄を自称するなんて、ただの子供のごっこ遊びと変わらないとね」

そう言つて、笑った。

ぎこちない笑みであった。

「いいじゃないですか、ごっこ遊びでも」

連也がポツリと言った。

「悪い事したんなら償わなきゃいけないけど、あなたのした事で救われた人が誰か一人でもいるんなら、その人にとってはあなたは間違いない本物の英雄だ。その点は、胸を張っていいと思いますよ」

「救われた者が、いればいいがね」

曹操は死んだ仲間の事を思い出した。

あの剣士は、自分と共に歩めて果たして幸せだったのか？ 何か

救われたのだろうか？

「いないって事はないでしょ。何か、結構たくさん仲間がいたみたいだし、その人たちにしてみれば曹操さんと一緒の方がいいと思ったからついてきた訳で」

連也は構わず続ける。

「そもそも、英雄を自称しちやいけないなんて決まりもないでしょ。そんな事言ったら『ダイノの大冒険』とかどうするんです？ あれの

主人公、『勇者になりたい』がスタートラインだったのに」

「君もあの漫画を読んでいるのか!？」

曹操が突然声を弾ませ、連也の肩を掴み、ズイツと顔を近付けた。

「え、ええ、まあ……」

「そうか……ならば俺と君は、魂の兄弟だ!」

「そんな大袈裟な……」

「大袈裟なものか。俺にとってあの漫画は聖典にも等しい。それを君も愛読していたとは、これは天の導きか……俺たちが出会うのは運命だったに違いない!」

「あんた、そういう趣味だった訳?」

と言ったのは、連也ではなかった。

いつの間にか黒歌が、連也の隣に座って両腕を腰に巻き付けていた。

『英雄、色を好む』って言うけど、まさかそっちの色が大好きだったなんてね……」

「いや待て違う誤解だそういう意味じゃない」

「悪いけどダーリンは誰にもあげないわよ。ほらダーリン、早く帰ろ?」

黒歌は早口で弁明する曹操には取り合わず、連也の手を引いて連れ去って行った。

「性悪のどら猫め」

その場に取り残された曹操は、小さな声でぼやいた。

「救われた者、か……」

連也の言葉が、思い出される。

自分を希望と崇める者はいた。

尾羽打ち枯らした今も、自分をリーダーと認めてくれる者たちもいる。

自分は敗北者だ。だが、やって来た事の全ては無駄ではなかったと思いたい。

でなければ、彼等の存在すら軽んじる事になる。

彼等の人生すら否定する事になる。

「……そうなのかもな」

つぶやく曹操の口角が、かすかに上がっていた。

◆ 連也は黒歌に手を引かれて、住宅街に戻ってきていた。

黒歌は彼の腕に抱き付き、豊かな膨らみを押し付けてくる。

「危なかったわね、ダーリン。大丈夫？ 変な事されなかった？」

「今、セクハラされてるところです」

答えながら連也は、ズボンの中に侵入しようとする黒歌の手を押さええた。

黒歌は「ニヤハハ」と笑って誤魔化する。

「で、朝っぱらから何の用です？」

「大した用事じゃないんだけどね。ほら、男の子って朝は色々とみなぎってて大変でしょ？ だからお姉さんが慰めてあげあだだだだっ！」

連也に思いつきり耳を引っ張られて、黒歌は声を上げる。

「もお、怒らなくてもいいじゃない」

涙目になりつつ、黒歌はプウツと頬を膨らませる。

「会う度会う度そんな事言われりや、怒りますよ」

「ハイハイ、ごめんなさい——でもね、ダーリン。アタシは結構本気だから、その辺は覚えといてね」

「わかりました。心の金庫にそっとしまっておきます」

「ちよっと待って。それ一度しまったら二度と取り出さない系でしよ」

「はい」

連也はあっさり肯定し、黒歌はヒョイツと大袈裟に肩をすくめた。

「まあ、それはそれとして、伝えておきたい事もあるのよね」

「何です？」

「うん、たぶんスイッチ姫からも連絡あると思うけど、ダーリンにストーキングしてたあのバカ二人、しばらくは手を出せないみたいよ？」

ヴァーリとアーサーの事である。

ヴァーリは、塞がりかけた心の傷が再び開いたアルビオンのカウンセリングのために玄装三蔵法師の元へ向かった。

アーサーに至っては、ルフェイはあの隔離空間内での一幕を隠し撮りしていたらしく、その記録映像を実家に送り付けたと当のルフェイから知らされて、チームメイトの黒歌すら未だかつて見た事のない絶望的な顔をして、大急ぎでイギリスへ帰っていったそうだ。

「そういう訳だから、絡まれる心配はないわよ？ 万が一にもトチ狂ってダーリンを襲ってきても、『ルフェイちゃん萌え萌え』って唱えれば逃げてくから」

「口裂け女かよ」

連也は呆れつつ、あの二人にちよつぴり同情した。

同時に、ルフェイの辣腕に戦慄に近いものを感じた。

「それでもダメならアタシを呼んでよ。いつでも助けに飛んでいくからね——アタシ、割りと本気だからね、ダーリン」

黒歌はそう言うのと、連也の首に両腕を回し、唇を重ね合わせた。

連也が突然の事に驚き、立ちすくむ間に、小さな黒猫の姿に化けて、走り去って行った。



兵藤邸に戻った黒歌は、一誠と鉢合わせた。

「あれ？ 黒歌、こんな朝早くから出掛けてたのか？」

「そ。ダーリンの所にね」

「ダーリンって、秋月の事か？」

「他に誰がいるのよ」

黒歌は、何を当たり前の事を聞いてるんだと言わんばかりの態度である。

「ま、まさかアイツと、朝エツチとかしてたのか!？」

「そうしたかったんだけどねー、ダーリンってばガードが硬くって」

「そ、そうか、してないのか……ならいいんだけど……でも、なんで秋月なんか……アイツのどこが良いんだ？」

「どこって、資質？ 赤龍帝ちゃんよりもずつと優良物件だし？」

黒歌の答えに、一誠はうなだれる。

「ちえっ、どーせ俺は才能なんてねえよ……歴代最弱の赤龍帝だよ……」

「そんな事ないわよ。赤龍帝ちゃんは才能あるって」

「そ、そうか？　じゃあなんで秋月なんか狙うんだよ。ちよつと前までは俺との子供が欲しいって言ってたじゃねえか」

「だってアンタめんどくさいんだもん」

「め、めんどくさい？」

黒歌の言わんとする事がわからず、一誠は鸚鵡返しに言った。

「だって普段からおっぱいだハーレムだ言って性欲アピールしてるくせに、未だに誰一人手をつけてないじゃない？」

「そ、それはその、だっていつつも今一都合が合わないし、他の女の子の手前、迂闊に俺の方から誰かにお願いする訳にはいかないし……」

「はあ？　それをどうにかするのがアンタの役目でしょ？」

「それはそうだけど」

「そーいうところがめんどくさいのよね。自分からはごちゃごちゃ言い訳して何もしくないくせに、やたら他人に干渉してくるし。だいたいアタシは別に赤龍帝ちゃんの眷属でも彼女でもないんだから、誰と寝ようが関係ないじゃない？」

「うっ……」

「それと。さっきは赤龍帝ちゃんには才能あるって言ったけど、その才能もぶっちゃけ一代限りのものでしかないでしょ？　セイクリッド・ギア 神 器は子供

には遺伝しないし、龍神ボディもまだまだ不安定で、資質が子供に遺伝するかどうかはかなり分の悪い博打よね？　もうその時点で赤龍帝ちゃんには子作りの相手としての価値がないのよねー」

「うぐっ……」

「ま、それでもアタシとしたいなら、いつでも声掛けてよね。その代わりに、アタシもしたい相手とするから、文句なしよ？」

◆ 黒歌はそう言って、パタパタと階段を上がって行った。

その日の夜。

一誠はトレーニングルームでサンドバッグをひたすら打っていた。今日一日、黒歌の言った「子作りの相手としての価値がない」という言葉が引つ掛かって、モヤモヤした気持ちを引きずっていた。いわばその憂き晴らしである。

黒歌の評価もひどいが、それで代わりに選んだ相手が秋月連也というのが、もっと気に入らなかつた。

なるほど、あの男も才能に溢れた天才肌だ。

しかし、人格という点においては認める事は出来なかつた。人並みの正義感や倫理観は持ち合わせているようだが、余りにも自己中心的だ。

念道を教えて欲しいと土下座してまで懇願したのに、それを無下に断り、挙げ句『誰かのために戦う』という行為——一誠の生き様——を否定したのが、今でも許せなかつた。

自分のために戦うと言い切るような男が、力なき者の希望として己れを鍛え続けるサイラオーグを打ち負かしたのも許せなかつた。

「どうしたの、イツセー。ずいぶん荒れてるわね」

リアスが声を掛けてきた。

タンクトップとレギンスという動きやすい格好からして、彼女もここで汗を流す予定なのだろう。

「どうせ連也くんの事を考えていたのでしょうか？ あなたもすっかりあの子に夢中みたいね」

「……からかわないでくれよ、リアス」

一誠は気の抜けた声で言った。リアスは「あら、ごめんなさい」と言つてコロコロと笑う。

「でも、いつまでも気にしてても仕方がないわ。世の中いろんな考え方の人がいるのだから。あなたと反りの合わない人だつてたくさんいるわ。いちいち気にしては身が持たないわよ」

「そうだけどき……でも俺は、やっぱりアイツが気に入らないよ。あんな自分勝手な奴」

「あなたがそう思うならそれでもいいけど、私たちみんなの命の恩人である事も、信頼出来る実力なのも確かなのだから、その点だけは心

に留めておきなさい。ひよつとしたら、またあの子の力を借りる時があるかも知れないのだから」

「どうだろうな……実力はあっても、人格は信用出来ないよ。誰かのために戦う事を危険な事だっけ言うような奴……念道やってる奴なんて、みんなあんな感じなんだろうな」

「あら、どうしてそう思うの?」

「だってそうでもなきや、邪龍戦役に、トライヘキサとの戦いに、一人くらいは加勢に来なきやおかしいじゃないか! そりや、一人二人来たくらいじゃ結果は変わらなかったかも知れないけど、ひよつとしたらもっと良い方向に変わったかも知れない……アザゼル先生やサーゼクス様たちと離れ離れにならずに済んだかも知れない……そう思うと、何だか凄く悔しいんだ」

「だからと言ってそれで連也くんを毛嫌いするのは筋違いよ」

リアスはピシヤリと言いつつ切った。

「わかってるよ。でもそう考えると、やっぱり秋月にも腹が立って来ちゃうんだ。『愛と奇跡の子』とか言われてみんなからチャホヤされてるアイツを見てるとき……」

「チャホヤって……イツセーあなた、連也くんが何故そう呼ばれているのか知らないの?」

「知らないよ、興味ないし、知りたくもない」

一誠は吐き捨てるように言った。

リアスは深い溜め息をつく。

「今度、あの子の名前とそのフレーズで検索してみなさい。すぐにわかるわ……」

「そう言い残して、何やら疲れたように、踵を返して退室していった。『……あれ? トレーニングしに来たんじゃなかったのか?』」

一誠は訳がわからず、ポカンとした顔でそれを見送るだけだった。

## 生徒会長の挑戦

朝の6時。

早朝のジョギングから戻ったゼノヴィアは、庭に誰かが立っているのを見つけた。

曹操である。

二日ほど前にここ兵藤邸にひよっこり現れ、「しばらく世話になるよ」と言って住み始めた。

家主である兵藤五郎には中国産の酒を、その妻である静江には髪飾りと外出用の服を贈り、更に中国式の座礼まで行ったので、夫妻は彼を礼儀正しい好青年と認識したらしく、居候の話はものの数分とかわらず快諾された。

今、彼は右手に槍を持ち、しかし、構える風でもなくたたずんでいた。

その槍のケラ首に一羽のスズメが止まっている。

しかし、奇妙であった。

そのスズメは何度も何度も羽をばたつかせて飛ばたいいながら、一向に飛び立とうとしないのである。

「……………」

それを不思議に思ったゼノヴィアは、元々物怖じしない性格もあり、曹操に声を掛けた。

「何をしているんだ？」

すると曹操は、チラリと彼女を見やっただ後、槍をヒョイツと跳ね上げた。スズメは途端に舞い上がり、飛び去っていった。

「おはよう。なに、ちよつとした鍛練さ」

「今のがか？ あのスズメは飛びたくても飛べないようだったが——ん？」

ゼノヴィアはそこでようやく、槍の正体に気付いた。

「おい、それは《黄昏の聖槍》トウルー・ロンギヌスじゃないのか？」

「そうだ。君も何度も見ただろう」

「いや、まあ、そうだが……」

確かに、何度も見た。

だから、今曹操が持っている槍が間違いなくあの聖槍である事は間違いない。

しかしどうした事だろうか、あの溢れんばかりの聖なる波動が、全く感じ取れないでいた。

見てくれだけの模造品と言われたら信じてしまうほどである。

「場所が場所だからね。槍のパワーは完全にシャットダウンしてある」

「そんな事が出来るのか……」

「当たり前だろう。神セイクリッド・ギア器は俺の体の一部も同然だからね」

曹操は答えて、苦笑した。

「そういうものか……で、何をしていったんだ？ あのスズメの様子がおかしかったのは、どういう事なんだ」

ゼノヴィアの質問に、曹操は理屈を説明してやった。

「——中国武術に伝わる鍛練の一つさ」

「なるほど、大したものだ」

ゼノヴィアは素直に感心した。曹操は事も無げに説明し、実演もして見せたが、スズメが槍を蹴る時の圧力、蹴る力の強さ、それはいつたいどれほど軽く小さいものか……そんなものを皮膚ではなく槍を通して感知するのがどれほど難しいか、考えなくともわかる。

「秋月連也もやっていたよ」

「そうなのか。さすが連也だな」

「同感だ。木刀越しにやるなんて、俺にはとても真似出来ないな」

「——？」

ゼノヴィアは小首を傾げた。

「君も今、槍でやってのけたじゃないか」

「これは俺の神セイクリッド・ギア器、体の一部も同然だ。だが彼の木刀は違う。あれは本当に、ただの木刀だ。なのにその木刀でやってのけたという事は、よほど長い事使って来たのだろうか。己れの一部となるほど」

「……………」

わかる気がした。

ゼノヴィアにとって聖剣デュランダルは愛刀であり相棒であり、そして、やはり己れの一部と言ってもいい。

剣士としてのゼノヴィアは、デュランダルを手にして初めて完成すると言っても過言ではない。

連也にとつては、あの木刀が剣士としての自分を構成する最後のピースなのだろう。

それはそれとして、連也も同じ事をやっていたと知り、ゼノヴィアはちよつと真似したくなつた。

「私もやってみよう」

そう言つてスツと手を伸ばす。

曹操がクスリと笑つた。

「やめておけ、時間の無駄だ」

「ムツ、何故わかる」

「絶海の孤島に棲む、人間を一度も見た事がない鳥ならば、好奇心で寄ってくるかも知れないが、人間の町に棲むスズメがそんな事をするはずがないだろう。心を静め、無念無想の境地を以て天然自然と一体化し、己れを一個の木石とせねば、鳥は近寄りもしない。だが君は、心を熱く滾らせてしまうタイプだ。そしてその技量は、必殺の一撃をいかに相手より早く当てるかに重きを置いている。そんな細やかな事を見よう見まねで出来はしない——が、それを恥じる必要はない。真剣勝負においては、拙速は巧遅に勝る。君のようなパワーファイターなら尚更だ。人の真似をして己れの本分を見失うより、得意分野をとことんまで突き詰めるのも一つの道だと思うがね」

「……………」

ゼノヴィアは目をパチパチさせた。

「…………それはひよつとして、慰めてたり励ましてたりしてるのか？」

「さて、どうだか」

曹操は肩をすくめると、己れの神セイクリッド・ギア 器である聖槍を消して、立ち去つた。

その背中を見送つた後、それでもゼノヴィアは挑戦してみたが、アーシアが朝食に呼びに来るまでの一時間掛けても、確かにスズメは

一羽も近付こうとしなかった……。

◆ 放課後。

秋月連也は女子生徒たちからの黄色い声に照れ笑いと苦笑いの入り雑じった珍妙な表情で手を振って応じつつ、校舎を出た。

そこへ――、

「待てえええっ！ この痴<sup>し</sup>れ者どもおおおおっ！」

ゼノヴィアの怒号が響いてきた。

見れば一誠・松田・元浜の三人組が、またも生徒会から逃げ回っているところだった。

「またアイツ等よ」

「やあーねえ、今度はどこを覗いてたのかしら」

「頭おかしいんじゃないかねえのか、アイツ等」

「ホント懲りないわよね」

「今年で卒業なんだからおとなしくしとけばいいのによ」

「ゼノヴィアお姉様、苦勞させられて可哀想……」

周囲の生徒たちは三人組に対して呆れや憤りの言葉を呟く。

連也はその場を離れて、校舎の裏の花壇に移動した。

その水撒き用に設置されてある水道で、バケツに水を汲むと、その水面をじつと覗き込んだ。

数秒覗き込んだ後、人差し指を水面に差し込み、サツと真横に振る。

「うおっ!?!」

同時に、校庭で三人組が一樣にすっ転んだ。まるで、見えない棒で足を薙ぎ払われたかのようなようであった。

「おらあつ！ 神妙にしやがれ、このクズども！」

副会長の匙元士郎が一誠の背中に馬乗りになる。

彼が一誠を押さええる隙に、書記の百鬼<sup>なきり</sup>が素早く松田と元浜を結束バンドで後ろ手に拘束する。

「おい匙い！ いくらなんでもクズ呼ばわりはねえだろ！」

「<sup>テメエ</sup>自分の楽しみで人の嫌がる事ばかりやるような奴はクズって言うんだよ！」

匙は拳骨を一誠の頭にゴツンと落としてから、拘束した。

「本当に勘弁してくださいよ、先輩……俺たちの仕事のほとんどがア  
ンタ等の後始末なんですから……」

百鬼がうんざりした顔で言った。

日本を魑魅魍魎の類いから守ってきた五つの集団『五大宗家』の一  
つ百鬼家の次期当主で、幼少の頃から修行してきた少年である。それ  
故に、逆に異能の力とも異形の存在とも縁がなかったにも関わらず度  
重なる激闘を潜り抜けて来た一誠に対しては、強い憧れを抱いていた  
のだが、最近はその気持ちもやや冷め気味である。

三人組を連行しながら、ゼノヴィアは軽く辺りを見渡した。

一誠たちは、まるで見えない棒で足を薙ぎ払われたかのように転ん  
だ。

もしや連也が近くにいて、念道の技を使ったのではないかと思っ  
たのだが、彼の姿は見当たらなかった。

◆ 別の日の昼休み。

連也はいつものように生徒会室で昼食を済ませた。

今日はゼノヴィアだけでなく、他の生徒会メンバーも一緒だった。

「じゃあな」

弁当を風呂敷に包んだ連也は、水筒と一緒にフアスナー式のランチ  
バッグに詰め込み、席を立った。

「……連也。最近あれをやっていないようだが」

ゼノヴィアが尋ねた。あれとは王冠のチャクラを開く練習である。

「ああ、やめた」

「何だよ、諦めたのか?」

今度は匙が聞いてくる。

「今はな」

と、連也。

「あの時は火事場の馬鹿力的な何かで開いたんだと思う。だから稽古  
を積んで、今の地力をその火事場の馬鹿力でブーストされた状態と同  
じレベルにまで高めていけば、案外簡単に開くかも知れない。だか

ら、今は王冠のチャクラの事は忘れる」

「でも、もつたいなくねえか？ 聞いた話じゃ、本当に物凄いパワーだったらしいじゃねえか」

「そうですねよ秋月先輩。その王冠のチャクラっていうのを完璧にコントロール出来れば、修行段階を一気に五く六段くらいすすつ飛ばして進められるんじゃないですか？」

百鬼が言った。

オルランドとその一党との戦いでは、兵藤邸の警護を任されていたので目の当たりには出来なかったが、あの赤龍帝兵藤一誠がかなわなかった相手を一人で倒したという事実だけでも、彼には充分過ぎた。サイラオーグとの試合は間近で観戦した。

連也が今よりも更に、爆発的に強くなれるかも……というのは、他人事ながらワクワクする話なのである。

「だったら尚更、今はやめる」

しかし連也の返答は変わらなかった。

「砂山を高くしようと思ったら、まずはしつかりした土台を作らないとな。闇雲に大量の砂を重ねても、砂の重みで山が崩れるだけだ。焦って他の事を疎かにしちまったら、何の意味もない」

「まあ、確かに……」

百鬼はそう同意した。物心ついた時から修練に明け暮れている彼には、連也の言い分もわかるのだ。

しかし、それはそれとしても、連也はあまりにも冷静だ。

あまりにもものんびりしている。

一度は手にした最強のパワーが使えなくなったのだから、もう少し焦りや苛立ちが見えてもいいはずである。

「でもよ。そうやってのんびりしてる内に、本当にやり方とかわかんなくなったらどうすんだよ」

匙はまだ納得いかないのか、せつつくように言う。

「別に。俺にそれだけの素養がなかったってたけの話さ。大事なのは結果じゃないし、結果が大事だとしても、それなら尚更、過程を大切にしないとな。テストと同じだよ。百点取るには日頃の勉強をちや

んとやらないとな」

連也はあつけらかんと答えて、生徒会室を出ていった。

「……なあくんか、よくわかかんねえな、アイツ」

匙がボソツと呟いた。

「普通なら、もつとがむしやらに修行するもんだろ」

「強くなるためなら、そうなのだろうね」

ゼノヴィアが匙にそう言った。

「でも連也は、おそらくそういった事には興味がないんだろう。サイラオーグやヴァーリに勝負を挑まれた時も、断っていたしね」

「じゃあ、なんでアイツはネンドーとかいうのの修行をしてるんだ？」

「そういう家系に生まれたからとか？」

「さて、それは私にもわからない。ただ、今の例えで言うなら、連也はテストで百点を取るために勉強するのではなく、日頃の勉強をきちんとするために、テストで百点を取るという目標を持っているのかも知れないね」

「だから百点取れなくても、それはそれで別にいいって事か……」

「たぶん、ね。連也は強い奴と戦いたいとか世界で一番強くなりたいとか、そういう目的意識は持っていないんじゃないかな。自分がどこまで強くなれるのかを知りたいだけで、他者との勝ち負けは最初から眼中にないのだろう」

「わかるようなわからんような……」

匙の呟きは、その場にいた生徒会役員全員の気持ちでもあった……。

◆  
それから一週間が過ぎた。

ゼノヴィアは、曹操が見せたあの鍛練に今も挑戦を続けている。

しかし結果に変わりはなかった。

目を閉じて呼吸を緩やかにしても、スズメはおろか他の小鳥さえ近付かない。

「だから言ったろう、時間の無駄だと」

未だに兵藤邸に居候している曹操が、後ろから声を掛けた。

「君はただ、何も考えてないだけだ。無念無想には程遠い」  
「悪かったな」

ゼノヴィアはぶつきらぼうに答え、唇を尖らせ——ハア、と大きく息を吐いた。

「剣士としてある程度は完成されたつもりだったが、まさかスズメ一羽も引き寄せられないとは情けない……か？」  
「うるさいな」

しかし曹操の言葉は、彼女の胸のうちを正確に表現していた。

ゼノヴィアは、ジロリと曹操を睨む。

「確か、連也も同じ事が出来ると言っていたな」

「俺以上にね」

「そんな連也と戦ってみたいとか、思わないのか？」

「戦ってほしいのか？」

「そんな訳あるか。連也に手を出したら私が承知しないぞ——ただ、ヴァーリやアーサー、サイラオーグの例があるからな……君が妙におとなしくしているのが、却って不安というか、気味が悪い」

「ひどい言われようだな」

曹操はヒョイツと肩をすくめた。

「まあ、力試し・腕試しが理由で君たちに挑んだ前例があるから、仕方ないが……今のところ、彼に挑むつもりはないよ。ただ、彼のけいがい警戒に、しばらくは接していたい」

そう答える曹操は、どこか遠くを見るような眼差しだった。

警戒とは咳払い、或いは人が話をしている様子を現す。『警戒に接する』とはつまり、相手と会ったり話を聞いたりする事だ。それも、友人や恋人などとは違う、尊敬する相手に対して使う言葉である。

一度は英雄を名乗った曹操にしてみれば、現在進行形で英雄視されている連也は確かに興味の対象だろう。

(それにしても、この男がそんな風に言うとはね……)

友人として、ゼノヴィアは何だかちよっぴり誇らしい気持ちになった。

同時に、自分も改めて秋月連也という男の事を、もつと深く知れた。

くなった。

その思いは一旦自覚すると加速度的に膨らみ、燃え上がり、抑えきれなくなっていく。

そして三日後の放課後、ゼノヴィアは無人の屋上に連也を呼び出した。

「どうしたんだゼノヴィア。いったい何の用なんだ？」

連也はいつものようにノホホンとしているが、胸中は穏やかではない。

わざわざ屋上に呼び出しての二人きり。

人目をはばかる用事であろう。

となれば、彼としてはいささかなりとも期待してしまうのだ。

「すまない。君が今、色々と騒がしく落ち着かない状況なのは百も承知だ。しかし、どうしても自分を抑える事が出来ない……こんな気持ちを抱えたまま、君と友人として付き合い続けるのは、もはや不可能だ」

ゼノヴィアは連也の目を真つ直ぐに見ていた。

目と目が合って、連也は不覚にも照れ臭くなった。

そして、期待で心臓の鼓動が早まるのも感じた。

「連也……どうか、私と一手、お手合わせを願いたい」

「なんでそうなるんだよおおおおツツ!!」

連也の悲痛な叫びが、屋上に響き渡った――。

## 聖剣戦争

「なんでそうなるんだよおおおおッツ!!」

連也の悲痛な叫びが、屋上に響き渡った。

ゼノヴィアは驚いて、目をパチパチさせる。

「……ああ、そうか。うん、確かにそうだ。君を護衛する立場にある私が試合を申し込むなどもつての他だ。それは本当にすまないと思っ  
ている」

ゼノヴィアは連也の気持ちなどほとんど気付いてないらしい。当たり前だが。

「だが、どうしてもこの気持ちを抑えきれない。剣士としての君を、私はもつと深く知りたいんだ」

「それなら散々見てきただろ」

「第三者の視点と、対戦相手としての視点では、見えてくるものが違う。実際に手合わせをせねば見えないもの、わからないものだってある。私は、それを知りたい。そうする事で、戦士としてより一段上のステージに上がれるかも知れないからね」

「……でもさ、それなら良さげな相手はもつと他にもいるだろ……いるよな?」

「私は君がいい。というか、君でないとダメだ」

ゼノヴィアは即答した。

「ヴァスコ・ストラード猊下は、私の使う聖剣デュランダルの先代の所有者だった。君はそのストラード猊下と、猊下を降したオルランドを倒した。怨み辛みの類いではなく、純粹に剣士として、私は君の事を本当の意味で知りたいんだ。そして、そうする事で自分を高めたいんだ」

ゼノヴィアの真っ直ぐな気持ちのこもった返答に、連也は何も言えなくなつた。

己れを高めたいという気持ちなら、彼にもある。

強い奴と戦いたいだけの命がけのスリルを楽しみたいだのという酔狂な理由でなら真っ平ごめんだが、そういう気持ちで求められては、

断りづらかった。

(……やっぱり受けるんじゃないかな)

サイラオーグとの一戦を思い返して、連也はちよっぴり後悔した。彼の挑戦に応じておいて、ゼノヴィアからの挑戦を突っぱねるのは道理に合わない。

つまり、断る理由がますますない。

「わかったわかった、わかりました。受けてやるよ。時間と場所はそっちで勝手に決めてくれ」

連也は溜め息混じりに、承諾した。

「本当か？　ありがとう連也、嬉しいよ！」

ゼノヴィアはパツと笑うと、連也の両手をギュツと握り、ブンブんと上下に振った。

柔らかくて、スベスベした手だった。

デュランダルと言ったか、とてもあんな大きな剣を振り回してるとは思えない。

舌の根も乾かぬ内に、連也は戦うのがちよっぴり嫌になった。

「——ただし、条件がある」

「何だい？」

「俺が勝ったら、一日デートしてもらおうぞ」

思いきって言ってみた。

真面目なゼノヴィアなら、こんな軽薄な事を言われれば断るだろうと踏んでの事だが——、

「ああ、いいぞ」

「いいのお!!」

一ミリ秒の間も置かず快諾するゼノヴィアに、逆に言い出しっぺの連也の方が驚き、すつとんきような声が出た。

「争いを好まない君に我が儘を聞いてもらうんだ。こちらもそれくらいいしなくては筋が通らないだろう？」

「え、あ、うん、そうね、その通りね……」

「では今度の日曜日などどうだろう？　場所は冥界にある私の領地内から見繕っておくよ」

「お前、領地とか持つてるのか？」

「去年の夏に、リアス様からもらったんだ。管理はほとんどグレモリー家に任せてあるけれどね。当日私が案内するから、駒王駅前の公園で待つててくれるかい？」

「アツハイ」

「よし、決まりだ。ありがとう連也。いい試合をしよう」

ゼノヴィアはそう言うのと、去っていく。

あとに一人残された連也は、その場に座り込んだ。

「……何が悲しくて女の子と決闘なんてしなきゃいけないんだ」

俺、前世で何か悪い事でもしたのかな……そんな風にすら思ってしまう。

しかも自分が勝ったらデートしてもらおう約束まで取り付けてしまった。

流れが流れだけに、棚ぼた的な喜びより『やっちゃった……』的な後悔の方が大きい。

果てしなく気が重くなる連也であった。



その日の夜。

ゼノヴィアは自室で桐生藍華とスマホで話をしていた。

「……という訳で、その日は君とアーシアとで遊びに行くともみんなには知らせるつもりなんだ。すまないが口裏を合わせてもらえないだろうか」

『オツケー、それくらいはお安いご用よ』

桐生は軽い調子で答えた。

ゼノヴィアの用件は、言ってしまったえばアリバイ工作である。

悪いとは思うものの、報告したところでリアスも一誠も、それぞれ別々の理由で承知するはずがないからだ。

アーシアを巻き込むのも申し訳ない気持ちだったが、万が一の事を考えると、彼女の神セイクリッド・ギア器は必要不可欠だった。

『それにしても意外ね。ゼノヴィアっちが兵藤以外の男とデートだなんて』

「そんな色っぽい話じゃない。デートは連也が勝った場合の話だ」

『でもさ、ご主人様である兵藤に内緒で他の男と会うのは確かでしょう？ 秋月にしたって、おとなしそうな顔してそんな約束取り付けるなんて、アイツも案外スケベなのね』

「おい桐生。冗談でも連也の事を悪く言うのは良くないぞ。彼はこの駒王町の恩人であり、英雄なんだからね」

『——んん？ て事は、悪者やつつけたのマジで秋月な訳？ 私てつきり、アンタたちの秘密を守るためのスケープゴートだと思つてたわ』

「事実だよ。私たちが束になっても勝てなかった相手を、連也は一人で倒してのけたんだ」

『へえ、アイツがねえ……それでゼノヴィアたちは、兵藤から秋月に乗り換えようつて訳ね』

「だからそういう話じゃない。純粹に剣士として、彼の事をもっとよく知りたいんだ」

『ハイハイ、じゃあそういう事にしといてあげる。とにかく今度の日曜日、アンタやアーシアと一緒に遊んでたつて事にしとけばいいんでしょ？ リョーカイリョーカイ』

「そうだ。手間をかけてすまないね。おやすみ」

『おやすみ』

桐生の返事を聞いてから、ゼノヴィアは通話を終わらせた。



それから2日ほど過ぎた放課後。

生徒会の仕事を終えたゼノヴィアは一人で家路についていた。

時計の針は七時を回り、日の長くなり始めた初夏とは言え、もう辺りは薄暗い。

ゼノヴィアは何を思ったか、住宅街へ続くルートから外れて、町外れの廃工場へと向かう。

工場の中に入ると、開け放されたままの出入口の方を振り向いた。

「私に何か用か？」

そう問い掛ける先には、スーツ姿の青年が一人、立っていた。

アーサー・ペンドラゴンである。

薄暗い工場内だからそう見えるだけなのか、心なしか顔色が少々悪い。

しかし眼鏡の奥の眼差しには、妖しい光が宿っていた。

「ええ。あなたのエクス・デユランダルと、是非とも一手交えたいと思ひましてね」

答えるアーサーが右手を虚空にかざすと、そこから光の紋様が現れ、中から聖王剣コールブランドが顕現する。

「お前の魂胆などお見通しだ。連也をその気にさせるために、私を痛め付けようというのだろうか？ 連也は正義感が強いから、そうすれば本気で戦ってくれると考えたんだろう」

「もちろんそれもあります、今言った言葉も本音ですよ。あなたのエクス・デユランダルにも、大いに興味を抱いているのです」

「そうか、それは光栄だな。だがまあ、それはそれとして——ルフェイちゃん萌え萌え！」

ゼノヴィアはルフェイから教えられた、アーサーやヴァーリを撃退する呪文を叫ぶ。

しかしアーサーは、まったく動揺する様子を見せなかった。

「ルフェイの入れ知恵ですか？ 無駄な事を……私はそのおぞましき冒流的な死の呪文を、自ら繰り返しつづやき、耳で聞き、この手で繰り返し書き取りをする事で耐性を付けたのです……ふふふ……それ以前に、あんな醜態をよりによって家の者に見られてしまった今、この私に恐れるものなどもう何もないですよお！」

アーサーの声は、かすかに哀しみの色を帯びていた。

ゼノヴィアはほんのちよっぴり、アーサーに同情した。

「すなわち今の私は色んな意味で無敵。もはや神であろうと止められはしません。ゼノヴィアさん、あなたに怨みはありませんがこれも剣士の宿命と想っていたかもしれません」

言うなりアーサーは、コールブランドで虚空を斬り上げた。

一筋の閃光が、地面にうつすらと積もった砂埃を巻き上げながらゼノヴィアに迫る。

しかし、その剣光を受け止める物があつた。  
エクス・デユランダルだ。

いつの間に顕現したのか、その機械的な物々しさに満ち溢れた威容を宙にそびえさせている。ゼノヴィアがその柄を握り、唱えた。

「アムド鎧化！」

デユランダルに取り付けられて鞘を構成していた七本のエクスカリバーが、分離・変型して鎧を構成し、ゼノヴィアの身体に装着された。

「そのような使い方があるとは、驚きですね……」

「以前イツセーの部屋で読んだコミックを参考にした」

本気とも冗談ともつかぬ事を言いつつ、ゼノヴィアはデユランダルを左に掲げた。

瞬間、鋭く響く金属音——アーサーが間合いを詰めて斬りつけて来たのである。

直後、二人の姿が消えた。

かと思うや否や、工場内に風が巻き起こり、あちらこちらで金属音が鳴り響き、衝撃波が四方八方に撒き散らされる。

ゼノヴィアとアーサーが猛スピードで動き回り、互いに相手の死角に回り合い、白刃をぶつけ合っているのだ。

その超高速の打ち合いの中で、ゼノヴィアは改めてアーサーに対して戦慄を抱いた。

デユランダルと十合以上も打ち合えるのは、さすが聖王剣コールブランドだと納得出来るからまだいい。しかし騎士ナイトの駒とエクスカリバー・ラビッドリイ天閃の聖剣の二つの特性を得た自分のスピードに、ただの人間であるはずのアーサーがついてきているのはどういう事か。

(こいつ、本当に人間か!?)

それとも聖王剣に、所有者に超人的な身体能力を授ける加護でもあるのか……。

しかしゼノヴィアはそういった思考をすぐに止めた。

今はアーサーとの太刀打ちに集中せねばならない。彼は工場内の壁や柱、放置されたままの機械などを蹴る事で、軌道に変化を付け始

めた。

しかも太刀筋は正確で、鎧の隙間を的確に狙ってくる。わずかな気の弛みや隙が命取りになりかねない。

ゼノヴィアは背中から悪魔の翼を広げて、上空に飛んだ。

アーサーも手近な柱を蹴って後を追う。

廃工場の天井は高く、五メートル近くある。

二人の剣士は上昇しながら刃をぶつけ合い、天井スレスレまで来たりで重力に従って落下している間も、打ち合った。

アーサーがもうすぐ地面に着地するその瞬間、ゼノヴィアは翼を強く羽ばたかせて滞空した。

着地の体勢を誤れば致命的な隙をさらす事になる。だからその瞬間だけは、如何にアーサーといえど攻撃が途切れる。その瞬間を狙って、彼の頭上を取ったのだ。

「もらったぞ、アーサー！」

ゼノヴィアは大上段に掲げたデュランダルを振り下ろす。

アーサーは、着地の衝撃を和らげるためかその場に膝をついていた。

コールブランドは地面に柄まで深々と突き立てられて――、  
(いや、違う！)

ゼノヴィアは攻撃を中断し、身体を捻り、翼を羽ばたかせて真横に飛んだ。

ほぼ同時に、ゼノヴィアがさつきまでいた位置に、コールブランドの刃だけが虚空から生えていた。空間転移攻撃だ。回避が遅れていたら、鎧の隙間を通して串刺しにされていただろう。

ゼノヴィアは翼を体内にしまいながら、地面に着地した。

回避は完全には間に合わず、わずかながら翼をかすめていた。アーサーの頭上を取るために翼を広げたのが災いして、被弾面積が増えてしまったのだ。

「お見事ですね。こちらこそ取ったと思ったのですが」

コールブランドを正眼に構えながら、アーサーはしかし、どこか楽しげにつぶやく。

「やはり小細工などやめて、真つ向勝負といきましょうか」

「望むところだ」

ゼノヴィアは答えつつ、こちらから攻撃に出た。

虚空に突き出したデュランダルから、聖なる光の波動がほとぼしり、巨大な閃光となってアーサーを襲う。

アーサー、これを聖王剣で幹竹割りにして雲散霧消させるや否や、ゼノヴィアの懐に一気に飛び込んで、鎧に覆われていない脇腹目掛けて斬り付ける。

ゼノヴィアは腕甲に守られた左腕でそれを叩き落としてつつ、アーサーの脳天目掛けてデュランダルの片手面打ち。

しかしアーサーはこれを回避、ゼノヴィアの背後に回り込んだ——と同時にゼノヴィアも後ろを振り向き、デュランダルを横一文字に振り抜く。

アーサーは迫る青い刀身を跳躍してかわし、その刀身を蹴って更に高く跳んだ。

コールブランドを両手で握り、渾身の打ち下ろしが雷光めいてゼノヴィアに繰り出される！

瞬間、白光が閃き、別方向から伸びてきた刀身がその一撃を受け止めた。

「ちよつとアーサー！… どういうつもりなの！」

聖剣オートクレールを携えた、紫藤イリナであった。

幸運であった。

彼女はロードワークのためのコースを複数駒王町内に作っており、今日はこの廃工場付近を通るコースを選択したのだ。

いつもは早朝にやるロードワークを、今朝は寝坊して出来なかったため、この時間にやっていたのも幸いした。

「オートクレール……と、紫藤イリナさんでしたか。ふふ、ますます楽しくなって来ましたね」

アーサーは邪魔が入ったというのに、むしろその状況を楽しんでいる。

「ねえゼノヴィア、なんでアーサーとこんな所でチャンバラしてるの

？」

「かくかくしかじか」

「まるまるうまうまという訳ね……そういう事なら容赦しないわ！私がこの場に居合わせたのも天の思し召しでしょうしね！」

「ああ、全力でいくぞー！」

ゼノヴィアとイリナは、二方向から同時に打ち掛かった。

これに対しアーサー、自ら間合いを詰めて、まずはイリナを迎撃する。

コールブランドの上段からの打ち下ろしを、イリナはオートクレールで受け止めた。

しかしその威力たるや凄まじく、思わず足が止まる。

かと思いきや、アーサーはすぐに狙いを変えてゼノヴィアに斬りかかった。

コールブランドとデュランダルがぶつかり合い、衝撃波を撒き散らす。

その鏢迫り合いも束の間、アーサーはまたもや狙いを変えて、後ろから迫るイリナと打ち合う。

さすがの彼も二人の女剣士を同時に相手取るのは分が悪いと見たのか、交互に対応する。

そうしながら二人の距離を徐々に引き離して、連携を取れなくしていた。

ゼノヴィアと三合打ち合った後、その腹を蹴り飛ばして引き離しつつ、蹴った反動でイリナの方へと飛ぶ。

イリナのオートクレールとアーサーのコールブランドがぶつかり合って、鏢迫り合いとなった。

二人はすぐに離れて太刀打ちに入る。

しかしイリナはアーサーのスピードについてこれず、すぐに追い込まれた。

「……うわ」

不意にイリナの顔が嫌悪に歪んだ。

その隙にコールブランドが少女の白い首筋を襲う。

「イリナ！」

すかさずゼノヴィアがカバーに入った。アーサーの背後からデュランダルで斬り付ける。

アーサー、咄嗟に跳躍してそれをかわし、距離を取った。

「イリナ、ボサツとするな！」

「いや、だってアレ、アレ……うわあ……」

「うん？」

イリナが顔を背けながらアーサーを指差す。

どうしたのかとゼノヴィアがアーサーに目線をやると、すぐに相棒同様に顔を歪めた。

「うっ……」

「ね？ 信じられないでしょ？ 有り得ないでしょ？」

「あれは……お前が引くのも無理はないな……」

「……？」

戦闘中とは思えない態度に、アーサーは首を傾げた。

そういえば、さつきから鼻や口元がヌルヌルする。

手の甲で拭って見ると、赤く汚れた。

鼻血が出ていた。

「これは失礼。デュランダルとオートクレールを同時に相手出来る喜びのあまり、つい興奮しすぎてしまいました」

「いや、そっちじゃなくて下！ 下！」

「お、お前……さすがの私もちよつと引くぞ……はつきり言って気持ち悪いぞ……」

「下っ」

チャックはちゃんと閉めてるはずだ。しかし二人の様子は、とてもこちらの注意を逸らすための作戦とは思えず、アーサーは下を向いた。

——股間が見事にテントを張っていた。

「……ふふ、何かと思えば……今も言ったように、シャルルマーニュ伝説に名高き二本の聖剣と斬り結べるのです。剣士ならば血がたぎり、このようになってしまうのは当然の結果でしょう」

アーサーはそれでもやっぱり恥ずかしいのか、それとも単に興奮しているだけなのか、頬をかすかに赤らめつつ言った。

「さあ、続けましょうお二方。これはもはや手合わせなどという甘っちよろいものではない。私という国と、あなた方という国との、聖剣による全面戦争、聖剣戦争とでも言うべき戦いだ！」

「勢いだけで喋るの、やめた方がいいよ」

冷めた声が、出入口の方からした。

三人が同時に振り向く。

ジャージ姿の秋月連也が、そこにいた。傍らには黒歌もいる。

「これはこれは、何たる僥倖……黒歌。あなたが彼を？」

「あんたが町中をウロチョロしてるの見かけたから、ダーリンに忠告したのよ。そしたらダーリンが自分で来たの」

「ほう、秋月連也くん、それはどういう風の吹き回しですか？」

「あんたがゼノヴィアを付け回してるって聞いたもんで、もしやと思ってるね……ゼノヴィアと紫藤さんを痛めつけて俺を怒らせようって魂胆か？」

「その通りです。そうでもしないと本気で相手をしてくれそうにありませんからね」

「やっぱり……いいよ、相手してやる」

連也は左右の拳を握ると、親指側同士でくつつけた。

そしてそれを左右に開く。

まるで見えない鞘から抜き放たれたかのように、少年の右手に柄巻きを施した木刀『飛龍』が握られていた。

「ただし、今日で最後だけだな」

いつも通りの、のんびりした軽い口調だ。しかしその声音には、そこはかとない凄味があった……。

## 断空剣

秋月連也とアーサー・ペンドラゴンは、互いに得物を同じ中段に構えて、対峙した。

恋慕にも似た想いが成就して、アーサーは口角が上がるのを抑えられなかった。また、抑える気もなかった。

みなぎる闘志に呼応しているのか、聖王剣コールブランドはその身に宿す聖なる波動を高め、刀身から白い炎が激しく噴き上がっている。

一方、連也の表情は穏やかだった。とても、これから決闘を行うとは思えない。顔はおろか全身から力が抜けて、寝息が聞こえて来てもおかしくはない——戦いを見守るゼノヴィアたち三人にはそう思えてしまう。

しかしアーサーは決して油断してはいなかった。

何故なら、連也の構える木刀の切っ先が、徐々にではあるが膨らみつつあるからだ。

剣道の達人が得物を構えると、相手にはその切っ先が大きく見えてしまうという。

剣士としてそれなりに高いレベルにあると自覚するアーサーにそのような感じさせる少年を、警戒しない方がおかしい。

何よりアーサーの目には、木刀の切っ先から光の輪が発せられ、輝いているのが見えていた。

二人の剣士の静かな対面は、しかし数秒の後に終わった。

アーサーの姿がフツと消えた。

連也が全く同時に右手側に木刀をかざすと、そこに移動していたアーサーの打ち込みが木刀に叩きつけられていた。

アーサーは更に二度三度と苛烈な打ち込みを入れてくる。上下左右にランダムに打ち分けて、パターンを読ませない。

しかし連也、これを全て木刀で受け、払い、よく防いでいた。

——かと思いきや、後ろに跳んで距離を取る。

アーサーはすぐに追い付き、首筋を狙って横一文字に聖王剣を振り

抜く。

対する連也、木刀を斜めにかぎして、刀身を滑らせるようにして攻撃を受け流すと、反撃に出た。今度は連也が立て続けに木刀を打ち込んでいく。

そしてアーサー、先程の連也同様にそれらを時に受け、時に払いして防いだ。

「こんなものではないでしょう」

防ぎながら、ポツリとつぶやく。聖王剣を通して伝わる衝撃が、思いの外軽いのだ。

「早く本気を出さないと、命は保証しませんよ?」

声音に冷たいものを含ませながら、アーサーは連也の喉元目掛けてコールブランドを突き出す。

その突きは、しかし突然刀身がグニヤリと曲がって狙いが逸れた。

「!?!」

何だ、今のは?

アーサーが引き戻した聖王剣を見るが、何の異常もない。

次いで胴狙いの斬撃を繰り返すが、今度も刀身が直角にグニヤリと曲がり、連也のジャージにすら届かず空を切った。

この怪現象の正体は、すぐにわかった。

アーサーが目を凝らすと、連也の周囲に幅10cm、長さ30cmほどの、帯状の陽炎めいたもやがいくつも浮かんでいるのだ。

念道とやらの力で空間を歪ませて、攻撃を逸らす盾にしたのだらう。

先程の妙に軽い打ち込みは、この太刀筋に沿って歪曲空間を作るためのものだったのだ。

連也にしてみれば、苦肉の策であった。

コールブランド自身の威力に加え、木刀『飛龍』に宿っていた先代たちの念が消失したため、長時間の打ち合いが出来なくなっているのだ。

「なるほど、あなたも空間を操れるんですね」

アーサーはニヤリと笑い、攻撃を仕掛けてきた。

今度も歪曲空間によって攻撃が逸らされるかと思いきや、聖王剣の白刃はその空間の歪みそのものを切り裂いた！

「おわつとおー！」

連也、予想外の事態に、奇声を漏らしつつ聖王剣をかわす。

アーサーは立て続けに、歪んだ空間そのものを切り裂きつつ打ち込んで来た。

連也、これを必死にかわしていくが、アーサーの面打ちをサイドステップで右によけた瞬間、右肩に刃物で切られたような痛みが走った。

「――？」

しかし、そこには何も無い。

「フツ、もつとよく目を凝らしてごらんなさい。そうすればわかるはずですよ」

アーサーは悠然とした足取りで後退しながら言った。

連也が目を凝らすまでもなく、吹き込んだ風に巻き上げられた砂埃が答えを教えてくれた。

連也の周囲のあちらこちらで、その砂埃の薄膜に切れ目が生じたのだ。

長さ30cm、しかし幅は1mmほどもあるまい。聖王剣の力で切り裂かれて出来た空間の裂け目が、少年を取り囲んでいた。その極薄の空間断層が刃物となって、連也の右肩を切り裂いたのである。

「コールブランドはあまりによく斬れるので空間すら斬ってしまう。空間の断層は本来ならすぐに閉じてしまうのですが、切り方を工夫すれば、長時間滞空させておく事も出来るのですよ。ファントムレイザー……とでも名付けましょうか」

「いかにも今考えましたって言い方だけど、ホントはずっと前から考えてたろ」

「よくわかりだ。ならば、下手に動けば手足が簡単に切り落とされてしまう事も、おわかりですね？」

アーサーは警告しながら、ゆっくりと聖王剣を振り上げた。

刀身から聖なる波動が白光を伴って溢れ出し、目映い光輝を放ち始

めた。コールブランドそのものが光となってしまったのかと見紛うほどだった。

「そしてこの一撃が、空間を歪ませた程度では防げない事も！」

その激烈なる光輝の聖剣を、アーサーは振り下ろした。

廃工場内全体が白く照らされ、巨大な閃光がほとぼしり、連也を襲う！

左右や上に飛べば空間断層で切り裂かれる。

しかし後ろに跳んだところで、真つ直ぐに正面から飛んでくる閃光には何の意味もない。

「イエエエーヤッ！」

連也、雄々しく声を張り上げつつ、木刀を四方八方に振り回す。

追い詰められて錯乱したのか？

——否。

太刀筋に沿って作られた歪曲空間が、水流が木の葉を運ぶように周囲の空間断層の刃を押し流し、連也の正面にかき集めて、バリケードを形成した！

空間断層と歪曲空間の二重の防御帯が、アーサーの放った砲撃にも似た閃光を切り裂き、四散させた。

「お見事」

しかしアーサー、既に間合いを詰めている。

大きく振りかぶった聖王剣を右から左へ、横一文字に振り抜く！

連也、これを真後ろに跳んでかわしつつ、距離を取った——はずだった。

ゼノヴィアたちの目に、奇異な光景が映った。

広げたはずの間合いが、連也とアーサー両者の体が磁石のように引き合い、あつという間に埋まってしまったのだ。

アーサーの今の一撃で、両者の間の空間そのものが切り裂かれ、削り取られたのだ。

空間の断層はすぐに閉じてしまう。その習性を利用して、連也をコールブランドの射程圏内に引き込んだのである。

アーサーは勝利を確信しながら、渾身の力で聖王剣を真つ向上段か

ら稲妻めいて振り下ろす！

「エヤアッ！」

対する連也、体を開いての片手抜き胴！

両者の得物が描いた光の太刀筋が交差した瞬間——連也の顔を斜めに赤い筋が走り、血が溢れ出した。ジャージも下のシャツごと胸元が切り裂かれ、染みが浮かび上がる。

アーサーの表情は、しかし驚愕の色に染まっていた。

彼の手の内からコールブランドが光の粒子となって分解され、消滅してしまふ。

「……何を……した……」

「ここに来る途中で、黒歌さんから聖剣使いの事を聞いた。聖剣を使うには、それに対応した因子とかいうのが必要なんだつてな。だから、あんたの体の中のその因子を破壊した……剣はどつか行っちゃったみたいけど、あんたはもう、二度とあの剣を振るえないよ」

連也の答えに、アーサーは更に何か言おうとしたが、あまりの事に言葉が出てこないのか、ただ口をパクパクと動かしながら、気を失った。

連也は倒れるアーサーを片手で抱き止め、ゆっくりと地面に横たわらせてやった。



兵藤邸。

連也はその客間で上半身裸になって、アーシア・アルジエントから治療を受けていた。

セイクリッド・ギア トワイライト・ヒーリング  
神器 《聖母の微笑み》の光が、顔や胸、肩の傷を瞬く間に治していった。

ジャージやシャツは、朱乃と静江が縫って修繕してくれた。

「うちの不出来でろくでなしかつ穀潰しの兄が本当にすみません」

ルフエイはそう言って連也とゼノヴィアに何度もペコペコと頭を下げる。

今回の兄の行動は、兄を追い詰めすぎた自分の責任だと思っているのだろう。

その後ろでは、未だ気絶したままのアーサーが簀巻きにされて転がっていた。

「まあ俺の方も新しい技の練習になったし、そんな気にしないで」

連也は修繕されて返されたシャツを着ながら、笑って言った。

「お兄さんは明日の朝には目を覚ますと思うよ。それと聖剣の因子とかいうの、一時的に機能を停止させてるだけで、一週間くらいでまた元通りになるから、もしそれまでにお兄さんが絶望して首でも吊りそうになったら教えてあげて」

「いつそのこと本当にぶっ壊しちゃえば良かったのに」

連也の隣に座る黒歌が言った。

「そうはいきませんよ。一応『でいーでいー』とかいうテロ対策チームのメンバーでしょ？　そうでなくても身を守る力は必要だし、あの剣がアーサーさんにとっても大事な物なのもわかる」

「お気遣いいただいて、重ね重ね本当に申し訳ありません、連也様」

ルフエイは背中が見えそうなくらい深々と頭を下げた。

「……連也さん、本当に優しい方ですね」

アーシアがポツリとつぶやく。

「私、お話を聞いた時はアーサーさんに対して呆れましたし、怒りもしました。なのにあなたは、そんなアーサーさんの事も気遣って手加減してくださっていたなんて」

「ていうか、あのアーサー相手に手加減出来る事自体凄いわよね」

と、イリナが言った。

「手加減なんてしてないよ。念道は妖魔や悪霊相手には必殺たりうるけど、対人戦闘の技としては『究極の峰打ち』がコンセプトだ。元々人間相手なら殺傷力が低いんだよ。怪我させてるようじゃ半人前もいいとこさ」

連也はそう答えた。

答えながら、オルランドの事、そしてストラーダの事を思い出す。

あの魔剣豪を殺した事については、後悔はない。倒さねばならぬ危険な魔物であり、許されざる大罪人である。

しかし、空港で別れた時のストラーダの顔を思い出すと、やはり悪

い事をしたような気分になってしまふのだ。

「君のおかげで、あの子は悪から解放されたのだ。もうあの子は、誰も傷付けなくて良くなったのだ……君は、正しい事をした。だから、どうか胸を張ってほしい」

◆ ストラードはそう言ってくれたが、その時の今にも泣きそうな顔を思い出すと、とてもそんな気持ちにはなれなかった……。

兵藤邸を後にした連也は、家路を歩いていった。傍らにはゼノヴィアがいた。助けてくれた札に家まで送ると言って聞かなかったのだ。

黒歌はそんなゼノヴィアを敵に回すのを恐れてか、今回はあつさり引き下がった（夕飯の時間だったからというのもあるが）。

「君には本当に助けられてばかりだな、連也」

「お互い様さ。俺の方も何回か助けられたしな」

「そうかも知れないが、助けた・助けられたで言えば、我々が助けられた方がよっぽど多いよ。D×Dの一員としても、駒王町の住民としてもね——だが、それとこれとは別だからね？ 今度の試合では私も全力でいくから、君も遠慮せず本気で来てくれ。でないと、せつかくの試合の意味がないからね」

「へいへい」

連也は気のない返事を返す。

ついさつきまでアーサーと超常の剣劇を繰り広げていたとは思えない、気の抜けた横顔だった。

見てるとゼノヴィアの方も、つい力が抜けてしまう。

逆に言えば、こんな家で寝転がって駄菓子をつまみながら漫画本を読んでそうなのんびりした少年が、自分でも一目置くような強敵たちを倒しているのである。

その二面性に、心惹かれる。

自分の《王》<sup>キング</sup>である兵藤一誠とは、また違った魅力を感じ始めていた。

## 連也 V S ゼノヴィア

駒王商店街はオルランド眷属の破壊活動の被害が少なかつた事もあり、復旧作業もいち早く完了していた。

日曜日。

その商店街の奥にある喫茶店『青い鳥』で、リアス・グレモリーは大盛りのチョコレートパフェを、小さな子供のような満面の笑顔で食べていた。

デスクワークが一区切り付いたので、自分へのご褒美と気分転換、そして残りの雑務への英気を養っている最中である。『休むのも仕事のうち』という言葉もあるが、彼女は今それを実践しているところだった。

テーブルを挟んで向かいの席には、側近にして親友でもある姫島朱乃が座っており、こちらはチーズケーキを味わっていた。しかしふと目の前のリアスの顔を見るなり、コロコロと笑った。

「あらあら、ウッフ。リアスったらお口の周りがベトベトじゃない」  
手元のおしぼりでチョコクリームまみれのリアスの口許を拭いてやる。

リアスは食べる手を止めて「ありがとう」と礼を言った。その頬はかすかに赤らんでいた。

「でも仕方ないわね、あなたにとっては久しぶりのお出かけだもの」  
「そうね。本当に、仕事以外でお外に出たのは久しぶり……お日様の光を浴びて、生き返ったような気分ですらあるわ」

「あらあら、ウッフ。純血悪魔のあなたがそんな事を言っているの？」  
「私はいいの」

リアスはキツパリと言い切つて、チョコレートパフェの攻略を再開する。

拭いてもらったばかりの口許がまたもや汚れてしまい、その度に朱乃が拭いてやった。王の気分転換のためならこうやって子供のようクインに甘えさせてやるのも女王たる自分の務めだと思っキングているので、苦にもならない。それどころか、こうしてリアスのお世話をし

がちよつぱり楽しかった。

そこへカランカランとベルの音が響く。店の出入口のドアに付いてある物だ。

リアスと朱乃が何とはなしにそちらを見やると、一誠だった。

その隣には、二本の三つ編みと桃色のフレームの眼鏡を掛けた、同い年の少女。

二人はリアスたちには気付かず、通りに面した大きなウインドウのある席に座った。

リアスが口許を自分のおしぼりで拭いてから、立ち上がった。

朱乃も立ち上がると、二人は一誠たちの方へと歩き出した――。



時間は少し遡る。

同じく駒王商店街。

兵藤一誠はそこにある洋服屋から、たくさん紙袋を手に、疲れた顔で出てきた。

一人ではない。女の子も一緒だ。

元クラスメートの桐生藍華であった。

今日は家人がみんなそれぞれの用事で出掛けており、一人で家に閉じ籠っているのも馬鹿らしいので街に一人繰り出したところで彼女と鉢合わせたのだ。

それが運のつきというやつで、桐生に口八丁で言いくるめられた一誠は、彼女の買い物に荷物持ちとして付き合わされたのである。

「いや、助かったわ。女の子って色々必需品が多くってねえ」

「ああ、そういえば女の子だったよなお前。一応、生物分類的には」「ハイハイふてくされないの。ご褒美にコーヒー奢ってあげるから」

桐生は一誠の減らず口を意に介さず、商店街の奥の方へとコトコトと歩き出す。

一誠もそれに続いた。

道中、一誠は何か言いたげに桐生の方を横目でチラチラと見る。

桐生はすぐに、その視線に気付いた。

「何よ、気持ち悪いわね。言いたい事あるなら言いなさいよ、気を遣う

ようなキャラでも関係でもないでしょ」

「あ、ああ……お前、確か秋月と同じクラスだったよな？」

「ええ」

「アイツ、どんな感じだ？　なんかやたら女の子に、不自然なくらいモテたりしないか？」

「モテモテよ。何せ町を救ったヒーロー様だし」

「その前はとうだったんだ？」

「普通」

「普通って？」

「だから、普通よ。モテモテじゃなかったけど、アンタ等みたいに毛嫌いもされてなかったわ。で、それがどうかした訳？」

「……おかしいんだよ、最近」

「何が」

「黒歌が秋月を狙ってるし、ゼノヴィアも妙に仲がいいし、リアスや朱乃さんやアーシアも秋月の事よく話題にするし……そのくせ、何か俺に対しては冷たくてさ……ひよつとして秋月の奴、催眠術か何かでみんなを操ってるんじゃないかって心ば」

「アツハツハツハツハツハツ！」

心配で、と言おうとするのを遮るように、桐生の笑い声が響いた。

「な、何だよ！　笑い事じゃねえぞ！」

「だって催眠術って！　アンタがそれを言う訳？　アンタこそ催眠術使って女の子にモテてんじゃないかとか言われてたのに！」

桐生は一誠の背中をバシバシ叩きながら笑い続け、しまいには笑いすぎてむせた。

「あー、アホらし。あのね兵藤、男の嫉妬が許されるのは幼稚園児までよ？」

「し、嫉妬なんてしてねえ！」

「してるわよ。今のアンタ、家に泊まりに来た親戚の子とかにお母さんが優しくするもんだから『ウエーン、お母さん取られたー』って嫉妬してるガキんちよそのものだし——実際、先輩たちにしてみれば家に泊まりに来た親戚の子供程度の感じなんじゃない？　それと、ゼノ

ヴィアっちから聞いたけど、アンタ等が東になってもかなわなかった悪者のボスを一人でやつつけちゃったんでしょ？ そりゃちやほやするわよ」

「……………よし、わかった。ならそういう事にしておくとして、なんで俺に対しては態度冷たくなるんだよ」

「気のせいよ、半分はね」

「残りの半分は？」

「アンタの自業自得。ゼノヴィアっちが生徒会長になってからこっち、アンタあの子に迷惑しか掛けてないじゃない。そりゃ好感度だつて目減りするわよ。ゼノヴィアっちとか、もうかなりヤバいかもね」

桐生はニヤニヤ笑って言った。

「愛想尽かされたくなかったら、日頃の行いに気を付けなさいな。ほら、こっちこっち」

そして、喫茶店『青い鳥』のドアを開けて入店したのであった。

二人は通りに面した大きなウインドウのある席に座り、オーダーを取りに来たウェイトレスにコーヒーを注文した。

ウェイトレスが立ち去るのと入れ替わりに、リアスと朱乃がやって来て、桐生の肩にそれぞれ手を置いた。

「こんにちは、桐生さん」

リアスが怖いくらい朗らかに挨拶する。

「ど、どくもお〜」

桐生はひきつった笑顔を返した。

服の下で背中にじつとりと嫌な汗が浮いている。

「リ、リアス、こいつは俺の元クラスメートで……………」

「ええ、知ってるわ。去年の生徒会選挙ではゼノヴィアがお世話になったものね」

「い、いやあ、友達とシテ当然の事をしタマでスし？」

桐生は何故か、声が所々裏返っていた。

「そうね、お友達なのよね、お休みの日には一緒に遊びに行くくらいだね——今朝も、ゼノヴィアとアーシアはあなたと遊びに行くからと言

って出掛けたのだけれど、その遊び相手のあなたがどおおくくして、ここにいるのかしらねえええええくくく」

リアスの声が、地獄の獄卒めいて不気味に、桐生の耳に響いた。

◆ 冥界、グレモリー領。

その内の、ゼノヴィアに与えられた一带に、ゼノヴィアとアーシア、そして秋月連也はいた。

見晴らしの良い草原。

彼方に見える山々。

程好い涼風が草を揺らしている。

連也としても、嫌いではないロケーションだ。空がドロドロした紫色でなければだが。

「連也。今日は私の我が儘を聞いてくれて、本当に感謝している。いい試合にしよう」

ゼノヴィアはそう言って、エクス・デュランダルを召喚した。

同時に、魔力を使つて着ていた服をエクソシストの戦闘服に変化させる。

そして呼び寄せた愛剣の柄を握った。

「鎧化！」<sup>アムド</sup>

ゼノヴィアの詠唱に応じて、エクス・デュランダルの鞘が光を放つて分解・変型し、鎧となって彼女の肉体に装着された。

「お手柔らかなにな」

連也はのんびりした口調で返し、右手をスツと横に伸ばした。

その手のひらから柄卷きを施した木刀『飛龍』が現れる。

物品引き寄せ<sup>ポー</sup>で召喚した木刀を正眼に構えつつ、連也は

（——カッコいいな、あれ）

と、鎧に変化する鞘を有する聖剣に対して思っていた。

同時に、曹操が聖典とまで呼んでいた漫画にも、似たような機能を持つ武器があったのを思い出す。

（ひよつとしてゼノヴィアも読んでるのかな……）

付き合いの短い連也から見ても、ゼノヴィアは感性が割りと男の子

だから、案外愛読しているかも知れない。  
そう思うと、ちよつぱり嬉しくなった。

「はあああああつー！」

連也が呑気にそんな事を考えていると、ゼノヴィアが雄叫びを上げ、デュランダルの振りを振り下ろした。

聖なるオーラが目映い光の奔流となつて、連也に迫る。

連也は木刀で、正面の空間を斬り上げた。

太刀筋に沿つて空間が歪み、相手の攻撃を逸らす防御帯となる。

デュランダルの光波はその歪曲空間によつて軌道が曲げられ、むなく紫色の空へと消えていった。

ゼノヴィアは——既に連也の懐に飛び込んでいた。

何のフェイントも掛けない、清々しいほど真つ直ぐに、そして単純に、デュランダルの大上段から幹竹割りに振り下ろす。

連也、斜めにかざした木刀でその一太刀を受け流し、そのままゼノヴィアの小手を狙つて木刀を打ち込んだ。

——が、そこにゼノヴィアの姿は既がない。

バックステップで離脱していたゼノヴィアは、すかさず再度接近して、横一文字に斬りつけた。

連也はその太刀筋を遮るように、木刀をかざす。

聖剣と木刀がぶつかり合つた瞬間、デュランダルの弾き返された。

(サイラオーグに使つた、あれか！)

とわかつた時には、ゼノヴィアは体勢を崩して胴体がかから空きになつていた。

連也、その隙を逃さじと突きを放つが、ゼノヴィアはそれを咄嗟に蹴り上げた。《破壊》と《天閃》の二つの聖剣の加護を得たその蹴りで、木刀が弾き飛ばされて宙に舞う。

ゼノヴィアは無防備になつた連也の脇腹目掛けて、デュランダルの打ち込んだ。

ここで連也は、思わぬ行動に出た。

迫り来るデュランダルの刃に、足を掛けたのだ。

そして刃を蹴つてジャンプして回避すると、空中で『飛龍』をキャツ

チして着地した。

(無茶をする……)

デュランダルは《支配の聖剣》エクスカリバー・ルーラーの能力で、その切れ味のみを一時的に封印してある。切断してしまうような事だけは、絶対でない。とは言え、連也はその事を知らないはずだ。彼からすれば、掛けた足が切断されてもおかしくはなかったはずなのだ。

しかしデュランダルには、何の手応えもなかった。まるで宙に舞う羽毛に斬りつけたようですらあった。ひよっとしたら、念道独自の体捌きによるものだったのかも知れない。

(連也……やはり君は、凄いな……！)

ゼノヴィアは、嬉しくなった。

これまで出会ったどの剣士とも違うタイプだ。ほんの数合で、その違いが実感出来た。

(やはり、思いきって頼んで良かった……)

これほどの剣士との試合は、間違いなく自分を剣士として高めてくれるに違いない。

あとは、連也の方も『この試合を受けて良かった』と思ってくれれば、最早言うことはない。

自分たちの至らなさを故に戦いに巻き込み、挙げ句マスコミの矢面に立たせてしまった少年に、どうにかして報いたいと思っていた。

リアスや朱乃なら手料理の一つも振る舞うのだろうが、生憎と自分にはそこまでの女子力はまだない。

いつその肉体からだで感謝の気持ちを伝えようかとも思った。胸を触らせるくらいなら、やぶさかでもない。しかし、黒歌に迫られて辟易している連也にしてみれば、追い打ちにしかなるまい。

ならばせめて、同じ剣士として、自分との試合がわずかなりとも彼のステップアップの一助となれば……連也に試合を申し込んだのは、そんな気持ちもあったのだ。

ゼノヴィアが気持ちを新たに、攻撃に移ろうと一歩踏み出した瞬間、両者のちょうど中間地点に一条の雷光が放たれ、地をえぐった。

「はい、おいたはそこまでですわよ、ゼノヴィアちゃん」

朱乃がいつの間やら、上空に悪魔の翼を広げて浮かんでいた。

「ゼノヴィア……説明してもらおうよ」

続くその声に振り向けば、アーシアの傍らにリアスが立っていた。一誠も一緒だ。

「リ、リアス様……何故ここに……」

「気分転換にお出掛けしたら、ちょうど桐生さんと出会ったのよ。あなたたちと遊びに行く約束をしていたはずの桐生さんと、ね」

しまった、とゼノヴィアは思った。桐生には口裏を合わせるだけでなく、いつそ外出自粛も要請しておくべきだったが、後の祭りだ。

「ゼノヴィア……連也くんが今いろいろと大変なのはわかってたはずよ。なのに、護衛を自ら買って出たあなたがこんな事をするなんて、どういうつもりかしら……」

リアスは声こそ荒げないものの、表情には鋼鉄のような暗さと冷たさがあった。

「ゼノヴィア。悪い事は言わないから素直に謝れ。何か深い事情があったんだろ？ 俺は気にしてないから、リアスに正直に謝るんだ」  
説得する一誠の顔が、何故か青ざめている。去年の今頃に起きたエクスカリバー事件で受けた、リアスからのお仕置きの記憶がよみがえったのだ。

「すいませんでしたあああああつ！」

すかさず、謝罪の言葉が飛んだ。

リアスの前で、土下座までする。

——ゼノヴィアが、ではなく、連也が。

「……………ど、どうして連也くんが謝るの？」

その迷いのない土下座っぷりに、リアスの中で高まっていた怒りのボルテージが、急速に下がっていった。

「俺、以前からゼノヴィアと手合わせしてみたいと思ってたんです！  
それで思いきってお願いしたんです！ ゼノヴィアとアルジェントさんに、桐生と一緒に遊びに行くって嘘ついてごまかすよう指示したのも俺です！ ホントにすいませんでした！」

嘘だ。

リアスはそう思った。

短い付き合いだが、連也はそういうキャラではないという事くらいはわかる。

「ねえ、リアス。連也くんも反省してるみたいだし、許してあげたら？」

空から舞い降りてきた朱乃が、助け船を出す。彼女も連也の言葉が嘘なのはわかっているが、ゼノヴィアをかばって悪役を買って出る連也の男気を尊重したくなつたのだ。

「……仕方ないわね。今回だけよ？」

リアスは大きな溜め息の後、そう言った。連也を通して、ゼノヴィアに。

連也には、協力してもらつた恩がある。悪魔の事情に巻き込んだ負い目がある。

何より、リアス個人が連也を好いていた。以前サイラオーグに言ったように、それは祐斗やギヤスパー、ミリキヤスに向けるのと同じ種類の好意だが、それでも連也に対してはつい甘くなってしまう。もしもお願いされたら、胸を触らせたり一緒にお風呂に入るくらいはしてあげてもいいと思ってるくらいだ。

その連也に土下座されては、嘘とわかっていてもそれ以上強くは出られなかった。

「いやいや、何言ってるんだよりリアス！ ただ戦つてみたいとか、そんな理由で憎くもない相手に勝負を挑むなんておかしいだろ！」

一誠が抗議した。

「こいつの念道が俺たち悪魔にどれだけ危険かわかるだろ！ 下手したらゼノヴィアを殺していたかも知れないんだよ!? 土下座したくらいで済ませていい問題じゃないだろ！」

「——と一誠が言ってるけど、ゼノヴィアはどうなの？」

「あ、いえ、断れば済む話をわざわざ受けた私にも、責任はありますので……軽率でした、申し訳ありません」

話を振られたゼノヴィアは、しどろもどろにそう言って、ペコリと頭を下げた。

「いやいや、お前は何も悪くないだろゼノヴィア！ 悪いのは全部こいつでぐえっ!？」

更に抗議の声を上げる一誠だったが、黒い物が首に巻き付いて遮られた。朱乃のポニーテールである。魔力を使えば制服から巫女装束に一瞬で変身出来る彼女にしてみれば、髪の毛の操作など文字通り手足を動かすも同然だ。

「イツセーくん、今夜は一緒にお風呂に入ってあげますから、機嫌を直してくださいなあ」

朱乃が一誠を抱き寄せて、胸部に搭載した102cmの戦略兵器に顔をうずめさせ、甘えたような声色でささやくと、一誠はさつきまでの怒りはどこへやら、早くもだらしない顔になっていた。

「じゃあ喧嘩両成敗ということ、解散！」

リアスがパンパンと手を叩き、宣言する。

一誠の態度に呆れつつも、どうやら誰も怪我をせずに終われそうなので、アーシアは安堵の溜め息をついた。

## 春風駘蕩

時計の針は午前12時を回っている。

深夜の公園に、秋月連也はいた。

噴水のそばのベンチの前の、舗装されていない地面に木刀『飛龍』を突き立て、ジャージ姿の本人はその後ろで、片膝をついて座っている。

木刀からは白い光が陽炎めいて立ち上ぼり、霧のように周囲に広がっていた。

その絹のような柔らかな光輝に引き寄せられ、やって来る者たちがいた。

どれも身体のどこかを著しく損傷させた者たちである。目は虚ろで、肌に生氣はなく、何より、その痛ましい姿は半透明で、向こう側の景色がかすかに透けて見えた。

オルランド眷属の破壊活動の犠牲者たちの霊である。

連也がこの場所を起点に周囲へと放った清らかな念に導かれて、集まってきたのだ。亡霊たちは瞬く間に、公園内を埋め尽くした。

連也は立ち上がり、地面から木刀を抜いた。

ゆっくり、静かに、『飛龍』を正眼に構え——目を閉じた。

連也の眉間に、光点が灯った。

その光は水車のように回転しながら輝きを強めていく。霊的な力を司るチャクラを開放したのだ。

木刀『飛龍』もそれに合わせて輝きを強め、純白の火柱となって激しく燃え上がった。

「エヤアッ！」

連也が気合いを放った。

木刀に宿る光がバツ！ と弾けて、風となった。

その白光を伴う風に当てられた瞬間、少年を取り囲んでいた霊たちは次々と、白い影となって夜空へと昇っていった。皆が皆、異口同音に、安らかな声で連也に感謝の言葉を述べていた。

「……よし、俺にしちやあ上出来」

連也は彼等を見送りながら、満足げに呟いた。

念の純度が高まり、自分の死を受け入れられないでいるだけの浮遊霊ならば、念を放射するだけで、浄化して送る事が出来るようになった。上出来とは、そこまで己れを高められた事を指している。

木刀を背中にしまうと、連也は公園を出て家路に就いた。

「連也」

そんな彼の背中に、声を掛ける者がいた。

振り向くと、ゼノヴィアがそこにいた。

水色のタンクトップと黒のレギンスという格好である。タオルを首に掛けて、いかにもランニング中といった風情であった。

「よう、ゼノヴィア。走り込みか？」

「まあね」

本当にランニング中だったようだ。

「君こそ、こんな時間に何をしてるんだい？」

「鍛練って意味じゃ、お前と一緒にだよ」

「精が出るね」

「お互いにな」

そんな事を言い合いながら、二人は夜道を並んで歩き出した。

「連也。この前はすまなかったね」

「何が？」

「私との手合わせの事さ。悪いのは私なのに、君は私をかばって、下げる必要のない頭まで下げてくれた……」

「あー、それね」

そういえばそんな事もあったなあと言わんばかりの、連也の軽い返事だった。

「いったい何故、あんな事をしたんだ？」

「……んー、適当に考えといていいよ。そんなたいした理由じゃないし」

——て言うか、俺にもわかんないし。

連也は胸のうちでそう付け加えた。

本当に、自分でも何故あんな行動に出たのかわからなかった。

リアスに問い詰められるゼノヴィアを見た瞬間、唐突に彼女を守ら

なくてはという、強い気持ちが入み上げて来たのだ。その強烈な想いに駆られての事だったが、では何故そんな風に思ったのか、という事になると、連也自身にもさっぱりとわからないのである……。

「そうか……だが、君に大きな借りが出来たのは確かだ。これでも貸し借りにはうるさいのでね、是非ともお礼をさせてほしい」

「いいよ、そんな気を遣うなって」

「それでは私の気がおさまらない。どうだろう、今度の日曜日に焼き肉をおごらせてもらえないか？」

「いいね、何時にどこ集合？」

連也はそう聞き返した。

それはつまり、ゼノヴィアのお誘いを受けたという事である。

それに気付いたのは、待ち合わせの時間と場所を教えられゼノヴィアと別れてからであった。



「あっはっはっはっ！」

翌日。

遊びに来た黒歌は、我が物顔で格闘ゲームをおっ始めながら、学校から帰ってきた連也の様子がおかしいので事情を聞き、そして大爆笑した。

「焼き肉にそんな簡単に釣られるなんて、ダーリン可愛いところあるじゃない」

「だって仕方なかったんですよ……焼き肉なんて小学校入学祝い以來、マジで一回も食べた事なかったから……」

連也はベッドの上で所在なげに体育座りをしていた。

「でもちようど良かったじゃない。焼き肉ついでにあの娘も食べちゃえぼっ。」

「なんでそういう話になるんです？」

「だってダーリン、気があるんでしょう？」

「……ありませんよ」

答える連也の声は、弱々しかった。

「ふうーん……だったら、なんで彼女をかばってスイッチ姫に土下座

した訳？ 多少なりとも意識してるからでしょ？」

「すいっちひめ？」

「リアス・グレモリーの事。ダーリンの事、男気があつて立派だつてべた褒めしてたわよ？」

「なんであの人がいっつち姫なんです？」

「だつてアイツのおっぱい、赤龍帝ちゃんのパワーアップスイッチだし」

ひどい言われようだが、実際に黒歌の目の前で一誠はリアスの乳首をつつく事で、バランス・ブレイカー禁手に至つたのだ。黒歌にしてみれば最早そうとしか言いようがない。

事情を全く知らない連也にしてみれば、ちんぷんかんぷんである。

「まあそれはそれとして、そこまで出来るんなら、好きつて事でしょ。ちよつと想像してみなさいよ、ゼノヴィアがダーリン以外の男とキスしたりエッチしてるとこ。それで嫌な気分になるなら、そういう事」  
「……………」

言われた連也は思わず想像してしまった。

ゼノヴィアが彼女の主君にあたる兵藤一誠と抱き合い、口づけを交わすところを。

すると、胸の中にドロドロとしたものが込み上げて来た。

「…………黒歌さんはいいんですか」

「何が？」

「仮に俺がゼノヴィアの事好きだつたとしたら、今の黒歌さんはお目当ての相手を他の女にけしかけてるようなものじゃないですか」

「あら、心配してくれるんだ。やっぱりダーリンつて優しいわね。でもアタシ、面倒くさいの嫌いな。ダーリンが誰と付き合おうと、アタシの事も見てくれればそれでいいわよ？ いちいち恋敵蹴落とすとか面倒だしね」

「それ、結果的に俺がゼノヴィアと黒歌さんで二股かける事になるんですけど」

「気にしない気にしない。アタシの尻尾だつて二股よ？」

「それは関係ないです」

連也がツツコミを入れた時、テレビから派手な音がした。黒歌の操

作するキャラクターが、CPUの操作するキャラクターに負けたのだ。テレビの画面の中で、CPUキャラが勝利台詞を口にしていた。「もお、何よこれ！　ちよつとダーリン、これ全然防衛しないわよ、壊れてんじゃないの!？」

「……それ、方向キー後ろでガードするやつじゃないです」

◆  
日曜日。

一誠はリアスの部屋を訪れた。

リアスは依然書類の山と格闘中であつたが、恋人の入室に、捺印の手を止めた。

「あらイツセー。どうしたの?」

「ちよつと、相談があるんだ」

「なあに、改まつて」

「ゼノヴィアの事だよ。アイツ、今日は用事があるって言って、一人でさっさと出掛けていったんだ。この前の秋月との決闘なんて、アーシアや桐生も巻き込んで、俺にまで嘘ついて出掛けていったし……ちよつと様子がおかしくつてさ」

「そうかしら?　全然いつも通りだと思うけれど」

「どこがだよ!　アイツ、なんか最近俺に冷たいだろ!?　ちよつと前までは俺の都合とか気にせず迫ってきたりとかしてたのに!」

「それは自業自得でしょう?　聞けばあなた、未だに松田くんや元浜くんと一緒に頑張って覗きをやってるそうじゃない」

「だってそれはしょうがないだろ!　男の性さがなんだよ!　それにアイツ等とは卒業しても一緒とは限らないしき、一緒にバカやれるのは今年が最後なんだ」

「それで毎回毎回あなたたちの後始末をやらされるゼノヴィアの身にもなりなさい……」

「だいたい秋月も怪しいよ!　アイツ絶対ゼノヴィアの事を狙ってるんだ!　催眠術で操るとかはないだろうけど、陰で俺の悪口をゼノヴィアに吹き込んでるかも知れないし!」

「連也くんはそんな事する子ではないわ。男気があつて、凄く素敵な

「子だと思っわよ?」

「それだよ、それ!」

「……それって、どれ?」

一誠の言わんとする事が掴めず、リアスは間の抜けた声を上げた。  
「なんでリアスも朱乃さんも、アイツの味方をするの!?! なんか下の名前で呼んでるし!」

「あなたの事も名前で呼んでるわよ? 祐斗もギヤスパーもミリキヤスもね。それに、あの子の味方をして何がいけないの? あの子の能力は、味方につけておいて損はないわ。そうでなくとも、連也くんを私たち悪魔の事情に巻き込んで、世間の矢面に立たせた以上、出来る限りの補償をするのは当然でしょう?」

「じゃあなんで最近、リアスは俺に冷たいのさ! やたらとお小言が増えてきてるだろ!」

「あなたを守るためよ」

リアスのはつきりとそう言いきった。

「俺を、まも、る……?」

「あなたには上級悪魔としてしっかりしてもらわなくてはいけないの。冥界ではあなたの上級悪魔昇進に、今でも反対意見が出ているのだもの」

「な、なんで?」

「だってあなた、悪魔に転生してからまだ一年半くらいでしょう?」

余りにも早すぎるって、不安に思う者がいるのも無理はないわ」

「確かにそうだけど、でも——自分でこんな事言うのもなんだけど——それだけの功績があったから、魔王様たちもお認めになられたんじゃないか。それに文句を言うなんておかしいよ」

「その功績が問題なの」

「どう問題なの?」

「……………」

リアスは一瞬、口をつぐんだ。どう言うべきか迷っているようだ。

しかし、意を決して口を開いた。

「イツセー……あなたは本当によく頑張ったわ。魔獣騒動の時なんて

一度死んでしまったほどだし、その後だって、死んでもおかしくないほどの激闘をくぐり抜けて来た……どんな強敵にだって、恐れず立ち向かい、勝利してきたわ……でも、それだけよね？」

「それだけって？」

「あなたがこの一年半でやって来たのは、ただ出てきた敵を倒すだけのもぐら叩き。もちろんその一年半での成長には目を見張るものがあるけれど、だからこそ一部の悪魔たちは、あなたを危険視しているの。こんな化け物に上級悪魔の権限を与えていいのかって。敵を倒す事しか知らない破壊者デストロイヤーに領主ロードが務まるのかって。彼等にとっての上級悪魔の条件とは、戦闘力ではなく統率力。どれだけ眷属をまとめ上げ、率いていけるか、どれだけ円滑に領地を治めていけるかというところを重視してるの。だからあなたは、上級悪魔をしつかりやれているところを彼等に示さなくてはいけないのよ」

「……………」

一誠は黙り込んだ。

リアスが口にした『化け物』という言葉が、胸に引つ掛かっていた。文字通り命懸けで守り抜いた冥界に、自分をそのように思う者がいるのが、哀しかった。

（俺はただ、大切なものを守りたかっただけなのに……誰かを傷付けたい訳でも、不幸にしたい訳でもないのに……）

リアスが立ち上がり、一誠のそばに歩み寄ると、優しく抱き締めた。「イツセー、思うところはあるでしょうけれど、今は耐えなさい。私は連也くんの味方だけど、それ以上にあなたの味方よ。どんな時だって、あなたを見捨てたりなんてしない。あなたが辛い時は、私があなたを支えてあげるわ。今は赤龍帝眷属の王キングとして、領主としての仕事をしつかりと、少しずつでいいから覚えていきなさい」

一誠の顔を自分の胸にうずめさせ、髪を優しく撫でてあげながら、リアスはそう言い聞かせた。

それでどうにか気持ちを切り替える事が出来た一誠は、書類仕事を片付けるべく自分の事務所に向かった。

リアスのおっぱいの柔らかさを顔中で確かめる事が出来たせい、

表情は緩みっぱなしだった。

◆ 焼肉屋を出た連也は幸せそうな顔をしていた。

小学校入学祝い以来、約十二年ぶりの焼き肉である。余りの美味さに涙が出そうだった。

隣を並んで歩くゼノヴィアも楽しそうだ。予算に関しては悪魔稼業で稼いでいるので、懐は全く痛んでない。それに、小さな子供のようにならぬ様に焼き肉を食べる連也の顔を見ると、それだけで楽しかった。

この後、特に予定はないが、ここでお別れというのも味気ない。二人はゲームセンターに赴き、そこでいろんなゲームで対戦して遊んで回った。

最後に、二人が最初に出会ったあのバツティングセンターへ向かい、そこで二人して思う存分ボールを打ちまくった。

そうやって楽しい時間はあっという間に過ぎ、二人が家路に着く頃には、時計の針は夜の7時を回っていた。

「今日はありがとう、連也。楽しかった」

「そりゃこっちの台詞だよ。焼き肉なんて本当に十年くらい食ってなかったし……」

その久し振りの焼き肉の味を思い出して、連也は頬を緩ませた。

「——こうして君を見ると、つくづく不思議だな」  
「何が？」

「とても、あのオランダを倒した戦士とは思えないよ……決して貶してる訳ではないのだが、いたって普通だ」

「そりゃどーも」

連也はわかっているのかわかってないのか、お気楽な返事である。

「強者とは、何かしらその実力を感じさせる雰囲気をもとっているものだ。それは、どんなに隠しても隠しきれない……なのに、君からは全くそれが感じられない。ビックリするくらい普通で、自然体で……あるいは、それが君の強さの秘訣なのかも知れないな。なんとも不思議だが……だからこそ、君は凄い奴だと思っよ」

「おい、おだてたつて木には登らないぞ」

「おだててなんかいないさ。私の、心からの言葉だ」

「そりゃどーも」

連也はお気楽な返事で受け流した。

(……本当に不思議だ)

ゼノヴィアは、しみじみと思う。

彼のそばにいと、何故か落ち着く。心も体も程好くほぐれていくような心持ちになる。

春風<sup>しゅんぷうたいとう</sup>駘蕩という言葉がある。

春風がそよよと吹く様を言い、転じて、温和でのんびりとした人柄の事を指す。

今はもう初夏だが、連也はまさに、その春風駘蕩であった。

会話は少ないが、何となく、いつまでもこうして、肩を並べて歩き続けている。

ゼノヴィアは、そんな気持ちになっていた。

## 悩み、人それぞれ

カッ

カッ

早朝の河原に、乾いた音が不規則に響く。硬い木と木がぶつかり合う音だ。

見れば二つの影が交差している。一方は手に柄巻きを施した木刀を持っていた。もう一方は2メートル近い長さの棒を手をしている。その棒は先端から30cmの辺りに黒いビニールテープを巻き付けてある。そのテープで区切った先が槍の穂先に当たる。河原に響く音は、この木刀と槍がぶつかり合う音であった。

秋月連也と曹操である。

早朝とはいえ、もう7月になっている。連也は灰色の半袖シャツとジャージのズボン。曹操は黒で統一したタンクトップとカンフーパーツ。どちらも動きやすく、かつ涼しげな服装だった。

連也は曹操の槍捌きに舌を巻く思いだった。

突き。

薙ぎ払い。

打ち下ろし。

振り上げ。

どの方向からの攻撃も鋭く、文句のつけようのない速さと重さがある。

技の織り交ぜ方も巧みで、パターンも豊富だ。

特に驚くのが、薙ぎ払いの軌道である。普通は長柄物を振るう時、穂先の動きは弧を描いてしまう。しかし曹操の薙ぎ払いは、穂先が一直線に飛んでくる。力任せの攻撃ではなく、体移動も用いて、最短距離で迫ってくる。

加えて、中国武術独特のダイナミックな体捌きも加わって、次の動作を読みにくい。

更には、この軽妙にして正確な槍捌きを、隻眼の男がやっているという事実にも、驚いていた。

隻眼では距離感が掴みづらくなるという。殴り合いや取っ組み合いの距離ならばさしたる問題もなかるうが、得物を取つての打ち合いではそうもいくまい。にも関わらず、曹操は常にこちらとの距離を正確に把握している。それだけ実戦経験を積み、槍の間合いを体に覚え込ませてきたのだろう。この男、ひよつとしたら盲目でも同じように戦えるのではないだろうか。

得物の違いはあれど、純粋な技術と言う点では、木場よりも上かも知れないと感じる。

曹操も連也の剣技に感心していた。

リーチで劣る剣が槍と相対すれば、まずはその攻撃を打ち払い、その隙に間合いを詰めようとするものだ。だがそのために、飛んできた槍を強く打ち払えば、その反動を利した薙ぎ払いで反撃される。

しかし連也は強く打つたりはせず、槍の勢いを削ぐだけにとどめていた。そして一歩ずつではあるが、ジリジリと間を詰めていく。

一撃で相手を挽き肉にも消し炭にも出来る異形異類と戦う事を目的としている曹操からすれば、こういう堅実な試合運びは好ましいスタイルだった。

曹操が連也の腹部目掛けて、槍を突いた。

連也、その突きを木刀で押さえつつ、半身になってかわす。

そのまま踏み込んで、ついに木刀の届く距離にまで近づいた。

すかさず繰り出される面打ち。

対して曹操、引いた槍を頭上に掲げて受け止めると、槍を翻して連也の木刀を押さえつけた。

——動かない。

両者、木石と化したかの如く、動かない。

互いに、重なっている得物を通して、相手の息遣いを、重心を、気配を、動きを、読み合っていた。

同時に、相手に読まれないように、己の気配を、意を、消している。静寂が辺りを包み込み、数秒……連也が不意に、曹操に背を向けた。体を回転させて、押さえ込まれていた木刀を槍から外して、勢いそのままに曹操の首筋を狙った片手打ち。

曹操もまた、連也の脇腹目掛けて、槍での薙ぎ払い。

そして、両者の攻撃は同時に、相手に触れる寸前で止められた。

「危ない危ない」

曹操が呑気な口調でつぶやき、笑った。

「止めなかったら、首を落とされていたな」

「俺の方こそ、止めなかったら真つ二つにされてました」

「では引き分けかな」

「そういう事にしといてくれると助かります」

「ならそうしようか」

曹操はそう言つて、一步下がった。

そして二人は、互いに礼をした。

男同士のやり取りを、少し離れた場所に設置されたベンチの上で、

一匹の黒猫が退屈そうに眺めていた。

黒猫は大きく伸びをすると、ベンチから飛び降りてトコトコと歩き去る。

その尻尾は二股に分かれていた。



普段曹操が兵藤邸で何をしているかというところ、家事手伝いである。ゴミ出し、庭の草むしり、掃除や洗濯などだ。最初は申し訳なく思っていた静江も、『店子たなこにとつて大家は親も同然ですよ』と爽やかな笑顔で言い切る曹操にすっかり心を許してしまい、時にはおつかいまで頼むようになっていた。

そして、それ以外の空いた時間は、主に槍術の鍛練に費やしている。今も黒のタンクトップとカンフーパンツ姿で庭に出て、槍術の型を繰り返して演じていた。

肌にしつとりと汗の粒が浮かぶ頃、一旦休憩に入った。タオルで汗を吹きながら、庭に設えてあるベンチに腰を下ろすと、傍らの木の上に向かつて言った。

「出てこい、どら猫」

「誰がどら猫よ」

声かして、一匹の黒猫が枝から飛び降りた。

飛び降りながら宙でクルリと一回転すると、黒い着物を着崩した女の姿に変わる。

黒歌であった。

「店子の身の上でありながら手伝いもせずタダ飯を食う君が、どら猫でないなら何だと言うんだ。家計を圧迫せずに幸運を呼ぶだけ、招き猫の方がまだ価値があるぞ」

「喧嘩なら買うわよ?」

「おや、売ってるのは君の方じゃあないのか? ここ最近、俺にキツイ眼差しを送っているじゃないか」

「そりゃあね。私のダーリンに付きまとう泥棒猫を警戒するなっ方が無理でしょ」

「それは杞憂というものだ。俺は別に、彼をどうこうしようという訳じゃあない」

「ホントに? 英雄派に引き入れようとか思わない訳?」

「来てくれれば嬉しいが、それは彼の決める事だ。俺がどうこう言える問題じゃない。俺自身は、彼のそばでその警戒けいがいに接していただきゃ」

「それよ、そ・れ!」

黒歌が曹操を指差して言った。

「それとは、どれの事だ?」

「アンタが警戒に接するとか、そんなしおらしい事言うのがキモいのよ。ホントは別に、何か企みがあるんじゃないの?」

「特に、何も——強いて言うなら、彼を通して、もう一度見つめ直したいのさ。人間の可能性をね」

「はあ?」

曹操の言わんとする事が本当に理解出来ないらしく、黒歌はすつとんきような声を上げる。

「君も知っているだろう? 俺は一度、兵藤一誠に敗れた。移植したメデューサの眼にサマエルの血を撃ち込まれてね……そして俺は、愚かにもその敗北の理由を、自分が人間だったからだと考えてしまった」

「違うの？」

黒歌は首を傾げた。

サマエルの血には、転生悪魔の一誠ですら耐えられなかったのだ。肉体的には脆弱な、ただの人間でしかない曹操がくれば、尚更である。

「全然違う」

曹操の声音に、力がこもった。

「俺が負けたのは、人間の力がどこまで通じるかという己の目的を見失い、目先の勝利にとらわれた弱さ故だ。人間であるが故の強さを忘れ、上辺だけの力を求めてしまったからだ——槍も、兵藤一誠を選んだのではなく、俺にその事を教えたかっただけなのかも知れない」

最後の言葉は、黒歌には何の事かわからなかった。

「で、それがダーリンと何の関係がある訳？」

「俺は、怖いんだよ。もう一度兵藤一誠と戦う事が。こちらが十全な対策を取っても、土壇場で十一、十二の力を引き出し、訳のわからないおかしな奇跡を起こされる。雪辱を果たしたいという気持ちもあるが、結局奴の理不尽な力でまた敗北するんじゃないかと思うと、やはり恐ろしい」

「心をバキバキに折られちゃったって訳ね」

「バキバキどころかバツキバキだ」

——曹操は、冗談なのかそうでないのか判断に困る返答をした。

「だからね、秋月連也と共にいる事で、もう一度人間の可能性を見つめ直したいのさ。人間とはこんなにも凄い力を持っている、人間とは素晴らしい、そう思える事が出来れば、少しは何か変わるんじゃないかと思ってる。それだけさ」

曹操は立ち上がり、稽古を再開する。

黒歌はその姿をしばらくの間、唇を尖らせて不信げに見つめていたが、その後、結局どこかへ立ち去った。



カッ

カッ

放課後の駒王学園旧校舎の裏庭で、木刀と木刀のぶつかり合う乾いた音が響く。

秋月連也と木場祐斗が稽古をしていた。

今は祐斗が仕掛ける側で、連也が受ける側である。

面と見せ掛けるの小手、胴と見せ掛けるの面、かと思えば面打ちの連続など、多彩な攻撃を高速で繰り出す。

連也はそれらを時に受け、時にいなしして、よく防いだ。

それが終わると攻守を入れ換え、今度は連也が攻める。

祐斗のようなスピードは望むべくもないが、予備動作を完全に消し去った打ち込みは、祐斗からすればいつの間にか攻撃が始まっているため、読みづらい。構えを見ればどんな攻撃が来るかは予測出来るが、その攻撃のタイミングが掴めないのだ。気が付くと木刀『飛龍』が面に、小手に、胴にと迫っている。騎士の駒のスピードを用いて、何とか受け止める事が出来た。

同じ騎士であるゼノヴィアとの稽古では、受けた木刀ごと真つ二つに斬割されそうな重さと鋭さがあつて肝を冷やすが、連也の場合はまた違う意味で肝が冷えた。

稽古を終えると、連也は祐斗に礼を言つて去っていく。祐斗も礼を言い、その背中を見送つた。

その一部始終を、兵藤一誠は部室の窓から面白くなさそうに眺めていた。

二人の動きを見て、改めて『才能』という言葉の重みを感じてしまった。

ヴァーリや曹操もだが、自分より遥かに少ない練習量で自分より遥かに早く上達していく。

その事実を悔しく思い、越えられない壁を感じて、時には挫けそうになる。

今もそうだった。

しかし不意に、サイラオーグの顔が脳裏をよぎる。才能のなさを極限の努力と不撓不屈の信念で補う男。

自分もまた、同じだ。己に足りないものがあると感じれば、貪欲に

あらゆる視点から強さを探った。その結果として、今の自分がある。何も落ち込む事はない。歩き続ける亀は、ウサギだつて追い越せるのだから。

(——でもなあ)

それはそれとして、やはり彼等の才能を羨ましく思うのも、また事実であつた……。

「どうしたんですか、イツセーさん」

背後のソファからアーシアが話し掛けてきた。

テーブルを挟んで向かい側では、小猫がドーナツをモグモグと食べている。

「ん？ ああ、いや、何でもない」

「祐斗先輩と連也先輩の稽古を見ましたね」

小猫がドーナツをモグモグと食べながら言った。

「それで才能の違いを実感して落ち込んでいたんですね」

「んぐっ！」

冷静に凶星を突かれて、一誠はうめいた。

「そうだったんですか？ 元気を出してください、イツセーさん」

「そうですよ。少なくとも、イツセー先輩がそんな事で悩むのはナンセンスです」

「へ？ どういう意味？」

「祐斗先輩も連也先輩も、基礎の積み重ねの量ならイツセー先輩よりも遙か上です。だからちよつとした事でも上達の切っ掛けに出来ます。でも剣術に関してはド素人のイツセー先輩に同じ事なんて出来る訳ないですし、出来たらおかしいんです。始めたタイミングが違いますから。レースで例えるなら、イツセー先輩は祐斗先輩たちが最終コーナーに差し掛かった辺りでスタートしたようなものです。追い付けないのは当然です」

小猫はドーナツをモグモグと食べながら言った。

「小猫ちゃんの言う通りですよ。イツセーさんは一年前まで何も知らなかったんです。そのイツセーさんの何年も前からお稽古している祐斗さんや連也さんに追い付けないのは当たり前じゃないですか。」

これから頑張っていけばいいんですよ」

◆ アーシアは一誠の両手を握り、優しく励ました。

町内放送で5時を知らせる音楽が鳴り響く中、連也はまだ校内に残っていた。

屋上に忍び込み、一人座禅を組み、瞑想している。

胸中に湧き起こるのは、不安だった。

ここ最近、祐斗や曹操が稽古相手を務めてくれるようになって、改めて稽古相手の存在のありがたさを実感する。

だからこそ、不安になるのだ。父の死後の自分の歩みは、果たして正しいものだったのか。大事な時期に、知らず知らず致命的な過ちを犯してしまったりしていないか。

そんな不安である。

世の中、なるようにしかならない。ここ最近の激闘を生き延びて来れたのだから、自分の修行は間違っていないだろうと思う。思いたい。

だが、それでも、稽古相手の存在のありがたさを実感するが故に、その稽古相手なしで続けざるを得なかった己の修行が、かえって不安になってしまうのである。

「なんだ連也、まだいたのか」

不意に、背後から話し掛けられた。

振り向くと、ゼノヴィアがそこにいた。

「もう下校時間はとづくに過ぎてるんだぞ。用もないのに学校に残るのは良くないな」

ゼノヴィアは腰に両手を当てて、朗らかにたしなめた。

「ああ、ごめん。もう帰るよ」

連也は座禅を解いて立ち上がった。

「ならいいが……こんな所で、一人で何をしていたんだ？ 念道の修行か？」

「だいたいそんな感じ」

努めて平静を装い答える連也だったが、ゼノヴィアはその声音に、

わずかながら弱々しいものを感じ取った。

「何か悩み事か？」

「ん、いや……なんで？」

「何となくだ。良かったら話してくれないか？ 困ってる生徒を助けるのは、生徒会長の務めだからね。それに、私も剣士としての自分の在り方で悩んだ事がある。多少なりとも君の力になれるかも知れないし、力になりたい」

「……………」

ゼノヴィアの真摯な言葉と眼差しに、連也はポツポツと、先程の不安を打ち明けた。

これは自分の問題であり、自分が解決していくべきものであり、他人に話すような事ではないと思っていたが、やはり心のどこかに、誰かにわかってもらいたいという気持ちがあったのだろう。いざ話し出すと、言葉が止まらなかった。

「そうだったのか……大丈夫だよ連也。君は間違っていない」

ゼノヴィアはそう言うなり、連也を優しく抱擁した。

「オルランドを倒した時のあの輝き、あれこそ君の努力が間違っていないかった何よりの証じゃないか。たとえ一時的、限定的なものであれ、あのような力を発揮出来るだけの下地が、確かに君の中で出来上がっているんだ。だからこれからも、自分を信じて鍛えていけばいい」

「そう、かな……………」

「そうとも。土溜まりて山となり、水溜まりて淵となり、技溜まりて才となる。焦らず、丁寧に積み重ねていけばいい」

「……………そうだな」

連也はゼノヴィアの肉体の柔らかさと温もりに、ちよっぴり上の空になりながらも、安心したようにうなずいた。

「ところでそれ、何かの引用か？」

「ああ。ストラーダ殿下のね。私も最近になって、ほんの少しだが意味を実感出来ているよ」

「……………そうか。まあ、あの人がそう言うんなら、頑張ってみるか」

「うん、その意気だ」

どうやら連也の気持ちも、前向きになれたようだ。安心したゼノヴィアは、何を思ったか少年の頬にチュツと口づけをした。

「……………へ？」

「駒王学園が誇るヒーローへの、生徒会長からの餞別だ」

「……………ア、アザマス」

「じゃあ私は他も見回らねばならないので、失礼するよ。君も気を付けて帰るんだぞ？」

「あ、ああ…………」

連也は上の空で答えたが、ゼノヴィアが立ち去ってからもしばらくは、そこに立ち尽くしていたのだった。

## 生徒会長の気持ち

日曜日の兵藤邸。

「はい連也くん、アーン♪」

姫島朱乃はテーブルを挟んで向かいに座る秋月連也に、フオークで掬ったケーキの切れ端を差し出す。

「……からかわないでくださいよ」

連也は言いつつも、頬がちよっぴり赤い。

朱乃はあらあらウフフと笑って受け流して――、

「アーン♪」

と、何事もなかったかのように強硬する。

連也は抗議しようとしたが、何となく『あ、こりやダメだ』と感じて、諦めてその差し出された一口をパクツと食べた。

二人がこんな事をするに至った理由は、ついさっきの出来事にある。

駅前のデパートで買い物を買ませた朱乃が公園の前を通りかかると、聞き覚えのある声が聞こえてきたのだ。

「この馬鹿ガラスうー！ 俺の唐揚げ返せえーっ！」

見るとベンチのそばで、連也が空を見上げて叫んでいる。その空を一羽のカラスが飛んでいた。

事情を聞くと（聞かなくてもだいたいわかったが）、コンビニで買った唐揚げを食べようとしたのだが、飲み物を買うのを忘れていたので、ベンチの近くの自販機でお茶を買っていたら、その隙にカラスにその唐揚げを横取りされたらしい。

「あらあら、可哀想に……でも、あなたほどの方がカラスに気付かないなんてあるのかしら？」

「殺気とか敵意があれば気付きますけどね。先輩だって飯食う時に、テーブルの上の料理にそんなもの向けたりしないでしょ。アイツ等もそうですよ、そこに食える物があるから取って食ってるだけです」  
「なるほど」

朱乃には、何となくだが理解出来た。

豊かに育ちすぎた胸のせいで、男のいやらしい視線には敏感になってしまっているため、連也の言う殺気や敵意というものがある程度わかるのである。

それはそれとして、唐揚げ一つで連也はずいぶんなしよぼくれようだ。何だか可哀想になつてきた朱乃は、彼を強引に兵藤邸へと連れ込んだ。

先の買い物で、安さに釣られて衝動買いしたショートケーキの詰め合わせセット。一人で食べるには多いが、みんなで分けるには少量で困っていたのだ。それを連也にお裾分けして慰めてあげようという魂胆である。

という訳で、ダイニングで連也は食事という名の羞恥プレイを受けている次第である。

「やあ連也、来ていたのか」

そこへ廊下から声がした。ゼノヴィアだ。

「や、やあ」

高校生にもなつてケーキをアーンしてもらつてる恥ずかしい姿を見られて、連也は顔中がカーツと熱くなるのを感じた。

「あらあらウフフ。ちようど良かったわ、ゼノヴィアちゃんもどうかしら？　一人で食べるには多いけどみんなで分けるには少なくとも、ちよつと困つてたの。みんなには内緒で手伝つてくださる？」

「私で良ければ喜んで」

ゼノヴィアはそう答えて、連也の隣に座ると、箱の中からモンブランケーキを選んで取った。

「美味しい……」

「そうでしょうか？　このお店のケーキ、私もお気に入りなの。だからつい中身も確認しないで安さに釣られて買ってしまつて……」

「無理ありません。きつと私も同じ事をしてしまつてしよう」

朱乃とゼノヴィアのガールズトークが始まつた事で、羞恥プレイが終わったものと思つた連也は安堵した――が、

「ほら、君も食べてみるといい。アーン♪」

今度はゼノヴィアが、自分のモンブランケーキをフォークで掬つて

差し出してきた。

単にお裾分けしたいという気持ちからだだったが、恥ずかしがって遠慮する連也を見てみると、何となく弄りたくなってきたのである。

朱乃がやっつてるのを見て、何となく自分自身にもよくわからない對抗心が芽生えたのもある。

朱乃は後輩の気持ちを知ってか知らずか、アーン攻撃を再開してきた。

(だ、誰か助けてくれ……)

珍しくそんな弱音を胸中で呟く連也に、更なる災難が降り掛かった。

「楽しそうじゃない、ダーリン」

いつの間にかやって来た黒歌が連也の背後から抱きつき、その豊満なバストを頭の上に乗せてきたのだ。

「あらあら、ダーリンだなんて……連也くんも隅に置けませんわね」

「一方的に言い寄られてるだけなんですけど……」

「そうです。このどら猫が、嫌がる連也に付きまとい、まとわりついてるだけです」

そう言うゼノヴィアの口調には、若干のトゲがあった。

「何よ、彼女でもないただのお友達にウダウダ言われたくないんだけど?」

「それを言うなら貴様など、彼女でも何でもないどころか、ただのストーカーだろうが」

「……喧嘩なら買うわよ?」

黒歌とゼノヴィアの間の空気が、ピリピリと張り詰めてきた。

——パァンツ!

不意に、連也が手を叩いた。

ゼノヴィアと黒歌は一瞬、暖かい風のようなものが吹き抜けていくのを感じ、急激に心が穏やかになっていった。

「喧嘩はよせよ、腹が減るだけだぞ」

連也がそう言った。

精神的な力を司るチャクラを開放し、感情の昂りを鎮める念を柏手

の音に乗せて放射したのだ。

「はぁーい」

「君がそう言うのなら」

黒歌とゼノヴィアはそれぞれ、そう言った。

連也は「ん」とうなずくと、自分の分のケーキをさつさと食べ、「ごちそうさまでした」と朱乃に言ってから、そそくさと退室する。

朱乃とゼノヴィアが彼を見送りに廊下に出たが、黒歌は箱の中にまだ一つだけ残っているチーズケーキを見付けて、そちらを平らげるのが優先した。

三人が玄関へ向かうと、そこに静江がいた。下駄箱の上に置いてある花瓶に、花を活けているようだ。花瓶の横に広げた新聞紙の上に、切り花がいくつも置かれていた。

しかし静江は浮かない顔をしている。

「おばさま、どうかなさいまして?」

朱乃が尋ねると、

「昨日買ってきたお花に、元気がない子がいて……どうしたものかしら」

静江は答えて、手にしていた白と桃色の百合を見せた。なるほど、「枯れた」とは言えないが、全体的に張りがなく、「元気がない」と言えた。

「ちよつと失礼」

連也がそう言って、静江の手からその二本の百合を抜き取った。

そして二本の茎の部分を右手でまとめて握り、深呼吸して目を閉じる。

何をするつもりなのかと三人が見守る中、不思議な事が起こった。

しおれ掛けていた百合の花が、徐々に広がり、元通りの張りを取り戻したのだ。

葉や茎にも、瑞々しさが戻ってきた。

「どうぞ」

連也は静江に百合を返すと、「お邪魔しました」と言い残して、出ていった。

◆  
月曜日。

連也はいつものように生徒会室で弁当を食べていた。

今日はゼノヴィアと匙、百鬼なきりも一緒だ。

匙の視界に、ふと隣に座る百鬼の、左手首の腕時計が映った。

匙はそれから、壁時計に視線を移して、そしてもう一度百鬼の腕時計を見直した。

「百鬼、腕時計止まってるぞ」

「え!？」

百鬼は言われて、腕時計と壁時計を見比べる。壁時計よりも腕時計の方が、二十分遅れている。秒針も全く動いてなかった。手首から外して、リユーズ文字盤の横に付いている、時刻やカレンダーを合わせるためのネジを触ってみるが、どこかで引っ掛けて針が止まった訳ではなさそうだ。

昨日買った物だが、最初から内蔵されていた電池の寿命が僅かだったのだろう。

「貸してみ」

連也が右手を差し出した。

「はあ」

百鬼はその差し出された手に、腕時計を置いた。

連也は腕時計を乗せた右手に左手を被せると、深呼吸して目を閉じる。

(まさか……)

ゼノヴィアの脳裏に、昨日の玄関での出来事が浮かび上がった。

連也は両手で腕時計を包んでから、十秒ほどで、その腕時計を百鬼に返した。

チツ、チツ、と秒針が動いている。

「一週間は持つから、その間に電池替えてもらおうといいよ」

そう言って、連也は食事を再開した。

百鬼はリユーズを引き出して時刻を合わせながら、目をキラキラさせて連也を見る。

「あの話、本当だったんですね……」

「何が？」

「この前うちのクラスの園芸部の子が言ってたんですよ。連也先輩が枯れた花を生き返らせたって……その時はちよつと信じられなかったけど、時計を直せるんなら、花だって治せますよね……」

「——そんな事あったっけ？」

あった。連也が覚えてないだけである。

先週の木曜日の昼休み、風通しの良い花壇に涼みに来た際、花壇に植えられていたヒマワリの花が一本しおれているのを見て不憫に思い、茎を握って、念を送り込んだのだ。するとしおれた花がみるみる内に元通りに開花したのである。それを百鬼のクラスメートが目撃していたのだ。

今百鬼の電池切れになった腕時計を直したのも、昨日百合の花を元通りに咲かせたのも、同様に念を送り込む事で為せる技である。

しかし連也にしてみれば、父が生きていた頃から出来た技だ。道端に落ちている空き缶やゴミを、すぐ近くのゴミ箱に捨てる程度の感覚なので、いつどこで使ったかなどいちいち覚えてないのである。

だが、それにしても彼はのんびりしていた。

その佇まいに、時計を直してもらった百鬼は言わずもがな、匙も、そしてゼノヴィアも、連也に対して尊敬の念を強くするのだった。

◆ 「というような事があったのだが、君にも出来るのか？」

その日の夜、ゼノヴィアは曹操の部屋を訪れて昼休みの一幕を話し、質問した。

曹操はスマホで電子書籍を読んでいる最中だった。本のタイトルは彼が聖典とまで呼ぶ日本のファンタジー漫画『ドリームクエスト外伝・ダイノの大冒険』である。

「出来るよ」

スマホから視線を上げて、曹操は肯定したが、

「パワーソースの関係で、彼よりは時間が掛かるがね」と付け加えた。

「パワーソース？」

「秋月連也が使ったのは恐らく気功術の一つ放華ほうげだろう。俺なら体内で練り上げた「気」を注ぎ込んで、一分くらいで花を甦らせたり蕾を開花させたり出来る。しかし彼の操る念はその「気」を更に二段階ほど高めたものだからね。ほんの数秒で効果を出してもおかしくない」

「そうなのか……」

「彼に出来るかどうかはわからないし、たぶんやろうと思えば出来るだろうが、応用すれば体内に入れられた毒を傷口から、或いは汗と一緒に、排出することも出来る」

「なるほど、キョージユツとは奥が深いな……うん？」

「そこまで聞いて、ふと疑問が浮かんだ。」

「その、毒を体外に排出する技も、君は使えるのか？」

「まあね」

「ならば何故、一誠にサマエルの血を撃ち込まれた時には使わなかったんだ？」

「その時はまだ会得してなかったからね。出来るようになったのはごく最近だ」

「そうだったのか……」

一誠の勝利は、時の利によるものだったようだ。

「兵藤一誠じゃあるまいし、必要な能力が必要な時に都合良く得られるものじゃないんだよ。配られたカードで勝負するしかないんだ。いつだって、誰だって——君のご主人様以外は、ね」

「まるで一誠が不正をしているような言い方だな。彼だって配られたカードで勝負しているぞ」

「……………ああ、そうだったな。失礼」

曹操はあっさりと引き下がった。

店子の身の上で、大家の息子を悪し様に言うのは憚られたからであり、同意した訳ではない。

（確かに配られたカードで勝負しているさ。ただ、常に相手よりも強い役が配られているだけだ）

そういう思いがあった。

「ところで、スズメは止まるようになったかい？」

「……………まだ、全然ダメだ」

「だろうな。前にも言ったが、ああいう細やかさは君向きではない。しかし気長にやれば、百年後くらいには出来るようになるさ」

「そうか……………よし、頑張ってみるよ」

ゼノヴィアは明るい声で言った。

曹操は皮肉のつもりで言ったのだが、何せ悪魔の寿命は転生悪魔でも一万年以上なので、百年後ですら割りと近い将来なのだ。そこを失念していた。

(彼女も転生してまだ一年くらいだったはずだが…………)

寿命に関してはまだまだ実感を伴わないと思っていたが、そうでもないようだ。順応性が高いのか、それとも単に気付かなかっただけなのか……………さすがの曹操も判断に困った。

「用件はそれだけか？」

「うん？ ああ、いや、もう一つ…………」

「何だ？」

「君は、連也と仲が良いのだろうか？」

「それほどでもないがね。毎朝、お互いの稽古に付き合ってるくらいだ。それで？」

「私は、もっと連也の事を知りたい。どうすれば良いだろうか？」

「デートにでも誘ったらどうだ？」

「なるほど、わかった。ありがとう」

ゼノヴィアはそう言つて、部屋を出ていった。

「……………どうしよう」

曹操は吐き出すように呟いた。

適当に言った言葉を、ゼノヴィアは真に受けてしまったようだ。

「まあいいか」

連也とて若い男だ。可愛い女の子からデートに誘われて、喜びこそすれ苦痛ではあるまい。

曹操は必死で、自分にそう言い聞かせるのだった。

◆  
思えば、曹操は冗談のつもりだったのかも知れない。ゼノヴィアは今でもそう思っている。

しかし、彼の言葉に天啓めいたものを感じたのは確かだ。

剣士としてではなく、もっと別の観点から彼と触れ合うのも良いかも知れない。

一誠の事が頭をよぎらなくもなかったが、そもそも彼はいつも、こちらからのアプローチにあたふたするだけで、自分からは何もしてこないのだ。今日だって、彼と予定があつたのを強引にキャンセルした訳でも何でもない。約束がないのだから、日曜日を誰と過ごそうと問題は無い。

そんな事を考えながら、ゼノヴィアは日曜日の昼下がりに、復興が終わった駅前ふれあい広場で連也を待っていた。

少しして連也が、緊張した面持ちでやって来る。

二人は映画館へ、肩を並べて歩き出した。

デートコースはいたって平凡だ。

映画を見た後、ファミレスで食事をし、街のあちこちを見て回る。

だが、それだけの事が妙に楽しかった。

振り返れば、プライベートではどうやって一誠と良い雰囲気になるか、ひいてはどうかやってリアスやアーシアを始め他の女性たちを出し抜くかを考えてばかりだった気がする。

だが、連也と一緒にいると、気持ちに凄く楽になった。

肩の力が抜けて、心なしか体も軽い。

連也も、最初こそ女の子とデートという事で緊張していたが、すぐにそれもなくなつたようだ。

夕方になって、二人はバスに乗って街を出た。連也が、

「せっかくだし、俺のお気に入りの場所に連れて行ってやるよ」と誘つたのだ。

隣町との境にある香車山の上にある駐車場に設置された、屋根付きのバス停で下りると、ゼノヴィアは連也に連れられて駐車場を抜けて、その奥の長い階段を上り始めた。

階段を上った先は広場になっており、その奥に展望台があった。展望台に上がると、駒王町全体はおろかその周辺まで見渡す事が出来た。

「おお……絶景とはこの事だな……！」

ゼノヴィアは感動すら覚えた。夕焼けに照らされた下界の眺めは、それほどまでに美しかったのだ。

「こんな素敵な場所があったとは、知らなかったよ。教えてくれてありがとう、連也」

「どういたしまして。気に入ってもらえて良かった」

「連也は、どうだった？　せっかくの日曜日に付き合わせてしまったが……」

「んー？　誘われた時はビックリしたけど、でも楽しかったよ。女の子とデートなんて初めてだったし。その初デートの相手がお前で良かったと思ってる」

「そうか……君がそう言ってくれるなら、私も一安心だ。また一緒に、ここに来よう」

「ああ」

二人は展望台からの眺めをしばし楽しむと、駐車場を出て、ちょうどやって来た駒王町行きのバスに乗った。

一番後ろの長椅子が空いていたので、そこに座る。

バスに揺られているうちに、ゼノヴィアは瞼が重くなるのを感じた。

「着いたら起こしてやるから、寝てていいぞ」

それに気付いた連也の言葉に甘えて、彼の肩にもたれ掛かる。

もう七月だというのに変な話だが、春の日差しを思わせる温もりを、少年の肉体から感じ取った。

（やつぱり、連也と一緒にいると、落ち着くな……）

そんな事を思いながら、ゼノヴィアは目を閉じた。

すぐに、穏やかな寝息が聞こえてくる。

まるで小さな子供のような、あどけない寝顔だ。

それを眺めていると、妙に気持ちや和む連也であった。

## ヒーローズトークⅡ

放課後。

最近ようやく落ち着き始めた女生徒の黄色い声を浴びながら、秋月連也は校舎を出た。

そこへ、聞き覚えのある怒号が響く。

「こらー、待てーっ!」

「今日という今日こそは引導を渡してやるーっ!」

クラスメートの仲良しコンビ、村山と片瀬だ。剣道着姿で木刀を手にして、同じ剣道部員らしき女子たちを引き連れて走っていた。

彼女たちに追われているのは、やはりと言うか何と言うか、兵藤一誠である。ちなみに悪友の松田と元浜は既に取り押さえられている。体力の差で、彼だけが未だに捕まっていないのだ。

「秋月くん、そいつ捕まえてーっ!」

「そいつまた覗いてたのーっ!」

「どけ秋月ーっ!」

村山、片瀬、一誠が次々に叫ぶ。

連也は追う者と追われる者、両方に応じた。

一歩下がって一誠に道を譲る。

そしてすれ違い様に、彼の影を踏んだ。

「うおっ!」

途端に一誠は足が動かなくなり、勢い余って転んでしまう。起き上がろうにも、下半身が見えない力で押しさえ付けられているかのよう  
に、動かなかつた。

「覚悟ーっ!」

「天誅ーっ!」

追い付いた村山と片瀬が、一誠目掛けて木刀を振り下ろした。

連也、割って入り、二人の怒りの打ち込みを両の掌で受け止めた。

『——えっ!?!』

二人は同時に、驚きの声を上げた。

連也が一誠をかばったのはもちろんだが、自分たちの、怒りに任せ

た割りとは本気の打ち込みを簡単に止められた事にも驚いたのだ。しかも木刀を通して手中に伝わった感触は、驚くほど軽く、柔らかかった。全力で打ち込んだにも関わらず、まるでゆつくりと真綿の上に置いたかのような感覚だった。

連也は上段から打ち下ろされた木刀を、踵を浮かせた状態で、まずは両手を伸ばして受け止めた。次に肘を軽く曲げる。そして膝も軽く曲げながら、浮かしていた踵を下ろし、全身をサスペンションにして衝撃を和らげたのだ。それでも完全には衝撃を殺しきれなかったが、それは体内の気脈を通して受け流し、地面に散らした。

「落ち着け。さすがに木刀はまずいって」

連也は小さな子供を諭すような優しい声で言った。

村山と片瀬はぼつの悪そうな顔で、木刀を下ろした。彼女たちも、後ろの部員たちも、二重の意味で予想外な光景を目にして、怒りのボルテージが完全に下がってしまったている。

「そ、そうね……ごめんね、秋月くん」

「秋月くん、手、大丈夫？」

「へーきへーき。このバカは俺が職員室に連行しとくから、みんなは部活に戻りなよ」

「うん、ありがとー秋月くん」

「じゃあ、また明日ねー、秋月くん」

村山と片瀬は女子部員を引き連れて、去っていった。

それを見送った後、連也は依然地面に転がったままの一誠の両脇に腕を通し、立ち上がらせる。

「さあ行くか。送ってってやるよ」

「あ、ああ……」

どうやったのかはわからないが、それでも転ばされた文句を言っつてやろうと思った一誠だったが、彼も彼で剣道部員たちからかばってもらった事で、その怒りも冷めていた。

「あ、ありがとな秋月……」

「気にするなよ、人間として当然の事をしたまでだ」

軽く答えながら、連也は一誠の肩に手を置き、歩き出した——校舎

の中へと。

「お、おい秋月。こっちは校舎だぞ?」

「そうだよ」

「送ってつてくれるんじゃないのかよ!」

「だから職員室に送るんだよ。さつき言ったら」

言いながら連也は職員室へと向かう。

一誠は抵抗しようにも、身体を自分の意思で動かす事が出来ない。肩に置かれた連也の手を通して、何やら暖かいものが全身に流れ込み、コントロールを失っていた。己れの意味とは無関係に、連也に伴われて職員室へと足が勝手に進んでいく。

「俺を助けてくれたんじゃないのかよ!」

「なんで? 村山さんたちが捕まえてつて言ったから捕まえたただけぞ。お前は『どけ』としか言わなかったし」

「で、でも、さつき俺をかばってくれただろ!」

「うんにゃ」

「——へっ?」

連也があつきり否定したので、一誠は間の抜けた声を上げた。

「お前みたいなのでも怪我させたら犯罪だからな。二人の内申書にわずかにでも染みが出来たら、クラスメートとして忍びない」

『みたいなの』つて何だよ! ちつくしよおおおとおおおつ! ほんの一瞬でもお前を良い奴だと思った俺が馬鹿だったあああああつ!」  
「気にするな、人間として当然の事をしたまでだ」

前方に見えてきた職員室のドアを見つめながら、連也はそう言った。

◆  
夜の9時。

一誠は一人、トボトボと家路につく。

悪友二人と一緒に職員室で説教をくらい、反省文を書かされ、更に校内の全てのトイレ掃除までやらされて、こんな時間にまでなってしまうのだ。

旧校舎のオカルト研究部部室に行ってみれば誰もおらず、どうやら

誰一人として迎えに来るどころか待つててもくれなかったらしい。

「くそつ、なんで俺がこんな目に……」

一誠は唸るように呟いた。

この世界を守るために戦い、何度も命を懸けて戦って来た。そうやって守り抜いた平和を堪能してはいけなくても言うのだろうか？ ましてや、松田と元浜の二人と一緒にいられる最後の一年だというのに……。

(でもまあ、しよーがねえよな。悪魔の事バラす訳にもいかねえし……『俺が世界を救ったんだ、世界は俺に感謝しろー』とか言ったところで、みつともないしな……)

「まったく、ヒーローはつらいぜ」

そう口に出して、自分を慰めた。

——が、『ヒーロー』という単語で、いけすかない男の顔が思い浮かんでしまう。

秋月連也である。

(あいつはいいよなあー、『愛と奇跡の子』だか何だか知らないけど、それでみんなにチャホヤしてもらってさ……)

オルランド眷属との戦いから、もう二ヶ月が過ぎているというのに、未だに連也は学園の女子たちから黄色い声を浴びせられている。

オルランドを倒した実力と功績は認めるが、彼が英雄視されているのはあくまでも、悪魔の存在を公にしないための策でしかない。いわば造られた英雄、偽りのヒーローだ。そんな奴が女の子たちから持て囃されているのは、どうにも面白くなかった。

「つーか、何だよ『愛と奇跡の子』って……全然意味わかんねえし……何かの宗教かつつーの」

どうせ念道の技を人に見せて、一時期注目を集めていたのだろう。インチキ宗教の怪しい教祖のように。一誠はそう考えている。

以前リアスから、彼の名前とそのフレーズで検索してみるように言われたが、上級悪魔に昇格してから仕事も増えているのだ。とてもそんな時間はない。

それはともかくとして、秋月連也はとにかく気に入らない存在だっ

た。

自分たちが必死の思いで戦い、我が身を引き裂かれるのも同然の犠牲を払ってようやく平和を勝ち取ったというのに、後からしゃしゃり出てきてその平穏な日常を掻き乱していく。

リアスや朱乃にゼノヴィア、黒歌のみならず、最近ではアーシアまでもが、連也に対して好意的だ。みんな名字ではなく下の名前で呼ぶようになってる。

自分が苦勞して築き上げたハーレムまで、連也によって崩壊させられてるような気持ちになっていた。

(……いやいや、考えすぎだよな。桐生も言ってたじゃねーか、遊びに来た親戚の子供に優しくしてやってるようなもんだって……リアスだって、あくまでもあいつの力や腕前を買ってるだけだし……)

そう自分に言い聞かせ、ざわつく気持ちを何とか静めようとした。しかし、なかなか出来ない。

特にゼノヴィアの態度がおかしいのだ。この前の日曜日は一人で出掛けていった。大抵は自分を誘惑してくるか、アーシアやイリナと一緒に遊びに行くかしているのに……。

「やっぱりおかしいよな……ゼノヴィアの奴、秋月の事好きになったりしてないよな……いやいや、そんなはずはない！ でも、秋月はやっぱりどう考えても怪しい！ あいつがゼノヴィアを狙ってるのは間違いない！ くそつ、ふざけやがって！ あんな奴にゼノヴィアは絶対に渡さねえ！」

「一人で大声を出すのはやめた方がいい」

「うおわあああああああつ！」

不意に話し掛けられて、一誠は奇声を上げた。

見れば曹操がいた。黒のタンクトップとカンフーパーンツ姿だ。街灯に照らされて、肌にしつとりと汗が浮かんでいるのがわかった。

「な、何だお前かよ！ おどかさな！」

「これは失礼」

曹操はヒョイツと肩をすくめた。

「君が一人でブツブツ呟いていた挙げ句、大声まで出すものだからね。

息子が奇行で通報されたとあってはご両親も悲しむ。誰かに伝える予定のない思いは、基本的に胸の内にとまっておく事だ」

「ちえつ、悪かったな……それより、こんな時間にこんな所でそんな格好して、何やってるんだよ」

「ロードワークに決まってるだろう」

「ロードワークだあ!？」

意外すぎる返答に、一誠はまたも奇声を上げた。

「そんなに驚く事か？」

「驚くだろフツー!」

一誠は怒鳴るように答えた。

初めて戦った時から、この男の戦闘力の高さには舌を巻いた。聖槍という強力な武器と、それを十全に活用するセンスは脅威とすら言えた。そんな才能の塊のような男が、ロードワークなどという汗臭い事をやっているのだから、驚くのは当然だった。

「お前、そんな、ロードワークとか、そういうトレーニングとか……やってるのかよ!」

「当たり前だろう。鍛練なしに強くなれる訳がない——俺たちのような、ちつぽけな人間風情は尚更ね」

「そ、そうか……」

一誠はちよつぷりこの男を見直した。

同時に、『ちつぽけな人間風情』という言い方が引つ掛かった。

(まだあの時の事気にしてんのかな……人間の力を試すとか何とか言つといて、結局その人間である事が弱点になって負けたんだもんな……)

自分が負かしておいてなんだが、何か元気付ける言葉を言ってあげたくなった。

「なあ曹操。そういう言い方はどうかと思うぜ? 人間はちつぽけなんかじゃねえよ。悪魔や天使だってちつぽけじゃねえ。みんな生きてる、みんな同じなんだ。もちろん、お前だってちつぽけなんかじゃねえぞ」

「……………」

曹操は一誠の言葉に、数秒ほど黙り込んだ。

そして、フツと笑うと、

「そうだな。そういう事しておくよ」  
と言った。

「な、何だよ！ 俺は気休めで言ってる訳じゃなくて本気で」

「今夜はご母堂お手製のカレーだ。早く帰らないと猫姉妹がみんな食べってしまうぞ？ ではお休み」

曹操はそう言い残して、タツタツと走り去っていく。

「な、何だよ、あの野郎！ 人がせつかく慰めてやろうと思ってたのによ！」

ほんの一瞬でも曹操を見直した事を、一誠は後悔した。

◆ 一誠と別れた後も、曹操は走り込みを続ける。

先程一誠が口にした言葉が、心に引つ掛かっていた。

種族の違いなど関係ない。命は皆平等だと言いたかったのだろう。

しかし、そんな言葉を平気で口にする自覚のなさや白々しさに、軽い苛立ちを覚えていた。店子という立場にあるので、大家の息子に対してあまりきつい事は言えないが――、

「化け物に言われてもな……」

嬉しくも何ともない。かえって馬鹿にされている気分ですらなかった。

この駒王町を一瞬で更地にもクレーターにも変えられる男からすれば、確かに人間も悪魔も天使も、それ以外の異形異類も、皆同じにしか見えないだろう。

あるいは、元々『自分』と『それ以外』の二種類でしか考えられないのだろう。

思えば、京都で初めて戦った時も、元同属相手との戦いに対して、妙に迷いがなかった。悪魔に転生して、ようやく半年を過ぎたかどうかという時期だったにも関わらず、だ。

さっきの言葉は本心だったかも知れないが、それは結局のところ、個々を見ているのではなく、『自分以外の全て』という括りで捉えている

るだけなのではないか。

もつと言えば、

『どうでもいいから同じにしか見えないだけ』

だからこそ、あんな白々しい言葉が言えたのではないか……。

相手が大家の息子で、自分は店子であるが故に、さつきは適当に受け流したが、曹操には賛同し難い言葉にしか思えなかった。

一万年以上の寿命があり、魔力で若さを保てる生き物からすれば、百年も生きる事が出来ず、老いていくだけの人間など、ちっぽけにしか思えないはずなのだ。悪魔と人間にはそれだけ、根本的な部分で大きな隔たりがある。

兵藤一誠は、果たしてそれを、どれだけ自覚しているのだろうか……。

「しよせん化け物は化け物だな」

曹操の顔に、暗く冷たいものが満ちていた。

曹操は不意に、走るスピードを上げた。

ペース配分も何も無い。

ただがむしやらに走る。

そうしてめちやくちやに走り回る内に、連也に出会った。

「曹操さん……どうしたんです？」

右手にコンビニ袋を提げた連也は、曹操が走ってきた方角に目を凝らす。余りに凄い勢いで走るものだから、追われているのかと思っただのだ。

曹操は足を止め、息を整えた。

「やあ、連也くん。君こそどうした。買い物か？」

「ええ、何か小腹が空いちやって。曹操さんは、稽古ですか？」

「そんな大したものじゃない……ただ、何も考えたくない時にはこうしてロードワークなどをやっているのさ。体を動かしてれば、つまらない事を考える余裕もなくなるからね」

「お疲れ様です。アイスあるけど食べますか？」

「いたごう」

二人は近くの公園のベンチに座り、並んで腰掛けた。

連也はコンビニ袋からソフトクリームを取り出した。

本当は道すがら一本食べて、帰つてからもう一本食べる予定だったが、何となくこの男に分けてあげたくなつた。

二人は夜の帳とぼりの中、黙々とソフトクリームを食べた。

「ところで、さつき何も考えたくない時にはくとか言つてましたけど、何かあつたんですか？」

「いいや。だが君も、不意に昔の事を思い出したりするだろう？ それも、なるべくなら思い出したくない事に限つて……俺もそうさ。親の事を、思い出してしまつてね」

「親、ですか」

「ああ」

曹操は訥々とつとつと、過去を語つた。まだ連也には聞かせた事のない、小さな子供だつた頃の事を。

中国の山奥で生まれ育つた事。

ある日、怪物に襲われたのが切つ掛けで《黄昏の聖槍トウルー・ロンギヌス》が顕現した事。

そんな自分の身柄を確保しようとする者が現れた事。

両親が、彼等に自分を売つた事。

逃げ出し、いろんな土地を放浪した後、故郷に帰つてみれば両親が自殺していた事。

曹操が行方をくらませた後も、様々な勢力が彼の情報を求めて両親に接触したのだ。両親は息子の情報と引き換えに大金を得て、贅沢の味を知つた。その贅沢から抜け出せず、あちこちから借金をして、返済も滞り、激しい取り立てに追われた挙げ句、生家で首を吊つたのだ。

「自業自得だよ」

そう断ずる曹操の声は、かすかに震えていた。

「だいいち、仮に、俺があの時違う行動に出ていたとしても、結果は変わらない。それでも、時々考えてしまうんだ——もっと普通に生まれて来れたなら、本当に何の力もない、ちっぽけで弱つちい人間に生まれていれば、父さんも母さんも死なずに済んだかも知れない、とね」

曹操はそこまで言って、ソフトクリームのコーンをモシヤモシヤと食べた。

「今更そんな事を考えたって、何もならない。だからそんな時は、とにかく体を動かして、考えないようにしているんだ」

「……なんか、すいません。話しづらそうな事聞いちゃって……」

何か困っているのなら力になるうかと思っただが、自分のそんな判断を連也は後悔した。

「気にしないでくれ。話そうと思っただのは、俺の意思だ」

「……俺は、母さんの事はよく知りません。写真でしか。小学校に上がる頃に、父さんと念道の修行を始めて……三年くらい前に、雪山で修行してた時に、雪崩に遭ったんです。その時父さんは俺をかばってくれて、二人で雪の中に生き埋めになった時、ありったけの念を俺の体に注いで、俺を守ってくれました」

「知ってる。それで『愛と奇跡の子』と呼ばれるようになったんだってね」

「念道の修行は本当に楽しかった。父さんの期待に応えなかった。でも、俺も時々考えるんです。念道の修行なんてつまんないからやめたとか言っちゃえば、父さんも雪山での修行なんてやらなかったんじゃないかって。死なずに済んだんじゃないかって」

「連也くん」

曹操が、かすかに声に力を込めた。

「言っただろう。今更そんな事を考えたって、何もならないんだ——だけど、ありがとう。君も、話しづらそうな事を話してくれたね。これでおあいこだ」

「です」

「ちよつぱり、気持ちも楽になれたよ。俺は帰って寝るとしよう。お休み、ヒーロー」

「お休みなさい」

ベンチから立ち上がり、歩いて立ち去る曹操の背中を、連也はいつまでも眺めていた。

◆  
翌日の昼休み。

生徒会室には、連也とゼノヴィアの二人だけだった。二人で隣り合って座り、黙々と弁当を食べている。

「なあ、連也」

「ん？」

「君の念道で、イツセーの性欲を消す事は出来るか？」

「何だよ、いきなり」

「多少乱暴でも、学園の平和のためには抜本的な処置を取らねばならないと思ったんだ」

ゼノヴィアの声には、硬い決意の色があった。

昨夜遅くに帰ってきた一誠は、学校からの連絡を受けて激怒した両親から夕飯抜きを罰を受けたのだが、その時彼は思わず叫んだのだ。

「なんで俺がこんな目に遭わなきゃいけないんだよ！」

それを聞いたゼノヴィアは、思わず殴りたくなった。兵藤夫妻がいなかったら殴っていたらろうと、自分でも思っている。

この男をおとなしくさせるには、もつと大胆な行動が必要だとも感じた。

それで白羽の矢を立てたのが、先日喧嘩になりかけた自分と黒歌を鎮めた連也という訳だ。

「うーん……」

連也は問われて、考え込んだ。

「やってやれない事はないと思うけど……後が怖いな」

「大丈夫だ。我々が全力で君を守るよ」

「いや、報復とかじゃなくてさ。性欲を消したせいであいつの心に何か悪い影響が出ないかとか、性欲を消したせいで先輩たちやアルジェントさんとの関係が悪くなるんじゃないかとか、そっち系。あいつの事は好きじゃないけど、俺のせいでそういう展開になるのはちよつと忍びないからさ」

「ふむ……そう都合良くはいかないか……」

ゼノヴィアはハア……と、ため息をついた。

「何か、ごめんな」

「いいんだ、気にしないでくれ」

謝る連也に、ゼノヴィアは朗らかに返した。

そして二人揃って生徒会室を出たところで、一誠と出会った。何やら書類の束を抱えている。さつき匙元士郎と鉢合わせた際に、生徒会室に運ぶよう頼まれたのだ。

「ちったあ学園のために貢献しろ！」

と怒鳴られて。

訳もわからぬまま、それでもゼノヴィアにいい顔が出来るならと引き受けたのだが、そこに世界で一番見たくない顔があったので、一誠は露骨に嫌な顔をした。

「うわ……」

声も出た。

ゼノヴィアはかすかに眉をひそめつつ、尋ねた。

「何か用か、イツセー」

「ああ、匙にこれ持ってつてくれって頼まれてな」

「そうか、ありがとう」

ゼノヴィアは差し出された書類の束を受け取り、室内の長机に置いた。

「それより秋月！ お前、昨日はよくもやってくれたな！」

「まあそう気にするなよ。昨日も言ったろ、人間ひととして当然の事をしたまでだからさ」

「ふざけんな！ おかげで昨日は夜遅くまで残らされて反省文書かされるわトイレ掃除させられるわ散々だったんだぞ！ しかも帰ったら帰ったで母さんに晩飯抜きにされるし！」

「勘当されなくて良かったな。そろそろ心を入れ換えて真面目に過ごせよ」

「うるせえ！ 愛と奇跡の子だか何だか知らねえが、女の子にチャホヤされてるからって調子に乗りやがって！」

「……別に調子になんか乗ってないし、お前の行動には何の関係もないと思うけどな」

連也はかすかに目を細めた。

「そうだぞイツセー。昨日の事は全て自業自得。身から出た錆だ。連也に八つ当たりするのはやめろ」

ゼノヴィアが一誠を諫める。

「八つ当たりなもんか！ お前は何とも思わないのかよゼノヴィア！

俺たちは世界を守るために必死で戦ってもその事を人間界では公に出来ないのに、こいつはちよつと戦っただけで世間からヒーロー扱いされてるんだぞ！ 事情はわかってもやっぱり納得いかないだろ！」

「いや、別に」

「即答かよツツ!!!」

おかしい。

一誠はそう思った。

やはりゼノヴィアの態度がおかしい。どこことなく冷たい。

これまでに蓄積された不満が、ここに来て爆発したのか、一誠は思っている事を全て吐き出した。

「だいたいこいつは前から気に入らなかったんだ！ 俺は町を守りたい一心で頼んだのに念道教えてくれねえし！ ゼノヴィアにはなれなれしいし！ サイラオーグさんに勝ったのも気に入らねえ！

ちよつと才能があるからっていい気になってあの人の血反吐を吐くような努力を踏みにじりやがって！ そもそもお前はいつも俺に對してえらそーにしゃがって、何様のつもりだよ！ 俺たちは今までつらい戦いを繰り返してきて、いろんなものを失ってここまで来たんだ！ 何も失わずに平和な日本でヌクヌク育ってきたお前に、なんで俺が」

そこで、ゴツ！ と硬い音がして、言葉が途切れた。

一誠は倒れていた。

鼻血が出ている。

殴られたのだ、連也に。

「おい」

連也は静かな声で、一誠に呼び掛けた。

「俺は、別に自分だけが苦勞をしてきたとは思っちゃいない。でもな、樂をしてきたつもりもないし、何も失わずに生きてきた訳でもない。お前がどんな苦勞をしてきたかは知らないけど、そんな風に言われる筋合いだけは、絶対にない」

そう言い捨てて、立ち去っていく。

ゼノヴィアは連也を追い掛けた。

一誠を助け起こすどころか、一瞥もせずいちべつに。

「な、何なんだよ、あの野郎……！」

いきなり殴られて、一誠は連也への怒りと嫌悪感をますます深めるのだった。

## 侵略者、連也

ゼノヴィアは一誠には一瞥もせず、連也を追い掛けた。角を曲がってすぐの所で追い付き、呼び止める。

「連也、待ってくれ。一誠がひどい事を言っすまなかつた、どうか許してほしい」

そう言っす深々と頭を下げる。

「……なんでゼノヴィアが謝るんだよ。俺の方こそ、悪かつたな。お前のご主人様殴つたりして」

「謝らないでくれ、連也……君は悪くない。君の怒りは正当なものだよ」

ゼノヴィアは連也の手をギュツと握つた。

「一誠の今の言葉は、ハッキリ言っす無神経過ぎる……正直、あんな事を言える奴だとは思わなくて、私もさっきの彼には失望している。君の代わりに私が殴っすやりたかつたくらいだ」

「悪魔業界の事はよくわからないけど、そういう事言っす大丈夫なのか?」

「確かに私は一誠の眷属だが、奴隷ではない。主君が道を誤つた時には、時には体を張り、時には力に物を言わせてでも諫めるのが、臣下の道だと考えている」

「……まあ、ほどほどにな」

連也はそう言っすしかなかつた。

一誠の事は嫌いだが、それでも怒りに任せて殴っすしまった事には罪悪感がある。だから『思いつきりやっちゃつてくれ』などは、冗談でも言えない気分だつた。

「連也……」

ゼノヴィアは連也の首に腕を回して抱き寄せ、彼の顔を自分の胸にうずめた。

「私は、君を心から尊敬している。お父上を亡くされても、挫けずにごこまで歩んできた君の克己心や忍耐を、素晴らしいと思つている。私に出来る事があれば、遠慮なく言っすてくれ。君のためならどんな事

だつてするよ」

連也の髪を撫でながら、優しく語りかける。

一方の連也は、思わぬ展開に驚き、半ば思考が停止していた。制服越しに顔中に伝わる、胸の柔らかさ。

髪を撫でてくれる、指の細さ。

そして慈愛に満ちた声色。

そのどれもに安らぎのようなものを感じて、それ以外の事は何も考えられなくなった。

「テメエエエエエエエツツ!! ゼノヴィアに何してんだ、この変態クソ野郎オオオオツツ!!」

そこへ、ゼノヴィアを追って来た一誠が怒鳴り付けて来た。

「やつぱりテメエ、ゼノヴィアを狙ってやがったな！ お前みたいなクソ野郎にゼノヴィアは渡さねえぞ！ ゼノヴィアは俺のものだあああああっ！」

ゼノヴィアに抱きついて、自分しか触った事のないおっぱいに顔をうずめる男に、一誠は怒りを爆発させて殴りかかろうとしたが――、「ぶべらっ!」

その顔面に、パンツが見えるのもお構いなしに放たれた、ゼノヴィアの上段横蹴りが突き刺さった。

カウンター気味に顔を蹴り抜かれて、一誠はそのまま仰向けにぶっ倒れた。

「廊下で大声を出すな、痴れ者め」

「……俺、悪魔業界詳しくないけど、本当に大丈夫なのか？」

「これでもまだぬるいくらいだよ」

ゼノヴィアは言い切った。

「さあ、教室に戻ろう連也。昼休みが終わってしまうからね」

「アツハイ」

「それと、これは私からのお詫びだ。度し難い主様に代わってのね」

そう言うと、ゼノヴィアは連也の頬に、チュツと口づけをした。

「時間もないし、場所も場所だからこんな事しか出来ないが……機会があれば、また改めてお詫びをするよ」

「アツハイ」

連也は、機械的な返事しか出来なかった。

キスの位置が、いつぞやの時よりもかなり唇に近かったからだった。

◆

その日の夜。

一誠はリアスに昼間の一幕を語った。

「ゼノヴィアが俺に暴力振るうなんておかしいよ！ やっぱりゼノヴィアは秋月に騙されてるんだ！ お願いだよりリアス！ ゼノヴィアを助けるために力を貸してくれ！」

「いやよ」

「ありがとうリアス！ やっぱり君は頼りになるよ——つて、ごめん、何て？」

「い・や・よ」

リアスは一文字ずつ区切って、もう一度返事をした。

「そ、そんな……なんでだよ！ 俺は暴力を振るわれた被害者なんだよ!?!」

「そりゃあ連也くんに対してそんな事を言えば、殴られて当然でしょう?」

「当然つてどこがだよ！ 本当の事言われたからって逆ギレなんておかしいだろ!」

「……イツセー。確認しておきたいのだけど、あなた、連也くんの事を調べてないの?」

「する訳ないだろ！ だいたい俺だってまだ駆け出しの新米とはいえ上級悪魔なんだ、そんな暇ないよ!」

「検索して記事を読むだけの時間くらいあるでしょうに……」

「とにかく、ゼノヴィアの目を覚まさせるために力を貸してよ!」

「お断りよ」

「なんでさー!」

「あなたの怒りには何の正当性もないし、何より、私は控えめに言っても、あなたの十倍は忙しいからよ!」

リアスは、デスクの上に鎮座する書類の摩天楼を、バンバンと叩いた。最近になってようやく、目に見えて量が減ってきたところである。正直に言えば、こうして一誠と話をしている今でさえ、作業を止めたくないくらいだ。

「下手をすると夏休みも返上しなきゃいけないのに、あなたのくだらない愚痴に付き合ってなんていられないわ!」

「く、くだらないって何だよ! 俺はプロツ!」

リアスは言葉を遮るように、一誠の顔面に一枚の書類を叩きつけた。

「どうせこんな事だろうと思ってプリントアウトしておいたわ。読んでごらんなさい」

言われた一誠は、渋々その書類に目を通した。

そこには、連也が『愛と奇跡の子』と呼ばれるようになった経緯が書かれてあった。

「どう? 自分がどれだけひどい事を言ってしまったか、理解出来た?」

「まあ、確かに悪かったよ。でもだからって殴るか普通……俺は知らなかっただけなのにさ」

バチインツツ!!

リアスが引き出しから取り出した乗馬鞭で、一誠の胸を叩いた。

「ふざけた事を言ってるよ、ぶつわよ?」

——ぶつ前に言ってくれ、という至極真つ当な反論は、余りの痛さに出てこなかった。

「な、何だよ……だって知らなかったんだからしょうがなアギヤアツ!」

二発目の鞭が、今度は肩に炸裂した。

「私が怒っているのは、知らなかったからじゃないわ。あなたが連也くんの事を知らないどころか知ろうともしないくせに、自分勝手な偏見を元に罵倒して、挙げ句それで反撃されて被害者面してる事が許せないのよ」

「わ、悪かったよ……でもだからって、俺のゼノヴィアに手を出してい

い理由にはならないよ！ 辛い思いをしたからって何をやってもいい訳じゃない！」

「それで、結局のところ、あなたは何をどうしたいの？」

「だから言ってるだろ！ ゼノヴィアは秋月に騙されてるから、目を覚まさせるのに協力してほしいんだよ！」

「騙されてる、ねえ……」

リアスはハア……と溜め息をつくくと、大きく伸びをして、首を左右に曲げた。ゴキゴキと小さく音が鳴る。

「イツセー。あなたは何を根拠にそう思ったの？」

「だってゼノヴィアの奴、秋月と妙に仲が良いじゃないか！」

「一緒にオルランド眷属と戦った戦友だもの。当然でしょう？」

「だからってあそこまで仲良くなるのはおかしいよ！ 昼間なんて秋月に抱きつかれておっぱいに顔をうずめられても文句言わなかったんだよ！」

「……ゼノヴィアが連也くんに好意を持つてるとは、考えないの？」

「なんでだよ、おかしいだろ！ アイツはゼノヴィアにそこまで好かれるような事、何もしてないんだよ！ ただ出てきた敵を倒しただけじゃないか！」

「そうねえ……本当に、実践経験に乏しいのによく頑張ってくれたわ連也くん……オルランド眷属は難敵揃いだったもの」

リアスはオルランド眷属との戦いを思い起こし、しみじみと呟いた。

彼女が直接戦った相手も、そうでない相手も、難敵と呼ぶにふさわしかった。

『この町で戦う限り、地の利は俺たちにある！ テメエーらが全力を出すよ、町が吹っ飛んじゃうからなあ〜！』

バズソーの言葉が、今も頭の隅に引つ掛かっていた。最大戦力を投入出来れば、簡単に勝負がついただろう。オルランドですら倒せたと、今でも思っている。だが、その結果この駒王町は地図から消えていた事だろう。それでは何の意味もないのだ。

最大戦力を投入出来れば、どんな敵にも負けない。

だが、その最大戦力は、いとも簡単に封じられてしまうのだ。

そんな中、連也はまず眷属ではない使い走りのジャンゴとミドラを倒し、次いでバズソーを、そして自分や朱乃と協力してクルガンとマシセルを、その後もルドラクを倒し、最後はオルランドとドウレンダナも倒した。今回の一件に限れば断トツのスコアを記録しているのだ。それまでは偶然鉢合わせたはぐれ悪魔との戦いを、数えるほどしか経験してないのにも関わらず。

(――やっぱり、ちよつと惜しいわね)

リアスもやはり悪魔である。彼の戦績を思い返して、今更ながらあの少年を欲しいと思ってしまった。

とは言え、眷属に迎え入れる事も念道を指導してもらおう事も、望むべくもない。今後も彼を援助する事で、協力関係を結び続けるのがベターだろう……。

それはともかくとして、である。

「あの戦いを通じて、ゼノヴィアが連也くんに信頼を置くのは当然だと思っただけだ」

「だから、ただそれだけでアイツを好きになるのはおかしいって言うてるんだよ！　ただ強いから好きになったって言うんなら、ヴァーリヤサイラオーグさんを好きになつてなきやおかしいだろ！」

「つまり、連也くんに強さ以外の魅力を感じたという事ね。あなたの知らない所で」

「魅力って何だよ！　アイツに何の魅力があるって言うんだ！」

「ゼノヴィアに聞いてみたら？」

「そうしたいけどゼノヴィアは帰ってからちつとも顔を合わせないんだよ！」

「昼間の事を思えば仕方ないわね。今夜は諦めなさい。二、三日もしてゼノヴィアの気持ちが悪く落ち着いたら、腹を割って話し合ってみるのもいいかも知れないわ」

「……………そうだね。そうしてみるよ。ありがどうリアス」

一誠は僅かな、しかし不安を感じさせる間を置いてからそう答え、退室する。

◆ 恋人の背中を見送りながら、リアスは長い溜め息をついた。

(おかしい……やっぱりおかしい……！)

廊下を歩きながら、一誠は恋人の態度に不信感を抱いていた。

自分が暴力を振るわれたというのに、それでも連也をかばうような事ばかり言っている。

リアスだけではない。

放課後にオカルト研究部メンバーたちにもそれとなく相談したが、皆一様に『一誠が悪い』と返したのだ。

アーシアに至っては、

「明日にでも謝りに行きましょう、イツセーさん。私も一緒について行ってあげますから」

とまで言う始末である。

リアスの所へ相談に行く途中で朱乃と出会ったので、彼女にも相談してみたが、彼女も連也の味方をした。

「イツセーくん、過ちは誰にでもあるものですわ。大事なのはそれを認めて受け入れる事。明日にでも謝りにお行きなさい。顔を合わせづらいのなら、私が場をセッティングして取りなしてあげますわ」と、まるで自分が悪いかのような言いぐさだ。

確かに自分の失言だった事は認めよう。

だが、だからと言って暴力を振るっていい訳ではない。

(だいたい、そういう事情があるなら、殴る前に言えばいいじゃねえか……そうすりゃ俺だって謝ったのよ……察してちゃんのくせに被害者ぶりやがって……！)

連也の過去を知ったところで、彼を許す気には到底なれなかった。

一番許せないのは、ゼノヴィアを奪おうとしている事だ。

ゼノヴィアはいつだって自分を見てくれていた。

初めて会った時こそ険悪な雰囲気だったが、神の死を知って絶望していた彼女をリアスが眷属に迎え入れてくれて以降は、良好な関係を築けた。

プールで子作りを迫られて以来、事あるごとに肉体関係を迫られて

辟易したものだ、ゼノヴィアが真摯な好意を向けてくれているのは嬉しかった。

もちろん一誠とて何もしなかった訳ではない。

そもそもゼノヴィアとアーシアが神に祈りを捧げてもダメージを受けなくなつたのは、自分がミカエルに直訴したのが切っ掛けだ。

その後も、ゼノヴィアの悩みには相談に乗ってやった。未熟なのはお互い様だが、自分なりにアドバイスだってしてやった。

そうやって少しづつではあるが関係を深めていったというのに、何故今になって、よりにもよって秋月連也ごときが、そこに割って入るのか。

（世界の危機にも、一人でシコシコ念道の修行にかまけてた自己チュー野郎じゃねえか！ あんな奴にゼノヴィアは渡せねえ！）

ゼノヴィアもゼノヴィアで、何故あんな男になびくのか。

自分との子供が欲しいと言つたのは嘘だったのか？

自分と一緒にいるのは楽しいと言つたのは嘘だったのか？

初詣の時にしたキスは？

それまでこちらの都合もお構いなしにぶつけて来た好意は、いったい何だったのか……！！

考えれば考えるほど、腸が煮えくり返る思いで、胸糞が悪くなつてくる。

秋月連也が、自分の平穏な日常を破壊する邪悪な侵略者に思えてならなかった。

否、現に破壊されている。誰も彼もがああ男の味方をしている現状は、そうとしか思えなかった。

部屋に戻ろうとしたところで、曹操と鉢合わせた。

「なんだ、お前か」

「なんだとはご挨拶だな。一つ屋根の下で暮らす仲だろう？」

「男に言われてもなあ……」

「それもそうか」

曹操はヒョイツと肩をすくめた。

そんな彼を一誠はジツと見詰める。

「……なあ、お前、秋月と仲がいいんだよな？」

「それほどでもない。朝の稽古を一緒にやる程度さ」

「まあ、それでもいいよ。なあ、お前から見て秋月ってどんな奴だ？」

「同じ人間として、尊敬に値する傑物だと思っっているよ」

「あんな奴がか……？」

「あんな奴とはひどい言いようだな。この駒王町と、そして君たちの恩人だろうに」

「そりゃあそうだけだよ。でもやっぱり、気に食わねえのは気に食わねえんだよ」

「喧嘩でもしたのか？」

「喧嘩じゃねえ。一方的に殴られたんだよ」

そう言つて、一誠は曹操にも昼間の件を語つて聞かせた。

「ひどい事言つちまつたのは確かだけどさ、俺は本当に何も知らなかったんだぜ？ 殴る事ねえじゃねえか。話してくれりゃあ俺だつて謝つたのによ」

「……呆れるな」

「だろ？ 察してちゃんのくせに被害者ぶつて、ゼノヴィアにまで手え出しやがるし」

「彼じゃない。俺が呆れてるのは君だよ、兵藤一誠」

「俺え？」

訳がわからず、一誠は自分を指差しながら、間の抜けた声を上げた。

「君はこの一年ちよつとの間に、様々な経験を積んできたはずだが、どうやらそれらを通して培われたのは戦闘力だけだったようだな。観察眼の方は、全く磨かれてなかったと見える」

「どういう意味だよ、この野郎！」

「君は本気で、秋月連也が何も失わず、平和な日本でヌクヌクと育てられてきたと思つたのか？」

「しよがねえだろ、知らなかったんだから！」

「それ以前の問題だよ。あれだけの実力を、何も失わず、一切の傷も受けずに手に入れられると思うか？ 才能だけで手に入れられる強さだと思ふか？」

「……そういう天才もいるんじゃないか？ 例えばお前とかさ」

「光栄な評価と言いたいところだが、さすがにそれは、俺や連也くんを馬鹿にし過ぎだ」

曹操はかすかに目を細めた。

「いいか兵藤一誠。誰だつて、傷の一つや二つは抱えているものだ。強き者であれば尚の事、大なり小なり何かしらの犠牲を払ってその強さを手にしているんだ。君の仲間も、君自身もそうだろう？ なのに何故、連也くんは違うと言い切れる？ 何故、俺は違うと言い切れる？」

「だから、俺は知らなかったんだつて」

「それ以前の問題だと言った。彼の力を、技を目の当たりにすれば、それが生まれ持った才能だけで易々と得られるものではないとわかるはずだ。才能という原石を、長年の鍛練によつて丁寧に磨き上げて完成させた『珠玉』だと感じ取れるはずだ。己れを鍛え、高める事を知る者ならね……そうでないなら、君の心のどこかに、自分だけが苦勞している、自分だけが頑張っているという思い上がりや、周りの連中はみんな何の苦勞もしていないと決め付ける差別意識にも似たものがあるからだよ」

「お、俺は別に、そんな……」

「自分の胸に手を当てて、じっくり考えてみる事だな」

曹操はそこまで言うと、立ち去っていった。



翌日の放課後。

一誠は廊下を歩くゼノヴィアの後をつけていた。とにかく、話がしたい。

だから一人になるのを見計らい、声をかけるつもりで機をうかがっているのだ。

ゼノヴィアは生徒会室には向かわず、屋上に出た。生徒たちの憩いの場として開放されているが、今は誰もいない。

ゼノヴィアはそこで足を止め、クルリと振り向いた。

「ほら、出てこい」一誠

言われて一誠はすくみ上がった。ゼノヴィアは尾行に気付いており、自分をここに誘き出したのだとわかった。

しかし、二人きりになれたのは確かだ。一誠は物陰から潔く姿を現し、校舎内に続くドアを閉めた。

「何の用だ？ 手短に頼む」

「あ、ああ……えーっと、昨日は大丈夫だったか？」

「何の事だ？」

本当にわからず、ゼノヴィアは小首を傾げる。

「ほら、昨日の昼休みに、秋月の野郎に抱きつかれておっぱいに顔をうずめられてたじゃねえか！ 俺はお前に蹴られて気絶しちゃったけど、あの後もっとひどい事されたんじゃないかって心配で……」

「ああ、そういえば五時間目に遅刻してたな。心配無用。私も連也も教室に戻ったからね。そもそも、あれはそんなのじゃない」

「どういう意味だ？」

「あれは、私が自分からやってあげたのさ。君の心ない言葉に傷付いた連也を慰めてあげたくてね」

「な、なんでそんな事を！」

「だから今言っただろう。君に傷付けられた連也を慰めるためだ」

「だだだ、だからってあんな野郎に、あんな、あんな事する必要ねえだろ！」

「……連也を怒らせておいて、よくそんな事が言えるな」

ゼノヴィアは呆れた。

「いや、それは悪かったよ！ でもだからってそこまでする必要ねえだろ！ だいたいなんで最近のお前は俺に冷たいんだよ！ 秋月に何か俺の悪口でも吹き込まれたんじゃないのか!？」

「いや、何も」

「だったらなんで！」

「お前がしょっちゅう覗き行為で学園の平和を乱して、我々の手を煩わせているからだ」

ゼノヴィアは暗く冷たい眼差しで、一誠を睨んだ。

「うっ、それは申し訳ないと思ってるけどさ、でもしようがねえだろ！

覗きは男の性さがなんだよ！」

「……まあ、そうなのかもな。性欲は生物に必要な不可欠な欲求の一つだ」

「だろ？ だからしようがねえんだよ」

ゼノヴィアが理解を示してくれた事に、一誠は安堵した。

だがゼノヴィアは、一誠の頭を鷲掴みして、物凄い力で押さえ付け、ひざまずかせる。

「ゼ、ゼノヴィア!？」

「だがな、人間にはその欲求をコントロールする理性というものがあ  
る。そして悪魔は欲を支配する者だ。お前は欲求をコントロールす  
る理性も持たず、己れの欲に支配されたケダモノだ。二本足で立つ資  
格も、服を着る資格も、言葉を交わす資格もない」

ゼノヴィアの指が、一誠の頭に食い込んでいく。

「己れの行いも省みずに連也を悪者扱いするとは、つくづく度し難い  
な……お前だつて連也に命を救われた一人だろうに……恥を知れ！」  
ゼノヴィアは手を離すと、一誠の顔面に、パンツが丸見えになるの  
もお構いなしに横蹴りをくらわせる。

昨日に続いて顔を文字通り足蹴にされて、一誠は怒りが込み上げて  
来た。

「なんだよ！　なんで俺が蹴られなきゃならねえんだよ！　俺はお前  
の事を心配してやってんのに！」

「私の事を思うなら、今からでも行いを改めろ。ハッキリ言うが、私は  
お前のような王キングを持って恥ずかしいとすら思っているんだぞ」

起き上がるなり不満をぶちまける一誠の顔面を踏みつけたいのを  
我慢して、ゼノヴィアは言った。

（連也は、こんな奴の事すら案じているというのに、こいつと来たら  
……）

だが、それは口にしない。そういう誰かと比較するような言葉を聞  
かされれば、自分だつていい気はしない。今の一誠なら尚更だろう。  
ますます意固地になる恐れがあった。

「で、でも、お前去年は何も言わなかったじゃねえか！」

「去年はね。だが、生徒会長になって被害者の声を聞くようになってからは、そんな去年の自分すら殴りたい気分だよ——いいか、一誠」  
ゼノヴィアはしゃがみ込み、一誠の頭を両手で挟んだ。

「どうも連也が私をたぶらかそうとしているなどと誤解しているようだが、私のお前に対する態度は全て、お前自身の行動が招いた結果だ。関係を改善したいなら、今すぐ心を入れ換えて、日頃の行いを改めろ。明日からじゃない、今すぐだ。それが出来ないようなら、私はお前の眷属をやめてリアス様の元に戻るからな」

「……あ、ああ」

一誠は目線を伏せたまま、答えた。

(む、少し脅かし過ぎたか……?)

一瞬そう思ったゼノヴィアだったが、この男にはこれくらいしないとダメなのだ、自分に言い聞かせた。

「言っておくが覗きだけじゃないぞ。連也にちよっかいを掛けるのもダメだ。わかったな？」

「あ、ああ……」

一誠はやはり目線を伏せたまま。何かおかしい……よく見ると、口許がニヤケている。

そこでゼノヴィアは、ようやく気付いた。

一誠は罪悪感などで目線を合わせられないのではなく、しゃがんで丸見えになった自分のパンツを凝視していたのだ。

「この痴れ者が！」

ゼノヴィアは一誠の顔面に膝蹴りを叩き込むと、屋上から走り去っていった。

◆  
夕方の6時。

魔力を使って制服姿から私服姿に変身したゼノヴィアは、連也を連れてバッテリーングセンターに行った。

連也が、バッテリーングをしている時も、施設内のゲームセンターで遊んでいる時も、こちらをチラチラ見ていた。何かあった事を察しているのだろうか。

心配させて申し訳ないと思う反面、敢えて根掘り葉掘り聞き出そうとせずに、黙って付き合ってくれるのがありがたかった。

一時間ほど遊んだ後、二人で一緒に帰る。

「付き合わせてすまなかったね、連也」

「いいって事よ。これくらいはお安い御用だ」

「……うん、ありがとう」

ゼノヴィアはそう言うと、連也の腕に自分の腕を絡めて、身体を密着させて来た。

「ど、どうした?」

「今日はちよつと、精神的に疲れてしまつてね……誰かに、寄りかかりたい気分なんだ」

「そうか。まあ、俺でいいなら好きだけ寄りかかるといいよ」

「ありがとう、連也……」

ゼノヴィアは言うなり、今度は連也の正面に回り、背中に腕を回して抱きついて来た。

「ゼ、ゼノヴィアさん!?!」

「帰りたくない……」

「はい!?!」

「去年までは、一誠と一緒にいるだけでも楽しかった……でも今は、全然楽しくないし、楽しめない……顔も見たくないし、声も聞きたくない……アイツと一緒にいたくない……」

「そ、そうか……」

やはり兵藤一誠絡みで、何かあったのだろうか。それともそれまで溜め込んでいたものが、たまたま今日弾けただけなのだろうか。

いずれにせよ、こんな弱気なゼノヴィアは初めて見た。

(これ、ドツキリじゃないよな?)

それにしても余りに唐突な展開に、連也はそんなあらぬ疑いを抱き、周囲に念を放射した。反響定位の念バースジョンだ。そうやって辺りを探っても、『大成功』と書いたプラカードを持って待機している人物など、当然だが存在しない。

安堵すると同時に、尚更ゼノヴィアが可哀想になってきた。

「じゃあ、今夜はうちに来るか？」

幸か不幸か、叔父夫婦は今日から温泉旅行に行っており、家には連也一人である。

「うん、行く」

ゼノヴィアは小さな子供のようにうなずいた。

(いいのお!?)

自分から誘っておいて、連也は心の中で突っ込む。

二人は手を繋いで、歩き出した。

(俺は……俺はいつたい何をやっているんだ……ツツ!!)

自分から誘っておいて、連也は相手の弱味につけこむような己れの手為に罪悪感を抱きつつも、それでも今繋いでいるゼノヴィアの手を離したくなくて、家人のいない自宅に向かって歩き続けた。

## 逆鱗に触れる

ゼノヴィアは兵藤邸の同居人たちに『今夜は友達の家泊まる』と連絡してから、連也に連れられて小さなレストランに入った。

そのレストランは連也の行きつけの一つで、カツカレーが彼のおすすめだ。ゼノヴィアはそのおすすめの意味に大満足して、小さな子供のよくな満たされた顔をしている。

(……………ダメだったか)

店を出て隣を歩く少女のその様に、連也は小さく溜め息をついた。腹が膨れて冷静になって、

「食事を奢ってもらった上に一晩厄介になるのは申し訳ないので、泊まるのはやつぱりやめにする」

とでも言い出してくれないかと期待しての外食だったが、作戦は失敗に終わった。

そこで次の作戦に切り替える。

途中でレンタルショップに寄り、映画のDVDを何本か借り、更にコンビニでスナック菓子やジュースも買い込んだ。

映画は派手なアクション物や怪獣物だ。これ等を見ていけば、一夜の過ちが起こるような雰囲気には絶対になるまいという算段である。

この作戦は成功し、ゼノヴィアは男の子めいて映画にすっかり熱中し、大はしゃぎだ。

これなら深夜ドラマの濡れ場みたいな流れには絶対にならないだろうと、連也は安堵した。

——ゼノヴィアが嫌いな訳ではない。

黒歌の受け売りではないが、友情以上の気持ちを抱き始めているのかも知れないと、自覚している。

それでも連也は、ゼノヴィアとの関係を深めたいとは思ってないどころか、深めてはいけないとすら思っている。

卒業後は、どこかにいるかも知れない念道の先人を探す旅に出るつもりだからだ。ゴールの見えない漂泊の旅と一緒に来て欲しいなどと、口が裂けても言えるものではない。

ゼノヴィアとは、卒業したらそれで終わりの友達でいるべきだ。連也は、そう思っている。

日付が変わる頃には、ゼノヴィアははしやぎ疲れて眠ってしまった。ソファで隣り合って座る連也の肩に寄りかかり、あどけない顔で穏やかな寝息を立てている。

連也はゼノヴィアの背中と膝裏に手を回して抱き上げ、自分の部屋のベッドに寝かせると、自分は一階のリビングに戻ってテーブルの上のお菓子の袋を片付けて、ソファに横たわって眼を閉じた。



翌朝、目を覚ましたゼノヴィアは連也が用意してくれた簡素な朝食を済ませると、着ていた私服を魔力で制服に変換して、一緒に登校した。

「昨日はありがとう、連也。おかげでリフレッシュ出来たよ」

「そりゃ良かった」

「いつかお礼をさせてくれ。今度は私が、何か美味しい物を奢らせてもらおうよ——それとも、こういう場合は手作り料理の方が良いだろうか?」

「俺はどっちでもいいよ」

「そうか。うん、ならどうするか考えておこう」

いつも通りのクールさだが、ゼノヴィアの声色は昨日とは打って変わって明るく、弾むような軽さがあった。

学校が見えてくる辺りで、二人は足を止めた。

一誠が立っているのだ。まるで待ち構えていたかのようだった。そして連也とゼノヴィアの姿を見つめるなり駆け寄って、連也の胸ぐらを掴む。

「秋月い!　なんでテメエがゼノヴィアと一緒に登校してんだよ!」

「別にいいだろ」

「良くねえよ!　ゼノヴィアは友達の家泊まるって言ったのに、なんでお前なんかが……さてはゼノヴィアを騙して家に連れ込みやがったな!」

「人聞きの悪い事言うなよ」

「そうだぞ。私は自分の自由意思で連也の家に遊びに行つたんだ」

ゼノヴィアの言葉に、一誠は横つ面をひっぱたかれたような顔になったかと思うと、今度はゼノヴィアの両肩を掴んだ。

「な……なんでそんな事しやがったんだ！」

「お前の顔を見たくなかつたからな。そもそも嘘は言つてないぞ。連也は私の友達だからな。少なくとも、お前にとやかく言われる筋合いはない」

「大有りだ！ お前は俺の眷属なんだぞ！ 王の俺の許可キングもなしに他の男の家に泊まるなんて許される訳ないだろ！」

「確かに私はお前の眷属だが、別に恋人でも夫婦でも奴隷でもない。だいたいだな」

ゼノヴィアはスマホを取り出して、LINEアプリを開いて、一誠に見せる。

「許可はちゃんと取つてあるのだが？」

開いたのは『兵藤家』というグループ内でのトーク画面で、ゼノヴィアの『今夜は友達の家泊まります』という書き込みに対して『うーい』という一誠の呑気な返信が表示されていた。

「う、いや、これは、まさか秋月の家に泊まるとは思わなかつたから……」

「それ以前の問題だ。友達が誰なのかも確認せずに気楽な返信をしておいて、後から文句を言うな。リアス様やご両親はちゃんと確認しているぞ？」

そう言つて、個人間でのトーク画面を見せる。リアスや兵藤夫妻からは、確かにその『友達』が誰なのかを尋ねる書き込みがあり、ゼノヴィアは正直に連也の家に泊まると答えてある。

「大して関心もないくせに、何故後になつてからいちいち口を挟むんだ？」

「うぐぐ……」

一誠は反論の言葉が思い浮かばず、うめくだけだ。

「ぐうう……チクシヨウ！ やい秋月！ テメエ、ゼノヴィアに何しやがった！ 念道の技で洗脳でもしやがったのか！」

「なんでそうなるんだよ」

「ゼノヴィアがこんな簡単に、俺以外の男になびく訳ないんだよ！ゼノヴィアを洗脳して家に連れ込んで、エロい事でもし、あだただだっ！」

いきなりゼノヴィアに腕をねじ上げられて、一誠は声を上げた。

「今のは言い過ぎだぞ。連也は私にベッドを貸し与えて、自分はリビングのソファで寝る紳士だ。侮辱は許さん」

「こんな奴信用出来るか！ お前が寝てる間におっぱい揉んだりしたかも知れねえんだぞ！ 自分勝手に、自己中心的で、自分の都合でしか動かない奴が紳士な訳ねあぎやあああつ！」

「侮辱は許さんと言ったぞ」

ゼノヴィアは鋼鉄のような暗く冷たい声色で言い、更に腕をねじ上げた。

「ゼノヴィア。かばってくれるのは嬉しいけど、もうやめとけ。それ以上は折れる」

連也の言葉に、ゼノヴィアは小さく溜め息をつき、渋々腕を離れた。「くそっ、ふざけやがって……俺にこんな事するなんて、やっぱりお前おかしいぞ！ 目を覚ませ、お前は騙されてるか洗脳されてるんだ！」

「まだ言うか。なら、この眼を見てみる」

ゼノヴィアは一誠の胸ぐらを掴んで、引き寄せた。互いの鼻息が感じ取れるくらい、顔が近付く。

「これが洗脳されてる者の眼か？」

問われて、一誠はゼノヴィアの眼を覗き込む。よく考えたら洗脳された者の眼など見た事はないが、常軌を逸した者や狂気に染まった者の眼に見られる、独特の暗さや淀みは見受けられない。

「い、いや……いつもと変わらない……」

「そら見ろ」

ゼノヴィアは一誠の胸ぐらを、半ば突き飛ばすように離れた。

「っ、つまり、お前は正気で、本当に自分の意思で、秋月の家に泊まった……？」

「だからそう言っているだろう」

瞬間、一誠の脳裏にはゼノヴィアとの思い出が次々とよみがえった。

プールで子作りを迫られて以来、隙あらば関係を迫ってきたゼノヴィア。

何度も胸を触らせてくれたし、初詣ではキスマまでしてくれた。

今とは比べ物にならないほど弱かった時期でも、自分と一緒にいると楽しいと言ってくれて、独立したら眷属としてついていくとまで言ってくれた。

だが、それらの思い出がたった今、ガラス細工めいて粉々に砕け散ったような気がした。

「俺の子供が欲しいって言ったのに……おっぱい触らせてくれたのに……キスだってお前の方からしてきたのに……全部なかった事にするつもりかよ……男の純情弄びやがって、このクソビッチがあつ！」

胸の奥から活火山めいて噴き上がった激情に駆られて、一誠は怒鳴った。

次の瞬間、硬い物が頬にぶち当たり、倒れる。

連也が拳を握っていた。

それで、彼に殴られたのだとわかった。

「ま、また俺を殴りやがったな、このクソ野郎

！」

「クソ野郎はお前だ。俺の事をどう思おうとどう言おうとお前の勝手だけど、今のだけは取り消せ。謝れ」

「うるせえ！ 本当の事だろうが！ こいつは散々俺を誘惑してきておいて、あっさり他の男に乗り換えやがったんだ！ ビッチじゃねえなら淫売だ！ 淫売のクソ女だ！」

「取り消せ。謝れ」

「他人の女に手え出しておいて偉そうな事言うな！」

今度は連也が、一誠の胸ぐらを掴んだ。そのまま片手一本で、一誠を持ち上げる。

「取り消せ。謝れ」

「同じ事ばかり言いやがって……九官鳥かお前は！」

「取り消せ。謝れ」

「うるせえ……お前はいいよな、ほつといても女の子の方から寄ってくるモテモテ野郎で。お前なんか、二度も好きな女の子に裏切られた俺の気持ちがあわかってたまるかよ」

一誠も負けていない。そう切り返して、連也の顔に、赤色混じりの唾を吐きかけた。眼には涙さえ浮かべている。

連也は避けようともしない。頬に一誠の唾がかかる。

「……取り消す気も、謝る気もないんだな？」

「当たり前だ！」

すると連也は、あっさり和一誠を下ろしてやった。

「よくわかった」

「けっ。わかればいいんだよ、わかれば」

「なら、力づくで取り消させる」

「……な、何だよ、やろうってのか」

「ああ。決闘だ。俺が勝ったら、さつきゼノヴィアに言った言葉を取り消せ。土下座して詫びろ」

「へっ、勝てたらの話だけどな。俺が勝ったら、お前は何をしてくれるんだよ？」

「何でも」

連也は、氷のような冷たく静かな声で答えた。

「死ぬというなら死ぬ。金を超越せと言うなら強盗してでも払う。二度とゼノヴィアに近付くなど言うなら近付かない。奴隷になれと言うならなつてやる。日時も場所もルールも、全部お前の都合で決めろ」

「……上等だ。舐めやがって」

連也の言葉を自信の現れと受け取り、一誠は歯を剥いた。

「じゃあ夏休み、8月になったら冥界の俺の領地で勝負だ！ 逃げん

じゃねえぞクソ野郎！」

「8月だな、わかった」

連也はあっさりと答えて、学校に向かう。

ゼノヴィアも慌てて後を追った。

「けっ、まるで犬コロだな……」

ゼノヴィアのその様子を見て、一誠は彼女に向けて、まだ赤色混じりのままの唾を吐いた。

◆

「連也！ 待て、落ち着くんだ！」

ゼノヴィアは追い付いた連也の手を掴む。

「私のために怒ってくれたのは嬉しいが——」

「お前のためじゃないよ。あいつがムカついたから、ぶちのめしてやりたいだけだ。お前は関係ない」

答える連也の声は、かすかに震えていた。

「俺はいつだって、自分自身のために戦う。今回もだ。だから結果がどうなろうと、お前は何も気にしなくていい」

「あの流れで私に気にするなと言うのは、もはや気遣いではなく新しの暴力だぞ……」

冗談ではなく、心からそう思う。

争いを好まないこの少年が、自分の名誉のために自ら戦いを挑んでくれるのだ。彼は今、『いつだって自分自身のために戦う』と言ったが、実際はいつだって、誰かのため、何かのために戦っている。その『誰か』が自分になろうとは、思ってもみなかった。自分が連也の好意に甘えたりしなければ……という罪悪感もある。気にならない方がおかしい。

だが、やはりこの決闘は無謀に思えた。連也の実力は間近で見えてきたが、それでも歩く核ミサイルと言っても過言ではない一誠相手では、分が悪いどころではない。

「連也、頼む。考え直してくれ……私はあんな奴に何と言われようと平気だ」

「俺は平気じゃない」

「だが、私のせいで君に万が一の事があつては……」

「お前のせいじゃない。俺が、自分で自分の尻拭いするだけだよ」

「え？」

「変な下心出して、家に呼んだりなんかしなけりや、お前があんなひどい事言われなくて済んだんだ。だから、その責任を取る。それだけの話で、お前は本当に何も関係ないんだよ、ゼノヴィア」

連也はそう言つて、微笑んだ。

◆ どこか儂いものを感じさせる笑みだった。

期末試験が終わり、一学期が終わった。

決闘の日取りは、8月半ばにある祝日とお盆休みが重なる連休期間最終日となった。準備期間は実に三週間ほどある。

相手に『もつと準備期間があつたら』などと言ひ訳させず、完膚なきまでに叩きのめしてやりたいという思いから、一誠はそのように決めた。

ちようど赤龍帝眷属用の合宿施設も完成してある。夏休みに入ると一誠はそこに籠り、トレーニングに勤しんだ。

ペンション地下に儲けられた、訓練用の異空間結界には、ちよつとした仕掛けがある。

時間の流れが、遅いのだ。結界内での三時間が、外界での一時間に当たる。あまり差を広げ過ぎると、その時間差に戸惑ってしまうからだが、それとは別に技術的な限界というのもあつた。

それでもありがたい。入念なトレーニングが出来るし、時間の流れが違うだけなので、決闘の前日でも、結界に籠れば三日分の休養が得られる。

更にタイミングの良い事に、天界から一誠に新たな武器が渡された。アスカロンⅡの試作品である。これを鎧の尻尾の先端に装着させれば、攻撃の幅が広がるだろう。

ペンションに籠つたのは、新旧オカルト研究部メンバーと顔を合わせたくないからというものあつた。

連也と決闘する事になったと伝えるや否や理由を聞かれ、素直に『向こうの方から喧嘩を売ってきた』と答えたら、皆が皆、口を揃えて『連也に何をしたのか』と詰問するのだ。

洗脳は確かに自分の考え過ぎだったようだが、それでも秋月連也には、他者の心を引き寄せ、なびかせ、手懐ける何かしらの力があるようだ。その力に魅入られた今の彼女たちでは、どんな横槍を入れてくるかわからなかった。

(まあ、それも少しの間の我慢だな……)

連也は負けたら何でも言うことを聞くと言った。死ぬと言われれば死ぬとまで言った。

だが一誠は、別に命まで奪うつもりはない。二度と自分たちに近付かなければ、それで良かった。そうすればみんな正気に戻るだろう――ゼノヴィアも含めて。

後から振り返ると、ちよつと言い過ぎたと自分でも反省はしているのだ。

だが、連也こそが元凶なのだから、それを排除すれば彼女も自分の元に戻ってくるはずだ。

ギクシヤクした関係性も、生徒会長という立場から来る重圧ゆえだろう。卒業してしまえばそれもなくなる。

連也さえ排除すれば、もう一度かつての平和な日常を取り戻せるのだ。

一誠はそんな思いを胸に、特訓に励んだ。



リアス・グレモリーと姫島朱乃の二人は、空から河原へと舞い降りた。

ゴツゴツした大きな石があちこちにあり、山奥の上流である事がわかる。

そこで曹操が、キャンプをしていた。

今は持ち込んだカツプラーメンで、昼食を取っている。

「おや、珍しい客人だな。それともこの近くに、やたら客への注文の多い料理店でもあるのかな?」

呑気な冗談を言う曹操に、リアスが詰め寄った。

「……何故あなたがここにいるの?」

「ご挨拶だな。どこで何をしようと、公序良俗に反しない限りは俺の

自由のはずだが」

「そうじゃなくて！ 私たちはこの辺りで連也くんが山籠りしていると、あの子のご家族から聞いてやって来たのよ！ なのに、どうして、その連也くんがいなくて、あなたがいるの！」

「彼ならいるよ」

「どこに？」

曹操は無言で、持っている割り箸である方角を指し示した。

川から離れて少し上の斜面に、大きな洞窟がポツカリと空いている。

「あそこに籠っている」

「あの洞窟で、何をしているの？」

と朱乃が尋ねた。

「さてね。誰にも見せたくない、念道の修行方法でもあるんだろう。すまないが、当分は面会謝絶だ」

「そう……」

「で、あなたは何をしているの？」

「決闘の話を聞いたものでね。彼のサポートをしたくて押し掛けて来たのさ」

曹操はリアスの問いに答えて、カップラーメンをまたすすり始めた。

「君たちこそ何の用だ？ 兵藤一誠に負けてやってくれと、お願いでもしに来たか？」

「あなたと同じよ」

嫌味たらしい皮肉に眉を潜めつつ、リアスは答えた。

「……………意外だな。二人揃って乗り換えか？」

「人聞きの悪い事言わないで。むしろイツセーのためになると思えばこそよ」

「ほう？」

「連也くんがあの子に勝てば、少しはあの子も心を入れ替えるだろうと思ってるね」

「ここ最近のイツセーくんは、様子がかなり変でしたもの。連也くん

に負ける事で、一旦足を止めて、自分を省みる事が出来ればと思いまして」

「あの子さえ良ければ、私が所有している合宿施設を使わせてあげてもいいのよ？」

「なるほど。なら尚更、今は彼の好きなようにやらせて欲しいね。彼の『武』は、君たちとは全く異なる。かえって足を引つ張りかねない」

「そういうものかしら……」

わからなくもないが、リアスはやや不安だ。

「……確かにあの洞窟から、清爽な力を感じますわね。こんな離れた所にまで届くほどのだから、特訓は順調と見るべきかも知れませんか」

こういう事にはリアスより聡い朱乃が、呟くように言った。

リアスも同様に感じ取っていたが、朱乃の言葉で、改めてそれを実感し、引き下がる事にする。

「連也くんの事、お願いね曹操。何かあったら、すぐに私たちに連絡をちょうだい」

—と言い残して、転移魔法陣を展開して帰っていった。

## 青春試考

夏休みに入ってから一週間が過ぎる頃、僕はイツセーくんと呼ばれて彼の別荘を訪れた。

イツセーくんはここで、連也くんとの決闘に備えて特訓をしている。その最中の呼び出しとなれば、用件は自ずと想像がつく。

「木場。秋月との試合に向けて、ちよつと稽古相手になつてくれねえかな」

別荘のリビングに通された僕に、イツセーくんは予想通りの事を言ってきた。

気持ちを落ち着けるために、僕はレイヴエルが入れてくれたアイスティーを一口飲み、フーツと大きく息を吐いてから、努めて冷静に返事をする。

「それは出来ないな——二つの理由で」

「二つの理由って？」

「まず、連也くんは僕とは全く違うタイプの剣士だ。僕なんかじゃ、妄想秋月連也は務まらないよ——もつと言えば、連也くんの念道はオンリーワン過ぎて、たぶんアーサーやイリナさんどころか、僕の師匠でも無理かも知れない」

「そ、それはさすがに、秋月の野郎を持ち上げ過ぎじゃねえか？」

「僕を含めて、今名前を挙げた人たちに、相手の聖剣の因子や神セイクリッド・ギア器を機能停止させるなんて芸当が出来ると思うかい？」

そう言うと、イツセーくんは黙ってしまった。

「友人としてのせめてもの忠告だけど、単純なパワーやスピードだけで連也くんを押し測っているようなら、君は絶対に彼には勝てないよ。相手を全く見ずに、目をつむったまま戦うようなものだからね」

「……じゃ、じゃあ、もう一つの理由ってのは、何だよ？」

「単純に、僕個人の感情だよ。リアス姉さんからの伝聞でだけど、聞いたよ。連也くんが決闘を挑んだ経緯……」

「うっ……」

僕と目線を合わせて、イツセーくんは小さくうめいて、わずかに身

を仰け反らせた……どうやら僕は、よほど怖い顔をしていたようだ。イツセーくんの後ろでレイヴェルが、ひきつった愛想笑いを浮かべながら、両手で何かを押さえるような仕草を何度も繰り返した。

——ブレーキブレーキ！ 抑えて抑えて！

そう言いたいのだろう。

僕はアイステイーをもう二口飲んだ。

「イツセーくん。君はいつも僕の想像を超える事をしてきたけど、今ほど理解が追い付かなかった事はないよ。よくそんな厚かましい事を頼めたものだね……そもそも君に、ゼノヴィアを侮辱する権利も資格もないんだよ」

「なんでだよ！ 眷属なのに俺以外の男の家に泊まるなんて——」

「そうさせたのは君じゃないか。今年に入ってから、ゼノヴィアに迷惑ばかり掛けている。アーシアに何度叱られてもやめようとしな……ゼノヴィアの気持ちに君から離れるのは、当然の結果だろう？」

もつと言うなら、そもそも去年からしてドライグがカウンセリングを必要とし、ついには一時的な幼児退行を引き起こすほど追い詰められていたのに、言動を改めなかった事にも、僕は憤りに近い感情を抱いている。

イツセーくんの性欲が強敵の撃破や状況の打破に繋がったのは確かだけど、それにしたって彼は自分を省みなさ過ぎだ。

今更だけど、僕があの時点で、殴ってでも言っただけ聞かせるべきだったのかも知れない。リアス姉さんから話を聞いた時、僕は後悔の念と共に、自分の甘さに対する怒りを抱いたものだ。

「しようがないだろ！ 男の性さがなんだよ！ だいたい、松田や元浜と一緒に馬鹿をやるのは今年で最後なんだ。俺たち三人の最後の青春なんだよ！」

「青春、ね……イツセーくん、これも友人としての心からの忠告だ。誰も、青春に背中を向けたまま生きていく事は出来ないよ。いつか、どこかで、その青春に裁かれる日が来るんだ。悪い事は言わないから、二学期からはおとなしくする事だね」

僕はそう言うと、アイステイーを飲み干し、「ごちそうさま」とだけ

言って、別荘を出た。

レイヴェルが玄関まで送ってくれる。

「本日は申し訳ありませんでした、祐斗さん」

レイヴェルのその一言には、呼びつけた事の他に、先程のイツセーくんの発言に対する謝意もあるのだろう。

「……レイヴェル。君も姉さんからの伝聞で経緯は聞いていると思っただけだね」

「もちろんですわ。ですが、私はイツセー様のマネージャーですもの。私情は挟まず粛々と務めを果たすまでです——悪魔らしい利己的な事を言わせていただきますけれど、でないと私の評価に響くかも知れませんので」

「……そう」

生き方は人それぞれだ。その辺については、ああだこうだ口を挟むべきではないだろう。

「それともう一つ……方が一にもイツセー様に死なれては困ります。あれでもまだまだ冥界には必要な方ですから」

僕の耳元で、レイヴェルはそう囁いた。

確かに、今回の一件で連也くんはだいぶ頭に來たようだからね……彼がそんな人間ではないとわかっていても、念道の性質も鑑みれば心配になってしまうのも、わからなくもない。

とにかく、僕は今回、初めてイツセーくんに対して『負けてしまえ』という感情を抱いた。出来ればこれが最後であってほしい……。

レイヴェルに見送られて別荘を出た僕は、気晴らしの散策を兼ねて、山道を歩いて下りていく。

途中で、一台の黒塗りのリムジンとすれ違った。車体にはシトリー家の紋章が描かれている。

リムジンは、その先にはイツセーくんの別荘以外何も無い山道を、静かに上っていった——。



連也の修行内容に、特別なものはない。天然自然と一体化し、念を高め、それをコントロール出来るようにする。何か新しい技を編み出

したりは、しない。そもそも念道の技は全て、日々の修練を通して自ずから生まれるものでしかない。そして先人から受け継いだその技を通して、念の制御を学ぶのだ。

そのために、洞窟に籠り座禅を組んだ。

山野を駆け回った。

曹操を相手に技の練習や型稽古を行った。

グレモリー眷属や生徒会、オカルト研究部の面々が、連也の身を案じて陣中見舞いに訪れたが、曹操が全てシャットアウトしてくれたので、連也は修行に専念出来た。

そうして決闘を三日後に控えたその日の事である。

連也と曹操は下山の支度をしていた。

と言っても、連也の荷物はリュックサックに詰めた着替えと、非常食のチョコレートくらいである。どちらかと言うと、曹操のキャンプ用具の片付けに時間を要した。

テントを畳むのを手伝っていた連也の手が、ふと止まった。

川下の方角の空をじつと見上げる。

曹操がどうしたのだろうかと訝しんで、同じ空を見上げると、翼を広げて、一人の悪魔が飛来してきた。

二人から少し離れた場所に着地したその悪魔は、駒王学園高等部の前生徒会長ソーナ・シトリーだった。

曹操の目が、スウツと細められた。眼差しに、鋼鉄のような暗く冷たい光が宿る。

ソーナの顔を一目見た瞬間に、直感した。この女は、厄介事を運んで来たのだと。

「あ、どーも会長さん。お久しぶりです」

……連也もわからないはずはなかくらうに、呑気な声で挨拶する。

「お久しぶりです、秋月くん。オランダの一件ではお世話になりましたね」

「いやいや、困った時はお互い様ですよ」

「実は——」

「ストップだ」

遮るように、曹操が二人の間に割って入った。

同時に、セイクリッド・ギア 神器 トウル・ロンギヌス 《黄昏の聖槍》を顕現させ、切っ先をソーナの白い喉元に突きつける。

「彼は忙しいんだ。君に構ってる暇はない。一度だけ警告してやる。死にたくなければ、回れ右をして帰れ」

「……………事情は、リアスから聞いています。それを承知の上で、秋月くんにお願ひがあるのです」

「警告はした」

曹操は冷たい声で言い、喉元に突きつけた聖槍を押し込んだ——つもりだった。

しかし、槍は一ミリも動かす事が出来なかった。

見れば連也が曹操の隣に立ち、彼の影を踏んづけている。

「まあまあ、落ち着いて。話だけでも聞いてあげましょう」

連也はのんびりとした声で、言った。

「それで、どうしたんですか？」

ソーナの方に向き直り、尋ねると、ソーナはポロポロと涙をこぼし始めた。

そんな彼女を、連也も曹操も、初めて見る。

「…………ち、父を、助けて、ください」

嗚咽混じりに、ソーナは言った。

『眠りの病』。

悪魔たちはシンプルに、そう呼んでいる。

原因は不明。ある日突然昏睡状態となり、全く目を覚まさなくなる。食事も運動も、魔力の行使すら出来なくなるので、当然肉体は衰弱し、やがて死に至る。治療法もなく、ただ医療機関で人工的に生命を維持する以外に対処方法はない。

ソーナの父が、その『眠りの病』を発症したのだそうだ。まだ初期段階で、完全に昏睡状態となった訳ではないが、それでも明らかに異常なレベルで、睡眠時間が長くなった。

「最初はイツセーくんにお願ひしようと思ったのですが、レイヴェルさんに門前払いされました…………」

「だからと言ってこっちに来られても困る。医者でも悪魔でもない彼に、どうこう出来る問題じゃない」

曹操が吐き捨てるように言った。

彼なりに、ソーナの境遇を可哀想だとは思う。

眷属や家の者を一人も連れずに単独でやって来たのは、人数で圧力を掛けて強要するような真似はしたくないという、彼女なりの誠意なのだろうという事もわかる。

それでも曹操の本音としては、今の言葉が全てだった。

「匙から聞きました……秋月くんは、枯れた花を生き返らせ、壊れた時計も直す力があると……どうかその力で、父を助けてください……」  
「わかりました、案内してください」

連也は、頼んだソーナすらビツクリして一瞬我が耳を疑うくらい、あつさりと承諾した。

「い、いいのですか?」

「ええ。でも、今曹操さんが言ったように、俺は医者でもなけりや悪魔でもない。やれるだけの事はやりますけど、結果は保証出来ません。それでもいいなら」

「あ、ありがとうございます!」

ソーナは何度も何度も、背中が見えるくらい深々とお辞儀をした。曹操は、ただ嘆息するのみである。

ソーナの開いた転移魔法陣で、二人はシトリー家の屋敷に移動した。

ソーナは二人を、父の寝室に案内する。

天蓋付きの大きなベッドで、五十代と思わしき男性が眠っている。

悪魔は魔力を使う事で若さを保つ事が出来るが、ソーナの父ムルマス独自設定。セラフォールの元ネタの名字（ムラサメ、ルカ、マス）を合体。・シトリーは、当主としての威厳を保つため、敢えて外見年齢を五十代に調整してあるのだ。

連也が映画やドラマでしか見た事がない医療機器が、その身体に取り付けられていた。

周囲には医療関係者が数人いてムルマスの様子を観察していたが、ソーナが人払いした。

「んじゃ、早速……人間の俺が触っても大丈夫ですよね？」

「はい。お願いします」

ソーナはまたもや、背中が見えるくらい深々とお辞儀をした。

チームD×Dの一員としてそれなりの修羅場を潜ってきた彼女だが、黙示録トライヘキサの獣との戦いで姉と離れ離れになり、今また父が病魔に侵され、気弱になっているのだろう。

連也は、まずは両手をムルマスの体の表面にかざした。

掌から念を放出し、浸透させ、彼の肉体の状態を調べる。

(何じやこりや)

胸のうちでうめいた。

全身の細胞から感じ取れるはずの生命の圧が、ほとんど感じ取れない。

まるで人の形をした砂の塊に触れているような、奇妙な感覚だ。

(うーん……じゃあ、活力を注いでいけば、目を覚ますかな?)

物は試しだ。

連也は、ムルマスの胸元、心臓部に触れた。

そして念を心臓に注いでいく。破邪の力を抑えた、純粋な生体エネルギーとしての念だ。霊的な力を司る眉間のチャクラを開き、念エネルギーの質をそのように調節して、注入していった。

注入された念は、心臓から血流に乗って、全身を駆け巡っていく。だが、それだけだった。ムルマスの細胞に浸透していく気配がない。

それでも一時間ほど、根気よく続けていくと、かすかだがエネルギーが染み込んでいくのが感じ取れた。

(こりや長丁場になるな……)

そう感じたが、焦りはない。

エネルギーの質の調整を誤ると、治すどころか死なせてしまう。時間を掛けて、ゆっくりやっていくしかない。

三日後の決闘の事も今は頭の隅っこに追いやり、連也は作業に集中

した。

◆ 丸二日間、連也は寝食も忘れて念を浸透させる作業に没頭した。その甲斐あって、ムルマスは目を覚ます。

「不思議だ……こんな清々しい目覚めは初めてだな。それどころか、全身に力がみなぎって……ははは、今なら熾天使セラフですら倒せてしまいそうだな。おっと、さすがに今のは不謹慎だったな」

柄にもなく冗談まで飛ばす父の姿に、ソーナは感極まって、小さな子供のように抱きついて泣き出してしまった。

ひとしきり泣いて落ち着いたソーナから事情を聞いたムルマスは、ベッドから出て、連也と両手で握手を交わした。

「感謝いたします、若きお方。シトリー家の当主としても、ムルマス・シトリー個人としても……お礼に、私に出来る事があれば何でも仰ってください」

「じゃあ、一つだけ……今回の事、一生の秘密にしてください」「秘密に？ 何故です……勲章ものですよ？」

「確証があつてやった訳じゃないですし、本当に俺のやり方が正しかったのかもわかりません。なのに頼りにされても、はつきり言つて困ります。今回は、生徒会長としてお世話になった先輩へのお礼としてやった事なので……」

「むう、しかし……」

「それだけじゃ気が済まないって言うんなら、俺に何か面倒事が起きた時、助けてもらえますか？ その時まで保留という事で」

「ふむ、そう仰るなら、またその時に改めて……」  
ムルマスは納得したようだ。

◆ 連也と曹操はソーナの転移魔法陣で、人間界に戻っていった。

「お人好しもあそこまで行くと、呆れるな」

駒王町に戻り、ラーメン屋でラーメンをすすりながら、曹操は向かいの席の連也を睨んだ。

「怒らないでくださいよ。これも、決闘に備えてのコンディション調

整なんだから」

「どこがだ。俺の目から見ても、明らかに消耗している……今日一日の休息で回復出来るのか？」

「……………」

連也は少し考え込んだ後、ニツコリ笑って、グツとサムズアップをした。

「……それは大丈夫、心配ないという意味か？ ダメっぽいけどまあ何とかなるさという意味か？ 判断に困るリアクションはやめてくれ」

「まあまあ、気にしない気にしない……それに、コンディション調整の一環なのは本当ですよ？ あそこで先輩のお願いを断ったりしたら、心にわだかまりが残って、試合で絶対俺の足を引つ張るだろうし……曹操さんにだから言いますけど……父さんの事、思い出しちゃって……父さんの真似、してみたかっただけです」

「……………そうか」

曹操はそれだけ言って、話を終えた。

過ぎてしまった時間は巻き戻せないのだ。問題は、どうやって連也を回復させるかである。

とは言え、自分の気功術で回復が間に合うか……英雄派の中にも回復系の能力者がいるが、今から彼等を総動員させていては間に合わない。そもそも、こんな個人的な事に協力してくれるかどうか……猫又姉妹の仙術は果たして適用出来るだろうか……。

「曹操さん、そんなに気にしないでください。一から十まで全部俺が、俺の意思で、俺のためにやった事です。確かにちよつと疲れたけど、おかげで修行の成果も確認出来ましたし」

「そう言われてはいそうですかと納得出来る訳ないだろう……だが、もうこれ以上は言うまい。勘定は俺が払っておくから、君は早く帰って休むといい」

「あざっす」

連也は味噌ラーメンの残りを平らげると、店を出ていく。

出入口を潜ったところで、かすかに体勢が揺らいだのを、曹操は見

逃さなかった。

急いで勘定を済ませ、連也を追って店を出るが――、

「馬鹿な……」

連也の姿は、どこにも見当たらなかった。

歩調からして、支払いをしているわずかな時間で見失うはずがない。

(まさか……何者かが彼をさらったのか?)

しかし誰が?

心当たりは兵藤一誠くらいだが、彼には良い意味でも悪い意味でも、試合前に襲撃を掛けるような悪巧みは出来ない。

では、彼のマネージャーのレイヴェル・フェニックスか? やりかねないが、それでは仕える主君たる兵藤一誠の評価を下げる事にも繋がり兼ねないので、彼女も違うだろう。

他に連也を拉致しそうな相手と言えば……、

(まさか、ヴァーリ・ルシファーか?)

◆

「あれ?」

連也は間の抜けた声を上げた。

店を出た瞬間、外の明るさに軽い立ち眩みを起こして、一瞬ふらついたと思ったら、いつの間にか全く別の場所にいたのだ。

ゴツゴツとした岩が周囲に散見される、だだっ広い荒地であった。

空を見上げると、夏の濃い色合いの青空ではなく、ドロドロした紫色だ。

「冥界? なんぞ?」

「俺がここに転移させた」

ゴロゴロとした響きのある声が、何もない空間から聞こえてきた。その声のした辺りの空間が陽炎めいて揺らめき、小型犬ほどの大きさの、一匹のドラゴンが現れる。

「貴様がアキツキレンヤだな」

「アツハイ」

「聞いたぞ。たかが人間の分際で、偉大なる赤龍帝・兵藤一誠に決闘を挑む不屈き者……果たして貴様ごときちっぽけな小僧にその資格があるかどうか、俺が見定めてくれよう！」

「ちっぽけな小僧って、あんた俺よりちっちゃんじゃん」

「そう思うか？ ならばよく見ているがいい！」

小型のドラゴンは言うなり、全身から目映い光を放つ。

その光が爆発的な勢いで膨張していき、消える。

後には、全長十メートルを越す巨大なドラゴンがそびえ立ち、眼を爛々と輝かせて、連也を見下ろしていた。

「我が名はボーヴァ！ 元六大龍王『ブレイズ・ミューティア・ドラゴン魔龍聖』タンニーンが一

子ボーヴァ・タンニーン！ 貴様の首を、赤龍帝への仕官の手土産にしてくれる！」

「さつき資格がどうか言っただけでなかったっけ？」

状況がわかっているのかわかってないのか、呑気にツツコミを入れる連也目掛けて、ボーヴァは口から隕石と見紛う巨大な火の玉を吐き出した。

## 開戦

元ドラゴンにして最上級悪魔に名を連ねる転生悪魔『ブレイズ・ミーティア・ドラゴン魔龍聖』タンニーンには、三人の息子がいる。その三人の息子の末子に当たるのがボーヴァ・タンニーンである。

ドラゴンや悪魔たちから尊敬の対象となつてゐる父兄に対して、ボーヴァは冥界の実力者に片っ端から喧嘩を売り、『破壊のボーヴァ』の渾名で恐れられ、蔑まれてもいる。

しかし彼がいたずらに蛮勇を奮うのは、偉大な父や二人の兄に対するコンプレックスと、自分も彼等のように認められたいという気持ちから来るものであった。

父タンニーンの弟子に当たる兵藤一誠に対して強い憧れを抱いており、彼が上級悪魔に昇格したと遅ればせながら（冥界の僻地で喧嘩とトレーニングに明け暮れて、情報の届くのが遅れたのだ……）聞きつけ、何とか臣下の末席にでも加えてもらおうと掛け合つと、マネージャーを名乗る小娘に門前払いを食わされた。

どうも大事な決闘を控えているらしい。

その決闘相手の事を調べると、人間の少年だった。邪龍戦役を始めとした戦いに全く参加していないようだ。駒王町を襲つたはぐれ悪魔を退治したらしいが、それも悪魔の存在を隠蔽するための、いわばスケープゴート生け贄の山羊にしか過ぎない。

偉大なる赤龍帝に救われた大恩がありながら、不遜にも決闘を挑むちっぽけな人間の小僧。

それがボーヴァの怒りに火を点けた。

そしてその怒りが今、文字通り炎となつて連也に迫る。

秋月連也は、いつの間にかどこからともなく取り出した木刀を上段に構え、振り下ろした。

太刀筋に沿つて空間が歪み、その歪曲空間によつて炎が分散され、少年の左右を通過していく。

（やっべー……）

連也は巨龍の攻撃をしのぎながらも、逆に危機感を覚えた。

練り上げられた『気』が『念』へと昇華されるスピードが、遅い。エネルギー補充のために、正中線上に備わる六つのチャクラを開きたいのだが、チャクラの開く感触が、重い。

念に備わる破邪の力を抑え、より純粋な生命エネルギーに変換して、丸二日間他者の肉体に注ぎ込むという作業は、連也の心身を予想以上に疲弊させているようだ。さっきの防御も、間に合ったのはかなりギリギリのタイミングだった。

「あの一、すいません。明日は大事な用事があつて早く帰らなきゃなので、勝負は明後日以降にしてもらえませんか？」

『その大事な用事というのが赤龍帝との決闘なんだろうが！ 貴様ごときが偉大なる赤龍帝に挑もうなどと無礼千万！ 今の炎を防いだ程度で思い上がるな！』

ボーヴァは怒声を轟かせ、右前足を連也の頭上に振り下ろす。圧倒的なパワーと質量で以て連也を叩き潰すつもりだ。

右前足が地面に叩きつけられ、風圧で土埃が円状に巻き上げられる。

『……？』

ボーヴァは眉根を寄せた。

おかしい。

小僧の華奢でちっぽけな肉体を叩き潰した感触が、ない。

どころか、前足が地面に激突した感触も、ない。

全力で振り下ろしたにも関わらず、まるでゆっくりと真綿の上に置いたかのように、何の手応えもなかった。

恐る恐る前足を上げると、そこには木刀を頭上にかざした連也が、しっかりと自分の足で立っていた。片膝すら、ついていない。

連也は、以前村山と片瀬の木刀を受け止めたように、全身をサスペンションにして攻撃の威力を吸収、体内の気脈を通して素通りさせて、地面に放射したのである。

さすがに、体内を一周させて送り返すまでの余裕はなかった。今ようやく、会陰と丹田に宿る、物理的な力を司る二つのチャクラが開放されたところである。

次はヘソ・鳩尾・喉に宿る、感情的な力を司る三つのチャクラだ。しかしこれも重い。少しずつしか、開かれていく感じがしない。

『おのれ、小僧があー!』

ボーヴァが、固めた左右の拳を連続で振り下ろす。

連也、これを木刀『飛龍』で受け止め、そのまま受け流す。

空爆を思わせる、超重量級の連打を捌きつつ、辺りを見渡した。

岩があちこちに散見されるものの、どれも隠れ場所には向かない。

何せ相手は全長十メートルの巨大ドラゴンだ。上から見渡せば、簡単に見付けられるだろう。

可能ならどこかに身を潜め、瞑想して、チャクラ開放に全神経を集中させたいところだが、それは無理なようだ。念の消耗を最小限に抑えながら攻撃をいなし、並行して周囲の岩や大地から吸収した『気』を『念』に昇華させ、充填していく。そうして溜まった念で、チャクラ開放を促進する。その作戦で行こうと連也は考えた。宇宙の理力を取り込めば、念の充填は短時間で終わるが、そのための吸収口たるチャクラが開かない事には、どうにもならないのだ。

ボーヴァは咆哮を上げながら、拳と蹴りを高速で繰り返して来る。一撃一撃がミサイルを思わせる勢いだ。

だが、ボーヴァ自身が敵意と闘志を剥き出しにしているせいか、動きの一つ一つに、明確な『圧』がある。それを感知すれば、速度差を補うには充分だった。

連也は真っ正面から飛んでくる左の超低空アツパーカットを木刀で払い上げる。ボーヴァの左拳が弧を描き、ボーヴァ自身の顔面にめり込んだ。

『小賢しいっ!』

ボーヴァは鼻血と涙を流しつつ、蹴りを放つ。

連也、これをバックステップでかわす。

ここでボーヴァ、蹴り足を振り抜いた勢いそのままに回転し、尻尾を槍のように真っ直ぐに繰り出した!

ボーヴァの尻尾は、頑丈な鱗に覆われてこそいるが、鋭く尖ってる訳でも、爪やトゲなどが生えている訳でもない。

だが尻尾での攻撃と言えば、たとえドラゴンであろうとも、ワニがするように薙ぎ払う動きしか出来ない。今の連也との体格差なら、頭上から振り下ろす事も出来ようが、いずれにせよ振り回す動きになる。

そこへ意表を突く、尻尾での突きである。

ボーヴァが今までの喧嘩の経験から編み出した戦法であった。

巨龍の尻尾が、城門をぶち破る破城槌めいて連也に迫る。

連也、木刀を正面に立てて、真つ正面から迫る尻尾を受け流す。

凄まじい風圧が、少年の肉体をぶつ叩いた。

更にボーヴァは、もう一度口を開いて、火炎放射の準備を始める。

「えやあつー」

連也は頭上遙か十メートル先にあるその口目掛けて、地上から木刀での片手突きを放つ。

その際、手首を捻るような動きも加えた。

周囲の岩や大地から取り込んだ『気』と、開放された二つのチャクラから取り込んだ理力から練り上げた『念』が、その捻り突きによって生まれた運動エネルギーを増幅させていき、螺旋回転する衝撃波を発生させた。

それは細身でありながらも猛烈な竜巻となつて、ボーヴァの口を直撃し、今まさに吐き出そうとした炎を暴発させる。

逆流した炎で喉や肺を焼かれて、ボーヴァは咳き込みながら倒れた。

連也は、木刀『飛龍』を正眼に構える。

今ようやく、中位の三つのチャクラが開いた。

後は眉間に備わる、霊的な力を司るチャクラだ。

『ぐうう……ま、まだまだあ……い！』

ボーヴァは口から煙を上げながら、立ち上がった。

血走った眼で、連也を睨み付ける。

『貴様……』と遅れを取っては、赤龍帝の牙になるなど夢もまた夢……断じて負けられぬ！』

咆哮を上げ、眼下の連也目掛けて、再びパンチとキックの空爆を浴

びせてくる。

連也の胸中に、もはや最初の不安や危機感はなかった。開放された五つのチャクラから吸入される宇宙の理力が、肉体に浸透していくのがわかる。

それを『念』へと昇華させ、眉間に集中させる。

未だ普段のペースとは言い難いが、それでも眉間のチャクラは、最初よりも軽い動きで、速やかに開き始めた。

頭上から隕石めいてボーヴァの拳が飛んでくる。

木刀で受け止め、拳の衝撃を、体内を一周させて木刀から放出する。木霊返し。

連也がそう名付けた防御技。

ボーヴァは自身の放った拳の衝撃を跳ね返されて、ロケットめいて空高く巨体を舞い上がらせた。

『お、おのれええええっ！』

ボーヴァは翼をはためかせて、更に高く上昇した。

高度百メートル。

地上の連也が豆粒ほどにも見える。

ボーヴァは大きく口を開けた。

己れの肉体すら焼き尽くしかねないほどの火力を、一点に集めて、火の玉を形成する。

彼の父タンニーンブレスの炎の息は、隕石の衝突を思わせる威力であり、故に燃え盛る流星ブレイズ・ミーティアの異名で呼ばれている。

その息子たる彼もまた、その真骨頂は口から吐き出す絶大な火炎にある。

もはやボーヴァは、赤龍帝に仕官するという目的すらかなぐり捨てた。

相手が父や兄たちなら、負けてもしようがない。

赤龍帝や白龍皇でも同様だ。

チームD×Dに所属する、一流の戦士たち相手でもそうだ。

だが、こいつは違う。

赤龍帝に守られる、ちっぽけで非力な存在の一人でしかない。

そんな小僧の、妖しげな剣法ごときに、負ける訳にはいかないのだ。ボーヴァは今、目の前の勝利のために、それ以外の全てを投げ捨てた。

この一撃で自分自身が燃え尽きても、それでもあの小僧を倒す。あの小僧に勝つ。

俺はタンニーンの息子なのだ。破壊のボーヴァなのだ。ただ人間ごときに負けたとあっては、その名が廃る！

ボーヴァは必死必勝の想いを込めて、最大火力の炎を吐いた。

その超高熱の炎は、もはや閃光。

熱波と衝撃で、牙や口周りの鱗が溶けて、吹き飛んでいく。

舌は半ば炭化して、喉も真っ赤に溶けた鉄を流し込まれてるかのよう<sub>う</sub>に熱い。

渾身の一撃は、父の吐く炎にも迫る威力を秘めていた。

その時、連也は眉間のチャクラを開放し終えていた。

眉間から白い光輪を輝かせ、上空から迫る超高熱線を木刀で受け止める。

——おお、何と！

ボーヴァの炎は、まるでそこが出入口であるかのように、木刀に吸い込まれていく！

「念道剣——」

木刀『飛龍』は、ボーヴァが死力を尽くして吐きつけた炎を全て吸収し尽くし、更に連也の念も流し込まれて、白い光輝の剣と化した。

「波濤返し——」

連也はその輝きを、遙か上空のボーヴァ目掛けて振り抜いた。

白光がほとぼしり、巨大な熱線となってボーヴァに迫る。

ボーヴァには、これをおろそかにするだけの余力は残ってなかった。

閃光が巨体を呑み込む。

焼け爛れた全身から煙を上げながら、ボーヴァは地面へと落下していった。

ズドオオオオオン……！

轟音が響き、土煙が上がる。

ボーヴァは……倒れ伏してはいるが、生きていた。連也の放った攻撃は範囲を広げた分、熱量が拡散されて、ボーヴァが耐えられるギリギリのレベルにまで落ちていたのだ。

だが、もはや戦う力は、残されてはいない。

自身の炎の熱で、内臓のいくつかも火傷を負っている。特に火炎放射に使用する器官のダメージが大きい。しばらくは、ライターの炎程度に火すら吐けないだろう。

(……まで……か……)

何より、決死の想いで放った炎を跳ね返されて、ボーヴァの闘志が完全に挫けていた。

(まあ……こんなものだな……)

しよせん自分は、器ではなかったのだ。

父や兄たちに負けぬ、いや、それ以上の立派なドラゴンになりたかった。

だが、そのために取った手段は、暴れる事だった。強い奴がいれば片っ端から喧嘩を売り、片っ端から叩きのめして来た。

そうやって力を振りかざす生き方ばかりしていけば、いつかより大きな力で叩きのめされる。

因果応報——そんな人間界の言葉が、脳裏をよぎった。

だが、考えようによつては、そう悪いオチでもあるまい。自分の生き方のツケを自分で払っただけ。父や兄たちに迷惑を掛ける事を思えば、この場で無様に死んでいけるだけ、まだ幸運なのかも知れない。

強がりでも何でもなく、そう思った。

ボーヴァの視界に、連也の姿が映った。

——俺の負けだ、殺せ。

という言葉をも、ボーヴァはグツと飲み込んだ。生殺与奪の権限は、勝者にこそある。勝者の意思に肅々と従うのが、敗者の礼儀だ。

ボーヴァは、ゆっくりと目を閉じた。

連也はどうしたか。

少年は、自分の背丈をも越える直径の巨龍の首筋に木刀『飛龍』をあてがい、

「えやあつー！」

と、気合いを放つ。

ボーヴァは、体内を春風が駆け抜けていくような、不思議な感覚に見舞われた。

げほつ。

大きく一度だけ咳き込むと、喉の焼けつく感じが、なくなった。

全身の痛みも消えている。

完全回復とまではいかないが、それでも身体がとても楽になった。

「お相手、ありがとうございます」

連也は木刀を左手の中にしまい、ペコリとお辞儀をする。

『……俺を、助けたのか?』

「応急処置ですけどね」

『何故だ……俺は、お前をさらって、殺そうとしたのだぞ?』

「んー……」

連也は頭をガシガシと搔いた。

「上手く言えないんですけど……何てゆーか……あなたと戦った事で、ちよつと自信がついた気がするんです。人間、どんなにへ口へ口になっても、最後まで諦めずに頑張れば何とかなるもんだな〜って」

『それだけの理由で、俺を助けたのか?』

「いえ、もう一つ……戦う前に、『たんにーん』の一子とか言ってたでしょ? その『たんにーん』ってのが、あなたのお父さんだかお母さんだかなんですよね?」

『父だ』

「息子がこんな寂しい所で死んだら、そのお父さんも悲しむだろうなって思っつて。それだけです」

連也はそう言うのと、はあくつと大きく息を吐き、座り込んだ。

「あー、めつちや疲れた……すいません、ちよつと失礼します」

そう言っつてボーヴァの首筋にもたれかかり、

「あつツツ!!」

まだ熱を持っている鱗に触れた自分の首筋を押さえて、転げ回る。

『……はは』

ボーヴァは、力なく笑った。

『おかしな奴だな、お前は』

呟く声は、とても柔らかく、優しい。

自分を殺そうとした敵すら救う『ちっぽけな小僧』が、とても大きく見えた——などという事は、全くない。大きくも見えないが、小さくも見えない。どこまでも、ありのままだ。

ボーヴァは今、これまでに感じた事のない、妙に安らかで落ち着いた気持ちになっていた。

そこへ、二人から少し離れた場所に、転移魔法陣が展開される。

そこから閃光が溢れて、複数の人物が転送されてきた。

ルフエイ。

曹操。

リアス。

朱乃。

ロスヴァイセ。

アーシア。

黒歌。

そして、ゼノヴィア。

地面に座り込んで、指で首筋に唾液を塗りたくっている連也の元へ駆け寄り、口々にその身を氣遣った。

曹操から連絡を受けたリアスは、腹心の朱乃と、魔法に精通したルフエイとロスヴァイセ、救護役にアーシアを連れて現場に駆け付けた。

ゼノヴィアと黒歌も、彼女たちの慌ただしい動きから、すわ連也に危機が迫っているのかと察して同行した。

そしてルフエイとロスヴァイセが、現場に残された転移術式の痕跡を発見、解析し、更に逆探知までして、ここにやって来たという次第である。

「——あら、誰かと思ったらボーヴァ・タンニンじゃない。男前になっただからわからなかったわ」

リアスがボーヴァに、鋼鉄のような暗く冷たい眼差しを向ける。

「あらあらウッフ。せつかくですから、もつと男前にしてあげませんとねえ」

朱乃の朗らかな笑顔は、まるで仮面のように冷たかった。

ボーヴァもさすがに危機感を覚える。今のこの二人なら、たとえさつきまでの瀕死の状態の自分であろうと、花を摘むような感覚で拷問に掛けるだろう。

他の連中も大なり小なり、自分に対して敵意の眼差しを向けている。

「アルジエントさん。俺は大丈夫だからボーヴァさん治してやってよ。身体の外も中も、あっちこっち大火傷してるからさ」

連也がアーシアにそう頼む声で、全員が一斉に、弾かれたように彼の方を向いた。

「い、いいのか連也……こいつが、消耗した状態の君をさらったのではないのか?」

「そうよダーリン。ここで消しといた方が、後腐れなくていいわよ?」

「いや、死なれちゃ俺の気分が悪いんで」

「……わかりました」  
アーシアは小さく溜め息をつくとき、ボーヴァのそばに歩み寄り、手をかざす。

白いたおやかな手に一対の指輪が顕現して、緑色の光を放つ。

光はどんどん広がってボーヴァの全身を包むと、火傷を瞬く間に癒していく。

『す、すまぬ……』

「……連也さんの頼みですから。それに、あなたのお父様には何度も助けられました。そのご恩返しです……あなたの身に何かあれば、お父様も悲しむでしょうから……」

アーシアは、そう言った。

連也はボーヴァの怪我が治っていくのを見届けると、地面に大の字に寝転がり、すぐに寝息を立て始めた。

◆ 目を覚ますと、兵藤邸の一室だった。

窓からカーテン越しに朝日が差し込み、室内をうつすらと照らしている。

あの後リアス・グレモリーによってここに運ばれたのだろう。

そう推測しながら身を起こした連也は、自分が何故かパンツ一丁である事に気付いた。

だがそれ以上に、自分の周りを見て、心臓を鷲掴みされたような気分になった。

何故か同じベッドに、黒歌が寝ていた。

彼女の妹の塔城小猫も寝ていた。

ゼノヴィアも寝ていた。

そして、何故か三人が三人とも、全裸なのである。

全裸なのである。

「うくん……」

やがてゼノヴィアが目を覚ました。

「あ、ダーリン起きたあ?」

「おはようございます、連也先輩」

猫又姉妹も起き上がる。

小猫はいそいそと、サイドテーブルの上に畳んで置いてあった寝間着を身に付けたが、他の二人は白い裸身を平然とさらけ出したまま、左右から連也の顔を覗き込む。

「うくん、まだちよつと顔色悪いかニヤ〜」

「気分はどうだ、連也」

「……東尋坊でロープレスバンジーしたい気分だ」

「むう、言葉の意味はよくわからんが、冗談を言えるくらいなら大丈夫か」

「それじゃお姉さんが念のために身体検査してあげるわね〜」

ニマツと笑った黒歌が、連也のトランクスの中に手を入れようとした時、衣服を身に付けた小猫が姉を後ろから羽交い締めをして天井高く投げ上げた。

小猫はそれを追ってジャンプ。

空中で、上下逆さになった黒歌の首を肩に乗せ、両足首を掴んだ。

更に肩でロックした首を両足での三角締めでホールドしたまま、床の上に着地した。

小猫秘伝の百八つの完猫技かんびょうわざの一つ『アルティメット・キャット・バスター』であった。

「し、白音しろね……お姉ちゃんはもつと労つて……」

「だったら、もつと労られる言動を心掛けてください」

そう言い捨てた小猫は、ついでに口から泡を吹いて気絶した姉をポイツと部屋の隅っこに投げ捨てた。

「……と、塔城さん……いったい全体、何がどーなつてんスか……」

余りに物凄**い**必殺技を目の当たりにした連也は、下級生相手にも関わらず敬語を使ってしまう。

「かくかくしかじか」

「まるまるうまうまという訳か……かえつて寿命が縮んだ気分だ……」

とりあえず、自分が彼女たちに何かした訳ではないとわかって、連也は安堵の溜め息をついた。

読者の皆さんには、これだけではわからないだろう。僭越ながら説明させていただく。

リアスは連也を兵藤邸に運び、そこで休ませる事にしたが、問題は連也の消耗した念を、明日の決闘までにどうやって回復させるかだった。

フェニックスの涙のストックがあつたので使ってみたが、連也の念が回復する気配はない。

「ダーリンの念は特殊過ぎて、もうこんなのぶっかけたくらいじゃ意味ないのかもね」

とは黒歌の言である。

そしてその黒歌の発案で、仙術を使って、一晚掛けて連也の肉体に気を注ぎ込むという処置を取る事にした。

効率を高めるため、肌と肌を直に触れ合わせる必要がある。だから彼女たちは全裸だったし、連也はパンツ一丁に剥かれていたのである。

小猫も以前命を助けられたお礼として、それに参加した。

ゼノヴィアも加わっていたのは、何か手伝える事はないかと申し出た際に、

「じゃあアンタ、バッテリーになって」

と黒歌から言われた。つまり猫又姉妹の仙術で、姉妹のみならずゼノヴィアの気も注ぎ込もうという訳だ。

そうして連也は、以前にも増して最悪の朝を迎えたのである。

小猫が連也の背後に回り、両手を背中に当てる。

「……二人分の気を注ぎ込んだのに、あまり回復してませんね」

口調こそ静かだが、頭の上からピヨコンと可愛らしく飛び出た猫耳は、悲しげに寝ている。

「あー、たぶん『気』から『念』に相転移する時に量が減っちゃうんじゃない？ 気100ポイントで念10ポイントみたいな」

「ソシャゲのアイテム交換みたいな言い方やめてください……まあ事実だからしょうがないけど」

平然と復活した黒歌に言いながら、連也は服を着る。山籠りの間中着ていたジャージやシャツは洗濯され、アイロンも掛けられていた。

一誠の母の静江が、事情がわからぬなりにやってくれたのである。

壁時計に目をやると、もう朝の十時半だった。

「試合って何時からだったっけ？」

三日前にリアスから伝えられていたが、連也はそれでも聞いた。

小猫が答える。

「十一時です」

「……場所はどこだったっけ」

「グレモリー家が用意した、レーティングゲーム用のバトルフィールドです。転移魔法陣でリアス姉様を送ってくれますので、慌てなくても大丈夫ですよ」

後輩の答えに、連也は再び安堵の息を漏らす。

「……やはり、今からでも延期させるべきだ」

ゼノヴィアが言った。

「連也はまだ万全ではない。消耗した理由も、ソーナ前会長のお父上

を救うためだったそうじゃないか。理由としては充分だろう」

「そうも行かないだろ。自分から誘つといてドタキャンとか、格好悪すぎるよ」

「だが、連也……」

「何より、そんな事したら、俺の心に甘えが生じる。例えば明日に延期してくれって言つてそれが通つても、明日になったら『やっぱ来週くらいに延期してもらえば良かったかな』とか思うに決まってるんだ。そうならもうおしまいだよ。決闘がいつになろうが、俺の心に生じた甘えは絶対俺の足を引つ張る。だから、今日アイツと戦う」

「……………」

ゼノヴィアが今にも泣きそうな顔で、全裸のまま、連也に抱きついた。

「すまない連也……私のために……」

「違うよゼノヴィア。俺は、俺のために戦うんだ。今までもそうだったし、これからもそうする」

連也は優しく、自分の肩に顔をうずめて震えるゼノヴィアの背中を、さすってやった。



サイラオーグ・バルには、実はちよつとした悩みがある。本人自身『悩み』と表現するのが憚られるほどの、些細な事だ。

周囲の悪魔との間に、時々考え方や価値観において『ズレ』を感じるのである。

滅びの魔力はおろか、悪魔として十分な魔力量すら持たず、ただひたすらに肉体を鍛え続けて来た自分と、生まれながら有する魔力で様々な事が出来る他の悪魔たちとは、考え方や感じ方が違うのは仕方がない。だからそんな時はただ『そういうもの』としてありのまま受け止める事になっている。そして必要があれば、話し合いを通して擦り合わせも行う。

しかし、今回の兵藤一誠の気持ちは、さっぱり理解出来なかった。

彼から秋月連也との決闘の審判役を頼まれたサイラオーグは、連也の方から挑んできたとだけ聞かされて不思議に思い、リアスに詳しい

経緯を聞いたのである。

正直に言つて、何故兵藤一誠がゼノヴィア・クアルタを罵倒したのか、その気持ちが本当に理解出来なかった。

彼女は単に、兵藤一誠とは違った魅力を秋月連也に感じているだけではないか。

従姉妹のリアスも、そこは同様だった。

そしてリアスが秋月連也を弟のように思っているのと同様に、ゼノヴィア・クアルタも単に友情を抱いているだけではないか。

仮に恋愛感情だったとしても、単に秋月連也を第二の夫と定めているだけではないか。

自分との関係が消えるのを恐れているのだろうか？　しかしリアスの話だと、学園生活においてゼノヴィア・クアルタに迷惑ばかり掛けているらしい。ならば彼女の気持ちが離れていくのは当然だし、それが嫌なら行いを改めて関係を再構築していけば良いだけではないか。時間はたつぷりと——それこそ半永久的に——あるのだから。

まあ、それはそれとして。

秋月連也がどのように兵藤一誠と戦うのか。

兵藤一誠がどのように秋月連也と戦うのか。

その点については、深い興味がある。

故に、審判役を引き受けたのである。

自分はともかく母まで侮辱され、それでも力がなかったが故に言い返す事すら出来なかった悔しさを知るサイラオーグとしては、ゼノヴィア・クアルタの名誉のために戦わんとする秋月連也を応援したい気持ちがある。

その気持ちを胸の奥底にしまい、彼は厳正に審判役を務めようと己れに言い聞かせた。

時間になった。

グレモリー領内にある未開発の平原を模した、レーティングゲーム用の異空間。

そこに立つのは三人だけ。

秋月連也。

兵藤一誠。

サイラオーグ・バアル。

「ルールは簡単だ、『一対一で戦う事』。時間は無制限。フェニックスの涙の使用はなし。バトルフィールドはこの平原。どちらかが戦闘不能になってフィールド外へ転送された時点で決着とする。ここは外界から隔離されているので、場外負けは物理的に不可能だから心配はいらん……広さ的にもな」

サイラオーグは四方を見渡して、そう付け加えた。フィールドは一キロ四方の広大な空間なのである。

「では両者、悔いのないよう存分に戦え。俺が見届けてやる！」

言い終えると、サイラオーグの足下に転移魔法陣が展開され、彼はフィールド外へ転送された。

審判への流れ弾を危ぶむ一誠からの提案で、フィールドの外から審判してもらう事になっている。何か不正が行われれば、そのプレイヤーを即座に強制リタイアさせる装置が、彼に与えられていた。

そして、サイラオーグの転移が、試合開始の合図となった。連也は小さく頭を下げて、礼をした。

その隙に一誠は、翼を広げて距離を取りながら、《ブリステッド・ギア赤龍帝の籠手》を顕現させる。まずは真・女王カーディナル・クリムゾンの赫龍帝へ昇格するつもりだ。そのための呪文の詠唱も開始する。

「我、目覚めるは、王の真理を天に掲げし赤龍帝なり」

『相棒、もっと距離を取れ。何かやらかす気だぞ』

籠手の中から、ドライグが警告する。

見れば連也はどこからともなく木刀を取り出し、切っ先で正面の空間に輪を描く。

一誠は更に連也から距離を取り、念のために上空に舞い上がった。

全身から真紅の光を放ちながら、次の一節を唱える。

「無限の希望と不滅の夢を抱いて、王道を往く」

そして続く一節を唱えようとした時、連也は虚空に描いた輪の中に、『飛龍』を突き入れた！

「がつ!？」





## 連也 V S 赤龍帝

通常の五倍以上にまで膨れ上がった巨大な腕が、破城槌めいて連也のどてっ腹に突き刺さった。

連也は巨拳の衝撃を、体内の気脈を通して一周させ、被弾箇所から放出しようとする。

しかし一誠、すかさず肘の撃鉄を稼働させた。その衝撃が、最初に打ち込まれたパンチの衝撃とぶつかり合う。

連也は、体内で爆発が起こるのを感じた。

その爆発の衝撃をとっさに背中から解放したため、着ていたシャツが千々に千切れて吹き飛んだ。

本来なら拳が当たった瞬間に撃鉄を打ち込む事で、パンチの威力を高めるソリッド・インパクト。

しかし一誠は、撃鉄を打ち込むタイミングをわずかにずらす事で、木霊返<sup>こだま</sup>しで送り返された衝撃を相殺したのだ。

腹部にめり込んだ拳が薄皮一枚ほども離れない間の、刹那の攻防である。

自分の読みが当たっていた事を確信した一誠は、迷わず左のソリッド・インパクトを連也の脇腹に放つ。

まともにくらった連也はまるでサッカーボールのように軽々と吹き飛び——二十メートルほど先で、クルリと宙返りして難なく着地した。くらったのではなく、パンチの勢いに乗って自ら跳んだのだ。

「逃がすかよー！」

一誠は追って駆け出す。

『ウエルシュ・ドラゴニック・ルーク龍剛』の戦車』は攻撃力と防御力を重視し過ぎて、機動力が低くなっているが、全く動けない訳でもない。

連也は連也で、遠距離攻撃が出来なくてもないが、これまでの戦いで決め技は全て木刀での直接打撃である。アウトレンジを保ったままの戦いはやるまい。

ならば無理に『ウエルシュ・ソニックブースト・ナイト龍星』の騎士』にモードチェンジして体力を消耗するより、このまま行った方が良かろうとの判断だった。

連也は犀のように突進してくる一誠目掛けて、木刀を振るう。念が光の刃となって飛翔するが、通常以上の分厚さになった今の一誠の装甲を切り裂くには至らなかった。

次いで連也、何を思ったか地面に伸びる己れの影に、木刀を突き立てた。そしてそのまま振り抜くと、連也の影の一部が矢の形を取り、地を走った。

影の矢が一誠の影に重なった瞬間、一誠は不可視の力で足が動かなくなり、バランスを崩す。

連也、『縮地』で間合いを詰めて、八双からの打ち下ろし！

一誠、巨大化した籠手でこれを受け止めた。

籠手の中に充満する莫大な量のオーラが、念の浸透を妨げる。

動きが止まった一瞬の隙を突き、一誠は巨拳で反撃。

連也、迫る巨拳を蹴って宙を舞い、回避した。

「クソッ、当たったはずなのに当たった感触がねえ……！」

一誠は歯噛みした。飛んでいる羽虫を掴み捕ろうとして逃げられるのに似た気分である。

相手は木場と同じテクニクタイプだが、それでも防御手段など無きに等しい生身の人間。一発当たれば簡単に終わるはずだ。しかしその一発が当たらない——否、当たりはしているが、刺さらない。

『だが相手の攻撃を跳ね返す《化勁》<sup>かけい</sup>とやらは、ソリッド・インパクトで対処可能なのはハッキリした。向こうもそれを警戒して、おいそれとは使えない。とは言え、コンボでの使用は控えた方がいい。戦車<sup>戦車</sup>にならねばソリッド・インパクトが使えないと知られば、付け入る隙を与える事になる。せつかく他にも色々カードがあるのだ。それをバンバン使って、能力を把握される前に倒すべきだ』

「おうー」

一誠は威勢良く答えた。

「今度はこいつだ！ モードチェンジ！ 『龍星の騎士』お！」

鎧が光を放ち、変化する。

アルマジロや犀を思わせた重厚なフォームから一転、細身で凹凸の少ないスマートなフォームに変わる。しかし推進器官の数は倍増し

ていた。速度重視の『龍星の騎士』は、ここから更にスピードを上げる手段がある。

「装甲パージー！」

全身の各部から、防御のための厚い装甲が弾けるように外されていく。

身を守ると言うより、身を包むだけの最低限の装甲のみを残した一誠が、背部の倍増された推進器官から噴炎を上げたかと思うと、連也の視界から消えた。

同時に、その背後に現れる。

だが、それよりも更に一瞬早く、連也は後ろを振り向き様に、木刀を横一文字に振り抜いた！

「うおっ!？」

一誠が驚く。

攻撃のために移動と同時に籠手から出していた聖剣アスカロンと木刀がぶつかり合う。

聖剣の聖なるオーラと連也の念がぶつかり合い、爆発にも似た衝撃波を発生させる。

一誠は追い打ちを恐れて、すぐに距離を取った。

「ど、どーなってるんだ!? アイツ、俺の神速を見切れるのか!? 動体視力どんだけだよ！」

『いや、違うな。奴は事前にこちらの動きを予測している』

「それにしたって、間に合うはずねえだろ！ 自分で言うのもなんだけど、来るとわかっててもかわせねえスピードだぞ！」

『だが、装甲を排除する分、動き出すのにワントンポ遅れる。そして奴は、相手の構えや姿勢などから次の動きを予測出来る。サイラオーグ・バアルとの試合でもそうだっただろう？ トップスピードの差など、充分補える』

「騎士もダメって事か……ならこいつだ！ モードチェンジ！  
『龍牙の僧侶』！」

一誠は上空高く舞い上がりながら、鎧を再度変型させた。

大きなバツクパツクから肩越しに前方へと伸びた、二本の砲身を有

する姿だ。

「ゴイツで消し飛べ！ ドラゴンブラスタアアアアアアアツツ!!」

砲身から、圧縮された龍のオーラが熱線となって発射される。

左右同時にはなく、タイミングをずらす。まずは右側から、次いで左側を。

連也が一発目を避けようとしたら、その避けた先に二発目が飛んでくるといふ算段だった。

しかし連也は木刀で虚空を薙ぎ、太刀筋にそって歪曲空間を生み出す。

ドラゴンブラスターの一発目が歪曲空間によって軌道を逸らされ、後から飛んできた二発目とぶつかり合って、相殺された。

「だったら、これならどうだあー！」

一誠は再度オーラをチャージ、今度は二発同時に撃つ。

放たれた二本のブラスターが絡まり合い、融合し、一匹の光の龍となって、連也に襲い掛かる。相手の防御の上から叩き潰す、フルパワーの砲撃である。

連也は呼吸を整え、木刀『飛龍』を霞に構えた。

眉間のチャクラを開放し、吸収した宇宙の理力を念へと昇華させ、『飛龍』に流し込む。

木刀が白い光輝を放ち始めた。

一誠の放った光ドラゴンブラスターの龍が、口を開けて迫る。連也は両の眼で、龍を象る光波を見据えて、その開かれた口に木刀を突き入れた。

「えやあつー！」

そして気合い一閃、念を解き放つと、熱線は内側から爆発、雲散霧消する。

ふーっ……！

連也は、大きく息をついた。

(あつぶねー……)

何とか念の消耗を抑えつつ、対処出来た。

二つの熱線が絡み合い、融合して生まれた砲撃だが、その寧猛なエネルギーの流れの中に、『圧』の弱い部分を見出させたからこそ出来た

事である。

(さて、どーしたもんかな……)

ここまで、何とか有効打をもらわずにいるが、逆にこちらも有効打を与えられてない。

さつき打ち込んだ時の感触からして、鎧の内側に充満したオーラだけでなく、鎧その物がオーラを物質化させた物らしく、どうも念が上手い事浸透してくれない。

念とオーラ。

人間と龍。

違いはあれど、結局のところ生物に宿る生体エネルギーである事には変わりはない。防ぐ事は決して不可能ではないのだろう。

何より、総量が文字通り桁違いだ。いかに念が万能の力であっても、やはりある程度の量は必要となってくる。

(じっくりやりたいところなんだけどなー……)

念の消耗を最小限に抑えながら、兵藤一誠の攻撃を捌き、それと並行して念の充填も行う。

そして相手が消耗し、逆にこちらの念の総量が必要分溜まったら反撃に出る。

そういう作戦でいくつもりだったが、問題がある。

果たして、どこまで念の消耗を抑えられるか。

果たして、どこまで念を充填出来るか。

水輪みなわくぐりを応用して、最初にやろうとしていたパワーアップ変身

(仮定)を封じたはいいが、あれも念の消耗を抑えるため、効果は『その時やろうとしていた事を思い出せなくさせるだけ』なのだ。効果も、いつまで続く事やら……。

そのパワーアップ変身や、今見せた三段変身以外にもまだ切り札があった場合、さすがに不利になる。

何よりも、このフィールドがいけない。

どういう理屈でそうなるのかはわからないが、ここはあくまでも冥界の土地を模して造られた疑似空間。極論すれば、微生物一つ存在しない真っ白な部屋に、超高画質の風景写真を壁紙として貼り付け

てあるようなものだ。自然の気が——ボーヴァと戦ったあの荒野にすらあつた自然の生命力が——全く感じられない。

チャクラコントロールだけで、エネルギーの消費と補充を同時にやらねばならないのだ。

三步進んでは二歩下がるような戦いとなる。

だが、やるしかない。

連也は木刀を正眼に構え、上空の一誠を見据えた。

◆

グレモリー領内の大きな湖の畔ほとりに建てられた城館。

その広い一室に、グレモリー、シトリー両眷属が集まっていた。眷属ではない生徒会やオカルト研究部メンバーもいる。

壁に設置された大型モニタ―に、連也と一誠の戦いが映し出されており、彼等はそれを観戦していた。

ソーナは今にもぶっ倒れそうな青ざめた顔をしている。自分のせいで連也に不利な戦いを強いてしまった事を気に病んでいるのだ。

リアスはそのソーナから離れた席に座っていた。

ソーナに対して相反する感情が渦巻いていた。

自分も彼女と同じ立場なら、やはりなりふり構わず連也にすがつただろう。だから責めるつもりはないが、それとは別に、やはり怒りのようなものが胸中に渦巻いているのだ。

その気持ちを紛らわすように、視線を曹操へ向けた。

「曹操。あなたは どう見てるの?」

「まあまあかな」

「まあまあつて?」

「お互い有効打を入れられてないが、流れとしては秋月連也に分がある、俺は見ている」

「どういふこと?」

「ここまでの流れは、兵藤一誠にとってはたぶん初めての経験だろうからね——格下と思っている相手に攻撃が通らないというのは」

その通りだろうと、リアスだけでなく、その場にいる誰もが思った。一誠の攻撃が効かない相手というのは、大抵彼より格上の者たちだっ

た。

連也は、いかに技に秀でていようと生身の人間。彼の振るう念道も、規格外の破壊力や防御力を有するものではない。

「恐らく兵藤一誠は、一発当てればそれで片が付くと思っていただろう。それが当たらない。当たってもダメメーヅが通らない。焦りから隙を見せるようになれば、秋月連也にも勝機はある——たぶんね」

「たぶん？」

「土壇場で訳のわからないトンチキな奇跡を引き起こすのは、彼の十八番おはしだからね——いや、本当に京都でのあれは、今でもちよつと理解が追いつかないよ」

「それは忘れなさい」

恥ずかしい記憶を呼び起こされて、リアスは凄味のある声色で言った。

ゼノヴィアはそんなやり取りなど目もくれず、モニターを食い入るように見詰めている。

いつそ自分が連也に加勢したい気分だった。一誠の攻撃には、殺意がありすぎる。ソリッド・インパクトもドラゴンブラスターも、生身の人間に使って良い威力ではないのだ。

(連也……死ななくてくれ……負けてもいい、どうか死ななくてくれ……)

ただひたすら、それだけを祈る。

左右に座っていたイリナとアーシアが、その手を握って、無言でゼノヴィアを慰めた。

◆  
フィールド内に爆発音が断続的に響き、地面からはいくつもの火柱が上がる。

一誠が上空から、ドラゴンブラスターを撃ちまくっていた。

一発ごとにチャージは必要だが、左右の砲身から交互に発射する事で、タイムラグを縮めているのだ。

連也は空から降り注ぐ熱線の雨を掻い潜り、回避出来そうにないものだけ歪曲空間の盾で受け流す。

『——相棒。奴はどうも本調子とは言えんようだ』

「やっぱりか？」

『ああ。さつき使った遠くから記憶を封じる技を使おうとせん。消耗が大きいため、使いたくとも使えんのだろう』

「なら——」

『勝負に出るべきだろう』

「うし、やるか！」

一誠は砲撃をやめると、自身の内にある悪魔の駒に、意識を集中させた。

「モードチェンジ！ 『龍星の騎士！』」

自身を騎士ナイトに昇格させた一誠は、余分な装甲を排除して、最高速で連也に真っ正面から突っ込んでいく。

そして連也の木刀の間合いに入る直前で、叫んだ。

「モードチェンジ！ 『龍剛の戦車！』」

今度は戦車戦車に昇格、膨れ上がった剛腕で、フルパワーのアップパーカット。

連也は迎撃のために木刀を振り上げていたが、下から迫る巨拳を咄嗟に蹴って、跳躍していた。

瞬間、撃鉄が作動してオーラを噴出し、連也を宙高く吹き飛ばした。

「モードチェンジ！ 『龍牙の僧侶！』」

再び砲撃形態となった一誠は、上空の連也目掛けてドラゴンブラスタを放つ。

迫り来る二本の熱線。

連也は空中で、それでも木刀を振るい、歪曲空間の盾を生み出して、この砲撃を受け流した。

通常の禁手バラス・ブレイカーに戻った一誠は、ここで龍の翼と背中の推進器官を使つて、飛翔した。

砲撃を防いだものの、重力に従って落ちていくだけの連也の、足首を掴む。

そして更に、高く高く上昇していった。

「秋月。お前は凄いやつだ。真・女王は封じられるし、トリアイナも通じ

ねえ……でもな、やっぱりお前は、ただの人間だ。ただの人間である事が、お前の敗因だ！」

一誠は連也の身体を振り上げると、眼下の地面目掛けて、全力で投げ飛ばした！

高さは地上百メートル！

連也の身体は、為す術もなく大地に向かって一直線に落下していく！

凄まじい風圧が、連也の全身を叩いていた。

それでも連也は、六つのチャクラを全開放する。

念の為せる業か——本来なら風圧で身動き出来ないはずの連也の身体が、動いた。

木刀を振り抜くと、光刃が放たれて地面に向けて飛んでいく。

光刃はしかし、落下の勢いに反動でブレーキを掛けたりはせず、ただ地面に向かっていき、高さ五メートルほどの辺りで消えてしまった。

そして、連也の姿も、一誠の視界から消えた。

「——へっ？」

勝利を確信していた一誠は、間の抜けた声を漏らす。

連也はどこへ行ってしまったのか？

彼は、光刃が消えた地上五メートルの地点に、移動していた。

この瞬間移動現象に、ゼノヴィア、イリナ、黒歌の三人は見覚えがあった。

アーサー・ペンドラゴンが連也との戦いで使用した技である。

空間を切り裂き、断層の修復力を利用して間合いを縮める技。

連也は、それを使ったのだ。

空間断層の修復力による移動である。実質連也は、地上五メートルから落下したのとほとんど変わらない状態であった。

「えやあっ！」

連也は迫り来る大地に、木刀『飛龍』を突き入れた。

地面と激突した衝撃が、全身に伝わる。

それを、体内の気脈を通して一周させて、木刀から放出する。

逆転の発想——自分が地面に向かっていてるのではなく、地面が自分に向かってきている。大地というこの世で最も巨大な打撃に対する木霊返し！

地面が、地下で爆発が起きたかのように盛り上がり、吹き飛ぶ。

しかし連也の方は、無事に着地出来た。

「何じゃそりやああああああああっつっつ!!!」

上空から降下して来た一誠が叫ぶ。

「なんであの高さから落ちてフツに助かってんだよ、お前は！ 何なんだお前はよお！」

ドラゴンブラスターが外れた直後、一誠は不意に連也とバズソーとの戦いを思い出したのだ。

水の龍でバズソーを倒した後、連也はただむなく地面へと落ちていくだけで、ゼノヴィアが助けなかったら重傷は間違いなかっただろう。

それを思い出しての、咄嗟の戦術だったというのに……。

「どうやったら倒せるんだよ、コイツ……」

目の前の、上半身裸で木刀を持った少年。

同年代だが、自分に比べれば細身だ。

何か強力な神セイクリッド・ギア器や聖剣・魔剣の類いを持つてる訳ではない。

曹操たちのような、英雄の子孫や生まれ変わりという訳でもない。

ただの人間だ。

ただの人間でしかないはずだ。

なのに、一誠の目には、まるで遠い星からやって来た宇宙人のような、不気味で理解し難い存在に映り始めていた。

『落ち着け、相棒。まだ勝機はある』

「——・ああ、そうだな」

ドライグの言葉に、一誠はマスクの下で笑った。

不意に思い浮かんだのだ。真・女王昇格のための呪文が。

否。

そもそも呪文自体、きちんと詠唱した方が心情的な意味で調子が出るからやっているだけだ。今の自分なら、詠唱自体必要ない。

三週間のトレーニングで基礎体力も大幅に向上し、  
赤龍帝の三叉駒の連続昇格の後でも、体力にはまだ余裕がある。

「今なら、使える——！」

「行くぜドライグ！」

『Cardinal Crimson Full Drive!』

ドライグの叫びと共に、一誠の鎧が目映い光輝を放つ。

輝きが収まった時、そこには新たな鎧をまとった一誠の姿があった。

先程の『赤』とは違う、『真紅』の鎧。

『真紅の赫龍帝』

今の一誠の主力形態が、ついに顕現した。

## 最後の勝利者

オーフィスの力を借りてようやく変身出来る龍神化を除けば、このカーディナル・クリムゾン・プロモーション『真紅』の赫龍帝こそが、一誠の主力形態であり最強形態である。紆余曲折あったものの、この姿に変身した事で、一誠は連也に対する恐怖にも似た不気味な感情を払拭出来た。

（——つと、いかんいかん）

これで勝てる。

胸のうちに湧いたそんな思いを、一誠は振り払う。

試合前にもレイヴェルに言われたではないか……優秀なマネージャーとの会話を、一誠は思い出す。

「イツセー様。イツセー様が自分より強いと思う方の名前を挙げてくださいますか」

「んー……魔王様方は当然として……やっぱりヴァーリがそうだろうな……それに、サイラオーグさんに、ストラード猊下に……」

「連也さんは、今挙げたそのお二人に勝利していますわ」

「まあ結果だけ見りやそうだろうけどさ。でもストラード猊下があの時どこまで本気だったかはわからねえし、サイラオーグさんだってセイクリッド・ギア神器なしだったんだぜ？」

「そんな事はどうでも良いのです！ イツセー様が御自分よりも強いと認識している方を、連也さんは二人も撃破したのだという事実を、もっと重く受け止めてください！」

「お、おう……」

「いいですかイツセー様。『この三週間、あれだけ頑張ったのだから絶対に勝てる』などという甘っちょろい考えはお捨てになってください。極論すれば、三週間が三年間でも、負ける時は負けるのです——ですが、『絶対に勝ちたい』という気持ちだけは、最後の最後までお忘れなきように。よろしいですね？」

「……おうー」

レイヴェルの言葉に、一誠は力強く答えた。

奇しくも今の言葉は、アザゼルが以前言っていたのと同じだったか

らだ。まるでアザゼルが、レイヴェルを通して激励してくれたような気持ちにすらなれた。

（――俺は、絶対に負けねえ！ 絶対に勝つ！ 勝ってやる！）

己れを鼓舞しながら、一誠は背中中の推進器官と翼で低空飛行し、連続倍加を繰り返しながら、一直線に連也目掛けて突撃する。

連也は木刀を正眼に構えたままだ。

公園では怒りで我を忘れたがために、無様にカウンターをくらったが、今度は違う。一誠は自信を持って、拳を振りかぶった。

「アスカロン！ アスカロン！！」

『Blade！ Blade！！』

ドライグの詠唱と共に、左右の籠手に内蔵された剣が、手の甲から飛び出す。その刃に、倍加したエネルギーを『譲渡』で込め、パンチのモーションで突き出した。

拳で殴ると見せ掛けている剣での攻撃。聖剣の刃渡り分、間合いも伸びる。

連也の意表を突いた攻撃――のはずだったが、連也、左右からの刺突を冷静に木刀で打ち払った。

『Tail Blade！』

背中から生える尻尾が延長し、その先端から刃が生える。ヴァチカから贈られた、アスカロンⅡの試作品だ。それを内蔵し、第三の腕となった尻尾が、一誠の頭上を越えて蠍の毒針めいて連也に伸びた。

連也、顔目掛けて飛んでくる刃を、身体を独楽のように回転させてかわす。

一誠の視界いっぱい、連也の背中が広がる。彼は後方ではなく前方、一誠の方に向かって回転していた。

その回転の勢いを利用した回し打ち！

一誠、咄嗟に腕でガード。

連也の念と一誠のオーラがぶつかり合い、衝撃波が空中に透明な波紋を広げる。

連也、構わず連続して木刀を打ち込む。

一誠、両腕のアスカロンで防ぎつつ、尻尾の剣で反撃していく。背

中から生える尻尾は、その位置ゆえに一誠の身体で隠れ、どこから飛んで来るかわからない。

更に、尻尾にばかり気を取られていれば、両腕のアスカロンはおろか、蹴りまで飛んでくる。

掌から、オーラを圧縮した光弾が放たれる。

翼に内蔵された砲身から、オーラの熱線がほとぼしる。

連也は全神経を研ぎ澄ませ、六つのチャクラを全開にして、一手一手に対処した。

わずかなモーションの違い——振り上げた腕の角度、踏み込んだ足の位置、広げた翼の向き、それ等から感じ取れる『圧』の違いに至るまでを敏感に読み取り、一誠の次の動きを予測し、時にかわし、時に払い、時に受ける。

コンマ一秒の判断の遅れも許されなかった。

神経と、筋肉と、念と、思考の、全てを費やさねばならない。

もはや、『勝ちたい』という思いすら、雑念・邪念であった。

尻尾の剣での連続攻撃をかわし、その陰から迫るアスカロンIIを打ち払った。

『Transferr!』

次いで、そんな音声と共に頭上から振り下ろされたアスカロンを、木刀『飛龍』で受け止める。連続倍加したエネルギーを譲渡された聖剣は、燃えるような真っ赤な光を放ちながら、今までとは段違いのスピードとパワーで打ち下ろされる。受け止めるために、より多くの念を木刀に注がねばならなかった。

両者の動きが止まった一瞬、一誠の鎧に埋め込まれた宝玉から、白い光が生まれ、形を変えた。

連也は一瞬、鳥かと思つたが、長い首と尻尾、翼の形は、香車山の廃ホテルで見たワイバーンという怪物を思い出させる。

子犬ほどの大きさの白い飛龍ワイバーンが、翼をはためかせて連也の背後に回り込む。

瞬間、連也の眉間に稲妻が走り、全身を悪寒が駆け巡る。危険を報せる第六感——こいつに触れると、何かヤバイ！

連也はアスカロンを受け止めたまま身を沈めた。

アスカロンで押し斬ろうとしていた一誠が大きく前屈みになると、その腹部を足で蹴り上げる。柔道の巴投げの要領で後方に投げ飛ばして、白い飛龍にぶつけようとした。

しかし飛龍は一誠にぶつかる直前で軌道を変える。

(あつぶね……)

その動きから、やはり触れるとまずいタイプのものだ と確信した。

「なかなかやるじゃねえか」

投げ飛ばされた一誠が立ち上がり、距離を取った。

「でもな、言っとくけどコイツは一匹だけじゃねえぞ！」

一誠の言葉に応じるように、全身の宝玉が光を放ち、更に三匹の白い飛龍を生み出した。

「コイツらは《デイベイディング・ワイバーン・フェアリー白龍皇の妖精達》！ 敵にぶつける事で、ぶつ

けた数だけ相手の力を半減させる優れものだ！ その棒切れで打ち落とそうなんて考えない方がいいぜ！」

説明しながら、一誠は白い飛龍たちを連也に向けて飛ばし、自らもドラゴンショットやドラゴンブラスターを放つ。

一誠の攻撃をかわせば飛龍が、飛龍の突撃をかわせば一誠の攻撃が、連也を直撃することだろう。

連也、この二重攻撃に対して、目を閉じて深呼吸すると、

「イエエーヤッ！」

独楽のように身体を一回転させながら、木刀を振った。

直後、強風が発生し、連也を包み込むようにして竜巻へと変わった。

太刀筋に沿って生まれた空気の流れを念で増幅させて風を生む、秋月流念道剣『太刀風』——その応用技『突あからしまかせ風』！

念を孕んだ竜巻は破邪の防壁となつて、連也に接触せんとした飛龍たちを吹き飛ばし、一誠の放った砲撃を弾き飛ばして消えた。

連也、この隙に間合いを詰めんとするが、攻撃を防がれたはずの一誠の佇まいに余裕を見て取った。

背中の肌には、熱を孕んだ『圧』を感じ取る。

咄嗟に、転がるようにして真横に跳んだ。

連也がいた位置を、弾き飛ばしたはずの熱線が通過する。

熱線はそのまま一誠の方へ飛んでいくが、その軌道上に飛龍が一匹、割って入った。

『Reflect!』

音声と共に、飛龍は己れの身体に直撃したドラゴンブラスターを、まるで鏡のように反射させた!

思わぬ展開に、連也は「マジか」とつぶやく。

一誠がわざわざ飛龍の半減能力をばらしたのは、そちらに意識を向けさせる事で、この反射能力を悟らせないようにするためだった。

跳ね返された熱線が、連也を襲う。

「エヤアツ!」

連也、念を込めた一刀で打ち払おうとするが、木刀はむなしく空を斬った。一誠が熱線を曲げたのだ。そして明後日の方角へと飛んでいく熱線を、

『Reflect!』

『Reflect!』

『Reflect!』

別の飛龍たちが次々と跳ね返し、連也の真後ろへと誘導していく。

同時に飛龍たちもまた、連也目掛けて飛翔する。

連也、背後からのドラゴンブラスターを木刀で受け止めた。そして熱線を木刀に吸収していく。

その隙に飛龍たちが連也に迫った。あと少しでそのあらわになっている上半身に触れられるという瞬間、彼等の小さな身体を、熱波がぶっ叩いた。

念道剣『波濤返し』!

さしもの飛龍たちもこのタイミングでは反射も間に合わず、念を込めた白熱線によって焼き払われて消滅した。

いちいち音声を発している辺り、反射モードと半減モードの二つがあつて、それを状況に応じて切り換えているのではないかと踏んでの、一か八かの賭けであつた。

連也の波濤返しはそのまま一誠目掛けて飛んでいく。



その力を再度、両腕の聖剣に譲渡する。

「ゴイツも持ってけ！ 見様見真似、クロス・クライシス！」

赤く輝く聖剣を、斜め十字に振り抜くと、X字状の巨大な光刃が放たれ、先に放ったクアドラブル・セイクリッド・スマッシュを後押しした。

波濤返しのエネルギーが押し切られて、雲散霧消する。

狂暴さすら感じさせる、莫大なエネルギーの激流が、連也に迫った。

連也は、木刀を大上段に振り上げ、虚空を斬り下ろす。

太刀筋に沿って生まれた歪曲空間は細いが、今度は前方に五メートルほど長く伸びていた。

迫るエネルギー流が、連也の五メートル前方でその歪曲空間にぶち当たり、左右に分かれて、素通りしていく。

しかしそれで防げたのは、最初の四重砲撃のみ。念で歪められた空間は元に戻り、そこへ後から放たれたクロス・クライシスの光刃が飛んでくる。

連也は身体の正面で、木刀を垂直に立てた。

そこにありつただけの念を込め、攻撃を受け止めんとするが――、

(あつ、やべ……)

念が弱い。

六つのチャクラを全開にしてもなお追い付かないほど、消耗している。

一誠が真・女王に昇格してからの攻防で、念を消費しすぎたようだ。

連也がそう気付いた時には、光刃が直撃していた。

不幸中の幸いと言えるのか、どうか。

一誠のクロス・クライシスはやはり見様見真似、鋭さに欠けていた。見た目こそ光刃を形成しているが、斬撃ではなく打撃や砲撃に近い。連也の身体を斬割するには至らなかった。

だがそれでも、クリーンヒットした事には変わりない。

爆発が起き、連也は放物線を描いて十メートル以上は吹き飛んだ。地面に落ちてもなお勢いは止まらず、更に数メートル転がってようやく止まった。

あらわになっている上半身のあちこちに、火傷の痕があった。  
無様に大の字に横たわっているが、木刀は手放してはいなかった。  
一誠は、何かを待つように立ち尽くしている。

実際、連也のリタイアを告げる、サイラオーグのアナウンスを待っていた。



グレモリー家の城館内に用意された、審判用の部屋で戦いを見守るサイラオーグもまた、待っていた。

何を？

連也が立ち上がるのを、だ。

迷っていた。

連也に死んでほしくないという気持ちがあった。

連也に勝ってほしいという気持ちもあった。

秋月連也。

ヴァスコ・ストラダに比べると、その肉体は余りにも小さく、細かった。

曹操たち英雄派のように、英雄の血を引く訳でもなければ、生まれ変わりでもない。

何か強力な神セイクリッド・ギア 器や、聖剣・魔剣の類を持っている訳でもない。  
駄菓子を摘みみながらテレビゲームに興じたり、漫画本を読むのが似合っているような、今思い返してもビックリするくらい普通な少年だ。

そんな少年が、あの赤龍帝・兵藤一誠を相手に、互角に戦っているのだ。

サイラオーグは少年の戦いを見ながら、そこに昔の自分を重ねていた。汗や涙を拭う暇すら惜しんで鍛え続けた自分を。

あの少年もきつと、艱難辛苦に耐えて己れを鍛え、高め続けて来たのだろう。

勝ってほしかった。

圧倒的な力を持つ存在に、それでもなお挑む意思。

たとえどんなに遅い歩みでも、どんなに小さな一歩でも、それでも

なお真実へ向かおうとする意思。

それがどんなに素晴らしく、尊いものであるかを、見せてほしい。自分はいくまでも、公平な審判であらねばならない。

あと十秒待っても連也が立ち上がらないようであれば、兵藤一誠の勝利を宣告しようと考えているが――、

(立て、秋月連也！)

それでもサイラオーグは、心の中で叫ばずにはいられなかった。

(立ってくれ、秋月連也！)

願わずには、いられなかった。

握り締めた拳の指の隙間から、ポタポタと赤い雫が垂れ落ちた。

◆

同じ想いを抱く者が、もう一人いた。

曹操だ。

今は部屋の隅の壁にもたれかかり、立ったまま試合の行く末を見守っている。

連也に死んでほしくないという思いと、勝ってほしいという思いが胸の奥でぶつかり合い、せめぎ合っている。

それを周りの者に悟られたくないがために、わざわざ位置を変えたのだ。

腕組みをして、一見余裕の態度だが、その表情は険しい。

組んだ腕は、指先の爪が袖を破って、その下の腕の肉にまで食い込んでいた。

グレモリー、シトリー両眷属も、生徒会も、連也のダウンに言葉もない。

そんな中、ゼノヴィアが立ち上がり、部屋を出ようとするのが見えた。

出入口のドアは、曹操のすぐ横にある。

「どこへ行くんだ？」

曹操はそのドアとゼノヴィアとの間に、顕現させた聖槍を掲げて、行く手を塞いだ。

「もう勝負はついた。サイラオーグに試合をやめさせるように言って

くる」

「まだ終わってはいない」

「これ以上やらせたら、連也が殺されてしまうぞ！」

ゼノヴィアは叫んだ。

「一誠のこれまでの戦いぶりを見ていただろう！ アイツは連也が死んでもいいと思っっている……いや、そもそも連也の生き死になど全く考慮していない！ 連也が立ち上がれば、今まで以上の火力を迷わず投入するに違いない！ そうなる前に試合を止めないと、取り返しのつかない事になるぞ！」

「……彼は、君のために戦っているんだ。ならば、彼の勝利を最後まで信じるのが、君の務めだと思うがね」

「そんな事知るか！ 連也に恨まれてもいい、嫌われてもいい！ 私は彼に死んでほしくないし、これ以上私のために傷付いてほしくもない！ いいからどけ！ どかないのなら力づくでも——」

「嘘だろ、おい……！」

匙のうめくような声に、ゼノヴィアはモニターの方を振り向いた。モニターの中で、連也が立ち上がっていた。



「嘘だろ、おい……！」

匙と同じ言葉を、一誠も口にした。

ある程度威力は減衰されたとは言え、あの二重攻撃の直撃を受けて、鎧すらまともにない生身の人間が立ち上がれるはずがないのだ。

『クククツ、まるで昔のお前を見ているようだぞ、相棒』

ドライグが愉快そうに笑った。

実際、嬉しくてたまらない。あの人間の小僧は、どこまでも魅せてくれる……自分に肉体があったなら、相棒を押し退けて自分が直接挑みたいくらいだ。

「む、昔の俺ってあんなだったのか？」

『ああ、レイナーレやライザー・フェニックスにボコボコのズタボロのボロ雑巾にされても、お前はなお立ち上がっていた。今だから言う

が、その根性だけは俺も最初から高く評価していたぞ』

「そ、そうなのか……」

『ああ、そうだ。それより、さっさと仕留めろ。追い詰められたら何を  
しでかすかわからんぞ。九割がた負けていたくせに最後の最後で逆  
転ホームランを打つのは、お前の専売特許ではないんだからな』

「そ、そうだな……でも、アイツ大丈夫なのか？ 待つてりやその内に  
またぶっ倒れるんじゃないか？ 何かこっち見てねえし……」

一誠の言う通り、連也は立ち上がりはしたが、木刀を構えもせず、一  
誠を見てもいない。何やら辺りをキョロキョロと見回していた。

——そして、フツと笑みを浮かべた。

『どっちも大して変わらんのだから、お前の手で直接ぶっ倒して、確実  
な安心としておけ。オルランドとの戦いを忘れたか？ あの時のあ  
の輝き……自分の意思で自由に出したり引つ込めたりは出来まいが、  
追い詰められる事で発動する可能性もある。そんな奇跡も、お前の専  
売特許ではない』

「……そうだなー」

一誠は相棒の言葉にうなづく。

別に奇跡を当てにして戦った事は一度もない。いつだって、自分に  
出来る最大限の事を全力でやった上での結果だ。

奇跡とは、それを最初から期待するような奴の元へは決して訪れな  
い。

この決闘でも、それは変わらない。俺はいつだって、俺に出来る事  
をがむしやらにやっていくしかないんだ！

一誠が背中の翼を広げて飛翔せんとしたその時、

——イツセー。

頭の中で、声が響いた。

——イツセー、聞こえる？

「オーフィス？」

それは、オーフィスの声だった。

彼女は邪龍戦役終結後、兵藤邸に匿われていた。最地下からしかア  
クセス出来ないよう調整された異空間内で静かに暮らしていたのだ。

そのオーフィスが、一誠の心に語りかけていた。

——宿題、出来た。

「宿題？ まさか、頼んでおいたアレか？」

——そう。イツセー、我の力、必要？

「ああ、もちろんだ！」

——わかった。なら謳おう。我とイツセーの、新しい呪文。

オーフィスがそう言うのと、一誠の頭の中に言葉が浮かび上がる。

一誠はそれを、迷わず口にした。

「我に宿りし紅蓮の赤龍よ、覇から醒めよ」

右の籠手に埋め込まれた宝玉から、燃え立つような真紅の光輝が生まれた。

『我が宿りし真紅の天龍よ、王と成り啼け』

オーフィスの詠唱が宝玉から鳴り響き、左の籠手の宝玉から、闇をそのまま物質化させたような漆黒のオーラが立ち昇る。

「濡羽色の無限の神よ」

真紅色のオーラが溢れ出し、一誠を包む。

『赫赫たる夢幻の神よ』

その上から漆黒のオーラが、繭のように一誠を包み込んだ。

そして、一誠とオーフィスは声を揃えて、唱える。

——際涯を超越する我等が偽りの禁を見届けよ。汝、燦爛のごとく我等が？にて紊れ舞え！

詠唱が終わると、一誠の全身の宝玉から音声かけたたましく鳴り響いた。

『D∞D！ D∞D！ D∞D！ D∞D！ D∞D！ D∞D！ D∞D！ D∞D！ D∞D！ D∞D！』

一つ一つの宝玉に無限大を意味する『∞』のマークが浮かび上がる。

——Dragon ∞ Drive！

一誠とオーフィスが声を揃えて叫ぶと、一誠を二重に包んでいた光の繭が、弾け飛んだ。

その中から現れたのは、真紅に漆黒の色を足し、より鋭角的なフォルムに変わった鎧姿の一誠だった。

背中の翼は二対四枚ついでに変わっている。  
疑似龍神化。

以前から一誠はオーフィスと話し合い、龍神化を、より扱いやすくする方法を模索していた。そして、オーフィスが出した答えが、呪文を改変して制限を加える事で、ごく短時間ながら自由に使えるようにしたこの姿であった。

『相棒。この変身も、持って一分、あるかないかだ』

「おう、出し惜しみはしねえ！」

一誠は四枚の翼を広げて、宙に舞い上がると、翼に収納されていた四本の砲身を展開した。

『D∞D！・ D∞D！・ D∞D！・ D∞D！・ D∞D！・ D∞D！  
D∞D！・ D∞D！』

宝玉が繰り返し叫び、輝く。その中で、宝玉に浮かぶ『インフイニティ∞』マークが紅と黒に点滅する。

砲口に、これまでのものとは比較するのも馬鹿馬鹿しくなるほどの極大のエネルギーが、不気味なほど静かに溢れていく。

龍神化した時にのみ使える究極の砲撃、『インフイニティ∞ プラスタール』の態勢だ。頭に『疑似』の文字が付くように、全体の出力は抑えられているが、それでも無限の龍神の力を宿しているのには変わらない。その威力たるや想像を絶するものであろう事は、想像に難くない。

秋月連也、この絶体絶命の危機を、どう乗り越えるのか——？  
少年は、ただ突っ立っているだけだった。

一誠のクロス・クライシスを受けて、全身の骨のあちこちがひび割れ、折れている箇所もある。何だか息苦しいのは、折れた肋骨が肺に刺さっているからだろう。打撲や火傷は数えきれず。残ったわずかな念で痛覚を抑制するのが精一杯だ。

だが、恐怖も不安も、全くなかった。

少年は一誠の方には目もくれず、辺りを見渡していた。

微生物一つ存在しない真っ白な部屋に、超高画質の風景写真を壁紙として貼り付けただけ。

そのような環境であるはずの、このゲームフィールド内に、生命の

エネルギーを感じ取っていた……否、少年の目には、そのエネルギーの輝きが、確かに見て取れた。

(――馬鹿だなあ、俺は)

フツと笑みが浮かんだ。

試合前から消耗していた念を、戦いの中で如何にして補充するか？

その課題の答えは、既に出ているのだ。

一誠が新たな姿に変身し、上空から砲撃準備を始めているのに全く構わず、穏やかに微笑みながら、少年は六つのチャクラを開き、そのエネルギーを取り込んだ。

取り込まれたエネルギーが全身を駆け巡り、そして頭頂部へと流れ込む。

(まさか、あの小僧……！)

連也の異変に、ドライグが気付いた。

(だが、そんな事出来るはずが……いや、待て、奴は既に、似たような事ならやっていた……)

今、眼下の少年が何をやろうとしているのか、それに思い至った時、ドライグは相棒に怒鳴り付けた。

『相棒、撃てえええええっ！』

「え？ で、でも、チャージがまだ……」

『いいから撃てツツ!!』

「お、おう！ くらえ、インフイニティ∞ ブラストアアアアアアアアアアツツ!!」

四つの砲身から、轟音と共に極大の砲撃が放たれる。

それは圧倒的な破壊エネルギーの大洪水となって、熱と光で地上に立つ少年の細身の身体を呑み込み、その後方の大地をフィールドの端まで削り取り、薙ぎ払った。

砲撃が終わり、閃光がおさまると、そこには何もなかった。

ただ、焼け焦げて、一部が高熱の余りにガラス化した土の地面だけが、広がっていた。

『スリー……ッ……ワン……ゼロ』

砲撃を始めた瞬間から刻まれていた10カウントが尽きて、一誠の疑似龍神化が強制解除される。

しかし、真紅の鎧はまもったままだ。ドライグに急かされて、チャージが八割しか終わってない状態で撃つたのが、逆に効を奏して、真・女王を維持出来る程度のエネルギーが残っていたようだ。

一誠は一對に戻った龍翼でバランスを取りながら、ゆつくりと地面に降り立つ。

自らが生み出した荒れ野を見渡し、連也の姿を探すが、どこにも見当たらない。

ハアッツと大きく安堵の息を吐くと、

「いよつしやあああああッツ!!! 俺の、勝ちだあああああッツ!!!」

高々と拳を振り上げ、勝利を宣言する歓喜の叫びを上げた。

自分の勝利を祝福するかのように、陽が昇ったようだ。辺りが不意に明るくなった。

「……?」

おかしい。

ここは冥界の土地を模倣して造られた疑似空間だ。二重の意味で、陽が昇るなど有り得ない……。

不審に思った一誠が背後の空を振り向き、竦み上がった。

なんと上空——さっきまで自分が砲撃のために位置取りしていた高さに、連也が浮遊していた。

その髪は逆立ち、白金色に輝いている。

頭頂部には、白い光輪が清らかな光輝を放っていた。

「ア、アイツ……なんであんな所に……」

『わからん……移動する気配は全く感じられなかった……まさか、瞬間移動したとでもいうのか……?』

狼狽する一誠とドライグの前で、連也は木刀をゆつくりと、天に向かって掲げた。

それに呼応するかのように、大地から、大気から、無数の光が生まれ、連也の木刀に集まり、吸収されていく。

「な、何だよコレー!」

『やはり、そういう事か……だが、信じられん……半減吸収を得意とす

るアルビオンですら出来ない事を、ただの人間がやれると言うのか  
！」

「どど、どういう事だよドライグ！」

『奴が今吸収しているのは、お前の放ったオーラだ。この戦いで何度も撃ち、狙いを外して散逸した、エネルギーの残滓……それを掻き集めて、己れの力に変えて、あの時のあの輝きを発動させたのだ……そして、今は……』

「い、∞ブラスターを撃った後のエネルギーを、吸収してるってのか？」

『奴はさつきも、お前の砲撃を吸収して撃ち返して来た……あの時点で、気付くべきだった……！』

ドライグは己れの甘さに、歯噛みする思いだった。

だが、むべなるかな。

連也自身、たった今気付いた事である。

ましてやドライグも一誠も、撃った後のオーラがどうなったのかなど、考えた事すらなかったのだ。

一誠は翼の砲身を展開したが、砲口に充填されるエネルギーは、余りにも小さく、少なかった。

鎧を維持する力しか残っていないのだ。

急いで連続倍加を始めるが、その前に連也が、掻き集めた龍のオーラで目映い光輝を放つ木刀を、一誠目掛けて振り下ろした。

木刀から放たれた光輝が、白金色の龍となって宙を駆け、一誠の鎧を貫いた。

更にそのまま一誠の全身に絡み付き、締め上げていく。

真紅の鎧が、赤い光の粒子状に分解されて、消滅していく。

圧倒的な破邪の力が、電撃にも似た衝撃となって、一誠の全身を駆け巡った。

「う、うおおおおああああああああああっつっつ！！！！」

一誠の、苦痛と恐怖の絶叫が響き渡る。

白金の光龍はそのまま全身の輝きを強め、天を貫く光の柱に変わる。

その中で、鎧を失った一誠の身体が、緑色の光の粒子となって、消えていった。

『兵藤一誠、リタイア。秋月連也の勝利とする』

フィールド内に、サイラオーグのアナウンスが響き渡る。

連也は、ゆっくりと地面に降り立つ。

頭頂部に意識を集中し、自分の意思で、王冠のチャクラを閉じた。

(……アイツのお陰、なのかな)

兵藤一誠の事は、ハッキリ言っただけだ。

だが、彼とのこの一戦によって、自分がほんのちよつとだけ、目指す『高み』に近付けた——ような、気がする。

「お相手、ありがとうございました」

だから、今この時だけ、連也は一誠に感謝した。

## 落とし前

「う、うおおおおおおあああああああッ!!」

恐怖の叫びを上げて、その自分自身の叫びで、一誠は目を覚ました。ハアハアと大きく息をしながら、辺りを見回す。

どうやら自分は、寝間着に着替えさせられて、ベッドに寝かされていたようだ。

起き上がると、その寝間着は汗でぐっしよりと濡れていた。

「目が覚めたようだな」

太い声がしてそちらに顔を向けると、部屋の出入口のドアをくぐってサイラオーグが入室してきたところだった。手にはティーカップを乗せたトレーを持っている。

「リアスが手ずから入れてくれた紅茶だ」

「あ、ども」

一誠は差し出されたトレーからティーカップを受け取り、紅茶を一口飲んだ。

サイラオーグはトレーをサイドテーブルに置き、傍らの椅子に座った。

「体の具合はどうだ？」

「んー、まだ、体全体が重い感じですね」

「まあ、戦いが終わったばかりだからな、無理もない」

——それでも、秋月連也に比べれば、無傷と言っても差し支えなからう。

サイラオーグは心の中で、そう付け加えた。

連也は今、別棟に設けられている医務室で、アーシアのトワイライト・ヒーリング《聖母の微笑み》による治療を受けている。

決闘の場となっていた疑似空間には、内部の者が戦闘不能になると外界の定められた場所に転送する術式が組み込まれている。

連也のダメージは、その術式が作動しないギリギリのラインで踏みとどまっていたもの、それでも予断の許されない深刻さであった。咳払い一つでもしようものなら、それだけでどこかのひび割れた

骨が折れて、リタイアさせられていたかも知れない。結果論ではあるが、『あと十秒待つても立ち上がらないようなら強制リタイアさせよう』というサイラオーグの判断すらも、楽観的と言わざるを得ないほどだった。

対する一誠は、リタイア直後こそ全身に破邪の念による火傷を負っていたが、それも先んじて医務室に向かったアーシアの見ている前で、動画の早回し再生めいてみるみる治っていったのである。元が龍のオーラだったから、一誠の肉体に吸収されて治癒力を爆発的に高めたのか、はたまた念そのものにそういう効果があるのかはわからないが、アーシアをしてこれなら自分の力は必要なさそうだと思わせるほどであった。

そして実際、サイラオーグがこうして見舞いに来る頃には、完治してしまっていた。

「……サイラオーグさん。俺、負けたんですか？」

そんな事とは露知らず、一誠はサイラオーグに尋ねた。

「ああ。文句のつけようのない負けっぷりだった」

「そう、ですか……」

一誠はうなだれた。

「悔しいか、兵藤」

サイラオーグが優しく問い掛ける。

「もちろんです……あそこまで追い詰めたのに……俺は九割がた勝っていたのに……あんな方法で、しかもたったの一発で逆転されて……」

「これまでお前が倒して来た連中も、同じ思いだったろうな。今度はお前に、その気持ちを味わう順番が回ってきた。それだけの事だ」

「でも俺は納得出来ません！ 他のやつならともかく、あんな奴に負けるなんて！ 今までずっと俺たちに守られて、平和な場所でヌクヌク暮らしてきたやつなんかに！」

「その平和な場所でヌクヌク暮らしてきたやつなんかに、お前は実力で負けたのだ——なあ、兵藤」

サイラオーグが一誠の肩に手を置く。

「俺もお前も、勝利の美酒だけを味わって来た訳ではあるまい。敗北の苦さもよく知っているはずだ。だが俺たちは、その苦さも受け入れ、糧とし、己の血肉に変えてきた。だからこそ、ここまで強くなれたのだ。俺たちは、二人揃って秋月連也に敗れた。逆を言えば、俺たちにはまだまだ強くなれる余地が残っているという事だ。お前とて、今日の試合で学ぶべき事はたくさんあったはずだ」

「でも、負けたんです……この三週間、レイヴェルにコーチをしてもらって、あんなに頑張ったのに……オーフィスだって力を貸してくれたのに……」

「勝敗は兵家の常だ。どんなに頑張っても負ける事はある」

一誠の最後の一言がちよっと引つ掛かった。

やはり最後に見せたあの変身は……。

しかしサイラオーグ・バアルに死者を鞭打つ趣味はないので、敢えて何も言わなかった。

「やっぱり悔しいです……納得出来ません……」

「お兄様の時も、そうやってゴネて魔王様に泣きついたのですか？」

鞭打つような冷徹な声は、レイヴェルだった。

レイヴェルは先に入室していたサイラオーグに黙礼すると、大股で一誠の枕元に歩み寄った。

「まったく、先程から聞いていればグチグチと……試合前にも申し上げたはずです、連也さんがサイラオーグ様とストラーダ殿下に勝利したという事実を、もっと重く受け止めろと！」

腰に手を当てて、前のめりに顔を突き出し、レイヴェルはきつい口調で言う。

「なのにあなたと来たら、何ですか最後のアレは！ まだ試合が終わっていないのに、勝手に自分が勝ったと思ひ込んで、勝ち名乗りを上げてもらうのをポケットと待つなどと……あそこでイッサー様が連也さんにトドメの一撃を刺しておけば良かったのです。それだけの時間も充分にありました。そんな甘ったれた根性で勝利を逃がした愚か者に、文句を言う資格などありませんわ！」

「お、俺は甘ったれてなんか……」

「なら、何故トドメを刺さなかったのですか？ 絶対に勝ちたいという気持ちがあれば、そして連也さんの実力を把握していれば、あそこでもトドメを刺さないという判断は有り得ません。ライザーお兄様ならば、そのような判断ミスは決してなさいませんわ……マナージャーたる私の言葉を軽んじ、結果も出てない内からもう勝つたのだと思いうがる愚か者以外は！」

レイヴェルはかなり頭に来ていた。

試合中に一誠の取った戦術は、レイヴェルの目から見ても間違っただけではなかった。

だが最後、連也をノックダウンさせた後だけが、間違いだった。何も大袈裟な技を使う必要はない。馬乗りになって顔面にパンチの一つも落とせば、それで決まっていた。いや、近付く必要すらなく、ドラゴンショットを一発叩き込むだけでも良かっただろう。それだけの余力も残っていたはずだ。

やれる事を全てやった上での敗北なら、レイヴェルも潔く受け入れる。こんなきつい言葉をぶついたりはしない。

彼女が怒っているのは、負けた事に対してではなく、勝てるチャンスを自らの油断でみすみす逃した、一誠の真剣勝負に対する不誠実さに対してであった。

「そもそも、ドライグ様もドライグ様です！ あなたがついていながら、何をやっておられたのですか！」

『ああ、すまんすまん。秋月連也の戦いぶりがあんまり面白くてな。アイツがまだ戦えるのなら戦わせてみたくて、つい黙ってた』

「何が『つい』ですか、この赤トカゲツツ!! まるでダメなおっぱいドラゴン、略してマダオツツ!!」

『グハアツツ!!』

レイヴェルの罵倒がドライグの魂にクリティカルヒットしたのか、ドライグは血を吐くような声を上げた。

『そ、その呼び方はやめろ……く、苦しい……ト、ト、トランキライザーを……!!』

「ド、ドライグううっ！ しっかりしろおおおっ！」

「鎮静剤なら医務室にデスノートとかいうのがあるらしいが……」

「それはデスフルランです。しかも鎮静剤ではなく、全身麻酔に使用される、沸点23.5度の揮発性麻酔薬ですわ」

「詳しいな」

「いずれ何かの戦術に応用出来るかと思ひまして」

その「いずれ」が来ない事を、サイラオーグは祈らずにはいられなかった。

「話を戻しますけれど、サイラオーグ様は先程、文句のつけようのない負けっぷりだったと仰いましたが、私の意見は逆です。文句や言い訳の余地がある、この上なく無様な敗北でしたわ。そして、そんな余地を残すような戦いをした今のイツセー様には、悔しがる資格すらありません。自分の甘ったれた思い上がり、海よりも深く猛省なさい！」

そう言い捨てる、もう一度サイラオーグに黙礼してから、後は一誠に一瞥もくれずに退室した。

サイラオーグはその背中を見送りながら、苦笑した。

フェニックス家の息女はなかなかの烈女のようなようだ。しかし、王にキング対してあれだけはつきりと物申せるのなら、むしろ信頼出来る。

「元氣を出せ、兵藤。今日の敗北も、必ずお前の力となる。今すぐは無理でも、時間をかけてゆっくりと飲み込んでいけばいい……そもそも、お前は今回の決闘で負けたところで、失うものなど何もあるまい？　いつまでもくよくよしていても、何も始まらないぞ」

一誠の背中をポンポンと叩いて慰めると、サイラオーグも退室した。

「失うもの、か……」

残された一誠は、ポツリと呟いた。

言われてみればその通りだ。勝負に勝って秋月連也を排除する事ばかり考えていたので、気付かなかった。

負けたらゼノヴィアに暴言を吐いた事を謝るのが、自分に与えられたペナルティだったが、そもそも一誠自身、ちよっぴり言い過ぎたと後悔して、反省もしていて、この決闘が終わったら謝ろうと思ってい

たのだ。最初からやるつもりだった行為など、ペナルティでも何でもない。

善は急げだ。

一誠はベッドから下りて着替えると、部屋を出た。

あちこち探し回っていると、別棟へ続く渡り廊下で、ゼノヴィアを見つけた。イリナも一緒だ。

「ゼノヴィア」

一誠が呼び掛けると、二人は足を止めて振り向いた。

「イツセーくん、起き上がって大丈夫なの？」

イリナが問い掛ける。

「ああ、まだちよつと体が重いけど、動けないってほどじゃねえし、そんなのは理由にならねえよ……」

気丈に答えると、一誠はゼノヴィアの方を向いた。

「ゼノヴィア。この前はついカツとなつて、お前にひどい事を言っちゃまったな。本当に悪かった！」

そう言つて、深々と頭を下げる。

ゼノヴィアもイリナも、目をパチパチさせるだけだ。

「じゃあ、俺は部屋に戻つてもうちよい休ませてもらうわ。じゃあな」  
「え？ あ、ちよ……」

イリナが慌てて呼び止めようとしたが、一誠には聞こえなかったよ  
うで、そのまま去つていった。



リアスを始めとした面々は、医務室の前に集まっていた。ゼノヴィアとイリナも到着する。

アーシアが連也の治療を始めてから、かれこれ一時間が経過している。トワイライト・ヒーリング《聖母の微笑み》で一人の患者を治療するのに、ここまで時間がかかるのは初めてだ。心配するなという方が無理だろう。

更に三十分が経過して、ようやくアーシアが出てきた。

廊下に据え付けられた長椅子に座り込み、ハアーツと大きく息をついた。

「大丈夫です、お手当ては終わりました。今はお医者様が検査をな

さっておられるところです」

そして、心配そうな視線を向ける面々にそう言った。

皆一様に安堵する。

少し離れた所に立つ曹操にふと目をやったアーシアは、立ち上がるなり駆け寄った。

「曹操さん、どうなさったんですか？ 腕にお怪我をなさってますよ」

神器の指輪を顕現させたアーシアは、曹操の腕に治癒の光を注ぐ。

「うん？ ああ、どこかで引っかけでもしたのかな……すまないね」

曹操は空とぼけながらも、礼を言った。

「……連也さんの事、本当に心配なさってたんですね」

アーシアがヒソヒソ声で言う。

「でも、その気持ちを人に知られたくなくて、こんな傷を付けたのでしょう？」

「さて、何の事やら」

「だけど、誰かを気遣い思いやる気持ちは、隠すものではないと思えますよ」

ヒソヒソ声でそう言うのと、

「はい、もう大丈夫ですよ。お大事に」

と普通の声で言つて、また長椅子に戻った。

さすがに疲れたようだ。

検査が終わったらしく、少しして医師が面会の許可を出すと、いの

一番にゼノヴィアが駆け込んだ。

「連也、大丈夫か？」

「お陰さんで」

ベッドの上で、連也は呑気な声で返す。

ゼノヴィアは遅れて入ってきたリアスたちの目も憚らず、彼を抱き締めた。

「良かった……君が無事で、本当に良かった……！」

感極まって、目尻に涙の粒さえ浮かべている。

「心配させちゃったか、ごめんな……でも、前にも言つたら？ 俺がア

イツと戦いたかったから戦っただけだよ。ゼノヴィアのためじゃない、俺自身のためにやった事だ」

「そんな事はどうでもいい。私は君に死んでほしくないし、傷付いてほしくもない……だから、こうして無事でいてくれて、本当に嬉しい……それだけだ、ただそれだけなんだ……」

そう言つて、連也を抱き締める腕に更に力を込め、密着する。豊かな胸が遠慮押し付けられて、知らず知らずそのボリウムと柔らかさをアピールしていた。

連也がリアスたちに視線で助けを求めると、リアスが肩をすくめた。

「ほらゼノヴィア。連也くんもあれだけの激戦の後で疲れてるでしょうし、ゆっくり休ませてあげましょう」

「そうですわよゼノヴィアちゃん。お話は後でも出来ますけど、今の連也くんには何よりも休養が大事なのですから」

そして朱乃と一緒に、ゼノヴィアを引き剥がして、他のみんなと共に医務室を出ていく。

去り際にゼノヴィアは連也に向かって、小さく手を振った。

連也も小さく振り返した。

そして全員が退室すると、ベッドに仰向けになる。

「疲れた……」

ポツリと呟き、目を閉じる。

少しすると、穏やかな寝息が聞こえてきた。



リアスたちが客間に移動して、先程の試合の感想などを語り合いながらお茶会をやっていると、そこに一誠がやって来た。

「あらイツセー。起きてても大丈夫なの？」

「ああ。まだちよつと体が重いけどね。何か小腹が空いちやつて……これ、食べてもいいかな？」

テーブルに広げられた茶菓子を指差して、一誠はリアスに尋ねる。

「構わないけれど、動けるようなら先にやっておく事があるのではな  
くって？」

「やっておく事って?」

「ゼノヴィアに暴言を吐いた事、ちゃんと謝るのでしょうか?」

「ああ、それならさつき済ませたところだよ」

一誠は軽く答えて、ゼノヴィアとイリナに「なあ?」と同意を促す。

「そうなの?」

「軽う〜くですけどね」

と、イリナがリアスに答える。

「軽く?」

「サツと来て、サツと謝って、そしてサツと部屋に戻っちゃいました」

「イリナの言った通りです」

ゼノヴィアが肯定した。

「何だよ、ちゃんと頭だつて下げただろ?」

イツセーはクッキーを食べながら、不満そうに抗議した。

「確かに下げたけど、負けたら土下座してゼノヴィアに謝るって約束だったじゃない。ごめんなさいして、もう用は済みましたって感じでさつさと立ち去るなんて、そんなの謝ったうちには入らないわよ」

イリナも口を尖らせて反論する。

「なんでだよ。ちゃんと頭下げて謝ったし、そもそも謝ったうちに入る入らないはイリナが決める事じゃないだろ?」

「それもそうね」

と割って入ったリアスに、一誠は救いの女神を見たような顔になった。

「それを決めるのは——更に言うなら、一誠の謝罪を受け入れるか受け入れないかは、ゼノヴィアが判断する事よ。それでゼノヴィア。あなたはどうなの?」

「私もイリナと同じ気持ちです」

ゼノヴィアははつきりと答えた。

「人前で土下座なんてみつともない真似をしたくないから、自分から形だけ謝って有耶無耶にしようとしてるようには見えません」

「そ、そんな事ねえよ! 俺は真面目に反省したんだ!」

「なら、今この場で、もう一度その気持ちを示してほしい。連也との約

束通り、土下座して謝ってくれるなら、君の暴言は忘れよう」

「何言ってるんだ！ それはもうさつき済ませただろ！」

「私は許すとは言っていないが？」

「でも、俺はちゃんと謝っただろ！」

「だからもう一度ここで土下座して謝ってほしいと言っている。そして、そうしてくれたら許すとも言ってるんだ」

「ふざけんな！ 頭下げてちゃんと謝ったのに、何が不満なんだよ！」  
「だから、土下座してねえのが不満なんだろ？ 許してもらいたいんならこの場で土下座すりゃいいだけじゃねえか」

匙が苛ついた声で口を挟んだ。

「会長も指詰めめろとか腹を切れとか明日までに百万円持つてこいとか言ってる訳じゃねえんだから、別にいいじゃねえか」

「そうだよイッセーくん。君の気持ちを、嘘偽りのない誠意を、あと一度だけここで示してほしいと言ってるだけなんだ。恥ずかしい事でもカッコ悪い事でも、何でもないんだよ」

木場もなだめるように言う。

「もしもゼノヴィアが、君が土下座して謝ってもまだ難癖をつけるようなら、その時は僕が君を守るよ——もつとも、それは杞憂というやつだろうけどね」

「ふざけんな！ 俺は反省して、頭下げて謝ったんだ！ この上土下座までしろってのかよ！ しかももう終わった事で！」

「終わってねえから言ってるんだろ！ だいたい、元々お前が秋月に負けたら会長に土下座して謝るって約束だったじゃねえか！ それで土下座してねえから文句言ってるだろうが！ なのになんでお前が被害者面してんだよ！」

匙が早くも我慢の限界に達したのか、声を荒げる。

「お前らこそなんで寄って集たかって土下座させようとすんだよ！ 何回でも言うけど、俺はもう謝ったんだぞ！ 終わった事なんだぞ！ 関係ねえやつが口出しすんじゃないやねえよチクショウ！」

そう言って、一誠は客間から走って出ていく。

「あの野郎……」

「おやめなさい、匙。頭に血が上ってる今のあなたが追い掛けたところで、喧嘩になって余計に話がこじれます」

追い掛けようとする匙を、ソーナが止めた。

「ソーナの言う通りね。私が行って説得してみるわ……朱乃、アーシア、悪いけど手伝ってくれるかしら？」

「仰せのままに」

「もちろんです、リアスお姉様」

快諾した二人を連れて、リアスは一誠を追って部屋を出た。

ゼノヴィアが、崩れるように手近のソファに座り込んだ。

生徒会メンバーやイリナが、心配そうに集まる。

「……見下げ果てたやつだ」

ゼノヴィアは、吐き出すように呟いた。

◆

翌日。

ゼノヴィアはリアスの部屋に呼び出された。

そこには一誠もいて、

「ゼノヴィア。ひどい事を言っただけに悪かった！ 許してくれ！」

そう言っただけで、ゼノヴィアに土下座して謝る。

「——わかった。この前の暴言は許してやろう」

「そうか、ありがとうゼノヴィア！」

一誠はそう言うのと立ち上がり、ゼノヴィアの手を握った。

「お前がそう言ってくれて、安心したよ。また改めて、仲良くやろうな」

「ああ。同じグレモリー眷属として、よろしく頼む」

「こつちこそ……って、んん？」

何かが引つ掛かった。

「グレモリー眷属として……いや、確かに俺はリアスの眷属のままだけど、お前は俺の眷属だろ？」

「昨日まではな」

「ど、どういう事だよ」

「一誠。私は一学期に言ったはずだ。心を入れ換えて、日頃の行いを

改めないよ、私はリアス様の眷属に戻るとな。その言葉を実行させてもらう」

「な、何言ってるんだよ！俺何もしてないだろ！」

「すぐに夏休みに入ったから何もせずにはいらただけだろう。何よ、昨日のあの態度で確信した。お前は、私が主君と仰ぐには値しない男だ」

「まだ言ってるのかよ……今日、こうして土下座して謝ってやったのに、この上何が不満なんだよ！」

「お前の眷属でいる事が、だ」

ゼノヴィアは一ミリ秒の間も置かずに、冷たい声で答えた。

「そういう訳ですので、リアス様。お手数ですが早速お願いします」

「そうね」

リアスは頷くと、部屋の床に向けて手をかざした。

掌から放射された魔力が、床に魔法陣を描き始める。

「リ、リアス！俺はトレードに応じるなんて一言も……」

「ああ、そうだったわね。なら王としてあなたに命じます。我が兵士兵藤一誠。あなたの騎士と私の騎士とを交換なさい」

リアスの、初めて聞く高圧的な声に、一誠はすくみ上がった。

昨夜リアス、朱乃、アーシアの三人から説得された時、

「これ以上駄々をこねるようなら、上級悪魔にふさわしくない言動多々ありとして、昇格を取り消させるわよ」

と脅されたのだ。

この突然のトレードを拒めば、リアスはそれを実行するかも知れない。そうなれば、アーシアやレイヴェルまで失ってしまう。

「わ、わかったよ……」

一誠は渋々承諾した。

トレードの儀式は、短時間で終わった。

専用の魔法陣と魔力を介して、駒に登録されてある王の名前を書き換えるだけだ。

すなわち、リアスが持ってきた空白の騎士の駒の王を一誠に、ゼノヴィアの体内にある騎士の駒の王をリアスに書き換えるのだ。

それも一分も掛からず終わった。

トレードの儀式が終わると、ゼノヴィアはリアスに黙礼して、自分の部屋に戻っていった。

一誠は空白の駒を手に、溜め息をつく。

「元気を出しなさい、イツセー。離れ離れになる訳ではないのよ？」

リアスは一誠の両肩に優しく手を置いた。

「最初は誰だつてつまずくものよ。ましてやあなたは、悪魔になってから約一年で上級悪魔に昇格してしまったのだもの。失敗するのも仕方ないわ。大事なのはそれを受け入れて次に活かす事よ。まずは、きちんとした高校生活を送りなさい。そうやって、ゼノヴィアとの関係を再構築していけばいいのよ」

無理だろうけど。

と、リアスは思わずにはいられなかったが、しかしこうでも言わねば一誠はいつまでも落ち込んだままだろう。

「大丈夫よイツセー。私はどんな時でもあなたの味方よ」

そう言つて、一誠を抱き締めて、顔を胸にうずめさせる。

一誠はリアスの胸のポリウムと柔らかさに、早くも表情が緩んでいた……。

## エピローグ

夏休みも残りわずかとなったある日、ゼノヴィアは連也を食事に誘った。自分の名誉を守るために一誠と戦ってくれたお礼だ。

最初は『戦ったのはあくまでも自分自身のためだから』と渋っていた連也だったが、焼き肉を奢ると言われた途端に手の平を返した。

豪勢な昼食を終えて、上機嫌で店を出る連也の様子に、ゼノヴィアも恩人に喜んでもらえた満足感があつた。

二人肩を並べて歩いていると、リアスとアジアに会った。一誠も一緒だ。買い物途中らしく、一誠は二人の物と思わしい紙袋を両手に提げていた。

三人に挨拶する連也とゼノヴィア。

ふと連也は、一誠の顔色が悪い事に気が付いた。

「兵藤、どうした？ 今にも死にそうな顔してるぞ」

「今にも死にそうだ……」

一誠はそう答えて、その場に膝をつく。

「ど、どうしたのイツセー！」

「イツセーさん、しっかりしてください！」

「一誠、何か悪い物でも食べたのか？」

他の三人も気遣わしげに声を掛けた。

「お、俺にもわからないんだけど、急に寒気が……頭痛がする……は、吐き気もだ……！」

夏の日中にも関わらず、一誠は全身をガタガタと震わせ、額には脂汗を浮かべていた。

突然の変わりように、四人ともが驚き、戸惑っていた。

とりあえず一旦家に帰ろうという事になり、一誠を人目のつかない場所に運び、そこからリアスが転送用の魔法陣を展開して、兵藤邸へと戻っていった。

「急にどうしたんだ、あいつ……」

「どうせ暑いからと言って、かき氷とかアイスとか冷たいものを食べ



子を黒歌は面白そうに眺めていた。

「いや、だって笑えるじゃねえか。テメーのぶっぱなしたオーラを利用して逆転負けとか、赤龍帝史上初なんじゃねえか？」

美猴はそう言っつて、ジョッキになみなみと注がれたコーラを一口あおり、ついでに氷もボリボリと食べた。

黒歌とたまたまこの店で鉢合わせた美猴は、相席したついでに連也と一誠との決闘の顛末と、昨日の一幕を黒歌から聞かされたところであつた。

「まあ、こればかりは仕方ねえやな。攻撃を反射したり吸収するやつはいるし、その対策をするやつもいるけどよ、攻撃した後のオーラがどうなるか、どうなったかなんて考えた事もねえ。俺っただけじゃなくヴァーリだつてそうだろうよ。それをかき集めて自身のエネルギーに再利用するなんて、なおさら考えつかねえや……にしても……キツキツキツ……まさかそこまでトラウマになつちまうとはね……クククツ……！」

よほどおかしくてたまらないらしく、美猴はパンパンと自分の膝を叩く。

「そう言えばヴァーリはどこで何やってんの？」

「おー、アイツは今ヴァルハラに入り浸つてるぜい」

「ヴァルハラ？ 好みのワルキューレでもいたの？」

「いやいや、んな訳ねーだろ。あそこは何でも最近、海外の神話体系にも門戸開いたらしくてよ、閔帝聖君が舎弟の張飛連れてリフレツシユ休暇も兼ねて暴れ回つてんだよ。それでアイツもちよつかい出しに行つてるのさ」

「相変わらずお子ちゃまねえ」

「まあ、あそこにはおっぱいでパワーアップするようなトンチキもいねえから、アルビオンのリフレツシユ休暇にもちようどいいんじゃないの？ ——つと、噂をすれば何とやらか」

出入口のドアが開き、ドアに取り付けられたベルが音を鳴らす。

入店してきたのは、ゼノヴィアと連也だつた。

「ほれ、あのデュランダル使いの姉ちゃんが連れてる坊やが、オメーの

「ダーリンだろ？」

「あらホントだ」

「行かねえのか？」

「恋の鞘当てとか面倒だし、ダーリンにめんどくさい女って思われるのも嫌だしねー」

「意外だな。もっとガツガツ行くのかと思ってたぜい」

「要はあの子とエッチ出来ればそれでいいから、慌てる必要なんてないのよ。急いでは事を仕損<sup>ことわざ</sup>じるって言うでしょ？」

「……オメーの口から諺<sup>ことわざ</sup>が出るとは思わなかったぜい」

同じ店内でそんな会話がされているとは露知らず、連也はゼノヴィアに案内されて、窓際の席に座った。

「会員制だつて言つてたけど、ホントに俺が入つて大丈夫なのか？」

「私の連れという事で話は通してあるから、心配いらない。家族連れで来る者もいるしね。さあ好きな物を注文してくれ」

ゼノヴィアが自信満々に言うので、連也はとりあえずカフェオレとチョコレートパフェを注文した。

ゼノヴィアはコーヒーとモンブランだ。

しかし注文しておいて、連也はいまいち食が進まないようだった。

「どうしたんだ連也。口に合わないのかい？」

「いや……何かさつきから視線感じるんだけど……」

言われてゼノヴィアが店内を見回す。他の客やカウンターの奥の従業員が、確かにチラチラと視線を向けていた。

「ああ、君の事が気になるんだろう。『D×D』内でも君の噂で持ちきりだからね。何せ一誠と決闘をして勝った男だ。アイツもあれで、『D×D』の主戦力だからね。気にせずにはいられないのさ」

「わかってるならなんで連れて来たんだよ。メチャクチャ居づらいんだけど」

「我慢してくれ。『D×D』にも面通ししておいた方が、君のためなんだ……君を危険視する者もいれば、君が何か卑怯な方法で一誠に勝利したんじゃないかとあらぬ疑いを持っている者もいる。多少なりとも君の人柄を知ってもらえば、彼等も自然と考えを改めるはずだ。そ

れに、味方は多いに越した事はないだろう?」

「……悪いけど、俺はこの皆さんと関わり合いになるのは御免だよ」  
「なら尚更だよ連也。たぶん今後もリアス様やソーナ様が君をこの店に誘うだろうから、それにも応じてほしい。両家のお気に入りだと知れば、余計な手出しをしてくる者もいなくなる。それでもまだ君にちよっかいを掛ける者がいるようなら……その時は、私が君を守るよ」

ゼノヴィアは優しい声音で言い、連也の手に自分の手を重ねた。

「気持ちだけ受け取っておくよ」

しかし連也は、そう言っただけで彼女の手の下から自分の手を外して、ごまかすようにチョコレートパフェを食べ始めた。

食事を終えると、二人は店を出る。

ゼノヴィアはさっきの連也の仕草によそよそしさを感じて、気になっただけだ。

「連也。私は、余計な事をしてしまっただろうか?」

街中を歩きながら、思いきって尋ねてみる。

「君のために、良かれと思ったのだが……」

「いや、別に怒ってるわけじゃあないよ。ただ、まあ、その……もうこの際言っちゃうけど、俺、卒業したらこの町を出る予定だからさ。どうせいなくなる奴にそこまでしてもらっても、申し訳ないから」

「いなくなる? 何故だ?」

「この世界のどこかにいる、ちゃんとした念道の使い手を探したいんだ。その人のところで、ちゃんとした念道を学びたい。前にも言ったかも知れないけど、俺のは半分我流だからさ。日本中探しても見付からなかったら、外国にも行くつもりだ。そんな当てのない旅を予定してる奴に便宜をはかるのも馬鹿らしいだろう?」

「そんな事はないさ」

ゼノヴィアは、連也の手をギュッと握った。

「それならなおのこと、『D×D』のバックアップは君の旅の助けになると思う。リアス様もソーナ様も、君への援助は惜しまないと言ってたよ。それに何より……私も、君のそばにいたい。君のためになるこ

とは、何でもしてあげたい」

「……そういうこと言うのやめて。本気にしちゃうから」

「それは良かった。私は本気だ、君も本気にしてくれなくては困る」

ゼノヴィアは、繋ぎ合った手に更に力を込めた。絶対に離さないぞと言わんばかりに。

「私は、いつも君と一緒にいたい。いつまでも君のそばにいたい。そうする事で私自身の成長の糧になるだろうし、何より、君と一緒にいると、とても心が安らぐんだ——こうして一緒に歩いている今もね。君はどうだ？ 私と一緒にいるのは、不快だろうか？」

「……いや。こうして一緒に歩いているだけでも、楽しいし、嬉しい……ずっとこうしていたいくらいだ」

「ならそうしよう。二人で一緒に、寄り添い合って生きていこう、連也」

「……本当に、いいのか？」

「ああ」

「そうか……うん、ありがとう、ゼノヴィア」

連也は照れ臭そうに微笑み、ゼノヴィアの手を握り返した。



それから、何やかんやで半年以上の月日が流れていった。

その間何事もなかった訳ではない。

例えば一誠は敗北によって刻まれたトラウマを自覚し、冥界の心療内科に通院するようになった。

ゼノヴィアと生徒会は二学期になってから教師陣と何度も話し合い、校則の改正に努め、覗きや盗撮、痴漢などのセクハラ行為に対しては即退学という罰則を設ける事に成功した。そして三学期に入ってから早々に、三人の生徒がこの罰則によって退学処分になったという。

グレモリー眷属と赤龍帝眷属はチーム『D×D』の主戦力として、カオス・ブリゲード禍の団残党などを壊滅させたりと治安維持に尽力した。

曹操も英雄派メンバーと共に活躍した。その槍術は更なる精妙を極め、『神槍』の異名で呼ばれるようになった。もともと本人は、

(『神槍・曹操』って何か語呂合わせの駄洒落っぽくてちよつとなあ)

と、余り嬉しくなさそうだが……。

ヴァーリチームはほぼ開店休業状態である。リーダーのヴァーリは未だにヴァルハラに入り浸り、オリュンポスの神々が派遣した『聖闘士』『海闘士』『冥闘士』『天闘士』、更には地元の『神闘士』と呼ばれる様々な戦士たち相手に充実した日々を送っているし、アーサーは聖剣の因子が活動を再開し、聖王剣コールブランドを再び手にする事が出来たものの、一時的にはいえ聖剣を使えなくされた事がショックだったのか、時々その辺の草をむしって『えぐり込むように打つべし』とか言いながら食べ始めたりするらしい。

ヴァスコ・ストラードは今もかつての弟子のために祈りを捧げている。精神的なものなのか年齢ゆえなのか、筋肉の量が落ちて目に見えて痩せてきているが、それでもプロレスラー並みの体格は維持している。

連也は連也でゼノヴィアや黒歌に夜這いされたり、カオス・ブリゲード禍の団残党が駒王町に放ったナチスの最終兵器『怪物軍団』モンスターバタリオンとの戦いに巻き込まれ、彼等を指揮する鎧兜に身を包んだ『サラマンダー』と名乗る男の正体を知って、

(サインもらつときゃ良かった……)

と大真面目に後悔したり、ゼノヴィアや黒歌に夜這いされたり、パンドラの箱を再度開放して世界に災いをもたらそうとする魔導師と戦わされたり、ゼノヴィアや黒歌に夜這いされて大人の階段を上ったりなど、散々な目に遭った。

しかし最終的に総合すれば、『何やかんやで半年以上の月日が流れていった』事以外、特筆すべきものは何もなかった。

そして三学期もあつという間に過ぎ去り、連也たちは駒王学園を卒業した。

四月も終わりに近付く頃、連也は荷物をまとめて、叔父夫婦に別れを告げ、兵藤邸に向かう。

そのこのガレージに、一台のキャンピングカーが停まっていた。車体にはグレモリーとシトリー両家の家紋が描かれている。

「私とソーナからの卒業祝いよ」

と、出迎えたりアスはそう言った。連也の卒業後の『進路』を聞いて用意したものである。

連也の取得した普通免許で運転出来るサイズだが、背面のドアを開けて中に入った連也は、何かに驚いたように、すぐに外へ飛び出し、車体の大きさを確認する。

その様子に、その場に集まっていたグレモリー眷属やシトリー眷属、生徒会などのメンバーはクスクスと笑った。

ちなみに一誠は退学後、グレモリー領に引き取られて上級悪魔としての礼儀作法や心得、立ち居振舞いなどの勉強中なので、ここにはいない。

キャンピングカーはハイエースほどの大きさなのに、中に入ってみるとホテルの一室が丸々そこにあるのだ。明らかに車体の大きさとの居住区との広さが釣り合っていない。

「レーティングゲーム用のフィールド生成技術とか、ルフェイの空間魔法とかを色々利用してあるの」

と、リアスが説明する。

「……悪魔。ハねえ」

余りの事に、連也は語彙力が低下していた。

そこへ、荷物をまとめたゼノヴィアがやって来た。

「じゃあ行こうか、連也」

「ああ」

ゼノヴィアの呼び掛けにうなずき、連也は自分たちの荷物を後ろの居住空間に仕舞う。

「運転席に私やソーナに直通の通信機があるし、この家に繋がる転送魔法陣を描いた紙なんかも用意してあるから、何かあったら迷わず使いなさいね」

「何から何まで世話になっちゃって、ありがとうございます」

「お互い様ですよ、連也くん。私もリアスも、その眷属たちも、ここにいるみんながあなたに助けられたのです。これくらいは本当にお安い御用ですよ」

ソーナの声は柔らかく、優しくかった。

皆の激励や祝福の言葉に見送られながら、連也とゼノヴィアは車に乗り込む。

曹操が運転席の連也に、小さく手を振った。  
連也も小さく振り返した。

そしてキャンピングカーは、出発した。  
「連也。まずはどこに行くつもりなんだ？」

助手席から、ゼノヴィアが連也に尋ねる。

「北。先輩たちが調べてくれたんだけど、北海道に念道っぽい技を使う人がいて、霊能者みたいな事やってるらしいから、まずはその人を当たってみるよ」

「これから暑くなっていくし、ちょうどいいんじゃない？」

二人の間に、黒歌がひよっこり顔を出す。猫に化けて後ろの居住空間に隠れていたのだ。

「アタシは後ろで寝てるから、ご飯になったら起こしてね」

そしてまた後ろに引込む。

「まったく、あのドラ猫め……」

苦笑するゼノヴィアだったが、表情や声音に険はない。同じ男性を愛する者同士の仲間意識のようなものが芽生えているのだ。

町を出てバイパスに入ると、連也はアクセルを踏み込んだ。

車の通りも少なく、キャンピングカーは風のように加速していった。